京都府遺跡調査概報

第89冊

1．太田遺跡第８次

2．中海道遺跡第49次

3．長岡宮跡第372次

4．長岡京跡右京第615次

5．芝山遺跡

6．国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

(1)左坂古墳群

(2)シミズ谷古墳群

(3)墓ノ谷古墳群

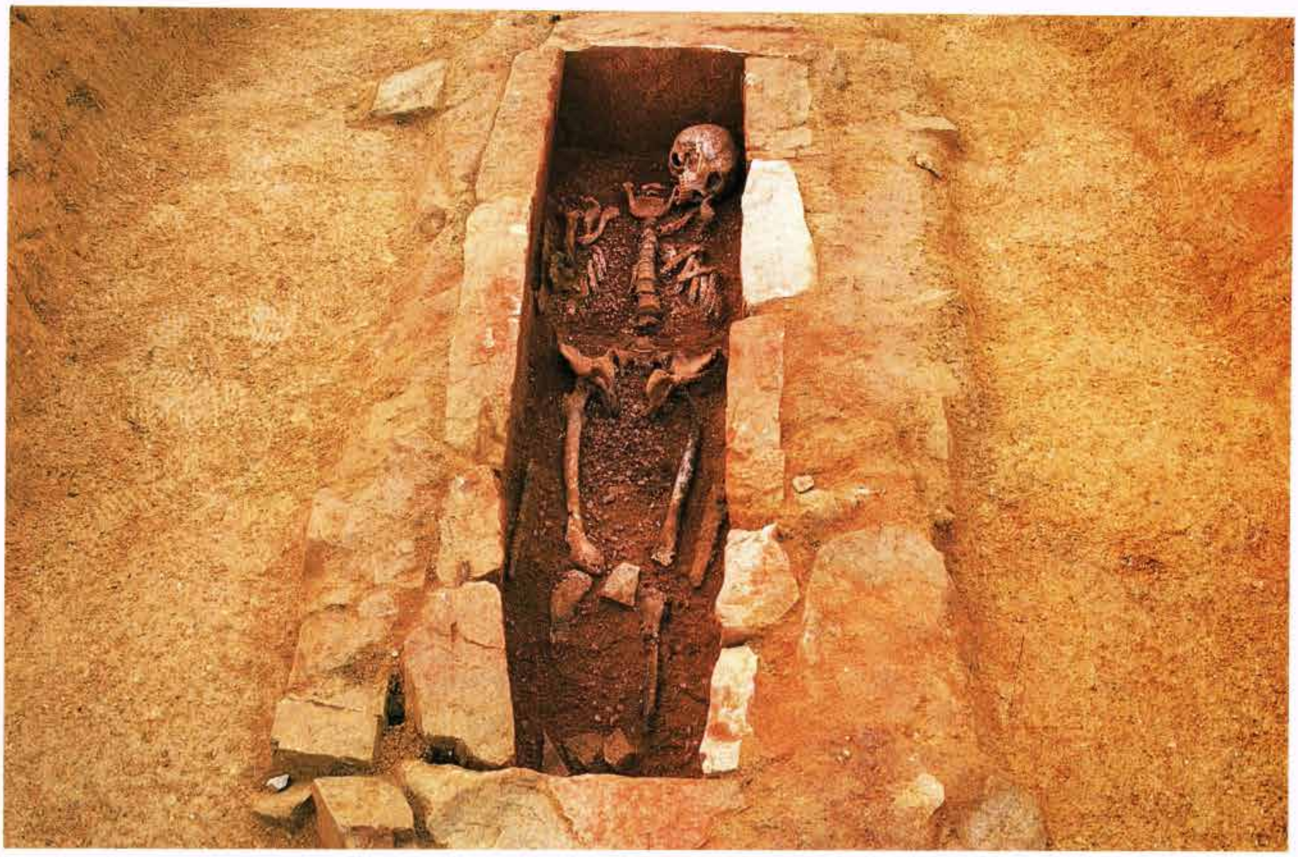
(4)南谷古墳群

(5)永留城跡(Ａ地点)

１９９９

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版　左坂古墳群



(1)左坂Ｂ２号墳第１主体部石棺全景（東から）

(2)左坂Ｃ21号墳主体部全景（西から）

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成10年度に実施した発掘調査のうち、亀岡地方振興局・京都府土木建築部・京都府自転車競技事務所・京都府乙訓土木事務所・農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った太田遺跡、中海道遺跡第49次、長岡宮跡第372次、長岡京跡右京第615次、芝山遺跡、国営農地関係遺跡(左坂古墳群、シミズ谷古墳群、墓ノ谷古墳群、南谷古墳群、永留城跡)に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、亀岡市教育委員会・向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・城陽市教育委員会・弥栄町教育委員会・大宮町教育委員会・久美浜町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長　樋 口 隆 康

凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1．太田遺跡第８次　　2．中海道遺跡第49次

3．長岡宮跡第372次(7ANBND-2)　　4．長岡京跡右京第615次(7ANIHJ-6)

5．芝山遺跡　　6．国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

2．　遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

3．　本書で使用している座標は、国土座標第６座標系による。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	太田遺跡第８次	亀岡市稗田野町太田森７・19	平10.10.26～平11.２.８	亀岡地方振興局	岡崎　研一
2．	中海道遺跡第49次	向日市物集町中海道地内	平10.11.9～平11.1.25	京都府土木建築部	藤井　整
3．	長岡宮跡第372次	向日市寺戸町西ノ段５番地	平11.1.6～2.19	京都府自転車競技事務所	田代　弘
4．	長岡京跡右京第615次	長岡京市今里蓮ヶ糸	平10.9.16～12.17	京都府乙訓土木事務所	竹井　治雄
5．	芝山遺跡	城陽市富野	平10.12.９～平11.２.18	京都府土木建築部	増田　孝彦
6．	国営農地(丹後東部・西部地区)			農林水産省近畿農政局	
	(1)左坂古墳群	中郡大宮町周枳	平10.7.7～11.12		石崎　善久 引原　茂治
	(2)シミズ谷古墳群	竹野郡弥栄町堤シミズ谷	平10.4.20～5.22		竹井　治雄
	(3)墓ノ谷古墳群	竹野郡弥栄町鳥取墓ノ谷	平10.6.8～7.14		竹井　治雄
	(4)南谷古墳群	熊野郡久美浜町永留畑山	平10.5.19～8.12		石尾　政信
	(5)永留城跡(A地点)	熊野郡久美浜町壱分南谷・女布北谷	平10.8.25～10.14		石尾　政信

4．　本書の編集は、調査第１課資料係が当った。

本　文　目　次

1．太田遺跡第８次発掘調査概要------1
2．中海道第49次発掘調査概要------17
3．長岡宮跡第372次(7ANBND-2地区)発掘調査概要------25
4．長岡京跡右京第615次(7ANIHJ-6地区)発掘調査概要------27
5．芝山遺跡発掘調査概要------41
6．国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成10年度発掘調査概要------47
(1)左坂古墳群------49
(2)シミズ谷古墳群------85
(3)墓ノ谷古墳群------87
(4)南谷古墳群------89
(5)永留城跡(Ａ地点)------99

挿　図　目　次

1．太田遺跡第８次

第１図　調査地および周辺遺跡分布図------1
第２図　調査地位置図------2
第３図　遺構配置図(1)　古墳～奈良時代------3
第４図　遺構配置図(2)　鎌倉時代------4
第５図　竪穴式住居跡１・２実測図------5
第６図　竪穴式住居跡３・４実測図------6
第７図　土器埋納坑実測図------7
第８図　掘立柱建物跡１・２実測図------8
第９図　掘立柱建物跡３実測図------9
第10図　掘立柱建物跡４実測図------9
第11図　掘立柱建物跡５実測図------10
第12図　掘立柱建物跡６・７実測図------11
第13図　井戸１実測図------11

第14図　土坑３実測図--------12
第15図　井戸２実測図--------12
第16図　出土遺物実測図(1)--------13
第17図　出土遺物実測図(2)--------14
第18図　出土遺物実測図(3)--------15

２．中海道第49次

第19図　調査地および周辺遺跡分布図--------17
第20図　今回の調査と過去の調査トレンチ位置図--------18
第21図　各トレンチ柱状土層図--------19
第22図　第１トレンチ平面図・南壁断面図--------20
第23図　竪穴式住居跡ＳＨ02平・断面図--------21
第24図　第２・３・４トレンチ遺構配置図--------22
第25図　各トレンチ出土遺物--------23

３．長岡宮跡第372次

第26図　調査地位置図--------25
第27図　トレンチ平面図--------26
第28図　断面柱状図--------26

４．長岡京跡右京第615次

第29図　調査地位置図--------27
第30図　トレンチ配置図--------28
第31図　遺構配置図１(中世)--------30
第32図　遺構配置図２(古墳・弥生時代)--------31
第33図　竪穴式住居跡ＳＨ01実測図--------32
第34図　竪穴式住居跡ＳＨ01竈実測図--------32
第35図　竪穴式住居跡ＳＨ04実測図--------33
第36図　土坑ＳＫ01実測図--------34
第37図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図--------35
第38図　溝状遺構ＳＤ01実測図--------36
第39図　出土遺物実測図(1)--------38
第40図　出土遺物実測図(2)--------39

５．芝山遺跡

第41図　調査地位置図--------41
第42図　調査地地形図およびトレンチ配置図--------42
第43図　古墳位置図--------43
第44図　古墳実測図--------43

第45図　出土遺物実測図(1)------45
第46図　出土遺物実測図(2)------45

6．国営農地(丹後東部地区・西部地区)関係遺跡

第47図　調査地位置図------47

(1)左坂古墳群

第48図　左坂古墳群主要部分分布図------49
第49図　左坂Ｂ支群調査前測量図および主体部配置図------50
第50図　Ｂ１号墳主体部および出土遺物実測図------51
第51図　Ｂ２号墳第１主体部蓋材検出状況および墓壙内遺物出土状況実測図------52
第52図　Ｂ２号墳第１主体部石棺および棺内遺物出土状況実測図------53
第53図　Ｂ２号墳第２主体部(左)、Ｂ１・２号墳間溝内埋葬(右上)、Ｂ２・６号墳間溝内埋葬(右下)実測図------54
第54図　Ｂ２号墳第３主体部実測図および棺小口部遺物出土状況図------55
第55図　Ｂ２号墳第４主体部実測図------56
第56図　Ｂ２号墳出土遺物実測図------57
第57図　Ｂ３号墳主体部実測図------58
第58図　Ｂ４号墳主体部実測図および出土遺物実測図------59
第59図　Ｂ７号墳主体部実測図および出土遺物実測図------60
第60図　Ｂ10・11号墳主体部および出土遺物実測図------61
第61図　Ｂ12号墳主体部実測図------62
第62図　Ｂ13号墳主体部実測図および出土遺物実測図------63
第63図　Ｂ14号墳第１～４主体部実測図------64
第64図　Ｂ17号墳第１主体部(左)および出土遺物(右上)、周辺第２主体部(右下)実測図------65
第65図　Ｂ17号墳第２主体部実測図------65
第66図　Ｂ17号墳周辺第１主体部および出土遺物実測図------66
第67図　Ｂ33号墳主体部および出土遺物実測図------67
第68図　Ｃ支群調査後地形測量図------68
第69図　Ｃ21号墳主体部(右)および玉類出土状況(左上)、土坑実測図------69
第70図　Ｃ21号墳出土遺物実測図------70
第71図　Ｃ22号墳主体部(左)・Ｃ23号墳主体部(右)実測図------71
第72図　Ｄ支群地形図------72
第73図　Ｄ３号墳主体部実測図------73
第74図　Ｄ３号墳出土遺物実測図------73
第75図　Ｄ４号墳主体部実測図------74
第76図　Ｄ４号墳出土遺物実測図------74

第77図　D５号墳主体部実測図------75
第78図　D５号墳出土遺物実測図------76
第79図　D７号墳主体部実測図------77
第80図　D８号墳主体部実測図------77
第81図　D８号墳出土遺物実測図------78
第82図　D９号墳出土遺物実測図------79
第83図　D９号墳主体部実測図------79
第84図　D10号墳主体部実測図------80
第85図　E５号墳出土遺物実測図------80
第86図　E支群地形図------81
第87図　E７号墳主体部・出土遺物実測図------82
第88図　E８号墳主体部・出土遺物実測図------83

(2)シミズ谷古墳群

第89図　調査地位置図(1/25,000)------86
第90図　墳丘測量図------86

(3)墓ノ谷古墳群

第91図　調査地位置図------88
第92図　６号墳地形図------88
第93図　７号墳地形測量図------88
第94図　８号墳地形測量図------88

(4)南谷古墳群

第95図　調査地および周辺遺跡分布図------89
第96図　女布団地内遺跡分布図------90
第97図　調査前地形図------91
第98図　調査地平面図および土層断面図------92
第99図　１号墳埋葬主体部実測図------93
第100図　４号墳主体部実測図------94
第101図　６号墳主体部実測図------95
第102図　堀切状遺構平面図------95
第103図　土坑ＳＫ01・02実測図------95
第104図　掘切状遺構土層断面図------96
第105図　４号墳主体部出土玉類実測図------97
第106図　出土遺物実測図(鉄製品)------98
第107図　出土遺物実測図(須恵器)------98

(5)永留城跡

第108図　永留城跡調査地位置図------99
第109図　調査地地形測量図------100
第110図　永留城跡平坦地土層断面図------101
第111図　調査地平面図------101
第112図　出土遺物実測図------102

付　表　目　次

6．国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

付表1　平成10年度国営農地関係遺跡に伴う発掘調査地一覧------48

(4)南谷古墳群

付表2　南谷古墳群出土玉類観察表------97

図　版　目　次

1．太田遺跡第8次

図版第1　調査地全景(西上空から)
図版第2　(1)竪穴式住居跡1近景(南東から)　(2)竪穴式住居跡2近景(北東から)
図版第3　(1)掘立柱建物跡1半掘状況(北から)　(2)掘立柱建物跡1・2・3近景(北から)
図版第4　(1)掘立柱建物跡4検出状況(南から)　(2)掘立柱建物跡4近景(南から)
図版第5　(1)土坑3・井戸2近景(南西から)　(2)掘立柱建物跡6・7近景(東から)
図版第6　(1)土器埋納坑近景(北東から)　(2)柱穴半掘状況(南東から)
(3)井戸1近景(北から)
図版第7　出土遺物(1)
図版第8　出土遺物(2)

2．中海道遺跡第49次

図版第9　(1)調査区全景(西から)　(2)第1トレンチ全景(西から)
(3)第1トレンチSH02完掘状況(西から)
図版第10　(1)第2トレンチ全景(東から)　(2)第3トレンチ全景(西から)
(3)第4トレンチ全景(東から)

図版第11　(1)第5トレンチ全景(東から)　(2)第6トレンチ全景(東から)
(3)第7トレンチ全景(東から)

図版第12　出土遺物

3．長岡宮跡第372次

図版第13　(1)重機掘削および土砂の搬出状況　(2)精査風景
(3)トレンチ全景(東から)

図版第14　(1)土層堆積状況(南西から)　(2)トレンチ完掘状況(東から)
(3)トレンチ完掘状況(西から)

4．長岡京跡右京第615次

図版第15　(1)調査前全景(南から)　(2)調査トレンチ全景(南から)

図版第16　(1)調査トレンチ全景空撮(南から)　(2)調査トレンチ全景空撮(真上から)

図版第17　(1)竪穴式住居跡ＳＨ01全景(北西から)
(2)竪穴式住居跡ＳＨ01竈全景(東から)

図版第18　(1)竪穴式住居跡ＳＨ01竈下層断面(北から)
(2)竪穴式住居跡ＳＨ01竈・支脚断面(北から)
(3)竪穴式住居跡ＳＨ02主柱穴(北から)
(4)竪穴式住居跡ＳＨ01竈の支脚(西から)

図版第19　(1)竪穴式住居跡ＳＨ01・02・03全景(南から)
(2)掘立柱建物跡ＳＢ01全景(北西から)

図版第20　(1)溝状遺構全景(北西から)　(2)土坑ＳＫ01全景(北から)

図版第21　(1)溝状遺構内土器出土状況(部分拡大)　(2)溝状遺構内底部土器出土状況(南から)
(3)溝状遺構内土器出土状況(部分拡大)　(4)溝状遺構断面(北から)

図版第22　出土遺物

5．芝山遺跡

図版第23　(1)2地点調査前全景(南西から)　(2)2－1トレンチ全景(南から)
(3)古墓検出状況(南から)

図版第24　(1)古墓遺物出土状況(北から)　(2)北側木口付近遺物出土状況(東から)
(3)中央部石帯出土状況(東から)

図版第25　(1)南側木口付近遺物出土状況(南から)　(2)遺物除去後全景(南から)
(3)裏込め除去後全景(南から)

図版第26　(1)3－1トレンチ全景(南西から)　(2)出土遺物

6．国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

(1)左坂古墳群

図版第27　(1)左坂Ｂ支群全景(平成5年度)(上空から)
(2)左坂Ｂ支群(平成6年度調査)全景(上空から)

図版第28　(1)左坂Ｂ１号墳主体部全景(北から)
(2)左坂Ｂ１・２号墳間溝内埋葬(南から)　(3)左坂Ｂ２号墳全景(東から)
(4)左坂Ｂ２号墳墳頂部全景(東から)
図版第29　(1)左坂Ｂ２号墳墓壙内鏃群出土状況(東から)
(2)左坂Ｂ２号墳第１主体部石棺被覆粘土検出状況(東から)
(3)左坂Ｂ２号墳第１主体部石棺蓋検出状況(東から)
(4)左坂Ｂ２号墳石棺蓋石除去後全景(東から)
図版第30　(1)左坂Ｂ２号墳第１主体部石棺全景(東から)
(2)左坂Ｂ２号墳石棺内細部(1)(北から)　(3)左坂Ｂ２号墳石棺内細部(2)(北から)
(4)左坂Ｂ２号墳石棺調査状況(東から)
図版第31　(1)左坂Ｂ２号墳第２主体部全景　(2)左坂Ｂ２号墳第３主体部全景(西から)
(3)左坂Ｂ２号墳第３主体部西群遺物出土状況(南から)
(4)左坂Ｂ２号墳第４主体部全景(東から)
図版第32　(1)左坂Ｂ２・６号墳間溝内埋葬(西から)　(2)左坂Ｂ３号墳全景(南から)
(3)左坂Ｂ３号墳第１主体部全景(東から)
(4)左坂Ｂ３号墳第２主体部全景(東から)
図版第33　(1)左坂Ｂ４号墳全景(西から)　(2)左坂Ｂ４号墳鉄剣出土状況(北から)
(3)左坂Ｂ７号墳主体部全景(東から)
(4)左坂Ｂ７号墳主体部内遺物出土状況(北から)
図版第34　(1)左坂Ｂ10・11号墳主体部全景(東から)　(2)左坂Ｂ13号墳主体部全景(南から)
(3)左坂Ｂ12号墳主体部全景(北から)　(4)左坂Ｂ14号墳全景(東から)
図版第35　(1)左坂Ｂ17号墳第１主体部全景(西から)
(2)左坂Ｂ17号墳第２主体部全景(南から)
(3)左坂Ｂ17号墳周辺第１主体部全景(東から)
(4)左坂Ｂ33号墳主体部全景(南から)
図版第36　(1)左坂Ｃ支群全景(北から)　(2)左坂Ｃ21号墳全景(南から)
(3)左坂Ｃ21号墳主体部全景(西から)　(4)左坂Ｃ21号墳鏡検出状況(東から)
図版第37　出土遺物(1)
図版第38　出土遺物(2)
図版第39　(1)Ｄ・Ｅ支群調査前全景(下が北)　(2)Ｄ・Ｅ支群全景(下が北)
図版第40　(1)Ｄ支群全景(南から)　(2)Ｄ４号墳主体部(南から)
図版第41　(1)Ｄ５号墳主体部(南から)　(2)Ｄ７号墳主体部(南から)
図版第42　(1)Ｄ８号墳主体部(北東から)　(2)Ｄ９号墳主体部(東から)
図版第43　(1)Ｄ10号墳主体部(東から)　(2)Ｅ支群全景(西から)
図版第44　(1)Ｅ５号墳主体部(南東から)　(2)Ｅ７号墳主体部(南東から)

図版第45　(1) E 8 号墳主体部(南東から)　(2) E 8 号墳第 3 主体部遺物出土状況(南東から)
図版第46　D支群出土遺物(須恵器)
図版第47　D・E支群出土遺物(鉄製品)
(2)シミズ谷古墳群
図版第48　(1)シミズ谷 1 号墳全景(北から)　(2)調査前全景(北から)
(3)シミズ谷 2 号墳全景(北から)　(4)調査トレンチ全景(北から)
(3)墓ノ谷古墳群
図版第49　(1) 6 号墳調査前全景(北から)　(2)墓ノ谷 6 ～ 8 号墳遠景(北東から)
(3) 6 号墳調査トレンチ全景(北から)　(4) 7 号墳調査地断面(北から)
図版第50　(1) 8 号墳調査前全景(北から)　(2) 7 号墳調査前全景(北から)
(3) 8 号墳調査トレンチ全景(北から)　(4) 7 号墳調査トレンチ全景(北西から)
(4)南谷古墳群
図版第51　(1)調査地全景から(北から)　(2)調査地全景(北上空から)
図版第52　(1)調査前全景(南上空から)　(2)調査前全景(南から)
(3)調査地全景(南東から)
図版第53　(1) 1 号墳全景(南東から)　(2) 1 号墳主体部完掘状況(北から)
(3) 1 号墳主体部土層断面(東から)
図版第54　(1) 4 号墳主体部検出状況(北から)　(2) 4 号墳主体部完掘状況(北から)
(3) 4 号墳主体部土層断面(北から)
図版第55　(1) 6 号墳全景(東から)　(2) 6 号墳主体部完掘状況(北から)
(3) 6 号墳主体部土層断面・鉄器出土状況(西から)
図版第56　(1) 6 号墳東側切り離し溝(北から)　(2)堀切状遺構土層断面(北から)
(3)堀切状遺構完掘状況(北から)
図版第57　(1) 4 号墳主体部玉類出土状況(北から)　(2)出土遺物
(5)永留城跡
図版第58　(1)平坦地調査前風景(北西から)　(2)平坦地全景(北西から)
(3)平坦地溝と柱穴(南東から)
図版第59　(1)東斜面と曲輪状平坦地(南東から)　(2)曲輪状平坦地(北東から)
(3)曲輪状平坦地(南西から)
図版第60　(1)曲輪状平坦地溝跡検出状況(北東から)　(2)第 4 トレンチ土層断面(南から)
(3)曲輪状平坦地地形測量風景(南西から)

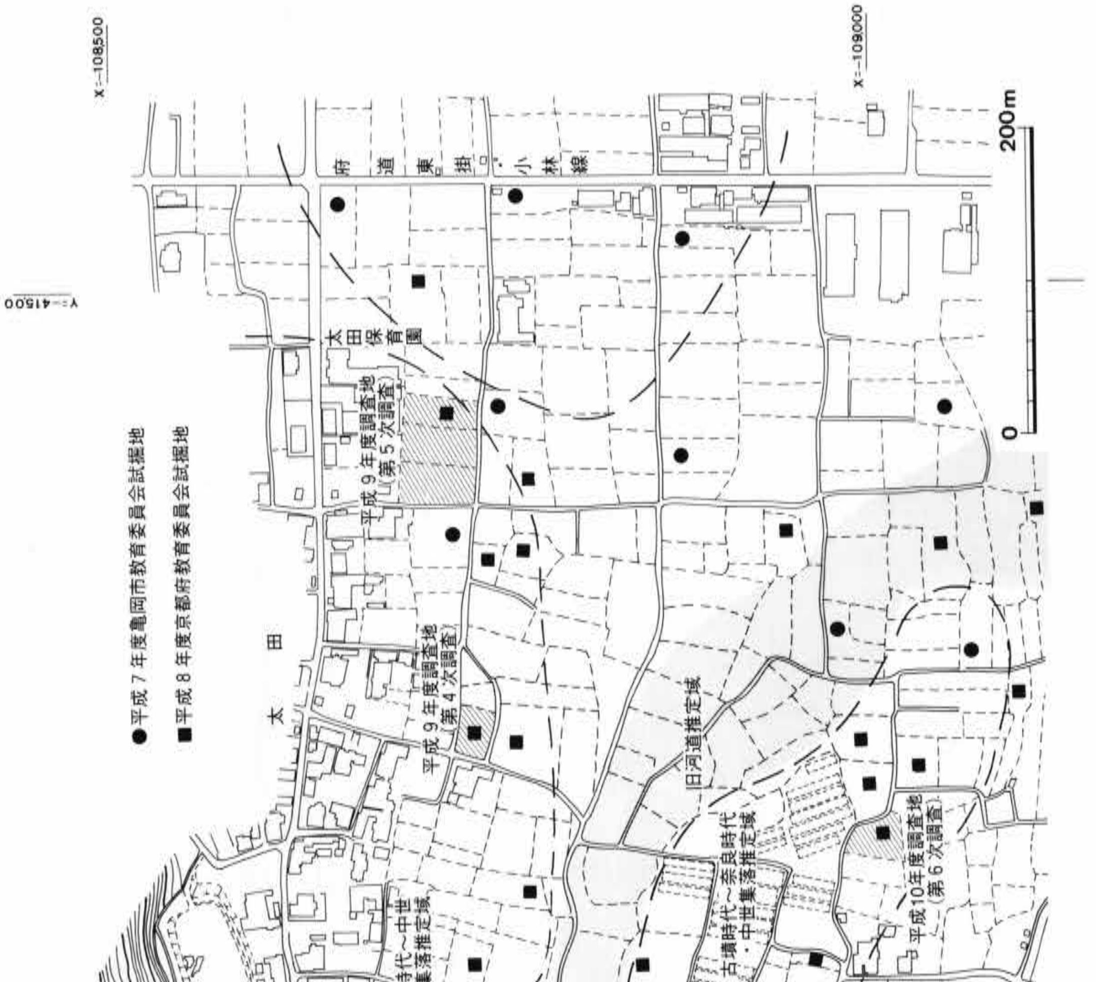
１．太田遺跡第８次発掘調査概要

１．はじめに

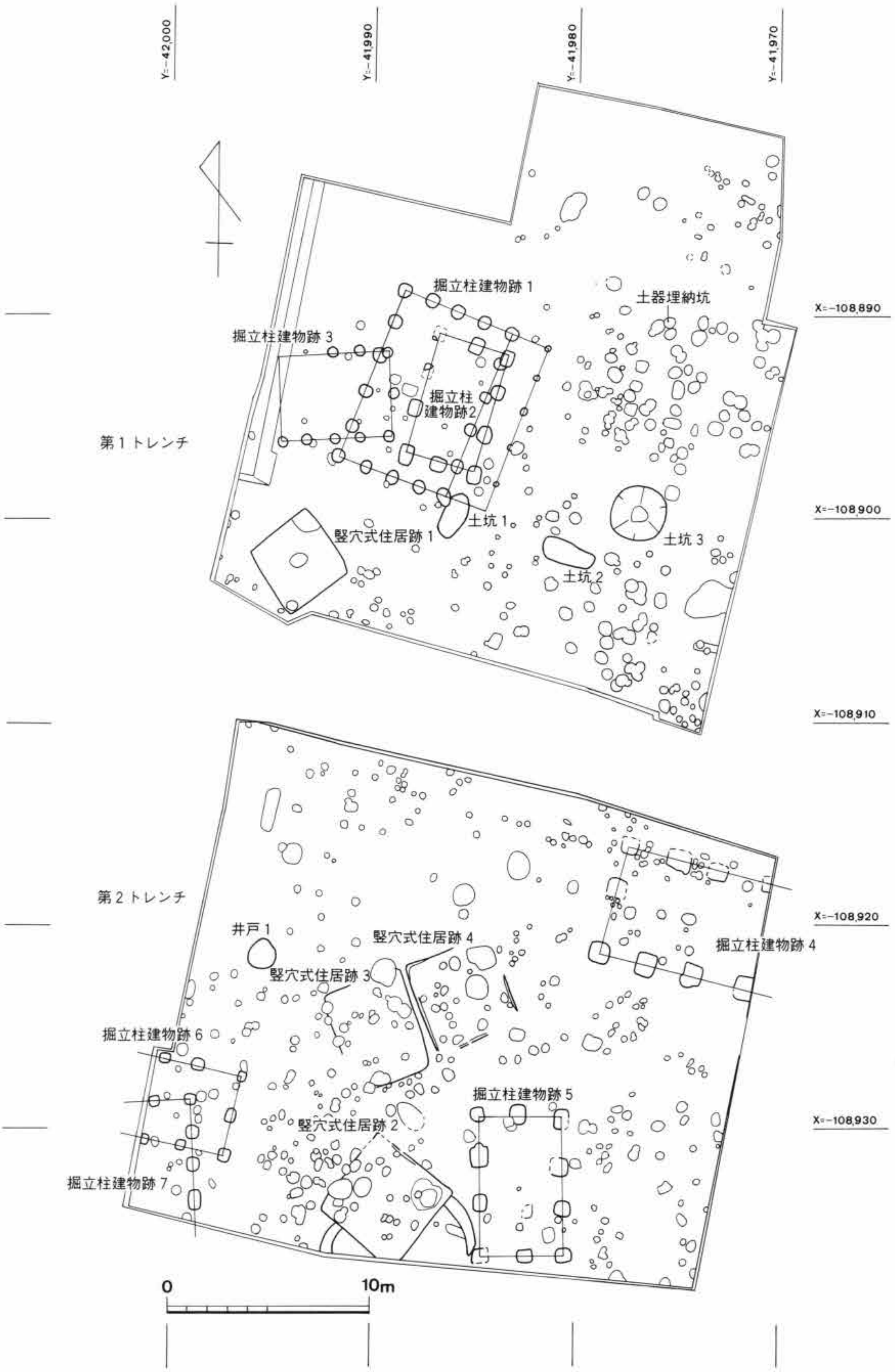
太田遺跡は、大堰川右岸の行者山南山麓部に広がる微高地に所在する。大堰川の一支流である山内川が行者山南側の稗田野町中心部を東流する。当遺跡はこの川北沿いに広がり、その範囲は東西1400m×南北600mである。昭和57年度に遺跡東側において弥生時代前期～中期の直径約160m以上と考えられる環濠集落が確認されたことは、すでに周知のところである[注1]。その後、遺跡西域においても試掘・発掘調査が数回にわたって実施され、弥生時代前期～鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが判明している[注2]。周辺の遺跡としては、行者山山麓部に国府跡推定地である千代川遺跡[注3]や、北金岐遺跡[注4]・南金岐遺跡・鹿谷遺跡[注5]などの集落遺跡が帯状に繋がる。また、行者山丘陵部には小金岐古墳群[注6]・北金岐古墳群・鹿谷古墳群・鹿谷池田古墳群などの古墳群が、丘陵中腹から裾部にかけて広がる。近年、稗田野町鹿谷・太田にかけての調査が多く、鹿谷遺跡では古墳時代の竪穴式住居跡を多数検出した。また、太田遺跡西域でも平成７・８年度に試掘調査が行われており、第２図に示すように、旧河道推定域を挟む形で北側には平安時代～中世にかけての集落推定域が、南側には古墳時代・奈良時代・中世の集落推定域が想定され、徐々に様相が明らかにされつつある。

第１図　調査地および周辺遺跡分布図（1/50,000）
1. 太田遺跡　2. 丹波国府推定地　3. 桑寺廃寺
4. 千代川遺跡　5. 馬場ヶ崎遺跡　6. 北金岐遺跡
7. 南金岐遺跡　8. 鹿谷遺跡　9. 小金岐古墳群
10. 北金岐古墳群　11. 鹿谷古墳群
12. 鹿谷池田古墳群　13. 丸勘城跡　14. 太田城跡
15. 野寺廃寺　16. 余部遺跡　17. 穴川遺跡
18. 天川遺跡

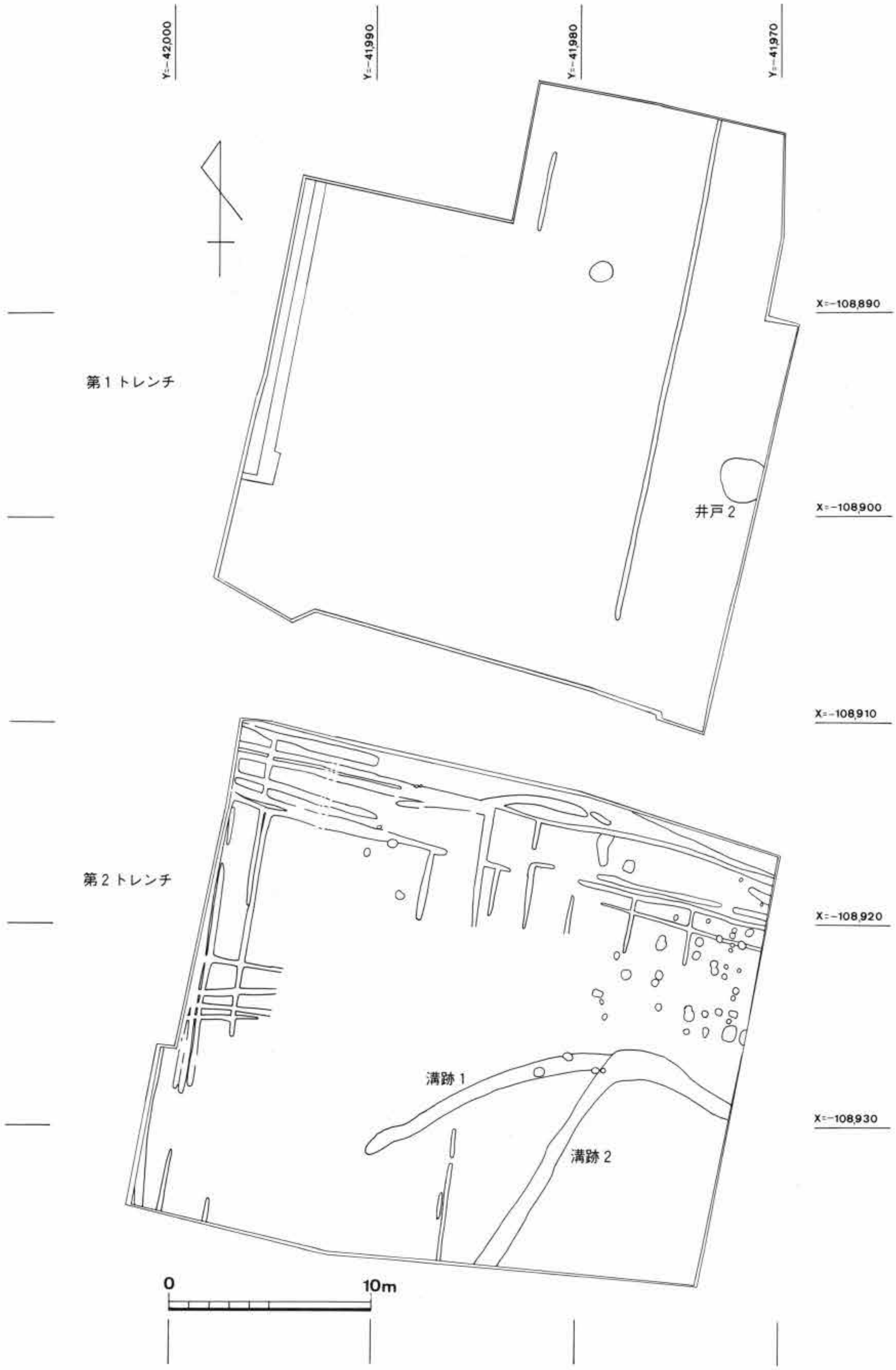
今回の調査地は、亀岡市稗田野町字太田小字森７・19で、太田遺跡西端（古墳時代～奈良時代・中世の集落推定域）にあたる。調査は、府営ほ場整備事業に伴い、亀岡地方振興局の依頼を受け、京都府亀岡土地改良事務所の協力のもとに実施した。調査面積は約1,200㎡で、現地調査は平成10年10月26日～平成11年２月８日まで行った。現地説明会は平成11年１月22日に開


●平成７年度亀岡市教育委員会試掘地
■平成８年度京都府教育委員会試掘地
府道東掛小林線
太田保育園
平成９年度調査地（第５次調査）
平成９年度調査地（第４次調査）
太田
旧河道推定域
古墳時代～奈良時代・中世集落推定域
平安時代～中世集落推定域
平成10年度調査地（第６次調査）
調査地
山内川
鹿谷
0
200m

第２図　調査地位置図



第3図　遺構配置図(1)　古墳～奈良時代



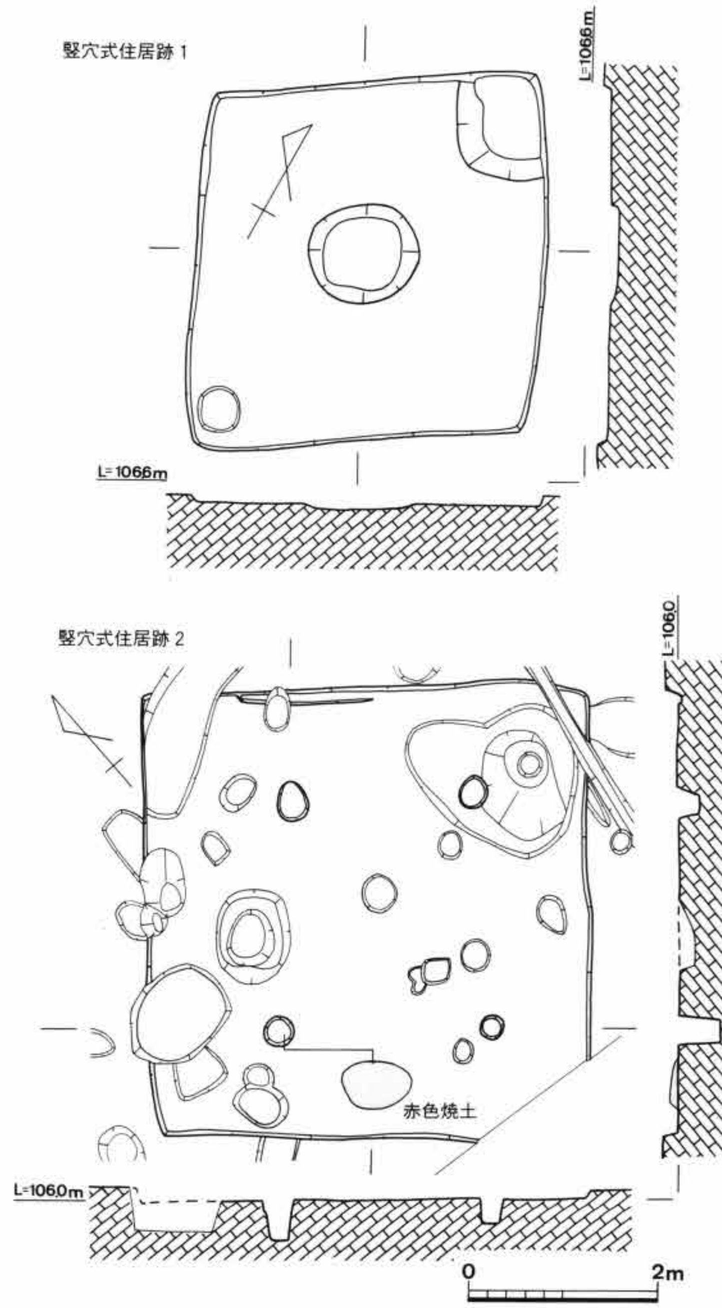
第４図　遺構配置図(2)　　鎌倉時代

催した。調査時の空中写真ならびに図化業務は株式会社アイシーに委託した。これら調査に係る経費は、全額亀岡地方振興局が負担した。

本概報作成にあたっては、調査第２課第２係主査調査員岡崎研一が担当した。遺物写真は調査第1課主任調査員田中　彰が撮影した。調査期間中は、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・各自治会の協力をいただいた。地元の方々にあたっては作業員・調査補助員・整理員として従事していただいた(注7)。記して感謝する。

２．調　査　概　要

京都府教育委員会の試掘調査(第７次)成果をもとに調査トレンチを設定した。北側のトレンチを第１トレンチ、南側を第２トレンチとして調査した。基本層位は、第１トレンチでは耕土・床土・地山で、第２トレンチでは耕土・床土・暗茶褐色土・黒色土・地山であった。第１トレンチは後世にかなり削平を受けており、浅いところでは0.2ｍほどで地山となる。また果樹を植樹するために、等間隔に掘り返した痕跡も認められた。第２トレンチでは、北から南へゆるやかに傾斜しており、南端では0.6ｍで地山となる。その上に20cmほど黒色土が堆積していた。この黒色土下層から奈良時代の柱穴が掘られており、黒色土と地山の境から古墳時代の竪穴式住居跡が切り込んでいた。黒色土の上に３cmほど堆積していた暗茶褐色土には中世の土器片が混入しており、中世の遺構はここから掘り込まれていた。中世の遺構については、周囲の土色と遺構内の土色が類似しており、調査期間・経費



第５図　竪穴式住居跡１・２実測図

面などから考えても、中世での面的調査は困難と考えた。このことから黒色土下層付近まで重機による掘削を行い、遺構検出に努めた。黄褐色砂質土である地山直上から、3時期の遺構を確認できた。中世の遺構は、埋土の土色が暗茶褐色土で、奈良時代の遺構については黒色土であった。古墳時代の遺構も黒色土が埋まっていたが、白色粘土が混入する。

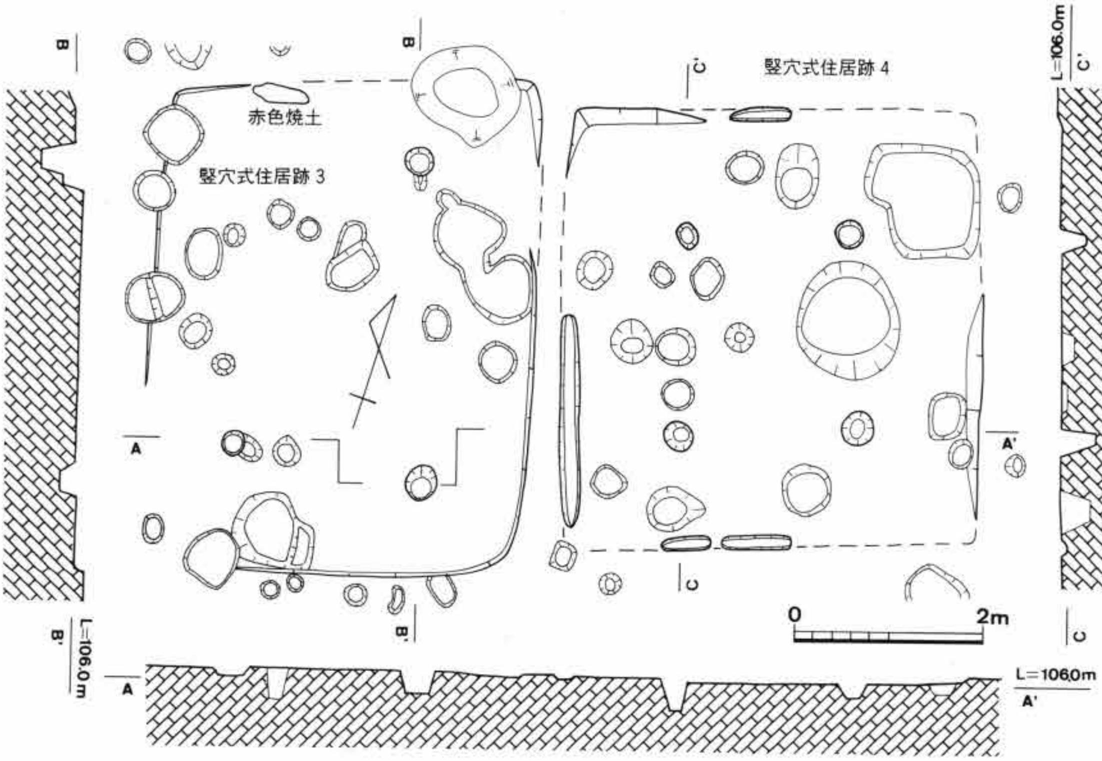
3．検　出　遺　構

(1)古墳時代

この時代の遺構は、竪穴式住居跡4基と土器埋納坑1基と土坑2基であった。

竪穴式住居跡1（第5図・図版第2）　第1トレンチ南端で検出した住居跡で、3.7m×3.8mを測り、深さは15cmである。周壁溝ならびに主柱穴は検出できなかった。住居跡周辺も柱穴は希薄であり、住居跡とするには問題がある。しかし、遺構検出時に、明確に土色の変化が認められたことや、他の竪穴式住居跡とほぼ同方向である点から、竪穴式住居跡として扱った。住居跡内中央と北隅にわずかな窪みが認められた。焼土は検出しなかった。住居内から須恵器・杯身などが出土した。

竪穴式住居跡2（第5図・図版第2）　第2トレンチ南端で検出した住居跡で、4.7m×4.8mを測り、深さは15cmであった。奈良時代の柱穴や中世の溝が切り合っていたが、主柱穴も確認することができた。今回検出した竪穴式住居跡の中では最も残りの良い遺構であった。住居跡南辺中央から赤色の焼土を確認したが、焼けしまった状態ではなかった。住居跡内からは須恵器杯身が出土しており、遺構検出時にはこの付近には多くの土器片が散乱していた。この住居跡と重複す

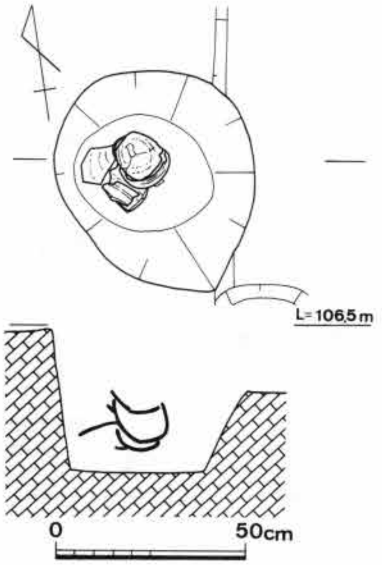


第6図　竪穴式住居跡3・4実測図

る形で東・西側に幅約0.3m・深さ0.2〜0.3mの溝が半円形状にめぐって検出できた。切り合い状況から竪穴式住居跡２以前のものと思われるが、調査地外にのびるため、ここでは住居跡の可能性があるとした。

竪穴式住居跡３(第６図)　第２トレンチ中央部で検出した住居跡である。4.2m×5.3mを測り、深さは５cmほどであった。平成８年度の試掘調査時にこの住居跡の北隅を検出している。主柱穴は３か所で確認したが、奈良時代の柱穴が切り合っており、非常に残りの悪い状態であった。北辺中央付近から赤色の焼土を確認したが、焼けしまった状態ではなかった。この住居に伴う遺物は出土しなかった。

竪穴式住居跡４(第６図)　第２トレンチ中央部で検出した住居跡である。4.5m×4.8mを測り、深さは５cmほどであった。平成８年度の試掘調査時にこの住居跡の北隅を検出している。周壁溝が部分的に残っていたことから、住居跡の規模が測定できた。主柱穴は４か所で確認できたが、非常に残りが悪く、また後の奈良時代の柱穴も切り合った状態で検出した。焼土はなく、住居に伴う遺物も出土しなかった。



第７図　土器埋納坑実測図

土器埋納坑(第３・７図)　第１トレンチ北側で検出した遺構である。径約0.5m・深さ約0.4mの柱穴状の掘形中央部に土器３個体分が重ねた状態で埋納されていた。土器は、上から土師器壺・土師器壺・須恵器杯身の順である(第16図17・21〜23)。祭祀的要素の濃い遺構と考える。

土坑１・２(第３図)　第１トレンチ南側で検出した長楕円形遺構である。須恵器片や土師器片が少量出土したが、性格については不明である。

(2)奈良時代

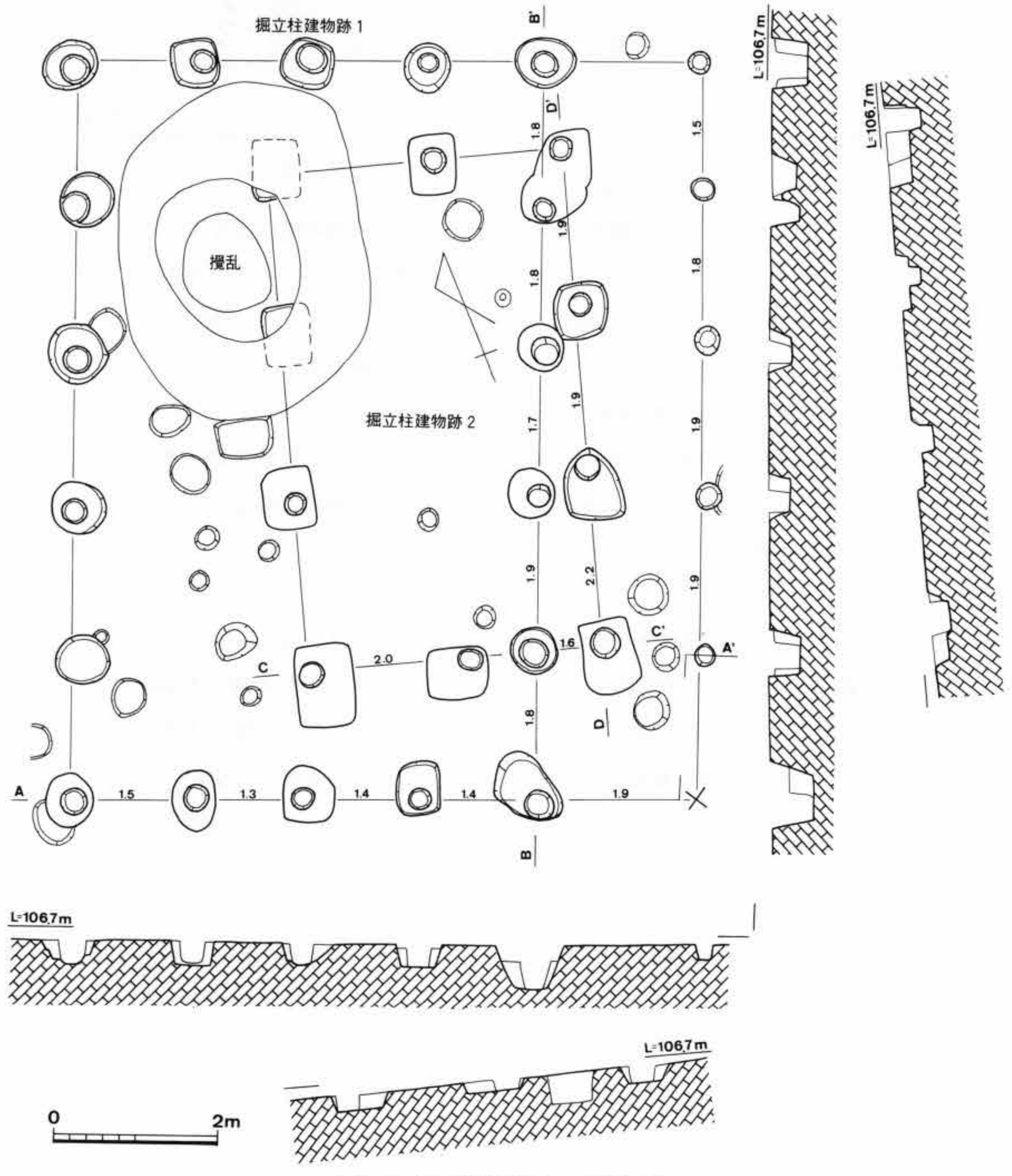
この時代の遺構としては、掘立柱建物跡７棟と井戸１基と土坑１基である。

掘立柱建物跡１(第８図・図版第３)　第１トレンチ中央で検出した大型の建物跡である。２棟の建物跡(掘立柱建物跡２・３)に切られた状態で検出したことから、３棟の建物跡の中では最も古いことが確認できた。建物の規模は４間(5.6m)×５間(9.0m)を測り、東側に庇を持つ。主軸方向は、N22°Eである。掘形は円形ないし楕円形で、径約0.6m・深さ0.4〜0.6mであった。柱穴内からは、土器片が少量出土したが、建物の時期を想定するにはあまりにも土器片が磨滅していたため、時期決定には至らなかった。柱穴の埋土は、黒色土であった。

掘立柱建物跡２(第８図・図版第３)　掘立柱建物跡１と重複した形で検出した建物跡で、北東隅の柱穴の切り合い状況から、掘立柱建物跡１の後に建てられたことが確認できた。一部後世の攪乱を受けていた。建物の規模は、２間(3.6m)×３間(6.0m)を測る。主軸方向は、N17°Eである。掘形は長方形で、大きなものでは0.6m×0.9mを測る。深さは、0.2〜0.4mであった。柱穴内からは、土器片が少量出土したが、建物の時期を想定するにはあまりにも土器片が磨滅していたため、時期決定には至らなかった。柱穴の埋土は、黒色土であった。

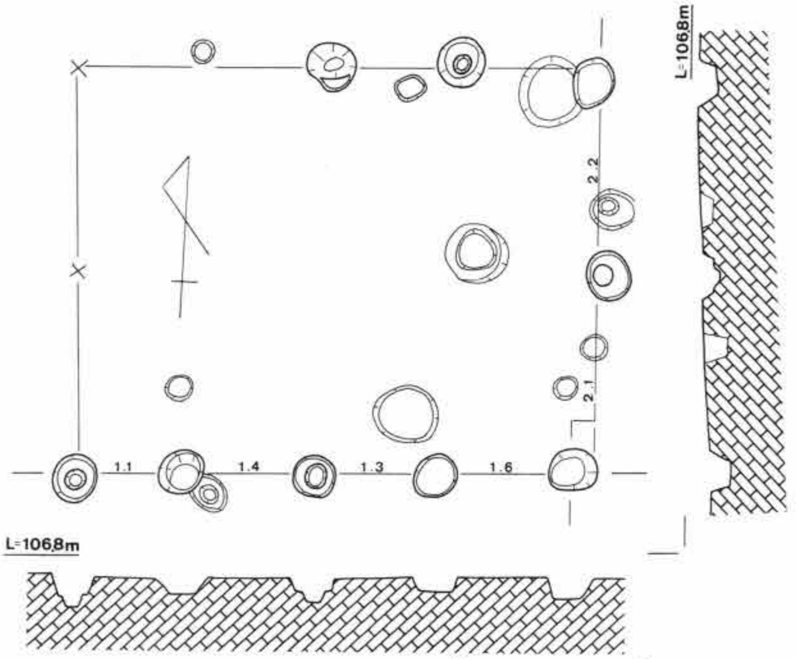
掘立柱建物跡3（第9図・図版第3）　掘立柱建物跡1の西辺に重複する形で検出した建物跡である。北隅の柱穴の切り合い状況から、掘立柱建物跡1の後に建てられたことが確認できた。しかし、掘立柱建物跡2と切り合っておらず、両者の前後関係については不明確である。建物の建て替え時には、建物の主軸方向を大きく違えて建てることはないと考え、建物1→建物2→建物3の順に建てられたと推定した。建物の規模は、2間(4.3m)×4間(5.4m)を測る。主軸方向は、N2°Wである。柱穴の掘形は円形で、径約0.5m・深さ約0.3mあった。柱穴内出土遺物はほとんどなく、掘立柱建物跡1・2と同様に黒色土が埋まっていた。

掘立柱建物跡4（第10図・図版第4）　第2トレンチ北東隅から検出した建物跡である。非常に

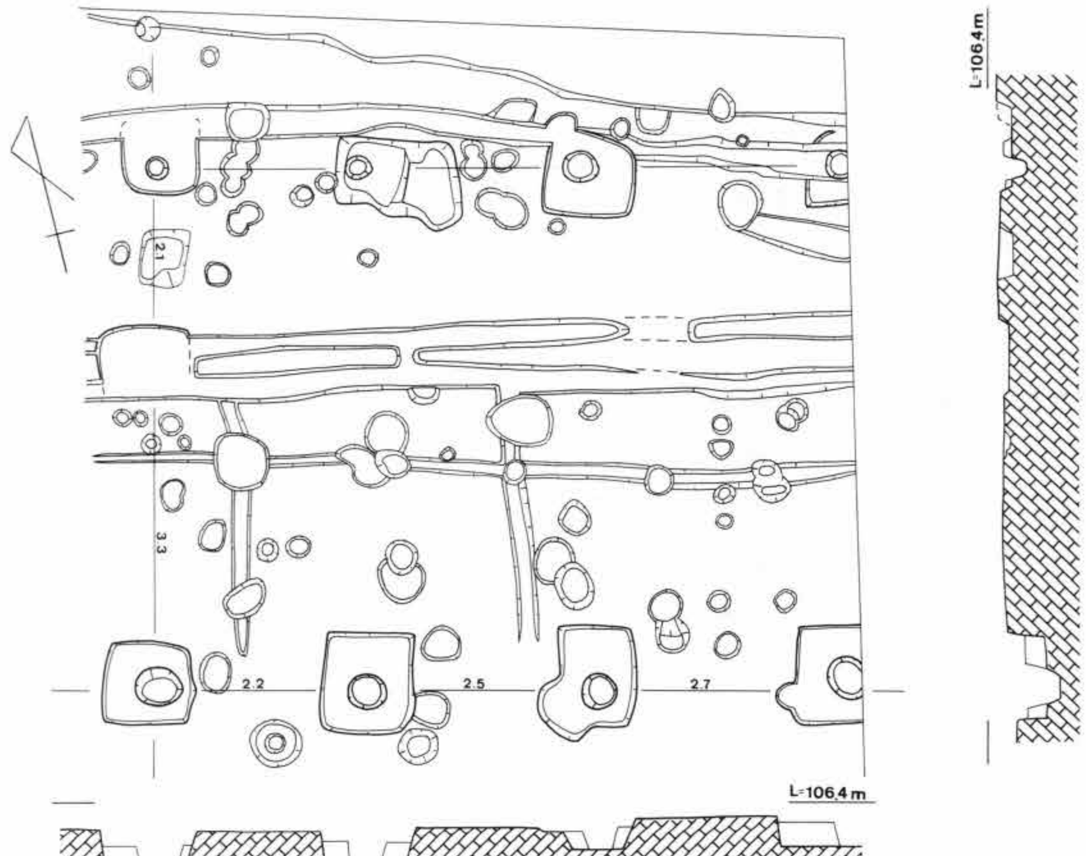


第8図　掘立柱建物跡1・2実測図

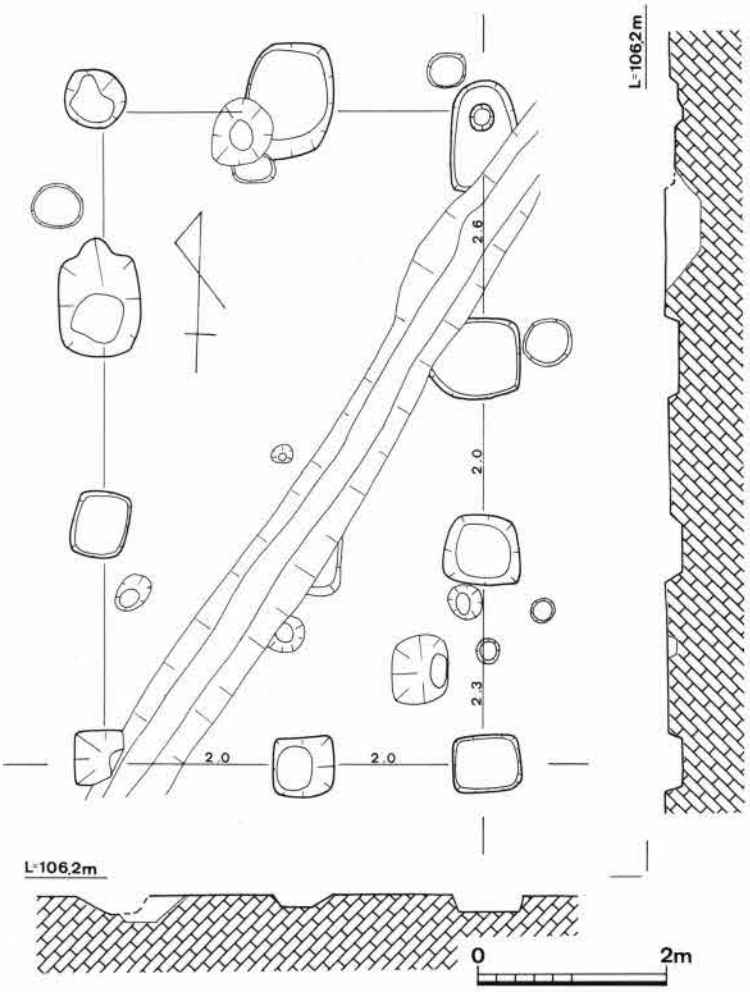
残りが悪く、一部鎌倉時代の溝で削平を受けていた。しかし、今回検出した建物跡の中では、最も大きな掘形を整然と配列したものであった。建物の規模は、２間(5.4m)×３間(7.4m)以上を測る。主軸方向は、N15°Eで、掘立柱建物跡２と同方向であった。柱穴の掘形は長方形で、大きなものは1.0m×0.9mを測り、深さは0.5mであった。また、この掘立柱建物跡の南西端にも２間(3.0m)×２間(3.0m)の小建物跡があった



第９図　掘立柱建物跡３実測図



第10図　掘立柱建物跡４実測図



第11図　掘立柱建物跡５実測図

可能性がある。

掘立柱建物跡５（第11図）　第２トレンチ南端で検出した建物跡である。一部鎌倉時代の溝で削平を受けていた。建物の規模は、２間(4.0m)×３間(6.9m)を測る。主軸方向は、Ｎ２°Ｗで、掘立柱建物跡３とほぼ同方向であった。柱穴の掘形は長方形で、0.9m×1.2mと大きく掘られていた柱穴もあった。深さは、0.2～0.3mである。

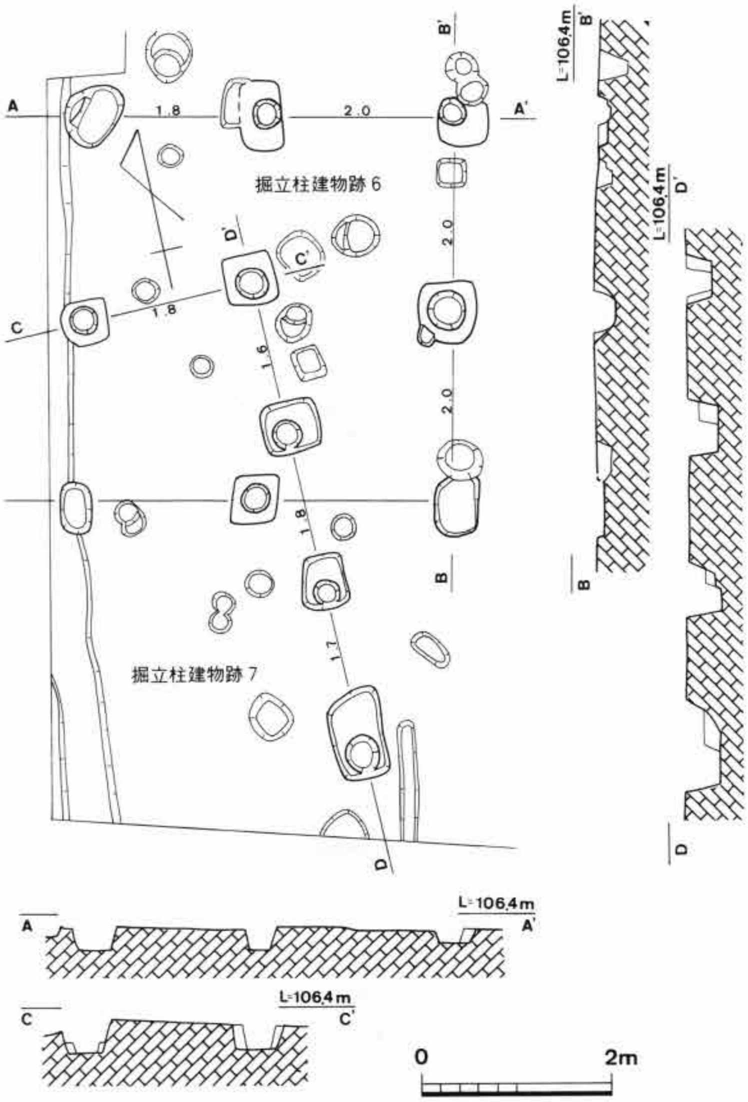
掘立柱建物跡６（第12図・図版第５）　第２トレンチ南西隅で検出した建物跡である。２間(4.0m)×２間(3.8m)以上を測る。主軸方向は、Ｎ13°Ｅで、掘立柱建物跡２・４とほぼ同方向であった。柱穴の掘形は方形で、一辺約0.6mを測り、深さは0.2～0.3mであった。柱穴内からは、遺物が少量出土したが、時期を決定するには至らなかった。

掘立柱建物跡７（第12図・図版第５）　第２トレンチ南西隅で検出した建物跡である。１間(1.8m)以上×３間(5.1m)以上を測る。主軸方向は、Ｎ３°Ｗで、掘立柱建物跡３・５とほぼ同方向であった。柱穴の掘形は方形ないし長方形で、一辺0.6～0.9mを測り、深さは0.3～0.4mであった。柱穴内からは、遺物が少量出土したが、時期を決定するには至らなかった。

井戸１（第13図・図版第６）　第２トレンチ西方で検出した、板材を木枠にした井戸であった。一部土圧によって崩壊状態であった。検出面での規模は、径約2.6m・深さ約2.8mであった。途中段掘りされており、段に沿って板材を並べ、真っ直ぐな自然木で内外から固定していた。井戸内にはさほど遺物は混入しておらず、土師器・須恵器細片がわずかに出土した。中世遺物は認められず、井戸内の埋土が掘立柱建物跡の柱穴と同じ黒色土であったことから、建物跡と同時期の遺構と考えた。

土坑３（第14図・図版第５）　第１トレンチ中央で検出した遺構である。掘立柱建物跡１・２・３の東側に位置するこの遺構は、断面がゆるやかな「Ｕ」字を呈し、その規模は径約2.4m・深

さ0.7mであった。遺構内の埋土は大半が黒色系の土であることから、ある時期に一気に埋まったものと思われた。黒色土内からは、土師器杯(第17図35・36)が出土したことから、8世紀中頃の遺構と考えた。さらには同色の土が埋土として認められた掘立柱建物跡や井戸においても、この時期に該当するものと考えた。土坑3自体の遺構の性格については不明であるが、井戸1を囲む形で建物跡が配列していることや、土坑3が一部の建物跡に隣接することなどを考えると、生活する上で必要とされる水を甕などに蓄えるために、設けられた土坑と言える。

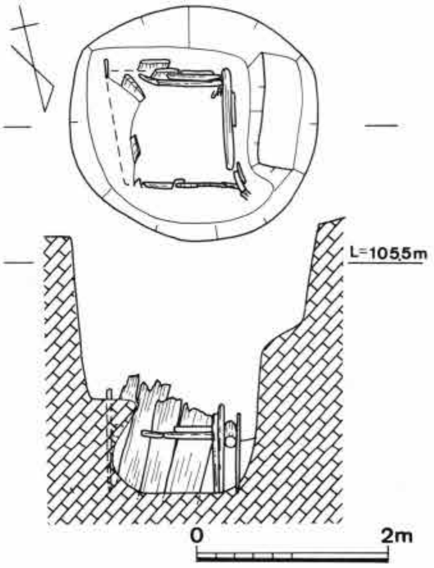


第12図 掘立柱建物跡6・7実測図

(3)鎌倉時代

この時代の遺構は、井戸1基と溝跡1・2と柱穴である。

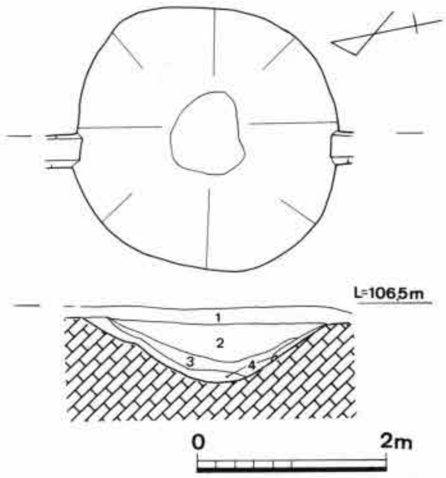
井戸2(第15図・図版第5) 第1トレンチ東側で検出した素堀りの井戸である。径約2.2m・深さ約1.2mを測る。埋土中に多量の瓦器椀・土師器皿が混入しており、遺物の形態から12世紀後半～13世紀代の遺構と考えられる。遺構を覆う施設については調査地端で検出したため不明である。



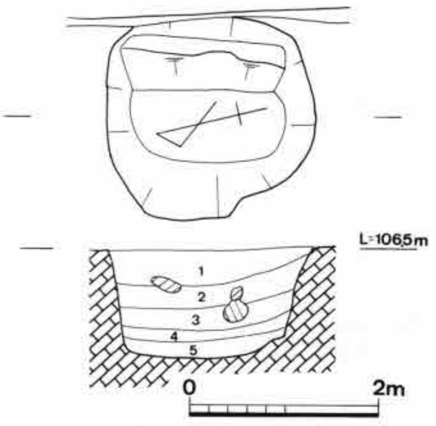
第13図 井戸1実測図

溝跡1・2(第4図) 第2トレンチ南側で検出した。遺構の切り合い状況や断面観察の結果、溝1の後に溝2が設けられた。規模は、溝1が幅約1.0m・深さ約0.2mを、溝2が幅約1.5m・深さ約0.3mを測る。出土遺物からは時期差は見られず、12世紀末～13世紀と思われた。この溝は、さらに第2トレンチの南・東方に延びる。隣接地は一段低くなっており、削平されている可能性が高い。

溝・柱穴 第2トレンチで確認した。溝は、幅約20～



第14図　土坑３実測図
1.中世溝埋土　　2.茶褐色土
3.暗茶褐色土　　4.黒色土



第15図　井戸２実測図
1.淡茶褐色土　　2.茶褐色土
3.黄白色土混じり淡茶褐色土
4.黒色土　　5.暗黒色土

30cm・深さ約５cmを測るもので、鎌倉時代には、この付近は田畑として利用されていたものと思われる。柱穴については、径約20～30cm・深さ約10～20cmと小規模であることから、小屋のような建物が建っていたと考えられるが、規模については不明である。

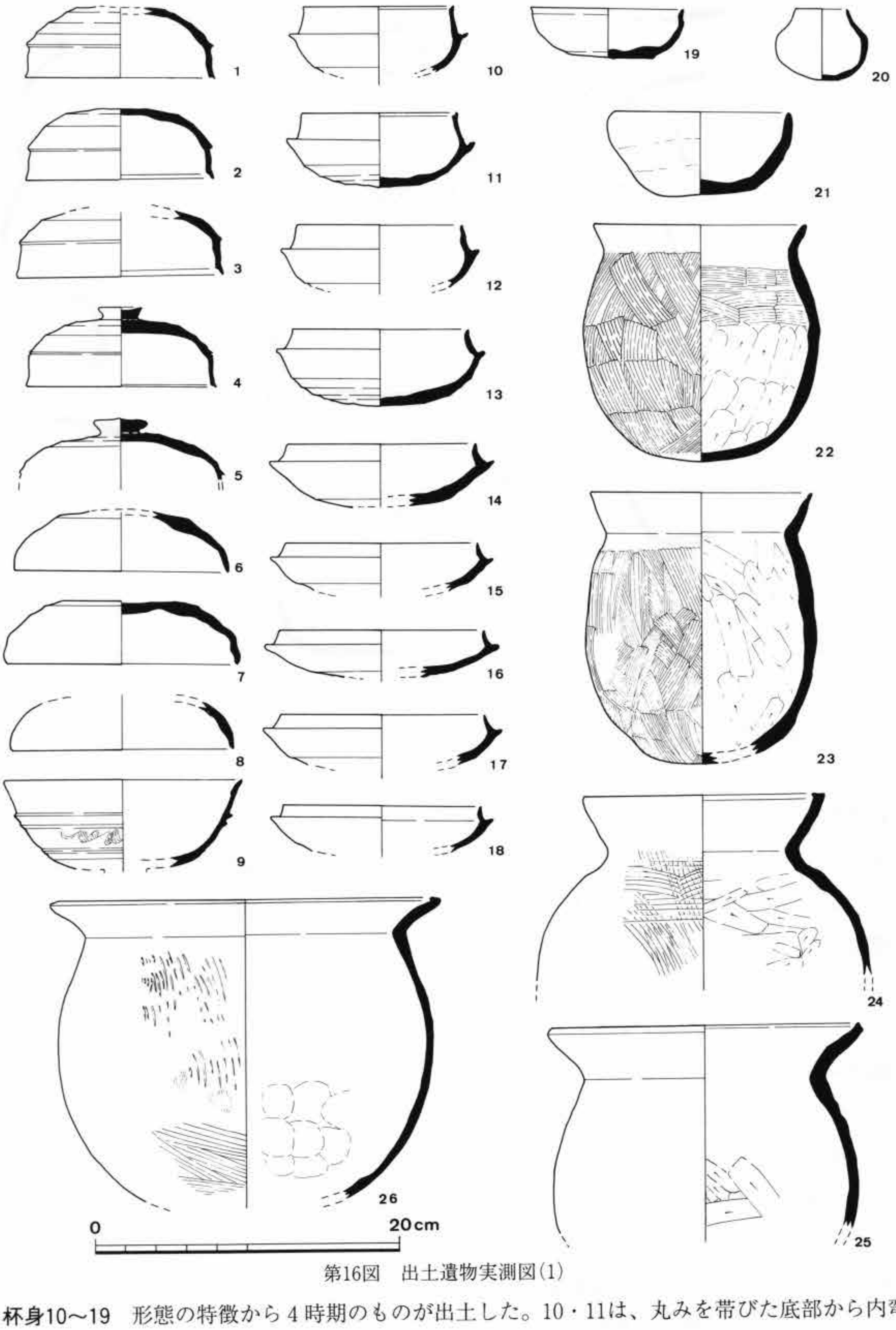
4．出　土　遺　物（第16～18図・図版第７・８）

京都府教育庁指導部文化財保護課の試掘調査（第７次）時に出土した遺物と、当調査研究センターによる発掘（第８次）調査時に出土した遺物の主なものを掲載した。遺物の出土量は整理箱12箱である。内訳は、古墳時代のものが５割を占めるが、遺構出土のものはわずかである。奈良・鎌倉時代の遺物が同量で、残り５割を占める。

第７次調査時出土遺物は、５・33・55でいずれも包含層出土遺物である。第８次調査時の包含層出土遺物は、１～３・７・８・10・13・18～20・25・28・30・32・34・39・40・46である。竪穴式住居跡１出土遺物は11で、竪穴式住居跡２出土遺物は４・９である。24は、竪穴式住居跡２よりも古い時期の土坑（北東隅で検出）から出土したものである。土器埋納坑出土遺物は15・17・21～23である。土坑１からは16が、土坑３からは26・35・36が出土した。26は磨滅していることから、混入遺物と思われる。掘立柱建物跡１出土遺物は14・29であるが、14はかなり磨滅していたことから混入遺物と思われた。６は、掘立柱建物跡６に伴う柱穴から出土したが、磨滅状態から混入遺物と思われた。37・38は、奈良時代の柱穴内出土遺物である。12も溝跡２から出土しているが、瓦器椀の破片とともに出土することから混入遺物と考える。井戸２は27・41～44・47～52・54である。45・53は鎌倉時代の柱穴内出土遺物である。

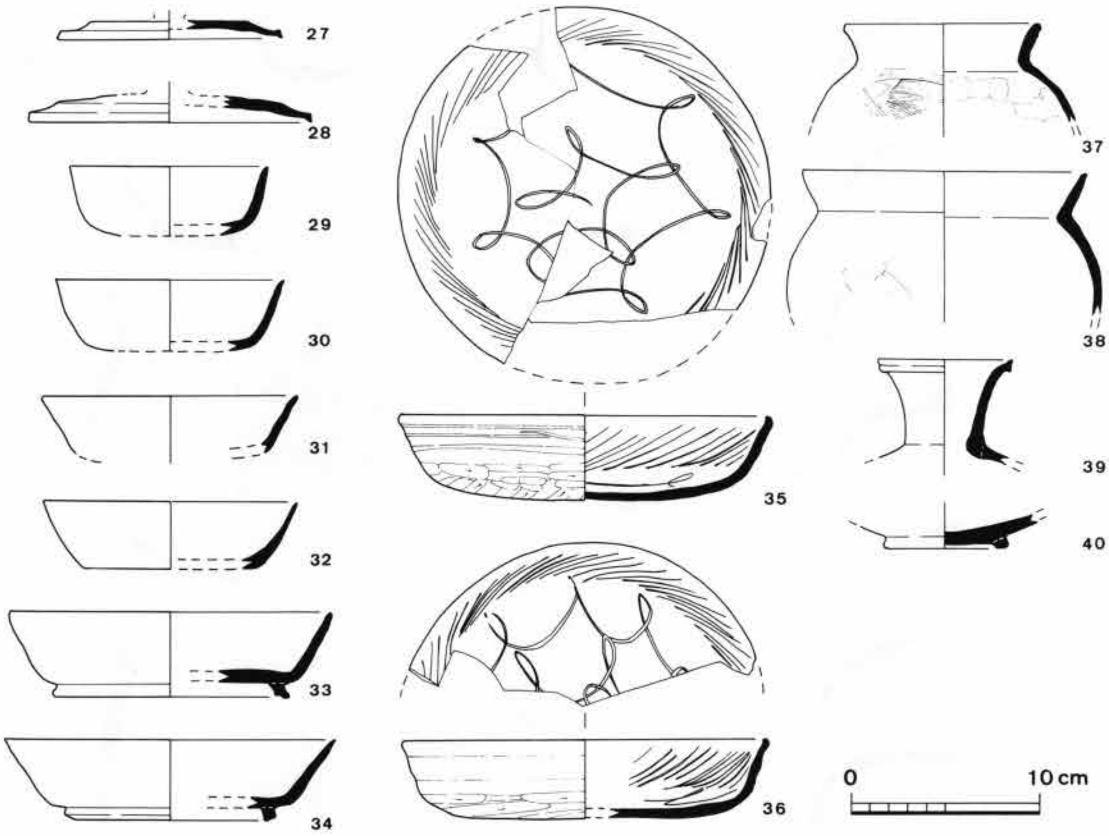
杯蓋１～８　丸みを帯びた天井部と下方を向く口縁部からなる。４・５は、有蓋高杯の蓋である。１～４は、口縁部が高く、器形が半球形に近い。また口縁基部や端部の特徴から、ＴＫ47型式併行期のものと考える。６・７は、平坦な天井部と短く下方を向く口縁部からなる。口縁端部は丸い。このような形態から、ＴＫ43型式併行期のものと考える。

無蓋高杯９　脚部は、欠損しており不明である。底部から内弯して、真っ直ぐ立ち上がる口縁部からなる。外面には２条の突帯が巡らされ、その下に波状文が施されていた。形態の特徴から、ＴＫ47型式併行期のものと考える。



第16図　出土遺物実測図(1)

杯身10～19　形態の特徴から４時期のものが出土した。10・11は、丸みを帯びた底部から内弯しながら立ち上がり、内上方に立ち上がる口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。形態の特徴から、ＴＫ47型式併行期のものと考える。12・13は、10・11と似た形態を示すが、口縁端部の特徴から、ＭＴ15～ＴＫ10型式併行期のものと考える。14～18は、器高が低く立ち上がりも内上方に短いこ



第17図　出土遺物実測図(2)

とから、ＴＫ43型式併行期と考える。19は、受け部を持たない杯身で、平坦な底部から内弯しながら立ち上がり、口縁部は上方を向く。ＴＫ209型式併行期と考える。

短頸壺20　球状の底・体部と短く内上方に立ち上がる口縁部からなる。ミニチュアである。

杯21　平坦な底部と内弯しながら立ち上がる体部からなる。口縁端部は丸い。器壁の厚い土師器である。須恵器杯身17と共に出土したことから、この時期の土師器と考える。

壺22・23　球状の底・体部と外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は丸い。体・底部外面は、ハケを施し、内面はヘラ削りを主体とする。体部上部のみ横方向のハケを施すものもある。須恵器杯身17と共に出土したことから、この時期の土師器と考える。

甕24～26　３点とも残りが悪く、全体に磨滅していた。球状の体部と外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。体部外面はハケ目が、内面はヘラ削りの痕跡が部分的に見られた。口縁端部が、内側に肥厚することから、布留式期のものである。

蓋27・28　つまみは欠損していた。天井部からＳ字状に屈曲して口縁部に至る。端部は、下方に尖る。扁平で大型品でないことから、９世紀前半と考える。

杯29～32　平底の杯である。底部端から外上方にまっすぐ立ち上がる。口縁端部は尖る。31は、体部の立ち上がりが直線的であることから、33・34と同じ高台を持つ杯であった可能性もある。

杯33・34　輪状に高台を巡らした杯である。底部端から外上方にまっすぐ立ち上がる。口縁端部は尖る。高台の貼り付け状態から、８世紀後半から９世紀初頭にかけての遺物と考える。

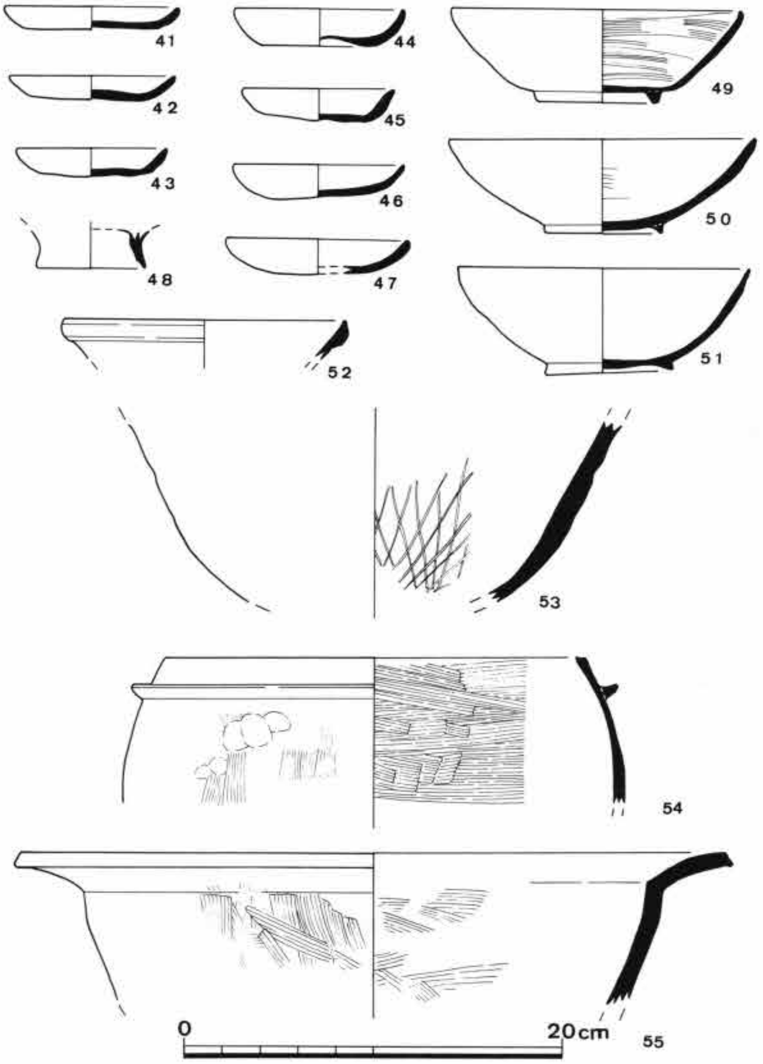
杯35・36　土師器の杯である。底部端は丸みを帯びて屈曲し、短く外上方に立ち上がる。体部

内面には渦状に、底部内面は螺旋状に暗文が施される。外面底部にはヘラ削り後の磨き痕跡が密に見られた。体部外面は磨きが施されていることから、8世紀後半のものと考える。亀岡市内においては国府跡と推定される千代川遺跡に出土例が見られる。

甕37・38　丸みを帯びた体部と外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。体部外面はハケ目が、内面はヘラ削りの痕跡が残る。

壺39　外上方に立ち上がる頸部と上下方に尖る口縁端部からなる。形態の特徴から9世紀前半の土器と考える。

杯40　短く下方に踏ん張る高台を貼り付けた杯である。底部から体部にかけての立ち上がりが椀に近い状態で弯曲する。形態から9世紀前半と考える。



第18図　出土遺物実測図(3)

皿41～48　46は黒色土器、48は土師皿の高台部である。それ以外は土師器皿である。平坦な底部から短く立ち上がる41～43と、わずかに器高の高い44・45と、底部から丸みを帯びて立ち上がる46・47がある。形態から見て、12世紀後半～13世紀にかけてのものと考える。

瓦器椀49～51　全体に磨滅していたため、ミガキの状態については不明な点が多い。49は、密にミガキが施されていた。形態の特徴から13世紀代のものと思われる。

鉢52・53　52は、口縁端部が肥厚する、東播系の鉢である。

羽釜54　全体の形態については欠損していたため不明である。内上方に立ち上がり、横方向の短い鍔が付く。内外面にハケ目が残る。

鍋55　わずかに内弯して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。体部内外面にハケ目が残る。

5. ま と め

今回の発掘調査の結果、6世紀前半の竪穴式住居跡群と、8世紀中頃の掘立柱建物跡群の一画

を確認することができた。

竪穴式住居跡群については、西方に古墳時代の住居跡が多数確認されている鹿谷遺跡が占めていることから、今まで推定されていた鹿谷遺跡の集落の東端が今回の調査地まで広がっていたと考えられる。鹿谷遺跡を調査した際には、この時期の住居跡が不明であったことから、今回の成果はその空白を埋める資料を提示することができた。北方の丘陵斜面には、鹿谷古墳群や鹿谷池田古墳群が位置する。

掘立柱建物跡群については、整然と並ぶ７棟の建物跡を確認し、その一部は隣接地にさらに広がることが分かった。調査地は、行者山から派生する低丘陵南側の微高地上にあたり、集落を営むには好条件の地と思われる。確認した柱穴の掘形がかなり大きいことから、現在の稗田野町一帯あるいはそれ以上の地域を掌握していた豪族の居館跡である可能性がある。今回の調査では、建物跡群の一画を検出したことから、全容については今後の調査が期待される。

（岡崎研一）

注１　村尾政人・田代　弘ほか『太田遺跡』（『京都府遺跡調査報告書』第６冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1986

注２　樋口隆久「太田遺跡第２次発掘調査」（『亀岡市文化財調査報告書』第37冊　亀岡市教育委員会）　1996

松尾史子「府営農業基盤整備関係遺跡平成８年度発掘調査概要［１］太田遺跡」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1997)』京都府教育委員会）　1997

岸岡貴英「府営農業基盤整備関係遺跡平成９年度発掘調査概要［３］太田遺跡第４次」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1998)』京都府教育委員会）　1998

増田孝彦「太田遺跡第５次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第82冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998

注３　水谷壽克・森下　衛・鵜島三壽・中川和哉・柴　暁彦ほか『千代川遺跡』（『京都府遺跡調査報告書』第16冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1992

注４　石井清司・田代　弘ほか『北金岐遺跡』（『京都府遺跡調査報告書』第５冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1985

注５　鵜島三壽「鹿谷遺跡平成３年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第48冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1992

野島　永・河野一隆「鹿谷遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第52冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1993

注６　吉水眞彦・大槻眞純ほか「昭和51年度国道９号バイパス関係遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会）　1977

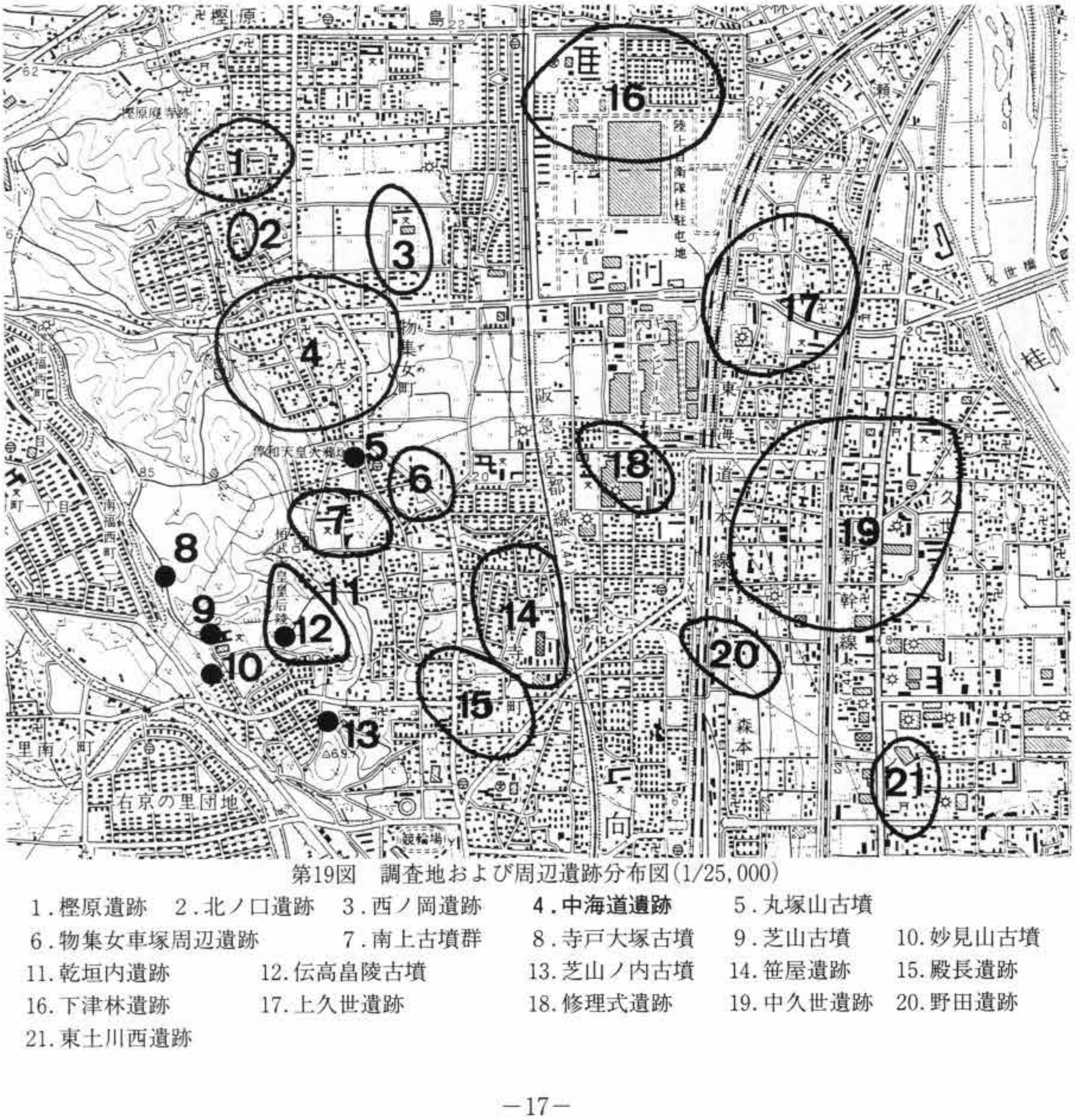
田代　弘・細川康晴「国道９号バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要(3)小金岐古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第17冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1985

注７　石田忠一・石田初美・石田晴美・石田正美・磯崎直子・出野　宣・大石ふゆ子・大西芳美・柿谷悦子・鎌田安彦・黒田道崇・高田眞由美・竹岡和子・竹岡喜代子・竹岡弘子・竹岡美恵子・楢本順子・西田貞代・原田浩年・原野実子・平出高志・廣瀬なる美・東前愛子・藤井矢壽子・前田茂野・松田唯烈・松元順代・村嶋みよ子

2．中海道遺跡第49次発掘調査概要

1．はじめに

中海道遺跡第49次調査は、広域幹線アクセス街路整備２工事（府道中山稲荷線）に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼をうけ、記録保存資料を作成する目的で当調査研究センターが主体となって調査を実施した。調査対象地は、向日市物集町中海道地内である。現地調査は、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第４係長奥村清一郎、同調査員藤井　整が担当した。調査期間は、平成10年11月９日から平成11年１月25日までである。調査面積は７地点の合計で、約270㎡である。発掘調査を進めるにあたっては、京都府教育庁指導部文化財保護課・向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センターの指導と助言をいただいた。なお、調査に係る経費は、京都



第19図　調査地および周辺遺跡分布図（1/25,000）

1．樫原遺跡　2．北ノ口遺跡　3．西ノ岡遺跡　**4．中海道遺跡**　5．丸塚山古墳
6．物集女車塚周辺遺跡　7．南上古墳群　8．寺戸大塚古墳　9．芝山古墳　10．妙見山古墳
11．乾垣内遺跡　12．伝高畠陵古墳　13．芝山ノ内古墳　14．笹屋遺跡　15．殿長遺跡
16．下津林遺跡　17．上久世遺跡　18．修理式遺跡　19．中久世遺跡　20．野田遺跡
21．東土川西遺跡

府土木建築部が負担した。

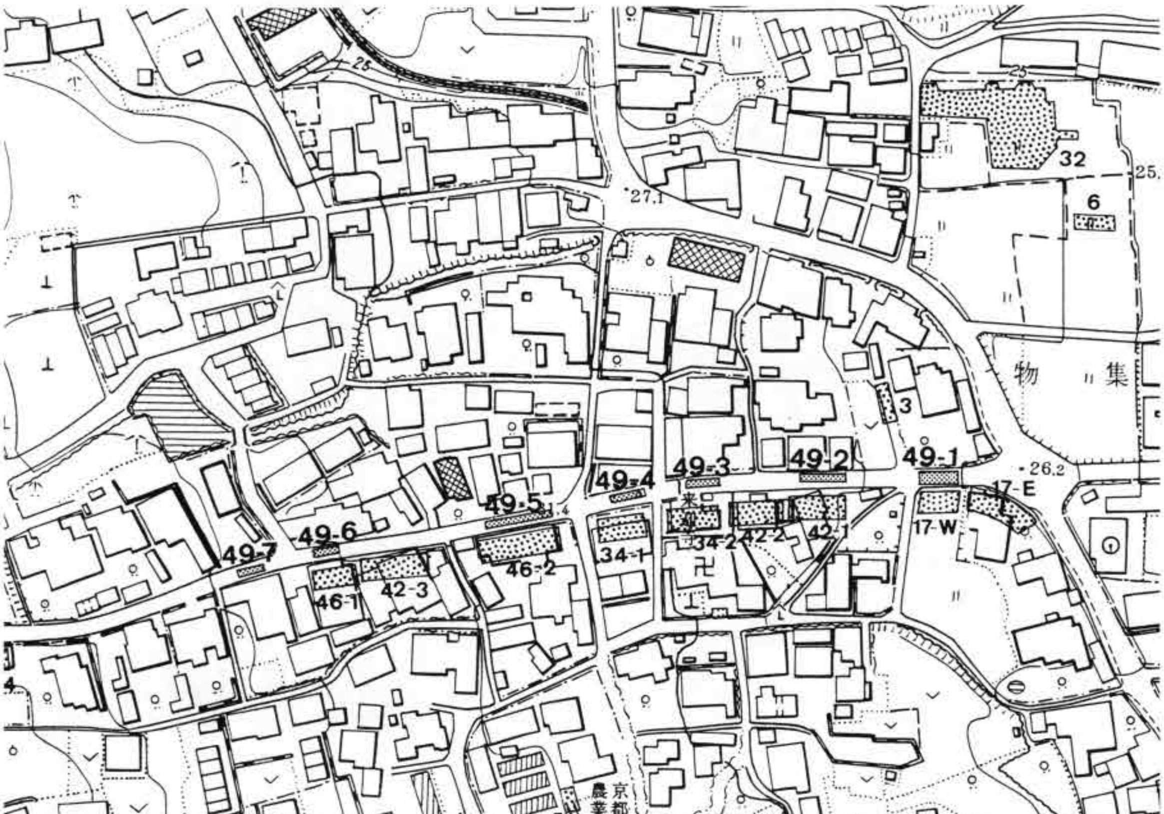
2．調　査　の　概　要

調査対象地は、道路拡張前の車道部分で、その範囲は東西約100mにわたる。トレンチは約2～3mの幅で、7か所に設定した。調査区周辺の地形は、西から東へ向かって下る段丘の緩斜面で、第1トレンチと第7トレンチの比高差は約6mになる。

7か所に設定したトレンチの内、西半分の3か所(第5～7トレンチ)については、すでに地山面まで削平が及んでおり、遺構の検出はできなかった。残る4か所のトレンチについても、近現代の土坑や井戸、水道管等による攪乱をうけており、調査は難航した。

今回の調査では、弥生時代後期、古墳時代中期、平安時代、中世の4時期にわたる遺構と遺物を検出した。検出遺構の大半はピットであるが、調査面積の制約から、それらが柱穴となるものかは不明である。

周辺の調査(中海道遺跡第3・34・42・46次調査)では、弥生時代の住居跡が検出されているが、今回の調査区では、当該時期の住居跡は検出されなかった。また、第3・42次調査では、古墳時代の住居跡が検出されている。今回、第1トレンチで検出されたのは、古墳時代中期の住居跡で、古墳時代の集落域がさらに東へも広がることが確認できた。



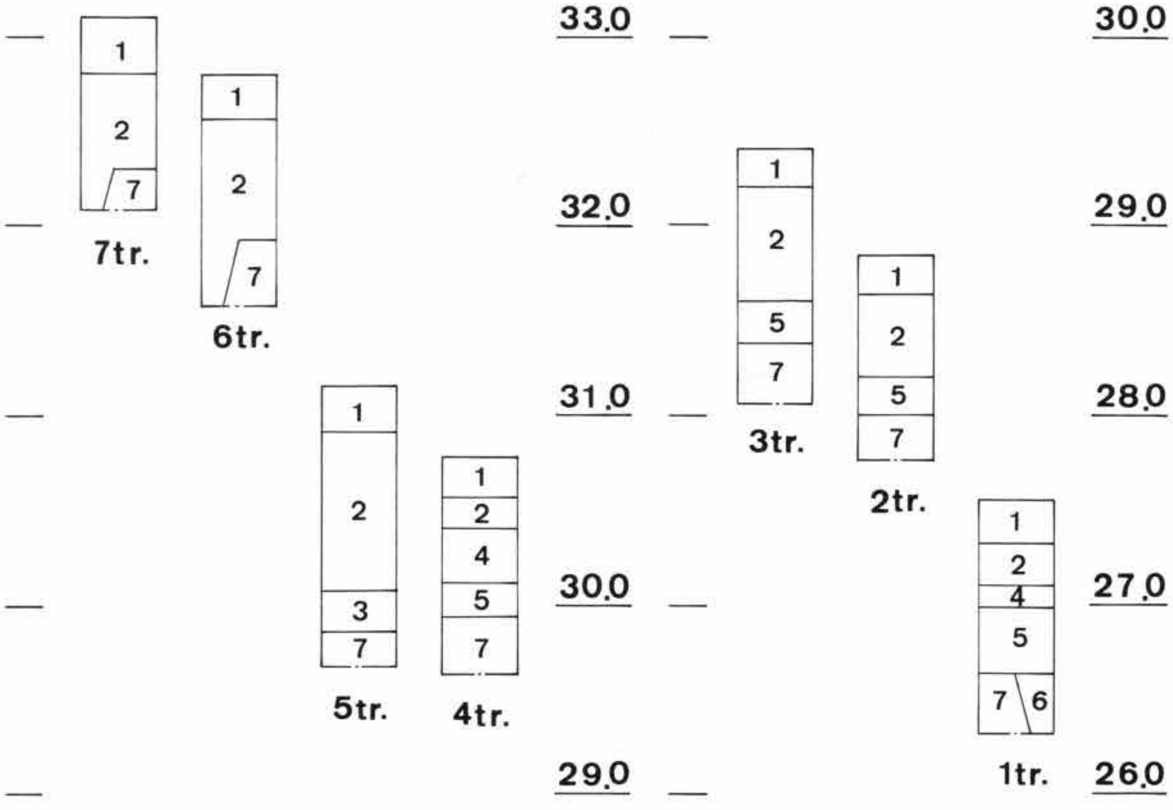
第20図　今回の調査と過去の調査トレンチ位置図

以下に各トレンチごとに調査成果を概観する。

(1)土層

今回の調査は、第1トレンチから第7トレンチまで東西に約100mという幅の広い調査となった。第21図は各トレンチごとの柱状図である。調査地が段丘の斜面となっているため、図面は左右2段組となっている。

第7層は明黄褐色粘質土で、拳大の礫を多く含んでおり、極めて硬質である。この層については、各トレンチで、最終段階に深掘りを行ったが、遺物等は出土しなかった。段丘の下に位置するトレンチでは、この第7層の再堆積と考えられる、ややしまりの弱い層も確認できた。第6層は淡灰色～灰白色砂である。今回の調査では、第1トレンチ以外では検出されなかった。扇状地堆積層であると考えられる。古墳時代中期の竪穴式住居跡や、それ以前の自然流路は、この層の上面で検出した。第5層は暗褐色粘質土で、弥生時代から古墳時代の遺物片を含む。中世と平安時代の遺構はこの層の上面で検出した。第4層は暗灰褐色粘質土で、瓦器などの遺物片を含んでいるが、第4トレンチなどごく一部でしか検出できなかった。第3層は暗茶褐色～茶褐色粘質土



第21図　各トレンチ柱状土層図

1.コンクリート　2.バラス(その他埋設管埋土)　3.暗茶褐色～茶褐色粘質土　4.暗灰褐色粘質土
5.暗褐色粘質土　6.淡灰～灰白色砂　7.明黄褐色粘質土(礫混)

で近世以降の遺物を含む。第３トレンチで検出された近代のものと考えられるガラス瓶などの入った土坑は、この上面から切り込まれている。この層より上は府道工事や、配管工事の際に敷かれたバラス(第２層)とコンクリート(第１層)である。

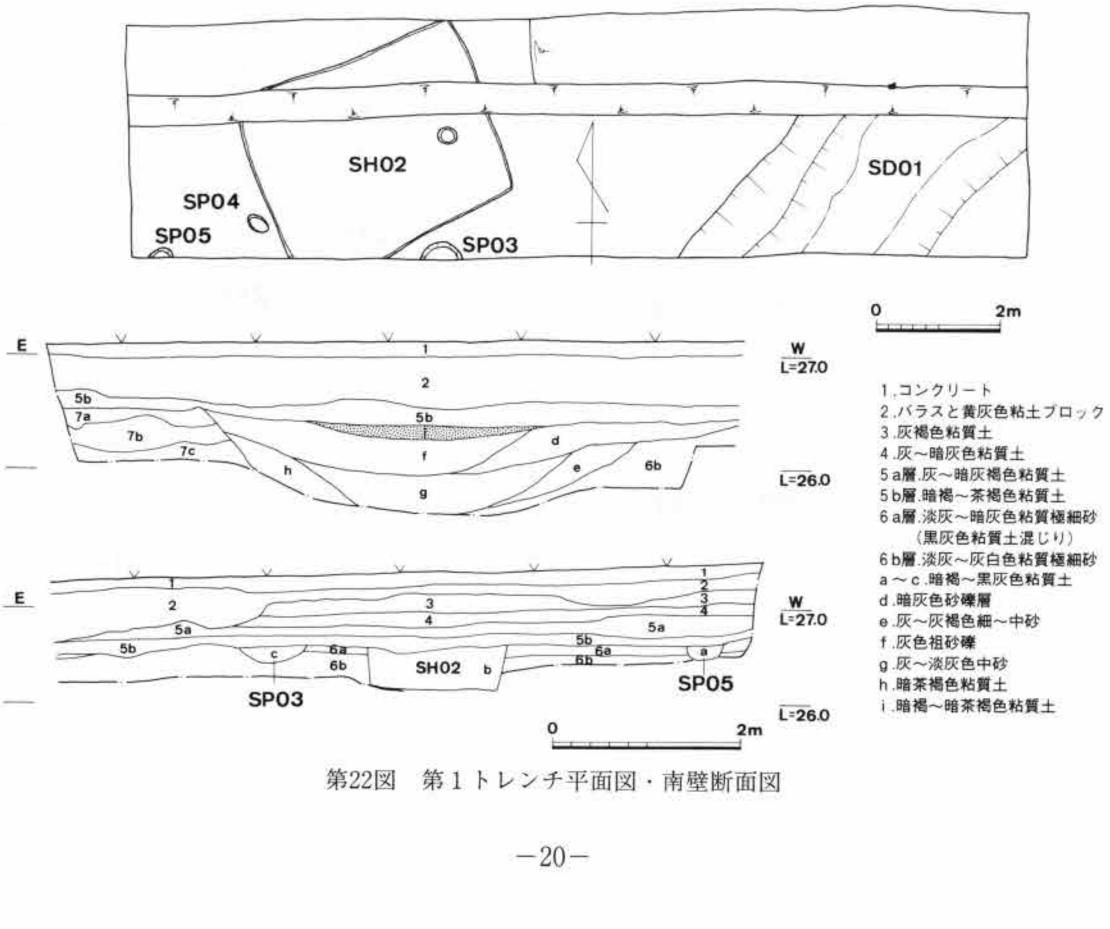
(2)第１トレンチの概要

このトレンチでは溝１条と竪穴式住居跡１棟、ピット３基を検出した。トレンチの大半は水道管や電話配線によって削平されており、その他の遺構は検出できなかった。これらの遺構は、すべて第６層の上面で検出した。

溝ＳＤ01　溝ＳＤ01は弥生時代後期を下限とする自然流路である。調査区の北側半分は電話配線によってすでに失われており、約1.5ｍほどの間で検出する形となった。この溝は幅３ｍ・深さ0.8ｍで、西側は二段に落ち込んでいる。この溝は埋土などから、自然流路であると考えられる。第17次調査のＮＲ16と同一の溝となる可能性が高い。

溝の最下層には灰～淡灰色中砂と暗茶褐色粘質土が堆積しており、この段階には流路として機能していたものと考えられる。しかし、溝埋土の中層以上は、砂礫によって埋没しており、これ以上の部分は短期間に埋まったものと考えられる。弥生時代後期の遺物は、全て最上層の暗褐～暗茶褐色粘質土に含まれていた。

第17次調査ＮＲ16では、溝が機能していたと考えられる最下層から縄文時代晩期の遺物が出土しているが、今回の調査では出土しなかった。遺物はコンテナにして約半分の量が出土したが、いずれも小片で、図化は困難なものが大半である。遺物は、溝がすでにほとんど機能していない段階の堆積物に含まれていることから、比較的近い位置に弥生時代後期の集落が位置したものと



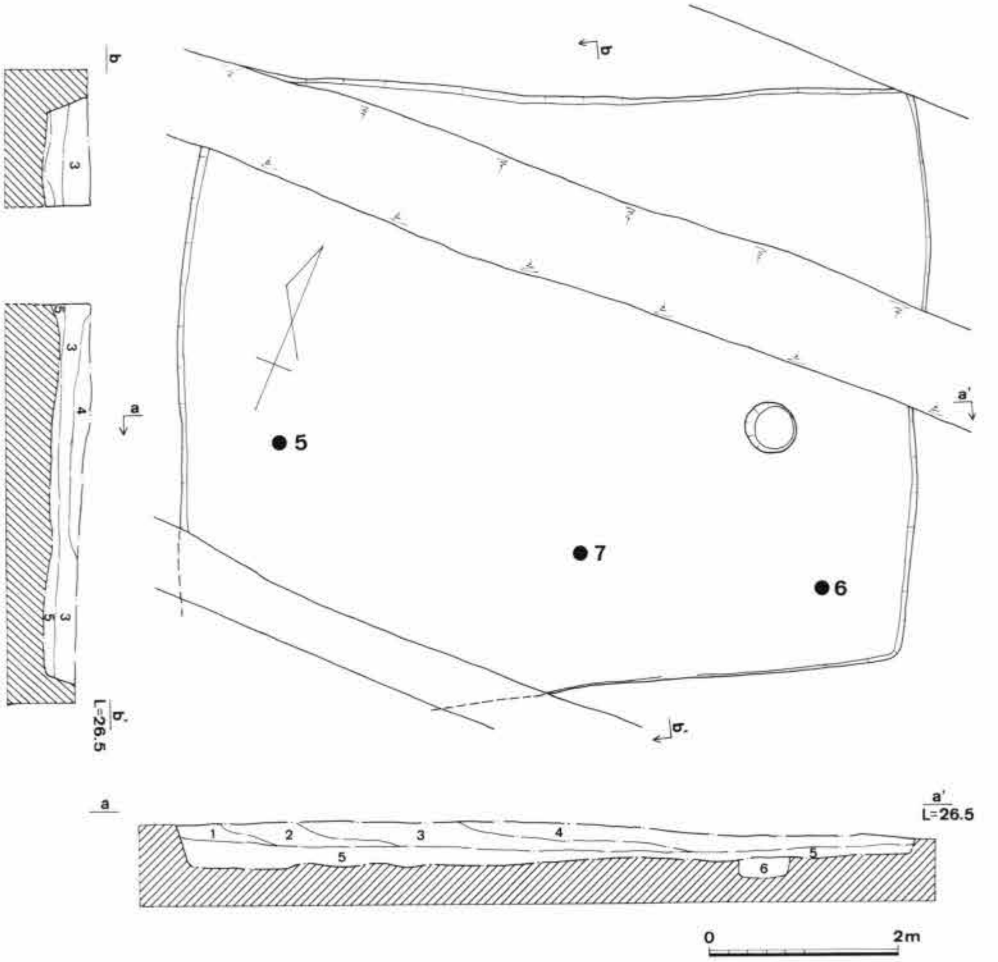
第22図　第１トレンチ平面図・南壁断面図

考えられる。

竪穴式住居跡ＳＨ02　古墳時代中期の竪穴式住居跡１基を、第６層の上面で検出した。長辺3.9m・短辺3.1mのやや不整形な方形の竪穴式住居跡であり、検出面からの深さ約45cmが残存していた。

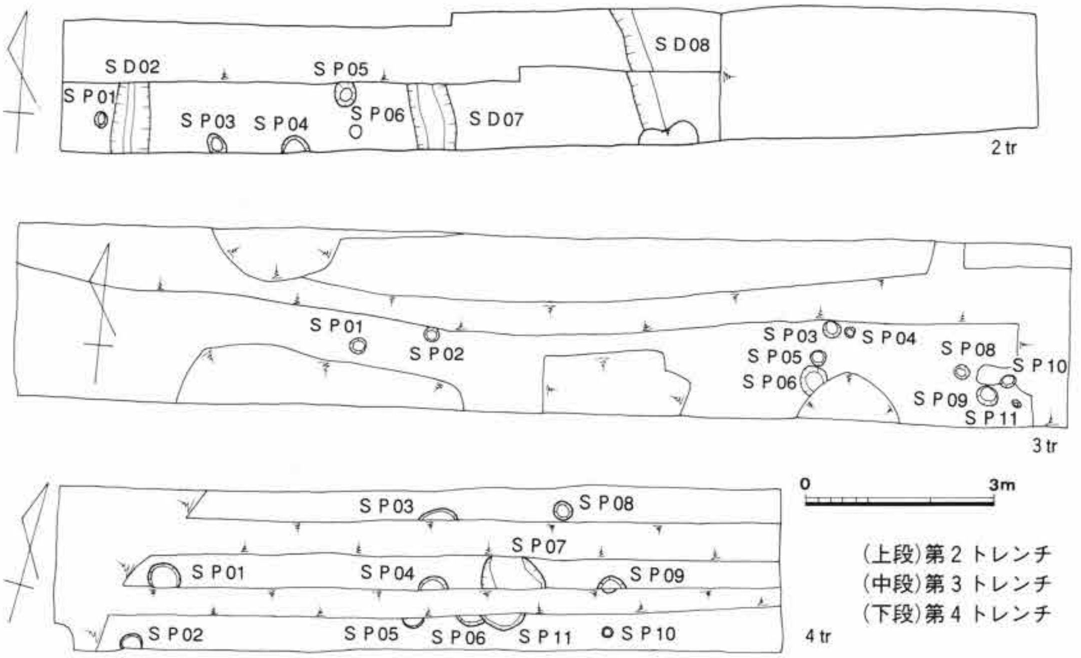
この住居跡では、周壁溝は確認できなかった。住居跡の掘形底面は不整形で、平面にはなっていない。この上に、平均して約３～４cmの張り床が認められた。床面直上では炭片が多く検出され、張り床の層中(５層)には炭は混じっていなかった。主柱穴は２本柱であるものと考えられるが、東側の１本しか検出できなかった。この柱穴は、張り床の上面から掘り込まれたものと推測されるが、現地調査の段階では、張り床を除去した段階で検出した。柱穴の深さは床面直上から約25cmを測り、埋土は暗灰～灰褐色粘質土で淡灰色粘質土ブロックが混じる。

床上の遺物は多くないが、杯部を欠損した高杯(5)が１点、床に立て置かれたような状況で出土した。また、敲石(6)も床面直上で出土した。この敲石はグラインドに用いられた面を上にし



第23図　竪穴式住居跡ＳＨ02平・断面図

1.暗黒灰色粘質土(灰色細砂を含む)　2.暗灰～灰色粘質土　3.灰色粘質土　4.灰～灰褐色粘質土
5.暗灰色粘質土(淡灰色粘質砂ブロック混)　6.暗灰～灰褐色粘質土(淡灰色粘質土ブロック混)



第24図　第2・3・4トレンチ遺構配置図

て出土したが、据え置かれていたものかは不明である。これとは別に東側でも、杯部を欠損した高杯(6)が出土しているが、これは脚部を上にしており、床面直上の資料ではない。

この住居跡からは須恵器は出土していないが、第42次調査のＳＨ01と同時期の住居となるものと考えられる。隣接地の調査となる第３次調査では、古墳時代前期の住居跡が確認されており、周辺に古墳時代の集落域が広がっていることが確認できた。

(3)第２～７トレンチの概要

第２トレンチでは、ピット５基と、溝３条を検出した。このトレンチの東端はすでに攪乱を受けており、遺構は検出できなかった。攪乱を受けていない部分では、ほぼ全域で遺構が確認できる。ここでは竪穴式住居跡などは検出されなかった。この内、ＳＰ03からは古墳時代中期の甑が出土している(第25図－９)。

第３トレンチでは、ピット11基を検出した。このトレンチは、水道管以外にも近現代の井戸や、ガラス瓶などを投棄した土坑によって攪乱されていた。遺構が集中していたのは、トレンチの東半で、ピットが集中するが、建物の復元は困難である。

第４トレンチでは、土坑とピット11基を検出した。遺構は全面的に検出されるが、その密度はまばらである。このトレンチで特筆すべきものとしては、ＳＫ07から出土した中世の山茶碗がある。このピットは、その他のものと比べるとやや色調が淡く、淡灰～淡灰黄色粘質土であった。このような埋土は、第２トレンチＳＤ02・ＳＤ08などの遺構でも確認されており、当該時期の遺構は少なくとも第２トレンチまでは広がるものと考えられる。

また、このトレンチは第34次調査の第２トレンチと第42次調査のトレンチに近接しているため、弥生時代の住居跡の検出には十分注意を払ったが、確実に弥生時代と判断できる遺構は検出されなかった。

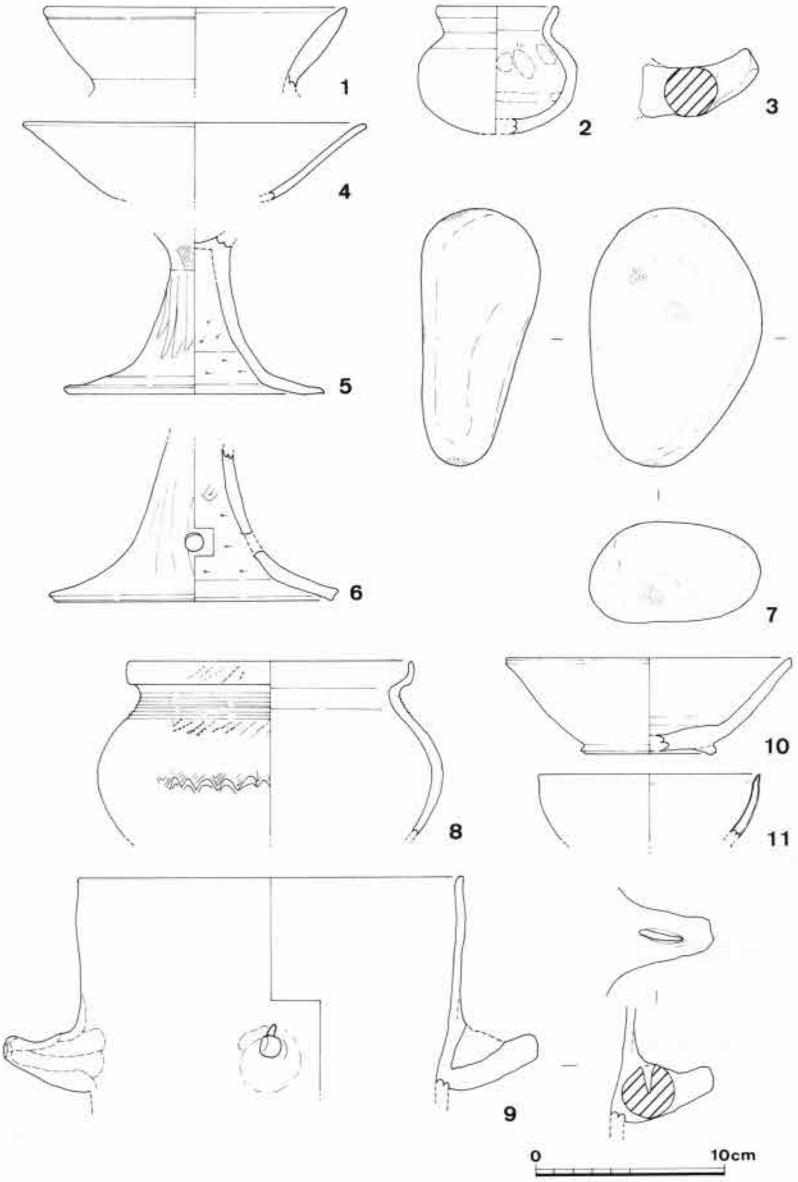
3．出　土　遺　物

1～7は、ＳＨ02出土遺物である。これらのうち、床面直上から出土した遺物は3・5・7である。1は布留系甕である。2は小形丸底壺である。器面が荒れており、調整等は不明であるが、器壁も厚く、粗雑な作りである。3は甑の把手部分であるが、器面が荒れており、調整等は不明である。4～6は高杯である。5は床面直上で出土したもので、色調は濃褐色と出土遺物の中でも目立つ。脚の内面はハケ後ナデ、脚柱部の内面はケズリ後ナデである。また、脚柱部の外面は粗くミガキをかけ、面を持たせている。6の色調は淡黄灰色である。この高杯は胎土が特に粗く、1～6㎜の砂礫を多く含んでいる。脚柱部の内面は強いケズリ、外面はハケ後ナデで脚柱部のみを粗くミガキをいれるものである。

この住居跡から出土した遺物の大半は、色調が淡黄灰色から淡黄褐色で、胎土に直径1㎜前後の長石・チャート等の砂粒を多く含んでいた。これらに比べると、5は色調がやや濃いが、胎土に含まれる砂粒は大きくは異ならない。同一河川流域からの搬入品であろうか。

7は敲石である。平坦部の一部には、グラインドに用いられたものと考えられる削痕が観察できる。また、石材の両端と、グラインドに用いられた面の上には敲打痕跡が認められる。

8は第1トレンチＳＤ01出土の受け口の甕である。色調は淡黄褐色で、胎土に含まれる砂粒は、住居跡ＳＨ02の出土遺物と同様である。在



第25図　各トレンチ出土遺物
1～7．ＳＨ02　8．第1トレンチＳＤ01　9．第2トレンチＳＰ03
10．第4トレンチＳＰ07　11．第2トレンチＳＰ04

地の胎土であると考えられる。

9は第2トレンチＳＰ03出土の甑である。淡褐色で砂粒を多く含むが、この個体はとくにクサリ礫が目立つ。把手は外面にやや弱い面取りを行い、上方からヘラ状工具による刺突を加える。

10は第4トレンチＳＫ07出土の山茶碗である。強いヨコナデで、端部に面をつくり、口唇部は沈線状にくぼむ。高台は糸切り後に張り付けるものであるが、極めて不整形である。東海系の山茶碗と考えられるものである。

11は天目茶碗である。色調は淡褐色～淡黒灰色で、胎土はやや粗く細かな気泡が観察できる。

4．まとめ

今回の調査区は、ガス管や水道管の敷設場所と重なったため、遺構面がすでに削平されてしまっている部分が大半であった。特に、第5～7トレンチでは、すでに地山面まで削平が及んでおり、これら3つのトレンチでは遺構は確認できなかった。

しかし、第1トレンチを中心とした東側のトレンチでは、周辺における既往の調査成果を裏付ける成果があがった。特に、第47次調査で検出されたものと同時期となる、古墳時代中期の竪穴式住居跡を1棟検出できた。第3次調査ではこれに先行する前期の竪穴式住居跡が検出されており、これらとあわせて、古墳時代の集落域が、第1トレンチ周辺に広がることが再確認できた。

また、弥生時代後期の遺物が、自然流路の最終堆積と共に出土したが、その出土状況から、当該期の集落も今回調査区の近辺に位置するものと考えられる。この自然流路からは、第17次調査時に縄文時代晩期の遺物が出土しているが、今回は出土しなかった。

第2～4トレンチでは、ピットと溝が検出できた。遺物の出土はほとんどなかったが、各トレンチで古墳時代、平安時代、中世のピットを検出した。残念ながら、調査区の大半は水道管やガス管によって破壊されており、建物等の復元はできなかった。これらの状況も周辺の第34・47次調査の成果と同様である。

（藤井　整）

参考文献

國下多美樹・中塚　良「中海道遺跡(第2・3・4・6次)発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財報告書』第13集　向日市教育委員会）1984

中川和哉「中海道遺跡第17次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第39冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1990

奈良康正「中海道遺跡第34次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第70冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1996

田代　弘「中海道遺跡第42次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第77冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1997

竹下士郎「中海道遺跡第46次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第81冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1998

3．長岡宮跡第372次（7ANBND-2地区）発掘調査概要

1．はじめに

今回、長岡宮跡の推定域にあたる京都府向日町競輪場内で施設整備が計画されたことから、これに先立って発掘調査を実施する運びとなった。発掘調査は、遺構遺物の広がりとその性格を確認し記録を作成すると共に、特に重要な遺構遺物が確認された場合にはその保存のための資料を合わせて作成することを目的として実施したものである。調査は施設改修予定地の約800㎡を対象とし、内約300㎡を掘削した。調査は平成11年1月6日に開始し、同年2月19日に終了した。

現地調査は当調査研究センター調査第2課第2係長辻本和美・同調査員田代　弘が担当した。発掘調査経費は、京都府自転車競技事務所が全額負担した。

2．調査地の位置

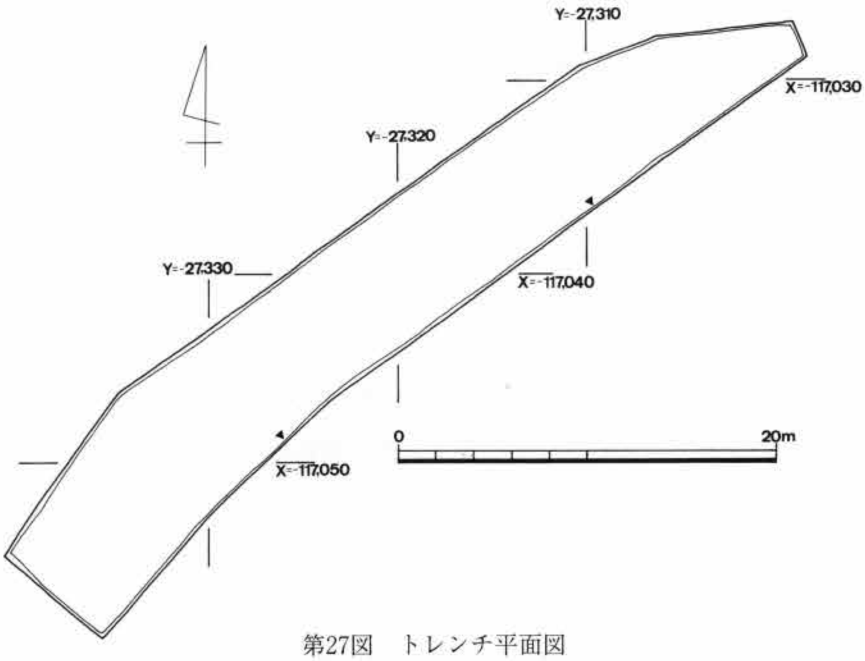
調査地は、向日町競輪場敷地の北西角に位置する。地番は、京都府向日市寺戸町西ノ段5番地である。この地点は、長岡京条坊復原によれば、長岡宮の北西域にあたる場所で、宮域の西端の構造を知る上で重要な地点である。向日町競輪場内では施設改修に伴って1986年度、1991年度に当調査研究センターが調査を実施しており、それぞれ重要な成果を得ている。1986年度は長岡宮跡第164次（7AN18B地区）、1991年度は長岡宮跡第250次（7AN18F地区）として調査を行った。長岡宮跡第164次では宮域内の区画溝と推定される溝、長岡京期の建物跡、土坑などを検出し、長岡京期の軒瓦や土師器・須恵器など多量の遺物が出土した。[注1] 土坑SK16409からは木箱に納められたとみられる緑釉唾壺が出土し、注目を浴びた。[注2] 長岡宮跡第250次では、長岡京期の遺物群とともに、西一坊東大路東側溝とみられる溝の一部が検出された。[注3] これらは、長岡宮域の西端の状況を示す資料として重要なものであり、今回の調査でも関連する成果が得られるものと期待された。

第26図　調査地位置図（1/10,000）

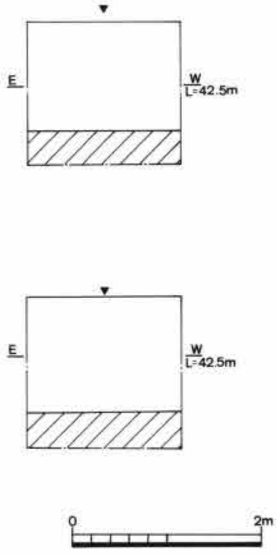
3．調査の経過と概要

(1)調査経過

平成11年1月4日に調査着手のための現地打ち合わせをし、6日からバックホーによる掘削を始めた。攪乱土層が地表下約1.5mまで認められ、これをすべて除去した。掘削に



第27図　トレンチ平面図



第28図　断面柱状図

よって生じた土砂は大型トラックにより場外に搬出した。掘削と土砂の搬出は8日に完了した。掘削作業と平行して、電気工事・プレハブ・安全対策フェンスなどの外注工事を行った。11日から作業員を雇用開始し、人力による遺構面の精査を始めた。精査に先立ち、調査トレンチの壁面と精査面の凹凸を除去するとともに、排水用側溝を巡らせた。この際、今後の掘削のための土層観察をした。この後、精査を行った。作業の進行に応じて適宜写真撮影などを行い、調査の記録を作成した。2月18・19日にトレンチを埋め戻し、調査を完了した。

(2)調査結果

地表下1.2～1.4m地点で精査を行った結果、基礎工事によって段丘礫層まで削平され、削平面から表土まではすべて盛り土がなされていることを確認した。遺構面はすべて破壊されており、遺構の痕跡は全く認められなかった。現代の塵芥があるのみで、考古学的な遺物を確認することができなかった。調査地の位置と土層の堆積状況は第2・3図に示した。

4．お　わ　り　に

今回の調査は、長岡宮に関連する遺構の検出が期待されたが、建造物建設の基礎工事に伴う掘削作業で遺構の存在が推定された面が失われており、成果を得ることができなかった。

（田代　弘）

注1　石尾政信「長岡宮跡第164次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第43冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1986

注2　石尾政信「長岡宮出土の緑釉唾壺について－唾壺集成－」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987

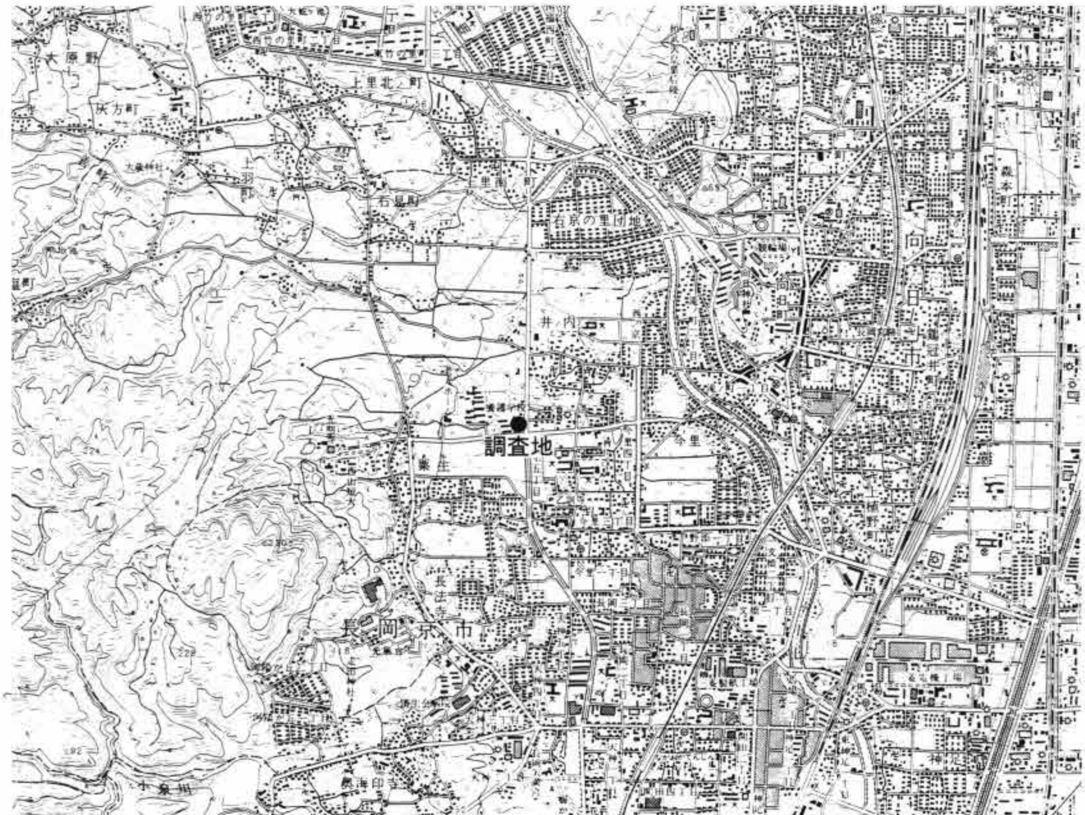
注3　竹井治雄「長岡宮跡第250次」（『京都府遺跡調査概報』第43冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1991

4．長岡京跡右京第615次(7ANIHJ－6地区) 発掘調査概要

1．はじめに

今回の発掘調査は、長岡京市今里蓮ヶ糸に所在し、府道大山崎大枝線の拡幅工事に伴い、京都府乙訓土木事務所(京都府土木建築部)の依頼を受けて実施した。この道路建設に係わる発掘調査は、昭和55年度の京都府教育委員会の調査をはじめ、当調査研究センターが数回にわたって行っており、周辺では長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターにより、数多くの調査が実施されている。調査地は、長岡京跡の北西部に位置し、右京三条四坊四町(新条坊では二条四坊二町)および西三坊大路に推定されている。また、縄文時代から中世にかけての複合遺跡と考えられる井ノ内遺跡の範囲内にも当たっている。現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克・同主査調査員竹井治雄が担当し、平成10年9月10日～平成10年12月17日まで行った。調査面積は約500m²である。調査の結果、長岡京に関連する遺構は検出されず、かわって、弥生時代、古墳時代、中世の遺構・遺物を確認することができた。

調査に当たっては、長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センターをはじめとする関



第29図　調査地位置図

係諸機関のご指導やご協力があった。また、調査期間中、学生諸氏や地元有志の方々には、調査補助員および整理員として調査全般について多大な協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。また、基準点測量、空中写真撮影は、株式会社アイシーに委託した。

なお、調査に係わる諸費用は全額京都府乙訓土木事務所が負担した。

2．周辺の遺跡と調査(第30図)

調査地の地勢は、京都西山地から派生する丘陵地東端の標高40mの低位段丘に位置している。概ね、西から東へと低くなり、桂川の支流である小畑川等によって形成された沖積層が、薄く堆積している。井ノ内遺跡は段丘と扇状地とが混在した立地条件を有しており、検出された遺構は大阪層群よりなる段丘の黄褐色土や暗茶褐色土を基盤層としている。

調査地の北方約80mにある坂川は、張り出した丘陵に沿って蛇行しながら東西に流れ、小畑川と合流する小河川(幅5m・深さ2m)である。古墳時代の井ノ内遺跡は、この川を境として南北の様相が大きく異なる。北側は、井ノ内稲荷塚古墳・小西古墳群・親王御塚古墳・下東ノ口古墳

第30図　トレンチ配置図

1.上里遺跡　2.井ノ内稲荷塚古墳　3.井ノ内遺跡　4.今里遺跡　5.乙訓寺　6.七ツ塚古墳群

などの墓域が展開する。南側は、竪穴式住居跡などの多くの遺構・遺物が出土していることから、大規模な居住域が想定される。現在の坂川は小さな河川であるが、この地域の調査・研究を行う上で、キーポイントとなる位置にあると考えられる。

まず、主要な古墳時代の遺跡について、言及しておきたい。井ノ内稲荷塚古墳は、古墳時代後期に築造された全長45mの前方後円墳である。埋葬施設は、後円部には横穴式石室、前方部には木棺を直葬する。石室は全長約10mの右片袖のもので、玄室・羨道の床面には円礫が敷かれている。玄室には、石室の主軸と異なって、追葬された組合式箱形木棺が良好に残っていた。出土遺物は、須恵器などの土器類のほか、馬具・武器・武具などが多く、被葬者は武人であろうとされている。この古墳は、向日市物集女車塚古墳に匹敵するこの地域の有力な首長墓と考えられる。

集落については、先述の稲荷塚古墳の周辺で竪穴式住居跡が確認されているものの、多くの住居跡・溝・流路などは坂川以南に集中しており、集落の中心があったと思われる。特に、右京第27次調査で検出された溝ＳＤ2712は、本調査との関連から注目される。これは、幅3.2m・深さ1.0mを測り、弥生～古墳時代にかけて開掘され、奈良時代に埋没した溝である。溝の性格は自然流路・環濠・濠などの可能性もあるが、いずれにせよ、古墳時代の一定期間、周囲の遺構と密接に関係することから、井ノ内遺跡の古墳時代集落と重要な関連を有すると考えられる。

なお、井ノ内遺跡の弥生時代集落は、円形の竪穴式住居跡・溝・土壙などが、後期の土器とともに出土しており、古墳時代と同様に大きく広がることが予想される。また、縄文時代の遺物散布地としても、井ノ内遺跡・朝日遺跡・頭本遺跡など段丘上に広く分布することが知られている。朝日遺跡では、後期の土器、石皿、石錘などが出土している。頭本遺跡では、ナイフ形石器が採集されており、旧石器時代にまで溯ることが知られている。井ノ内遺跡でも土器・石錘・砥石・石鏃などが出土しており、右京第235次調査で出土した後期の竪穴式住居跡も特筆すべきものである。

3．調　査　の　経　過

調査対象地は、約700㎡を測り、今日まで畑作が営まれていた。調査トレンチの設定については、長岡京跡の復原図や過去の調査成果(右京第27・235次)を踏まえて、敷地全域をカバーするようにした。掘削作業は、表土・床土を重機を用い、遺構の掘削は人力で行った。なお、排出した土置き場を確保するために、トレンチ南西部に細い調査区を設定し、掘削・調査を進め、終了後ただちに埋め戻した。ただし、遺構・遺物は検出することができなかった。引き続き本格的な調査区を全域に設定し、遺構掘削・実測・写真撮影等の作業を進めた。その結果、中世～縄文時代の遺構・遺物が検出された。

4．検　出　遺　構

(1)中世の遺構(第31図)

素掘溝群　素掘溝は調査区の北半部に集中しており、一部が南端に達している。溝は10～

第31図　遺構配置図１（中世）

30cm・深さ5～25cmを測り、大きさにばらつきがある。断面は「U」字形、逆台形を呈し、淡灰色、茶灰色の泥土が堆積する。出土遺物は瓦器椀・皿、土師器皿の破片が散在する。

素掘溝は、東西溝および南北溝に分けることができるが、重複しており、概ね東西溝の方が新しい。一部、近世のものある。東西溝については、調査区北端で４本の溝が切り合っており、時期差が認められる。他の東西溝との間隔は、約10mを測り、その規模からも、溝の性格は水田を区画する畦の造成によって、掘られた溝状遺構である。南北溝は、やはり数本の切り合いがあり、時期差が認められる。溝の間隔は、東西溝より狭く1.3～1.6ｍを測り、その形状からも畑の畝であると思われる。

柱穴群　調査区の

南半部で多く検出した。直径20～30cm・深さ10～20cmを測る小柱穴である。建物・柵などに復原することができない。

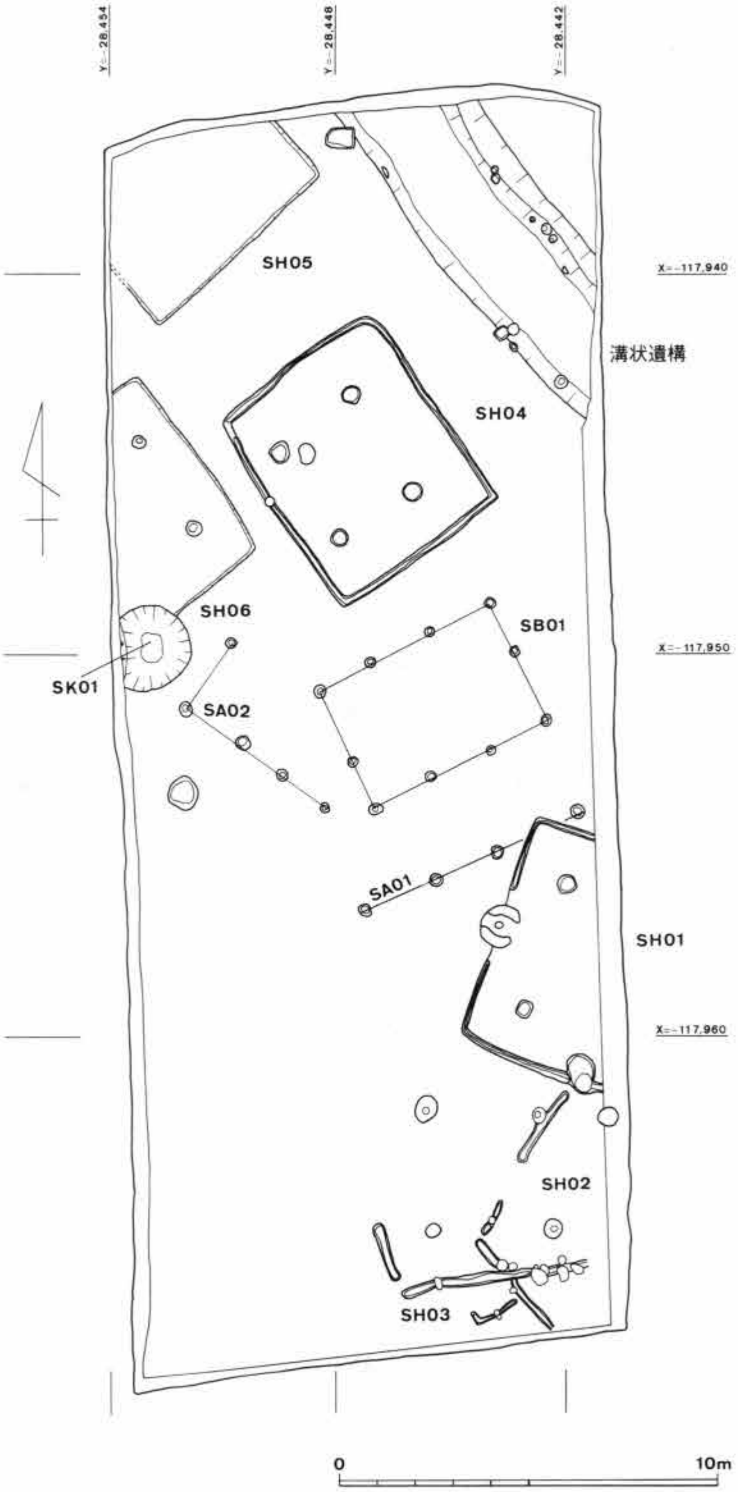
中世についての遺構は以上である。奈良・平安時代については、土器、土馬などの遺物は多量に出土したが、遺構は認められなかった。また、調査区は長岡京跡の西三坊大路の路面に推定されているが、今回の調査では、大路に関する側溝などは検出できなかった。しかし、大路を造る際には、後述するように、溝状遺構の上層部を人為的に埋めたと見られる痕跡が確認できた。

(2)古墳時代の遺構(第32図)

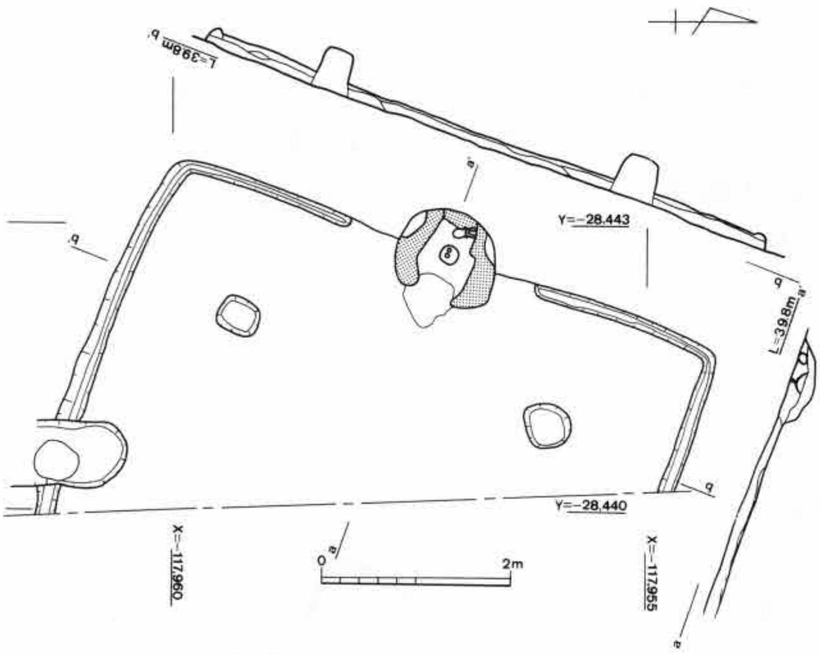
検出した遺構は、方形の竪穴式住居跡6基・掘立柱建物跡2棟・柵・土壙などがある。竪穴式住居跡は、南北で大きく2群に分かれ、南群では重複し時期差が認められ、概ね6世紀前半である。北群は遺物が少なく時期を決めにくいが、おそらく南群とさほど変わらないと思われる。

竪穴式住居跡ＳＨ01(第33図)

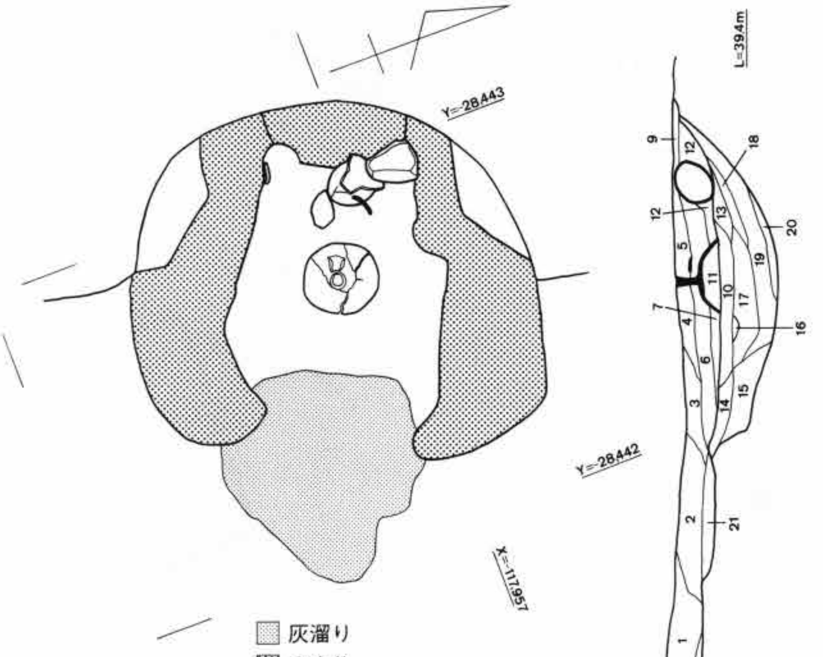
調査区の南東側で検出した。住居跡の東半分は調査区外であるが遺存状況は良く、一辺5.8mを測る方形の掘形を持ち、北西辺中央に張り出した造り付けの竈がある。掘形の深さは、残りの良いところで15cmを測り、周壁は垂直に立ち上がる。周壁溝は幅10cm前後・深さ5cmを測り、3辺をめぐるが、竈の両脇から約45cmで途切れている。床面は、堅く締まった淡灰黄色の砂質土であるが、暗褐色の腐植土が斑点模様に薄く堆積しており、わずかに土師器の細片が出土する



第32図　遺構配置図2(古墳・弥生時代)



第33図　竪穴式住居跡ＳＨ01実測図



第34図　竪穴式住居跡ＳＨ01竈実測図

1.暗茶灰色粘質土　2.暗茶灰色粘砂質土　3.暗茶灰色砂質土
4.黄灰色砂質土　5.黄灰色粘砂質土　6.灰色砂泥(焼土・炭多い)
7.灰色泥土(焼土・炭を多く含む)　8.黄灰色粘砂質土　9.茶褐色粘質土
10.淡灰色粘質土(焼土多い)　11.灰色粘質土(焼土・炭多い)
12.黒暗灰色粘砂層　13.茶灰色粘質土(炭)　14.暗茶灰色粘質土(焼土・炭)
15.淡黄灰色砂質土　16.灰色粘質土　17.黄灰褐色粘質土　18.暗灰色砂質土
19.淡茶褐色粘質土　20.暗茶褐色粘砂質土　21.黒灰色炭化層

など生活の痕跡が窺える。

住居内の堆積土は、大きく２層に分かれる。上層は茶褐色土・黄褐色土・暗褐色腐植土などが混在しており、部分的に炭化物・焼土が点在し、土師器の細片が出土する。下層は茶褐色土・灰黄色土・炭化層が混在し、遺物はほとんど出土しない。この層の上面も住居の床面であると考えられる。主柱穴は上層から２か所で検出し、柱穴間は3.6ｍを測る。柱穴は隅丸方形・円形の２種類がある。方形のものは35cm×45cm、円形のものは45cm、深さはいずれも25cmを測る。柱穴の堆積土は住居内の上層と酷似するため、柱の太さは明らかにできなかった。

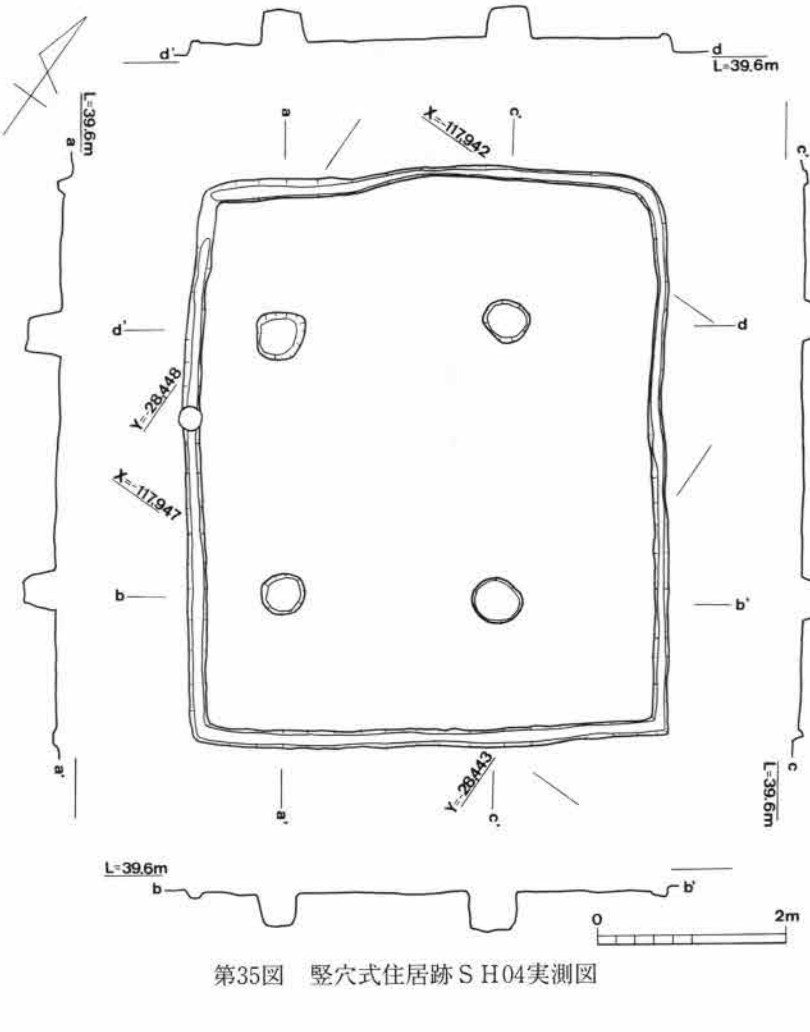
竈(第34図)は馬蹄形を呈し、中軸線の長さ96cm・幅106cmを測る。竈は、築造当初には、周壁の外側約40cmの範囲と床面下とに、約20cmの土坑を掘り、本

体をその基底部から構築している。竈の組成は、粘性の強い暗茶褐色土に砂粒を混ぜ合わせたものである。検出した竈は、煙出し部、燃焼部、焚き口、灰のかき出し部が明瞭に残存していた。煙出し部は、幅およそ20cmを測り、直線的に外側に開く。遺物は、拳大の河原石と共に、土師器甕が出土した。燃焼部は、幅約60cmを測り、大きく膨らむ。中央には、土師器高杯を逆位にして支脚としている。　焚き口は幅約40cmを測り、絞り込まれている。灰のかき出し部は、焚き口から40cm程度、外側に不定形に広がり、その下位には深さ５cmの窪みがあった。竈の内部は、焼土・炭・灰などが混在する層と黄色灰色土の互層が見られ、長く使用されたことが窺える。

竪穴式住居跡ＳＨ04(第35図)　調査区の北半中央で検出した。住居跡の掘形は、遺存状況が良く、方形を呈し、長辺6.0m・短辺5.5mを測る。住居跡の主軸はN40°Wである。掘形の深さは５～10cmを測り、周壁は垂直に立ち上がる。周壁溝は幅８～12cm・深さ３cmを測り、四辺をめぐるが、北西隅でわずかに途切れる。床面は、堅く締まった灰黄色の砂質土であるが、炭化物混じりの暗茶褐色腐植土が広く分布している。住居内の堆積土は、茶褐色粘質土と黄灰色指砂質土とが混合した層で、焼土は中世の素掘溝によって攪乱されていたが、一部が住居の中央付近に残っていた。出土遺物は、床面に土師器の細片があった。主柱穴は床面より４か所で検出し、柱穴間は、長辺2.9m・短辺2.4mを測る。柱穴は円形を呈し、直径40～45cm・深さ約40cmを測り、柱穴の基底部のレベルはほぼ揃っている。

竪穴式住居跡ＳＨ02(第32図)　調査区の東南隅で検出したが、上層の柱穴および耕作土などの削平を受けて、遺存状況は極めて悪く、周壁溝と主柱穴２か所のみが確認できた。周壁溝は、幅15cm・深さ５cmを測り、断面が皿状を呈し淡灰色砂質土が堆積する。主柱穴の間隔は3.2mであり、柱穴の直径45cm・深さ45cmを測る。遺物は、土師器の破片が出土した。

竪穴式住居跡ＳＨ



第35図　竪穴式住居跡ＳＨ04実測図

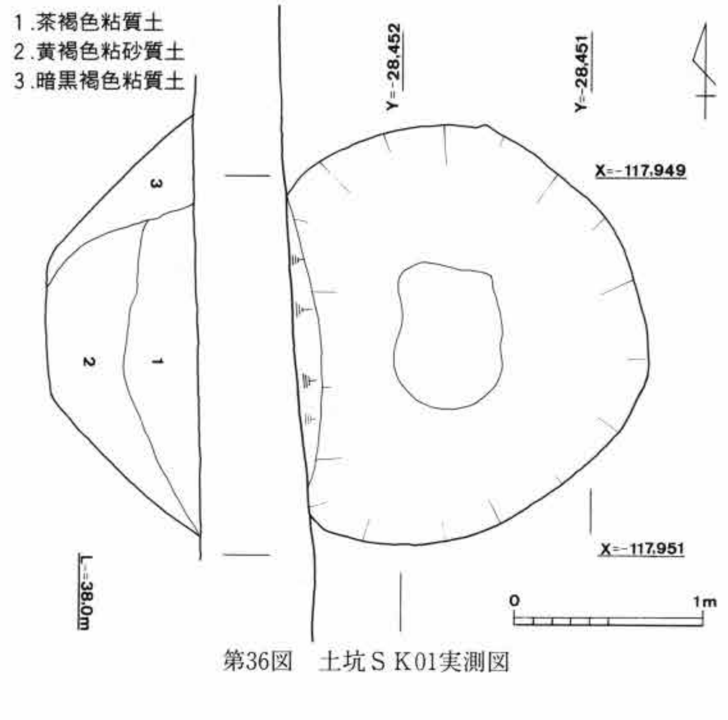
03(第32図)　調査区の東南隅でＳＨ02と重複して検出したが、この住居跡の方が新しいと考えられる。ＳＨ01と同様、周壁溝・主柱穴３か所を確認した。周壁溝は途切れているように見えるが、攪乱によるものである。周壁溝の幅18cm・深さ4cmを測る。主柱穴の間隔は3.2ｍ・直径30～45cm・深さ30cmを測る。

竪穴式住居跡ＳＨ05(第32図)　調査区の北西隅で検出した。住居跡の２隅は調査地外であるが、一辺6.0ｍを測る方形の掘形をもつ竪穴式住居跡である。深さは15cmを測り、周壁は垂直に立ち上がる。床面は、堅く締まった茶灰色砂質土で、周壁溝・主柱穴は確認できなかった。また、床面には、腐植土・土器類なども全く見られなかった。住居跡の主軸の方位はN45°Ｗである。

竪穴式住居跡ＳＨ06(第32図)　ＳＨ04の西側で、土坑ＳＫ01に切られた状態で検出した。住居跡の２隅を確認し、一辺5.5ｍ・深さ20cmを測る方形の掘形を持つ。周壁は、垂直に立ち上がる。床面は黄褐色粘質土であり、さほど堅く締まっていない。床面に周壁溝はなく、主柱穴を２か所確認した。主柱穴の間隔は2.8ｍであり、直径30cm・深さ５cmを測る。住居内の堆積土は、茶褐色砂質土の単一層で、遺物は無かった。住居跡の主軸はN40°Ｗである。

竪穴式住居跡の時期については、南群の住居跡群のＳＨ01は、竈の高杯・甕などから６世紀前半と考えられる。ＳＨ02は切り合い関係からＳＨ01より古く、さらにＳＨ03より古いことがわかった。南群に関しては、個々の竪穴式住居跡に時期差はあるものの、概ね、この年代におさまるものと思われる。北群の住居跡のＳＨ04では、古墳時代の土師器細片が出土しているが、細かな年代を与えられない。ＳＨ05・06も同じことが言え、切り合い関係がないが、住居跡の主軸の違いなどから時期差があるものと推定される。

土坑ＳＫ01(第36図)　調査地の中央西側で、ＳＨ06を切った状態で検出することができた。直径2.1ｍ・深さ0.8ｍを測る円形の土坑である。断面はすり鉢状を呈し、堆積土は、大きく３層にわかれる。上層は茶褐色砂質土に炭を混じえ、中層は茶褐色粘質土、下層は土坑の北側の肩部から底部まで連続する暗褐色暗褐色腐植土である。遺物は全く無く、時期は不明である。遺構の性格については、井戸・土取り穴などの可能性がある。



第36図　土坑ＳＫ01実測図

掘立柱建物跡ＳＢ01(第37図)　調査区の中央、ＳＨ01とＳＨ04の間で検出した梁間２間・桁行３間の東西棟である。建物の総長は、梁行3.3ｍ・桁行5.0ｍ(柱間寸法1.65ｍ等間)を測る。建物の主軸は、N25°Ｗである。柱穴は直径25cm前後の円形を呈し、

埋土は暗褐色粘質土で、遺物は全く無い。柱痕跡は確認できなかった。柱筋は、桁行では等間であるが、梁間では1.2m・2.1mと不揃いである。時期については、茶褐色土の下層から検出したことから、古墳時代と推定した。

柵ＳＡ01(第32図)　ＳＢ01の南側、約2.2m離れた位置で検出した３間以上の柵列である。柱間寸法は、1.8m・1.6m・1.9mを測り、不揃いである。柵列の主軸はN22°Wであり、ＳＢ01の桁行とほぼ平行している。柱穴は円形を呈し、直径約30cmを測る。埋土は暗褐色である。時期については、ＳＢ01と同じ検出状況である。

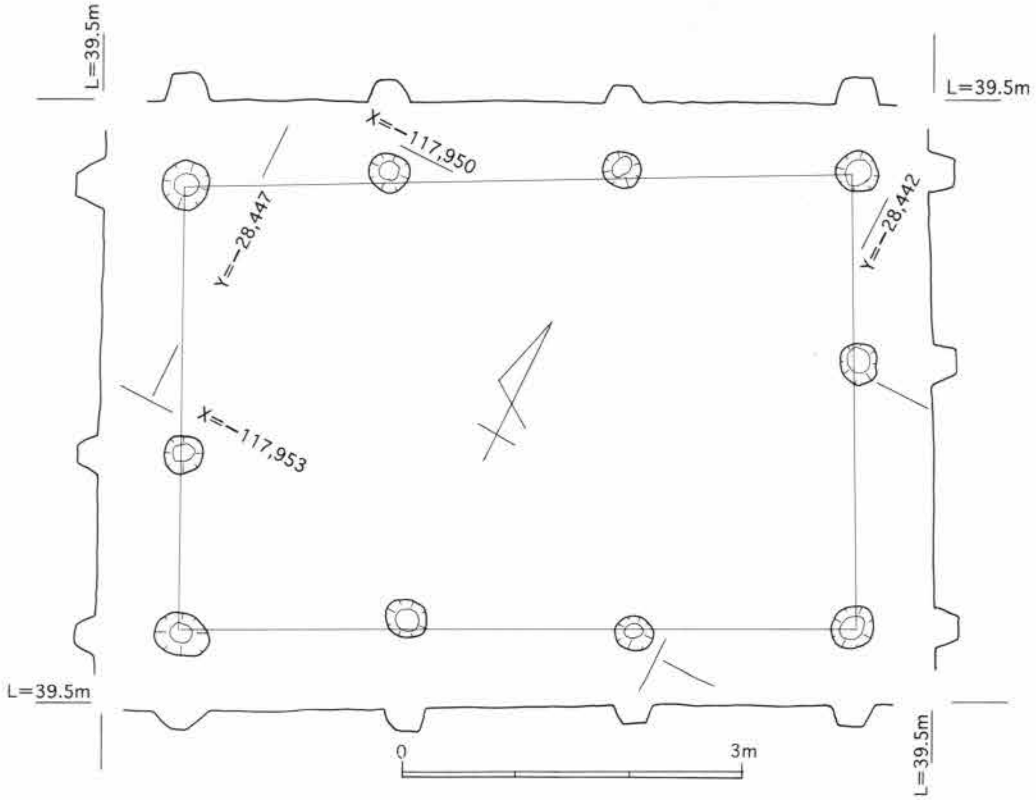
柵ＳＡ02(第32図)　ＳＢ01の西側で検出した、３間×１間の柱列で、柵あるいは掘立柱建物跡の一部とも考えられる。柱間寸法は、東西列が1.6m等間で、南北は1.8mを測る。柱列の主軸は真北にとっている。柱穴は円形を呈し、直径20～35cmを測り、多様である。埋土は暗茶褐色土である。

(3)弥生時代後期の遺構

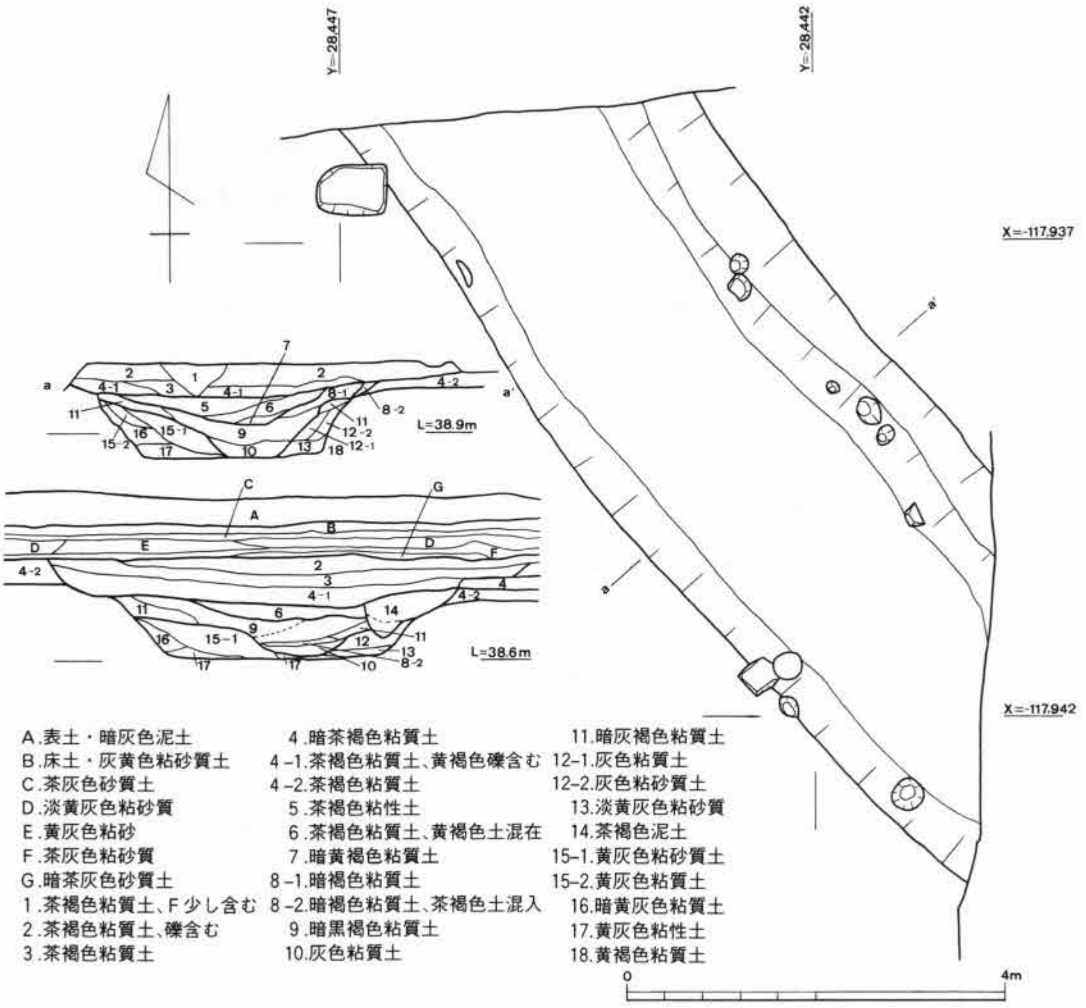
溝状遺構ＳＤ01(第38図)　調査区の東北隅で検出した、北西から南東方向の溝である。この遺構は、昭和55年度の京都府教育委員会の調査で報告されたＳＤ2712に続くものである。

ＳＤ01は、長さ約10mにわたって検出し、平面形態は直線的であるが、わずかに弧を描いている。断面は逆台形を呈し、幅3.2m・基底幅2.0m・深さ1.0mを測る。両斜面には直径20cm前後の小ピットが不規則に並び、その性格は橋・溝の土留め杭などが考えられる。

ＳＤ01は中世の下層で検出した。第38図のＡ・Ｂ層は近・現代、Ｃ層は近世、Ｄ～Ｇ層は中世



第37図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図



第38図　溝状遺構ＳＤ01実測図

に属する土層である。Ｄ・Ｆ層は瓦器、土師器細片を多く含み、淡黄灰色砂質土、淡黄灰色粘質土の互層をなす旧耕作土である。ＳＤ01内の堆積土は、上層・中層・下層の大きく３層に分かれ、各層から年代を決める遺物がまとまって出土している。

①上層　２・３・４－１・５・６・７層は茶褐色土が主であるが、上位の２・３・４－１層は砂質で、下位の５・６・７層は粘質に分けることができる。人為的に堆積した土層であると思われる。上位の層には、奈良時代の須恵器(杯身・杯蓋・高杯)、土師器(杯・瓶)のほか、古墳時代の須恵器も出土した。下位の層には、奈良・古墳時代の須恵器(杯身・杯蓋・高杯)、土師質の土馬が全域から出土している。

②中層　８－１・９・10・11層は、暗黒褐色腐植土が主体であるが、10層は灰色シルト質である。これは水の流れがあった、あるいは滞水していた状況を示している。８－１・９層には、古墳時代の須恵器(杯・高杯)、土師器(瓶)、11層は土師器のみ、10層は土師器と弥生時代後期の土器が出土した。

③下層　12－１・２・13・15－１・２・16・17は、灰色粘質土が主体であり、溝の両肩が自然

に崩落して形成された土層が大半であると思われる。17層は、溝の基底部に薄く堆積し、弥生時代後期の甕が多く出土したが、その他の土層にはほとんど遺物はなかった。

5．出　土　遺　物(第39・40図、図版第22)

本調査で出土した遺物は、ほとんどが土器類であり、整理箱にして20箱に及ぶ。これらは中世、奈良・古墳時代、弥生時代後期のものがあり、時期を決めかねる遺物も多い。図示した土馬は土器類以外のものとして、数少ない遺物である。

第39図の9・10はＳＨ01、14は包含層から、第40図の34・35は中世の素掘溝から、それ以外はＳＤ01から出土した。なお、下記の層名番号は、第38図ＳＤ01実測図の番号と対応する。

(1)中世素掘溝出土遺物

34は、口径10.5cm・器高1.8cmを測る土師器皿である。体部は外反して立ち上がり、口縁部は水平気味に外傾し、端部を丸くおさめる。35は口径８cm・器高１cmを測る土師器皿である。

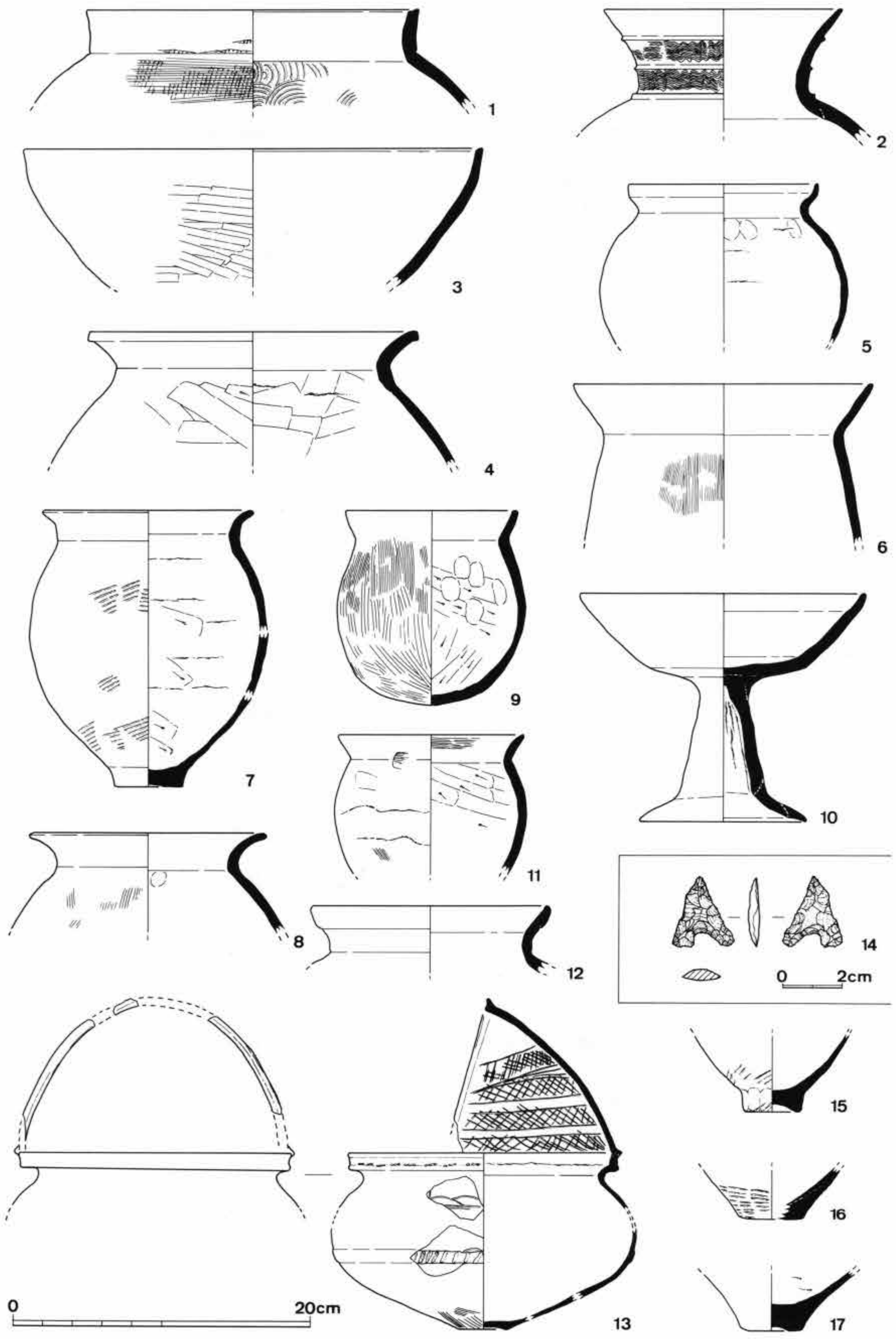
(2)ＳＨ01出土遺物

９は小型の土師器甕である。口縁部は内湾気味であり、器壁は厚い。調整は、外面を細かい縦ハケ、内面には指オサエを施す。10は土師器高杯である。口径19cm・器高20cmを測る。平坦な底部からゆるやかに屈曲し、斜め上方に立ち上がる。端部は内傾する。

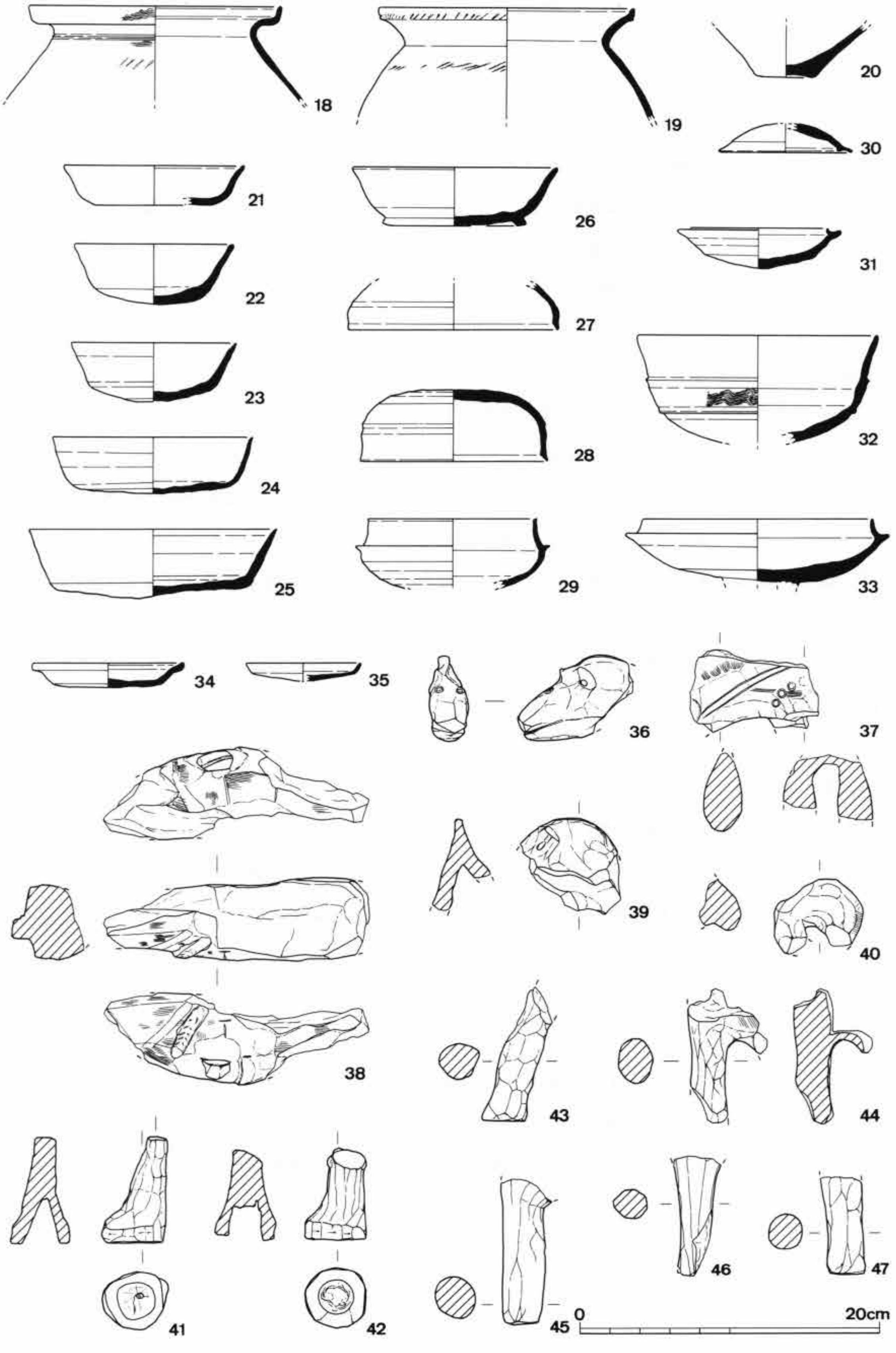
(3)ＳＤ01出土遺物

上層　１は須恵器甕である。外面は細かなカキ目が施されている。３は、口径31cmを測る土師器鉢である。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。12は口径16cmを測る生焼けの須恵器甕である。21～26は、２・３・４－１層から出土した口径12～16.5cmを測る須恵器杯である。口縁部は、外反するもの(21・23)、内弯するもの(24)、直線的なもの(22・25)がある。26は高台を持つ。30～33は５・６層から出土した須恵器である。30は、口径９cmを測る。小さなかえりを持ち、つまみを有する蓋である。31は、低い立ち上がりを持つ杯身である。32は、口径16cmを測る脚部に、長方形のスカシを持つ高杯である。外面は、２本の稜線の間に波状文が施される。33は口径18cmを測る長脚の有蓋高杯である。

36～47は３・４－１・５・６層から出土した土馬である。頭・胴・脚部などがバラバラであるために、個体数は確定できないが、おおよそ４～５個体と推定する。焼成は総て土師質であるが、堅く焼き締まった感があり、色調は、表面明黄桃色、内部が黒色である。形態はＡ類である。成形は、粘土魂をヘラケズリ・ナデ・ハケによるものである。顔・胴・馬具の表現は、線刻・粘土紐張り付けによって、様々な方法が見られる。36は顔部分であり、一部にたてがみが残る。目は竹管文で表現し、目の後方には耳が小さく取り付き、穿孔されている。口はヘラで深く刻まれ、手綱は線刻で表現される。37は首から前脚の付け根の部分の破片である。手綱は２本の線刻、胸繋は竹管文を並べて表現する。38は首から胴の部分の破片である。手綱は欠落しているが、粘土紐の痕跡がある。胸繋は粘土紐に綾杉文を刻むことで表現する。鞍敷きおよび泥障は深い線刻による。脚の付け根は黄桃色を呈していることから、脚は焼成時に胴から外れたものと思われる。39はたてがみで、両側に耳と穿孔された耳孔がある。40は、穴に火を受けた痕跡があり、丸みの



第39図　出土遺物実測図(1)



第40図　出土遺物実測図(2)

ある形状から尻の一部分と思われる。41・42は脚元が大きく広がり、中空である。あたかもヒズメを表現したようである。外面は、縦方向のヘラケズリが施される。脚の付け根部分は黄桃色を呈し、火を受けている。43～47は、脚元が若干広がり、爪先が小さく尖り、足裏は平坦面を持つ。

中層　中層は８－１・９・10・11層からなるが、遺物の大半は、９・10層から出土した。２は、口径16cmを測る須恵器甕である。稜線３本で二帯を設定し、波状文を描く。６は、口径20cmを測る土師器甕である。口縁部は直線的に伸び、端部は丸くおさまる。外面はきめ細かいハケ目である。11は、口径12.5cmを測る小型の土師器甕である。12は、口径16cmを測る須恵器甕である。28は、口径12.5cm、器高５cmを測る須恵器杯蓋である。29は、口径11.5cmを測る須恵器杯身である。

下層　遺物の大半は、底部上面付近の13・17層から出土した。５は、口径12.5cmを測る甕である。口縁部は直立して立ち上がり、端部は丸くおさめる。７は口径18cm・器高19cmを測る甕である。底部は平底で、体部外面にはタタキ痕が残る。13は、口径19cm・器高12cmを測る手焙形土器である。胎土は、長石・石英・金雲母を多く含み、器壁は薄く、色調は茶褐色を呈する。底部は小さい平底、胴部は大きく丸く膨らむ。胴部外面に低い凹線文がつき、刻目文を施す。口縁部は受け口状で、端部はやや外反気味に直立する。覆部の外面は、櫛描き直線文による斜格子状の帯が、４帯施される。15～17・20は平底の底部で、外面にはタタキ目を残す。18は、口径17cmを測る受け口状口縁部を持つ甕である。19は口径17.5cmを測り、口縁端部が上方に尖る甕である。

第39図14は、茶褐色粘質土（４－２）から出土した凹基式の石鏃である。

６．ま　と　め

調査地は、『長岡京市遺跡地図』では、井ノ内遺跡の中心地にあたる。検出した遺構・遺物は、この遺跡に営まれた集落の様相を明らかにする重要な資料であると考えられる。竪穴式住居跡は、数回の建て替えが認められ、６世紀を通じて存在していた。溝状遺構ＳＤ01は、弥生時代後期に掘られ、古墳時代には小規模な流路として存在し、長岡京の造営に伴い埋没した。出現当初の性格は、濠あるいは坂川に取り付く水路であった可能性があるが、古墳時代後期には集落を貫く流路となったと推察される。多くの土馬の出土状況から、ＳＤ01を中心として水辺の祭祀・儀礼を行ったことが想像される。ＳＤ01に関連する遺構は、先述の右京第27次調査のSD2712のほか、その調査で検出されたＳＤ2715（本調査地の北へ約60ｍ地点）も、規模・形態・遺物出土状況などが酷似しており、注目される。なお、長岡京跡にかかわる遺構は検出されなかった。

（竹井治雄）

5．芝山遺跡発掘調査概要

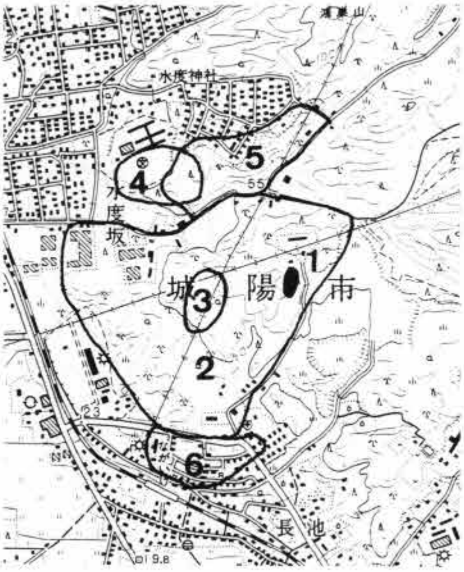
1．はじめに

この調査は、木津川右岸運動公園整備に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受け実施したものである。芝山遺跡は、城陽市のほぼ中央部、南北に延びる大阪層群によって形成された宇治丘陵から、西へのびた木津川右岸の丘陵上に、立地する縄文時代から中世に至る複合遺跡である。この丘陵内の中央部には、前方後円墳２基(４世紀後半)からなる梅ノ子塚古墳群(１号墳全長87m・２号墳全長65m)が立地する[注1]。丘陵上を中心に行われた昭和52年度、平成５・６年度に城陽市教育委員会による調査[注2]や、昭和60・61年度に当調査研究センターが実施した、府道山城総合運動公園城陽線建設に伴う調査[注3]では、古墳時代～奈良時代にかけての多くの遺構・遺物が検出された。これらの調査では、丘陵内で削平された古墳14基も新たに確認されている(芝山古墳群)。また、当調査研究センターでは、木津川右岸スタジアム公園整備事業に伴い、平成８年度には丘陵北側の山裾部分の調査[注4]を実施した。顕著な遺構は検出されなかったが、少量の遺物の出土から芝山遺跡北端が明らかとなった。この芝山丘陵北側には、大河原川を挟んで宮ノ平遺跡・古墳群[注5]があり、南側は谷を挟んで縄文時代から古墳時代の集落遺跡である森山遺跡[注6]が所在する。

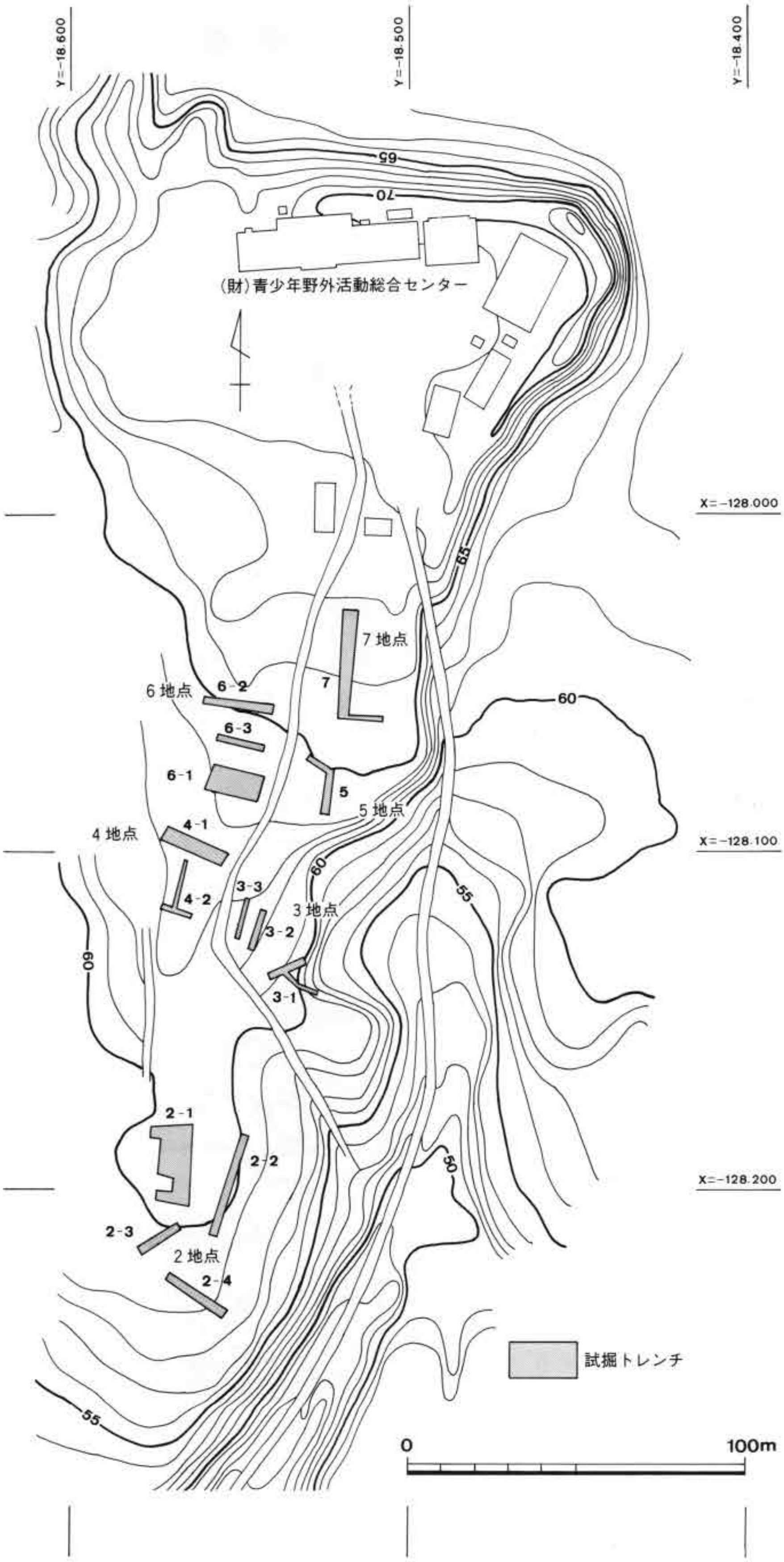
今回の調査地は城陽市字富野に所在し、芝山遺跡の東端にあたり、南北に延びる尾根稜線上がその対象となった(第41図)。ここは、(財)青少年野外活動総合センター友愛の丘があり、調査地はキャンプ場となっており、造成により削平を受けていることが懸念された。また、キャンプ場とされる以前は、茶畑が存在していた。平成10年度調査は、平成10年12月9日～平成11年２月18日まで実施した。調査面積は約680㎡である。

調査は、当調査研究センター調査第２課調査第２係長辻本和美、同主任調査員増田孝彦が担当し、本概要報告は、増田が執筆した。調査及び概報の作成にあたっては、調査補助員・整理員の協力を得た[注7]。調査に際しては、(財)青少年野外活動総合センター友愛の丘、京都府教育委員会、城陽市教育委員会、京都府土木建築部公園緑地課など関係諸機関から多大な協力をいただいた。記して感謝する。

なお、調査に要した費用は、全額京都府土木建築部が負担した。



第41図　調査地位置図(1/25,000)
1．調査地　2．芝山遺跡
3．梅ノ子塚古墳群　4．宮ノ平古墳群
5．宮ノ平遺跡　6．森山遺跡



第42図　調査地地形図およびトレンチ配置図

2. 調　査　概　要

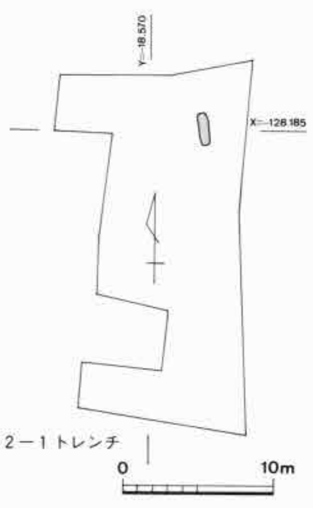
調査地は、(財)青少年野外活動総合センター友愛の丘キャンプ場全域が対象であり、試掘対象地は1～8地点まで設けられおり、このうち、2～5地点までの4か所が調査の対象となった。その後、追加調査として6・7地点の両地点の調査も実施し、計6地点の調査を行った。トレンチ名称は各地点名を付し、調査順にトレンチ番号を付けた(第42図)。

調査は、重機により表土を除去した後、人力により遺構検出作業を行った。キャンプ場として造成されているため全体が平坦化しており、また立木もあるためそれらを避け調査を実施した。

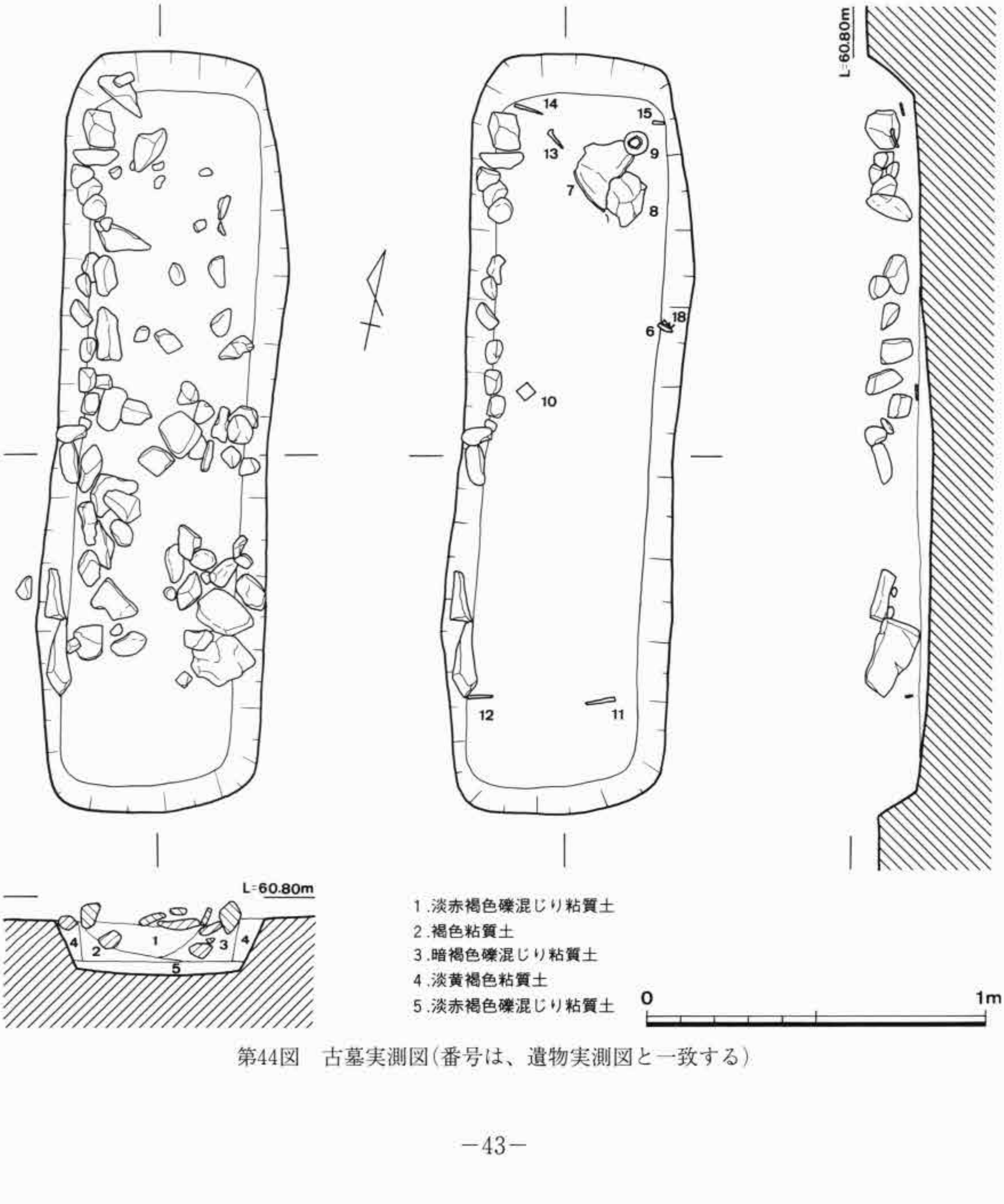
2地点　2－1・2トレンチにおいては表土直下(5～10cm)が地山面となっており、畑作・キャンプに伴う溝・土坑などが認められた。キャンプ場造成に伴う土砂は、東側、

２－３・４トレンチ方向に押し出されており、自然地形が傾斜し始める部分に当たるようで、約１ｍの堆積が認められた。部分的に、この堆積土を除去して調査を行ったが、堆積土下層は地山面である赤褐色粘土層となっており、包含層は確認されなかった。この表土中や造成に伴う堆積土中からは、磨滅した須恵器・土師器片が少量出土した。２－１トレンチ北端からは後述する古墓が１基検出された(第43図)。

3地点　３－１トレンチでは、キャンプ場造成に伴う盛り土を除去すると、暗黄褐色粘質土(炭混じり)の遺物包含層を検出した。包含層を徐々に掘り下げ地山面まで精査を行ったが、遺構は検出されなかった。盛り土中より少量の須恵器・土師器片が出土し、包含層中からは比較的まとまった須恵器・土師器片が出土した。いずれも磨滅して、



第43図　古墓位置図



第44図　古墓実測図(番号は、遺物実測図と一致する)

包含層出土遺物は、４地点より流出し再堆積したものと考えられる。

４地点　４－１・２トレンチとも、地山面には畑作に伴う溝やキャンプに伴う土坑が認められた。４－１トレンチからは、磨滅した少量の須恵器、土師器が出土した。造成に伴う土砂は、西側、３地点の２方向に堆積が認められる。

５地点　７地点側からの造成に伴う土砂の堆積が、約20cm程度認められた。その下層には畑作が行われていた旧表土が認められ、旧表土を除去すると地山面となり、畑作に伴う溝が検出された。旧表土中からは、磨滅した陶磁器・須恵器・土師器・瓦が出土した。

６地点　３か所のトレンチを掘削したが、４地点と同様な状態をなし、造成に伴う土砂は西側に堆積している。磨滅した少量の須恵器、土師器が出土した。

７地点　調査前の時点で地山面が露出している部分が認められ、表土下が地山面となっている。５トレンチ側には造成に伴う盛り土が認められた。キャンプに伴う溝・土坑が検出された。南側の造成に伴う盛り土中より、磨滅した少量の須恵器、土師器が出土した。

古墓(第44図、図版第23～25)　２－１トレンチでは、表土直下が地山面となっていたが、キャンプに伴う溝・土坑・柱穴以外に削平された古墓が１基検出された。古墓は、トレンチ北端中央部より検出したもので、尾根に平行する墓壙である。墓壙平面形は、隅丸長方形を呈し、長さ2.25m・幅0.65m・深さ0.17mを測る。主軸は、N12°Wである。棺両木口に側板と木口板を固定していたと考えられる側板側から、木口板に向かって打ち込まれた釘４本が出土している。形状から箱形木棺が推定される。釘から見た棺の大きさは、長さ約1.8m・幅約0.5mであり、使用された棺材の厚さは約２cmである。この釘以外に木口部には、天井板を止めていたと思われる釘が、北西側と南東側でそれぞれ１本、墓壙中央付近の東側板寄りでも１本出土した。

墓壙内の西側では、一直線に並ぶ礫が検出された。これより内側に落ち込んでいる礫は、棺安置後、若干の土砂で埋め戻し、棺上に礫を置いていたものが、木棺の腐朽に伴って、落ち込んだものと考えられる。西側に並ぶ礫については、木棺と掘形との間を埋めた裏込めと思われる。棺内に落ち込んでいる礫は、北側木口付近にはほとんど認められない。

遺物は、棺北端の木口付近より土師器皿２点・緑釉瓶子１点、棺中央部西側で石帯(巡方)１点が出土した。土師器皿は２枚が重ねられた状態で置かれ、枕として使用されたものと考えられる。緑釉瓶子は頭部に添えられていたようである。このことから、被葬者の頭位は北枕であったと考えられる。墓壙東側中央部分の裏込め内では打ち込まれた状態で不明鉄製品が、それに付着した状態で須恵器杯身底部片が出土した。棺安置後、裏込めとして土砂を入れていく過程で混入したものと思われる。

墓壙周辺部は、精査を行ったにも関わらず、溝などの墓域を区画するような施設は認められなかった。削平を受けた可能性もある。

３．出　土　遺　物(第45・46図、図版第26)

調査によって出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦がある。大半の遺物は

3トレンチより出土したものである。いずれも細片化し磨耗したものが多い。そのために、図化できたものはわずかである。古墓からは、土師器・緑釉陶器瓶子・石帯・鉄器が出土した。

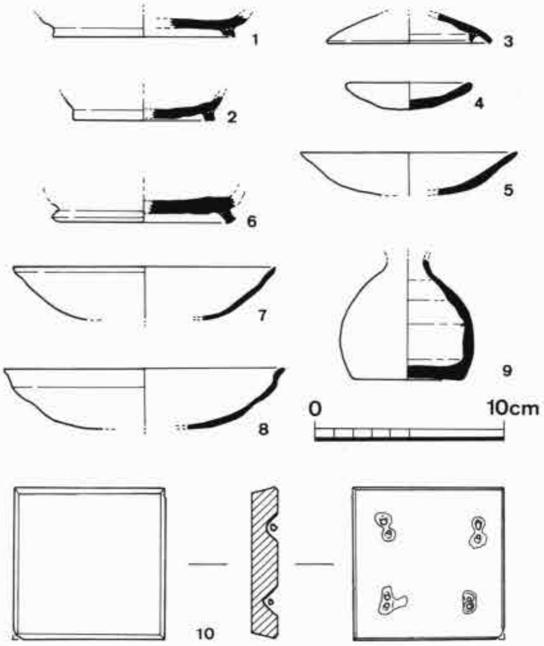
須恵器1～3・6は、底部外寄りに外に踏ん張る低い高台をつける。6は、不明鉄製品18に付着して出土したもので、内面がかなり研磨されており、硯として利用された可能性がある。古墓造成に伴い、破壊された遺物が裏込め内に混入したものと考えられる。3は、傘形を呈し、内面にかえりをもつ杯蓋で、口径8.8cmを測る。つまみの有無については欠損しており不明である。1・2・6は、形態的な特徴から9世紀前半頃と思われる。

土師器4・5・7・8の内、4は、口径約6.8cmの小型の皿で、体部内外面に指圧痕が残る。5は、丸みを帯びた底部と外上方に立ち上がる体部からなる。口縁端部は外上方に尖る。器壁はかなり薄い。全体に磨滅しており、手法については不明である。7・8は、古墓内の転用枕として使用された大型の土師器皿である。8は、丸みを帯びた底部と外上方に立ち上がる体部からなる。体部上部で「く」字状に屈曲し、口縁端部は大きく外反する。器壁はかなり薄く、口径15cmを測る。全体に磨滅しており、手法については不明である。

瓶子9は、砲弾型の体部と平坦な底部からなる。表面全体が剥離し磨滅しており、手法については不明であるが、底部切り離しは糸切りである。底部に、淡緑色の釉が一部残存する。口縁部は欠損しており不明である。形態の特徴から9世紀中頃と思われる。

石帯10は、粘板岩系の巡方である。正方形で帯幅4cm・厚さ0.7cmを測り、大型のものである。裏面の4隅に、2孔を1対とした潜り孔がある。黒色を呈し、平滑に仕上げられているが、外面には細かい擦痕が残っている。

鉄釘11～17は、錆の付着が著しく、また棺材の木質が多く付着し、全体の形態を知ることができないものが多い。形態的には、頭部先端を扁平に叩き水平に曲げた方形のものと考えられ



第45図　出土遺物実測図(1)

第46図　出土遺物実測図(2)

る。11については、頭部先端の折り曲げた部分がやや細くなるものである。14は、同一個体であるが中央部を一部欠損する。13・17は、頭部先端付近で屈曲する折曲頭形の角釘状を呈するが、屈曲部がゆるいカーブをなすことや、頭部にほかの釘同様に折り曲げた面が認められるため、前述のものと同形態のものが曲がっているだけのものと考えられる。11・12は南側木口、14・15は、北側木口底面より出土したもので、8cm前後のものである。13は、北側木口西側、16は、中央部東側、17は、南側木口西側付近の底面より浮いた状態で出土したもので、天井板の固定に使用されたものと考えられる。使用された棺材は、残存する木質から幅約2cmほどのものが推定される。

不明鉄製品18は、墓壙東側の裏込め中より突き刺さった状態で出土したもので、全長7.9cm・幅1.7cmを測り、先端は三角に尖る。断面は、「く」字状を呈する。

4．ま　と　め

調査地は、キャンプ場として造成されたため、丘陵稜線が削平を受け遺構は、古墓を除き検出できなかった。出土遺物からすると、過去に行われた調査と同様、弥生時代～中世までの遺物が認められることから、調査地でも何らかの遺構が存在していた可能性が高い。

古墓については、石帯の出土により律令官人のこの地域での墓制の一端を垣間見ることができるとともに、貴重な一資料となった。今までの調査結果から、古墳時代前期初頭には集落が形成され、古墳時代前期後半以降は墓域となり、7世紀以降は再び集落が形成されたと推定されている。古墓の調査は、奈良時代後期から平安時代前期の芝山遺跡の性格を考えていく上で、重要なものとなった。

（増田孝彦）

注1　小泉裕司「芝山遺跡発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集　城陽市教育委員会）1995

注2　注1に同じ。
近藤義行ほか「芝山遺跡発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集　城陽市教育委員会）1975

注3　小池　寛「芝山遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第25冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987

注4　古瀬誠三「5．芝山遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第74冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1997

注5　長谷川　達「14．宮ノ平遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第8冊　（財）京都府埋蔵文化財 調査研究センター）1983

注6　城陽市教育委員会「森山遺跡発掘調査報告書」（『城陽市文化財調査報告書』第32集　城陽市教育委員会）1997

注7　調査参加者は次の通りである（順不同・敬称略）。
南部　勝・丸谷はま子

6．国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡 平成10年度発掘調査概要

はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)に伴い、平成10年度に発掘調査を実施した概要である。調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所の依頼を受けて、当調査研究センターが実施した。

今年度の調査は、中郡大宮町左坂古墳群、竹野郡網野町浅後谷南遺跡、竹野郡弥栄町シミズ谷古墳群・同墓ノ谷古墳群、熊野郡久美浜町南谷古墳群・同永留城跡の6遺跡の調査を実施した。調査期間・調査面積等は、付表1のとおりである。なお、浅後谷南遺跡については、多量の木製品および土器が出土したことにより、詳細な整理作業を行ったのちに後日報告することとしたい。また左坂古墳群については、平成6・7年度に実施したB・C支群も報告する。

第47図　調査地位置図

1．左坂古墳群　2．シミズ谷古墳群　3．墓ノ谷古墳群　4．南谷古墳群
5．永留城跡　6．浅後谷南遺跡

付表1　平成10年度国営農地関係遺跡に伴う発掘調査地一覧

番号	遺跡名	所在地	調査期間	面積	担当者	備　考
1	左坂古墳群	中郡大宮町周枳	7月7日 ~11月12日	1,200	引原茂治・村田和弘	
2	シミズ谷古墳群	竹野郡弥栄町堤	4月20日 ~5月22日	90	竹井治雄	試掘
3	墓ノ谷古墳群	竹野郡弥栄町鳥取	6月8日 ~7月14日	780	竹井治雄	試掘
4	南谷古墳群	熊野郡久美浜町壱分	5月19日 ~8月12日	1,000	石尾政信	
5	永留城跡	熊野郡久美浜町永留	8月25日 ~10月14日	130	石尾政信	
6	浅後谷南遺跡	竹野郡網野町郷	4月20日 ~11月6日	3,100	黒坪一樹・石崎善久 福島孝行・竹井治雄	次年度報告

左坂古墳群は、丹後半島を南北に貫流する竹野川の中流域に広がる沖積平野の東側丘陵部に位置し、平成2年度からの調査で、弥生時代から奈良時代にかけての丘陵部全体が墓域として利用されていたことが判明している。また、シミズ谷古墳群・墓ノ谷古墳群は、竹野川下流域の丘陵部に点在する古墳群の一つで、古墳の規模や築造時期を明確にする目的で、発掘調査を実施した。

南谷古墳群・永留城跡は、久美浜湾に向かって北流する佐濃谷川中流域の丘陵部に位置し、特にこの地域は 佐濃谷川流域でも古墳群が密集して築かれているところである。

調査にあたっては、調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、同主任調査員引原茂治、同主査調査員竹井治雄・石尾政信・黒坪一樹、同調査員石崎善久・村田和弘・福島孝行が担当した。

現地調査においては、弥栄町教育委員会・網野町教育委員会・久美浜町教育委員会をはじめとする関係機関や地元区長など多大な協力を得た。また調査期間中、作業員や調査補助員・整理員として作業に参加していただいた地元の方々や有志学生諸氏には、感謝の意を表したい。

なお、調査に至る経費は、すべて農林水産省近畿農政局が負担した。

（水谷壽克）

(1) 左坂古墳群

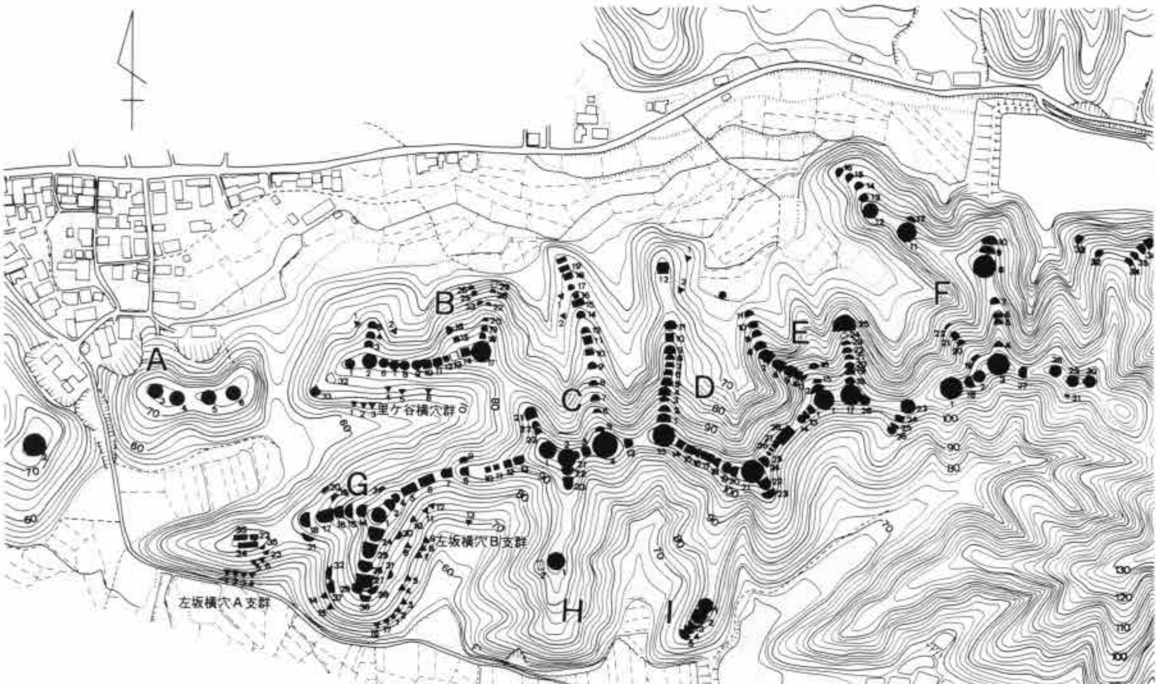
1．立地

左坂古墳群は京都府中郡大宮町字周枳小字左坂に所在する。古墳群は、丹後半島を南北に貫流する竹野川により形成された沖積平野に、東から西へ向かって派生する丘陵に分布している。

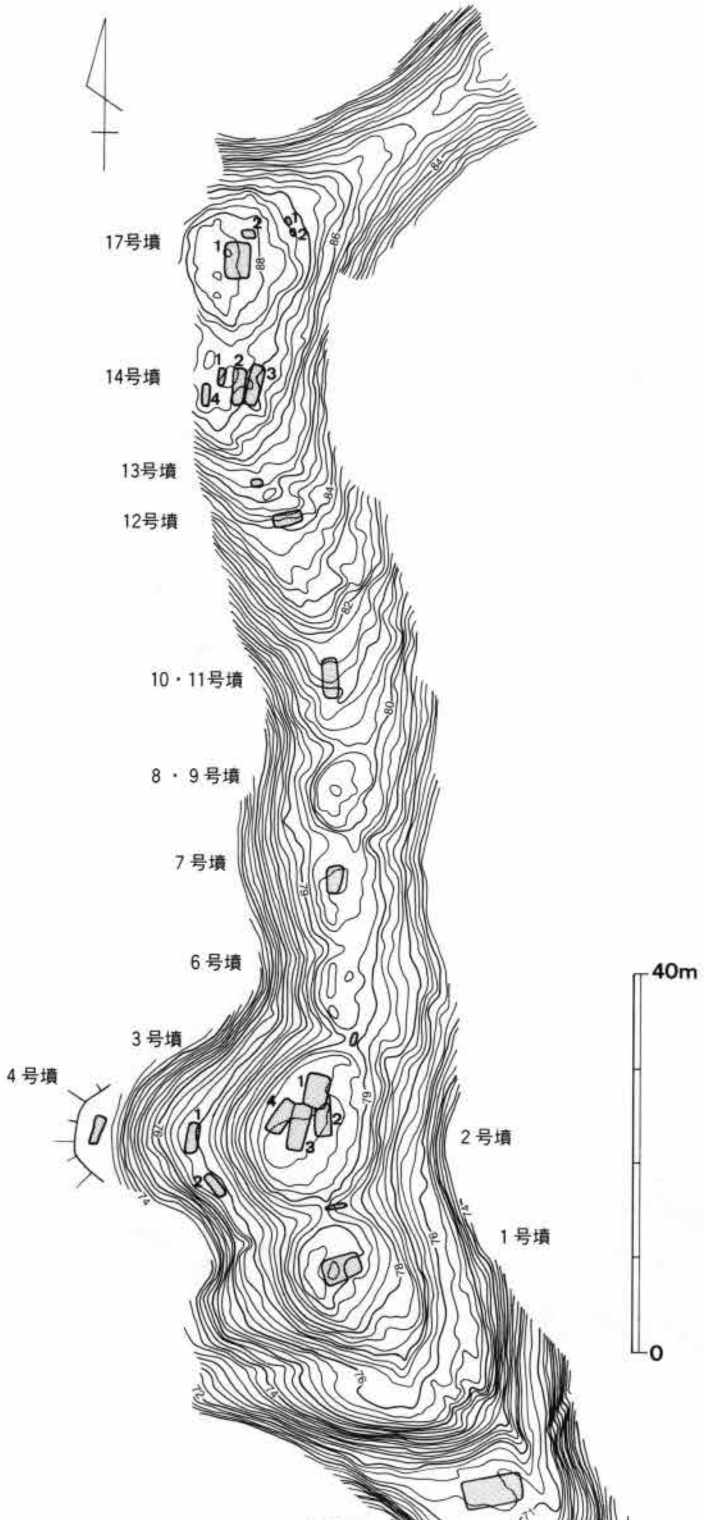
この丘陵では、弥生時代中期から後期の墳墓である左坂墳墓群など、140基以上の古墳が確認され、横穴群も丘陵の南斜面から里ヶ谷横穴群6基・左坂横穴群18基以上が確認され、弥生時代から奈良時代にかけて、墓域として利用されてきたことが判明している。また、周辺には弥生時代の墳墓として三坂神社墳墓群・帯城墳墓群が、古墳時代の墳墓としては有明古墳群や三坂神社裏古墳群、横穴群として大田鼻横穴群が調査され、この地域一帯が弥生時代から奈良時代にかけての墓域として広範に利用されてきたものと見られる。

左坂古墳群は、丘陵稜線上に中規模古墳が分布しており、北側に派生する支尾根上には小規模な古墳が造成されている。墳形は様々であり、円墳・方墳の他、地山を削り平坦面を造り出しただけのいわゆる「階段状地形を呈する古墳」も多く分布している。

なお、今回の報告に際しては、各古墳の番号を再整理することなく、大宮町教育委員会が提示している分布図(注1)によることとした。



第48図　左坂古墳群主要部分分布図(注1文献より転載、加筆修正)



第49図　左坂Ｂ支群調査前測量図および主体部配置図（1/800）

2．Ｂ支群の調査

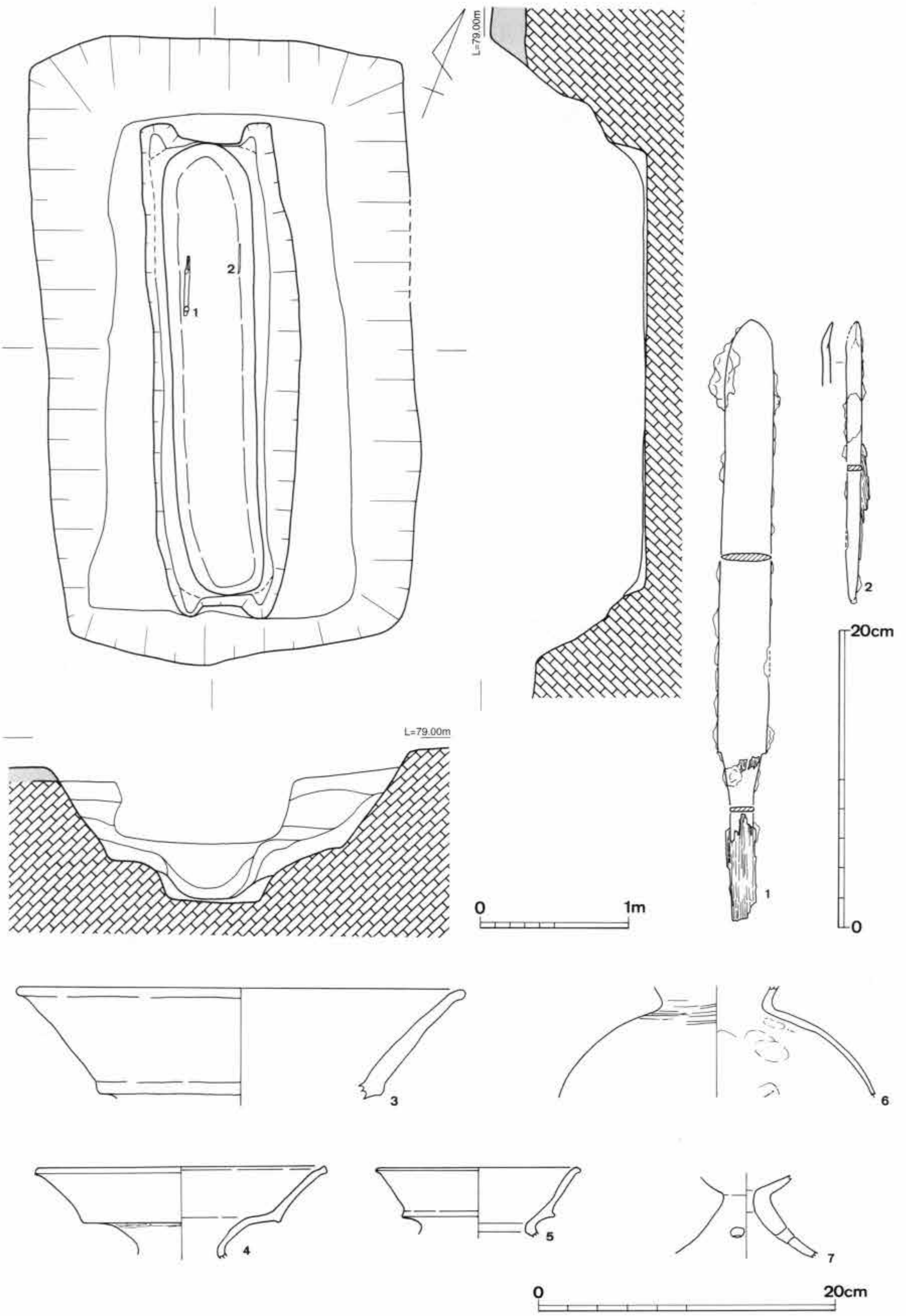
Ｂ支群では総数13基の古墳を調査した。また、併せて１号墳・２号墳の墳頂部で計３基の経塚を検出した。この経塚群については、本稿では触れることができないため、機会を改めて報告する。

①Ｂ１号墳

墳丘　直径約15ｍを測る円墳である。墳丘の大半は地山を整形することにより造り出され、墳形を整えるため北側に若干の盛土を施している。

主体部　墳頂部平坦面ほぼ中央で、南北に主軸をとる木棺直葬墓を１基検出した。墓壙は盛土上から掘り込まれており、墓壙の形状は平面隅丸方形を呈する二段墓壙である。木棺は二段目墓壙内で舟底状底部を呈する木棺の痕跡を確認した。蓋の形態についでは明確にできるものではないが、二段目墓壙の南北両端に各々２つの溝状の掘り込みが設けられていることから、蓋材には縄掛け突起が存在した可能性がある。

遺物は、鉄剣１点が切先を南に向け、棺内西側に、鉄製鉇１点が棺内東側から検出された。以上の遺物の配置から、被葬者の頭位は北側と推測される。



第50図　B 1 号墳主体部(1/40)および出土遺物実測図(1/4)

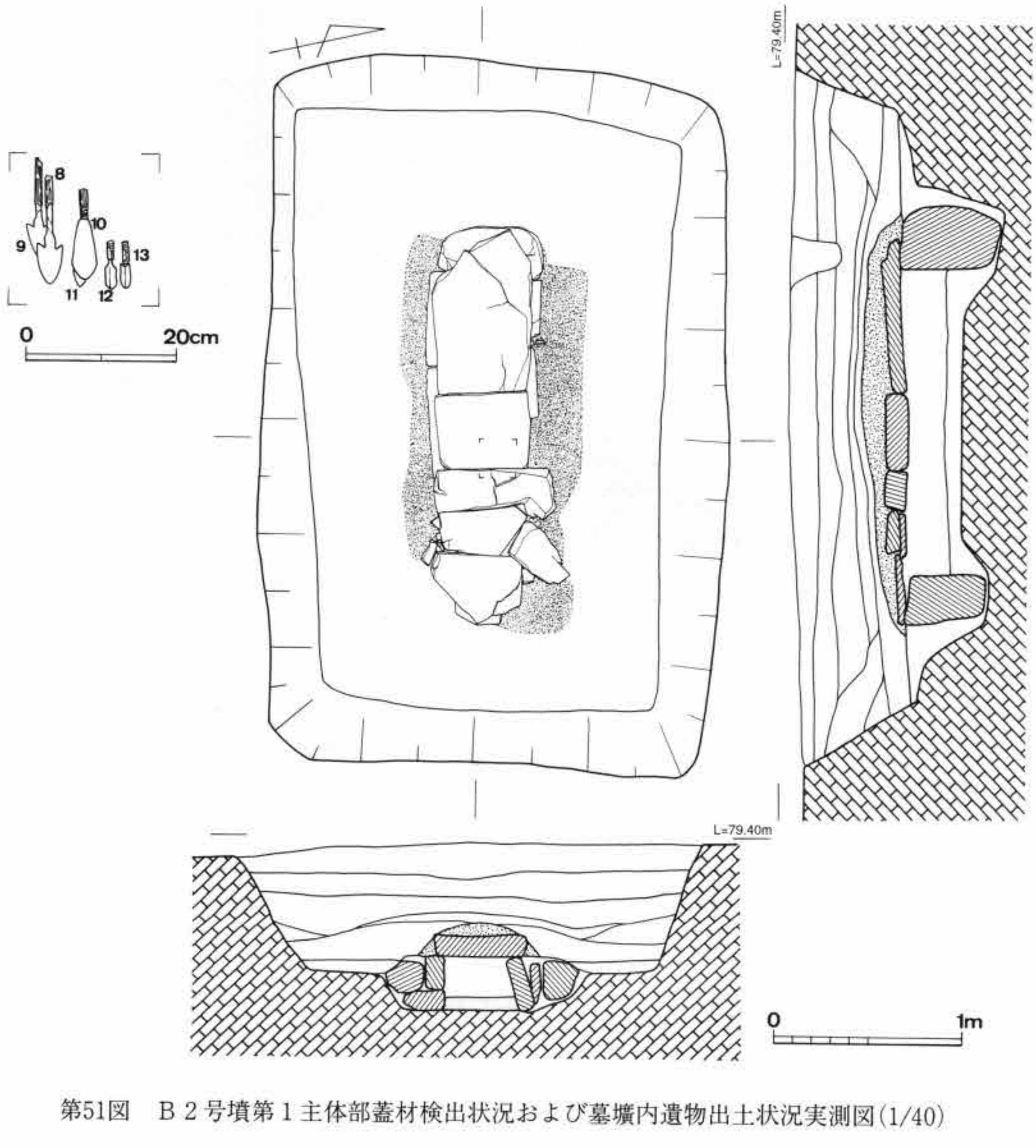
出土遺物　1号墳出土遺物には墳丘から出土した土師器、棺内から出土した鉄製品がある。鉄剣は全長40.5cm・刃部幅3.4cmを測る。関は小さく作り出され、茎は先端に向かってすぼまり気味である。茎から関下部にかけて木質が遺存している。肉眼観察では目釘孔は確認できない。鉇は全長18.8cmを測る。裏面に木質が付着しているが、これは木棺のものと判断される。土師器は3が墳丘南西斜面から出土した以外は、全て経塚状遺構埋土中から出土したものである。3～7はいずれも二重口縁壺である。3は大型品である。器台は三方向のスカシ穴を有し、椀状の受け部をもつものと考える。

②B2号墳

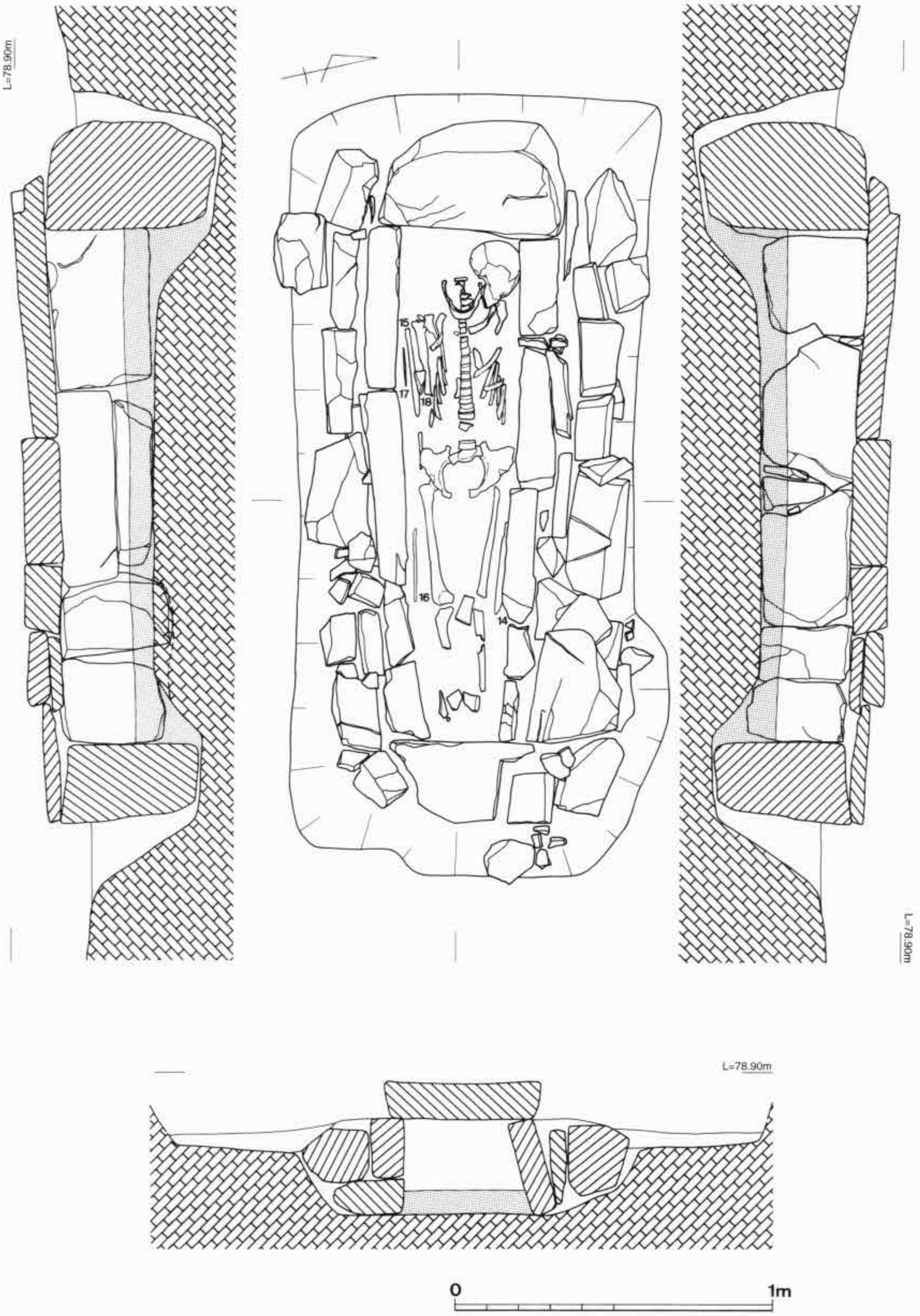
墳丘　直径約18mを測る円墳である。1号墳同様北側斜面部分のみ盛土を施している。

主体部　墳頂部で4基の主体部を確認した。また、1・6号墳間の溝内で、各々1基の土壙墓を確認した。2号墳に伴う周辺埋葬施設と考える。

第1主体部　墳頂部平坦面中央からやや南西寄りに作られた石棺直葬墓である。墓壙は地山面

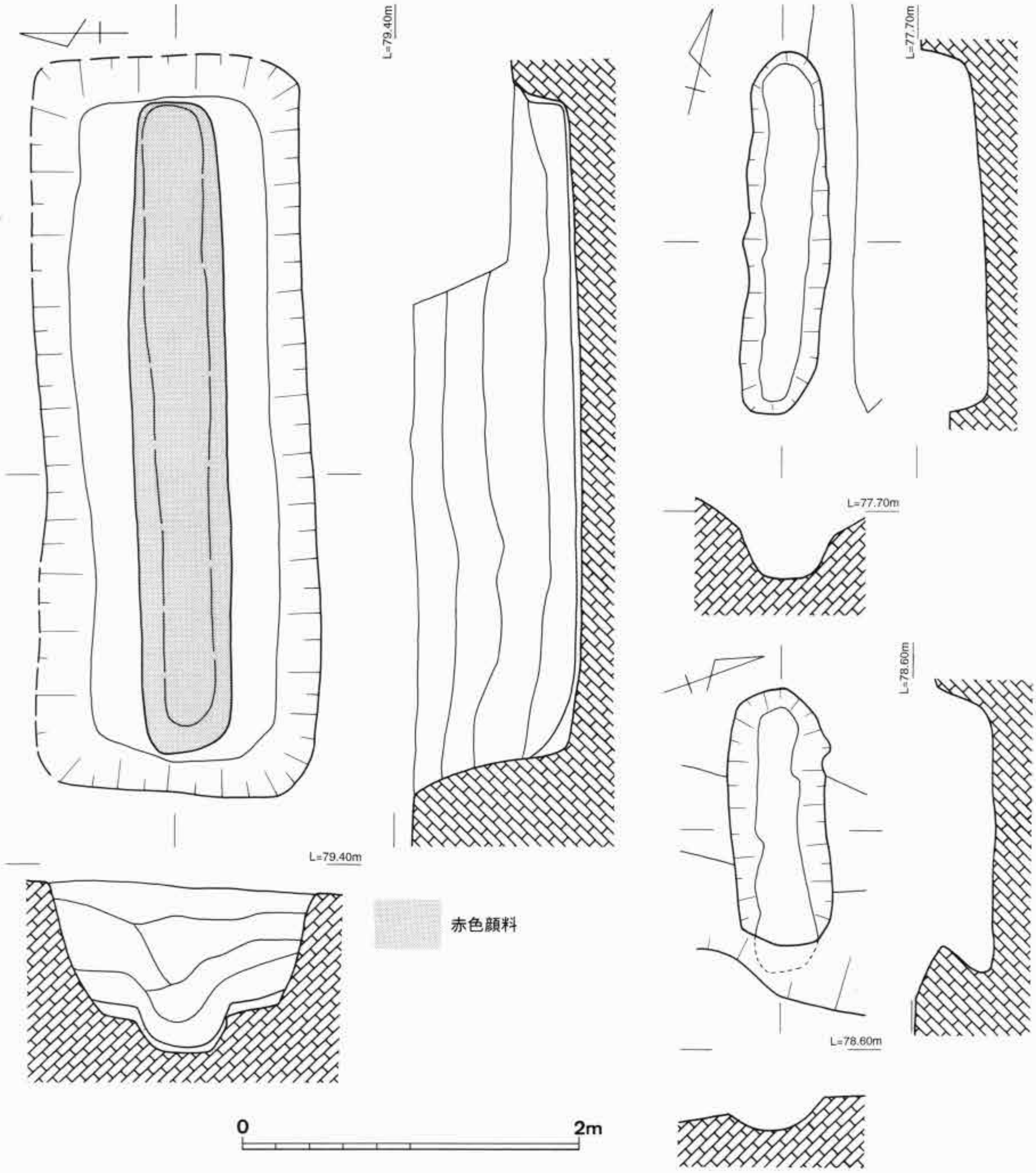


第51図　B2号墳第1主体部蓋材検出状況および墓壙内遺物出土状況実測図(1/40)



第52図　B２号墳第１主体部石棺および棺内遺物出土状況実測図(1/20)

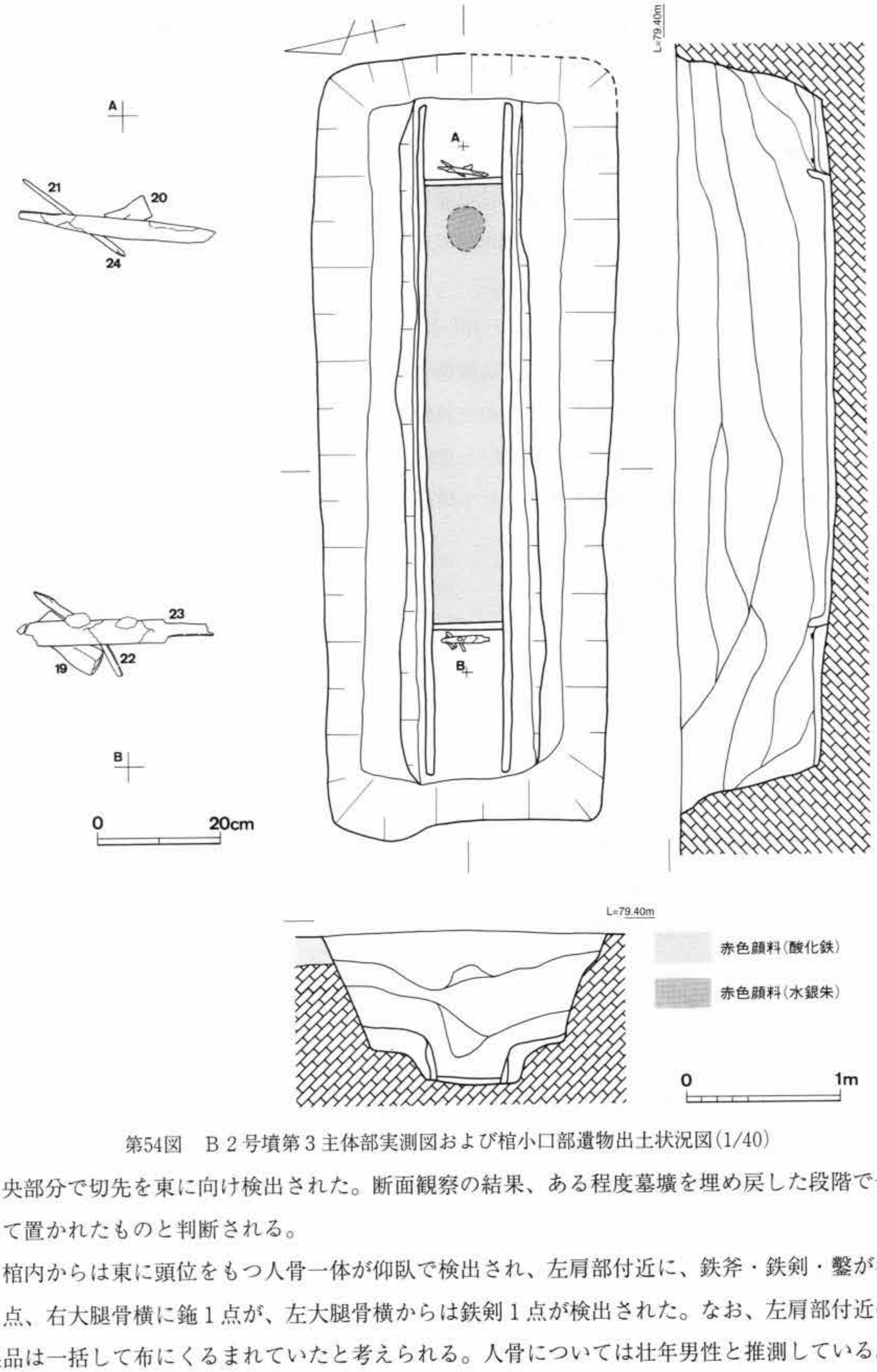
から掘り込まれ、第２・３主体部を切る。墓壙の形態は二段墓壙を呈し、二段目墓壙内に石棺を直葬する。石棺は周辺で採取される花崗岩の自然剥離を利用した石材を主体に用いており、北壁で５石、南壁で４石が直接棺側を形成している。両小口は比較的大きな石材を各々１石用いることにより構築されている。また、南壁では１石分ではあるが２段積みになっている部分もある。



第53図　B２号墳第２主体部(左)、B１・２号墳間溝内埋葬(右上)、
B２・６号墳間溝内埋葬(右下)実測図(1/40)

棺の内側にのみ赤色顔料(酸化鉄)が塗布されている。棺と二段目墓壙の隙間には多数の花崗岩割石が裏込めとして使用されている。また、石材間には粘土が充塡されていた。石棺の構築に際しては、この段階で作業の中断が行われたものと考えられ、一段目墓壙底面を一定程度埋め戻し、棺内に赤色顔料を塗布した作業面が確認された。蓋石は６石が用いられ内面にのみ赤色顔料が塗布されている。蓋を施した後、全体が被覆粘土で覆われていた。棺内には一定程度置き土を施した後、直径５㎜～１㎝程度の花崗岩小礫を棺底に敷き詰めている。

遺物は墓壙上面から器台１点が検出され、墓壙内埋土最上層から鉄鏃３点・銅鏃３点が、墓壙



第54図　B2号墳第3主体部実測図および棺小口部遺物出土状況図(1/40)

中央部分で切先を東に向け検出された。断面観察の結果、ある程度墓壙を埋め戻した段階で一括して置かれたものと判断される。

棺内からは東に頭位をもつ人骨一体が仰臥で検出され、左肩部付近に、鉄斧・鉄剣・鑿が各々1点、右大腿骨横に鉇1点が、左大腿骨横からは鉄剣1点が検出された。なお、左肩部付近の鉄製品は一括して布にくるまれていたと考えられる。人骨については壮年男性と推測している。人骨は土砂・水の流入により腐食したとみられる部分以外は全て関節している。

第2主体部　第3主体部の南側で検出した木棺直葬墓である。第1主体部によって切られてい

る。墓壙は地山面から掘り込まれている。墓壙の形態は二段墓壙を呈し、二段目両小口部分は段を形成していない。木棺は２段目墓壙内に納められた舟底状底部を呈する木棺である。木棺の痕跡は明瞭に観察でき、棺内には赤色顔料(酸化鉄)が塗布されていた。この主体部からの出土遺物は確認されなかった。

第３主体部　第１主体部の北側で検出した木棺直葬墓である。第４主体部を切る。墓壙は盛土上から掘り込まれている。墓壙の形態は二段墓壙を呈し、二段目両小口部分は段を形成していない。木棺は二段目墓壙内に納められた箱形木棺である。木棺の痕跡は極めて明瞭に観察でき、棺内には赤色顔料(酸化鉄)が塗布されていた。

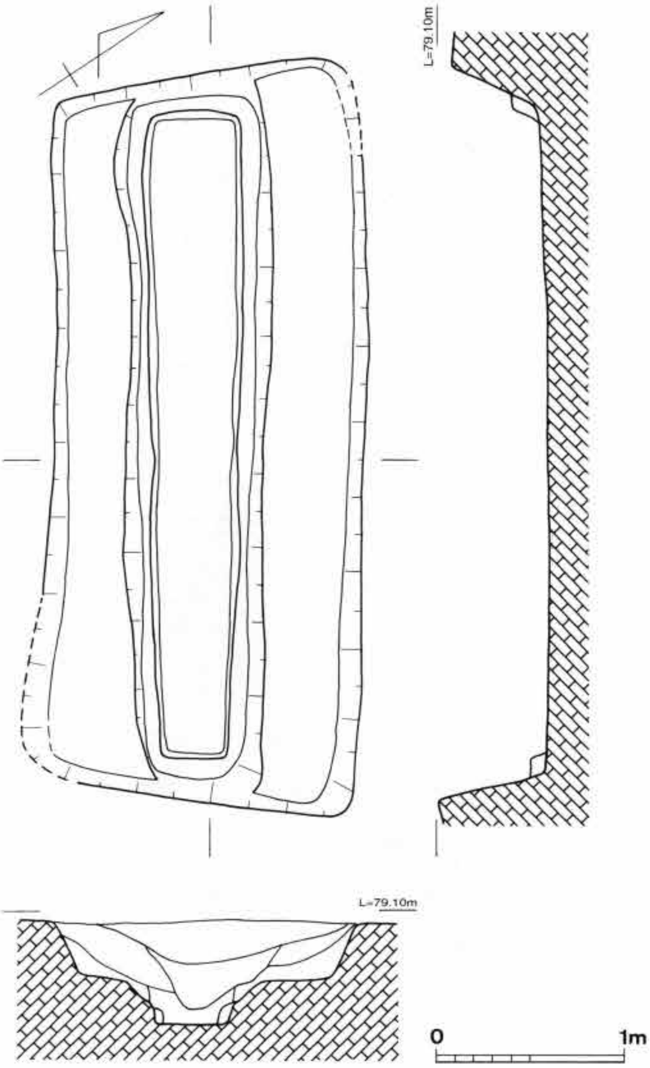
遺物は墓壙上面で、土師器とともにガラス小玉１点が検出された。棺外両小口部分に鉄斧・鉇・鉄剣が各々１組づつ置かれていた。土層観察の結果、これらの鉄製品は棺材を据え、小口部分に一定の土を置いた段階で納められたものと判断された。また、棺内東側では水銀朱が認められた。このような状況から、被葬者は東頭位と推測される。

第４主体部　第２主体部の北側で検出した木棺直葬墓である。第２主体部によって切られている。墓壙は地山面から掘り込まれ、この主体部の構築後に墳丘盛土が施されている。墓壙の形態は二段墓壙を呈し２段目両小口部分は段を形成していない。木棺は２段目墓壙内に納められた箱形木棺である。この主体部から遺物は確認されなかった。

Ｂ２・６号間溝内埋葬　６号墳との間の溝内で確認した主軸を東西にとる土壙墓である。墓壙の形態は素掘りであり、６号墳側が横穴状になっている遺物は確認されなかった。

Ｂ１・２号間溝内埋葬　１号墳との間の溝内で確認された主軸を南北にとる土壙墓である。墓壙の形態は素掘りであり、遺物は確認されなかった。１号墳の墳丘を削平している。

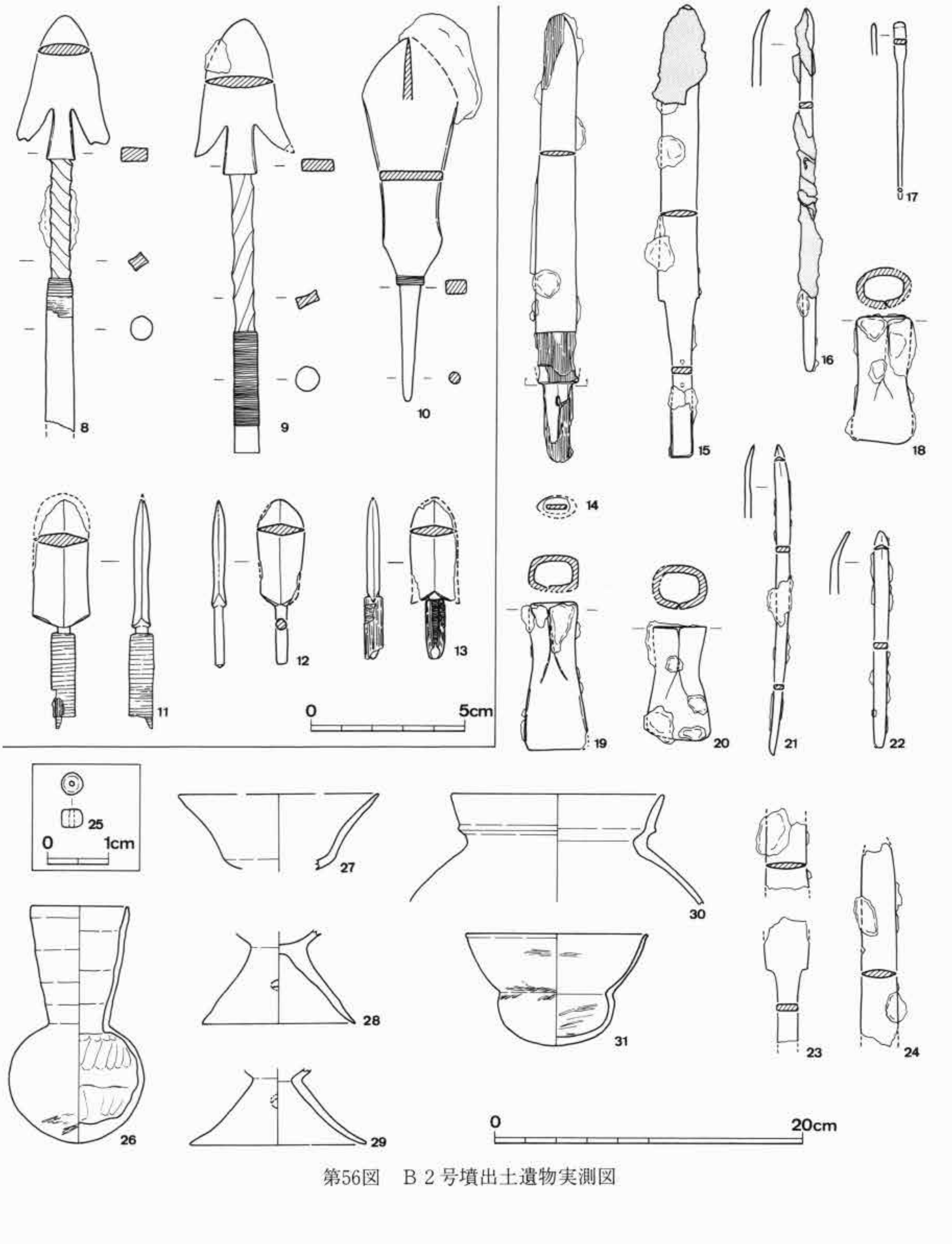
出土遺物　８～18・29が第１主体部に伴うものである。鉄鏃には８・９のように頸部をねじるものがある。類例は奈良県東大寺山古墳に見られる。11～13は柳葉式銅鏃である。いずれも鎬



第55図　Ｂ２号墳第４主体部実測図(1/40)

をもち13のみ逆刺を有する。鉄剣は、被葬者の左大腿骨付近に置かれた14に木製刀装具が認められる。15は木質の付着がなく、17・18とともに抜き身で布にくるまれていたと考える。17は鑿と考える。16は全長23.3cmを測る長身の鉇である。全体に布が巻き付いている。18は袋状鉄斧である。木質が認められず、柄に装着された状況ではない。29は墓壙検出面で検出した。円形のスカシが2方向に認められる。

19～28が第3主体部に伴うものである。19・22・23が西群、20・22・24が東群である。19は袋



第56図　B 2号墳出土遺物実測図

部断面が方形に近い。鉄剣はいずれも抜き身である。遺存状況が悪く、出土後崩壊したため、部分的にしか図示し得ない。土器群は、いずれもガラス小玉とともに、墓壙上面に一括して置かれていたものである。28は細頸壺であり、布留式併行期でも古相のものと考える。ガラス小玉は、径3.5㎜を測る。色調はスカイブルーを呈し、円孔に平行してのびる気泡が観察される。

墳丘から出土した土器30・31には山陰系の甕と精製の小型丸底壺が認められる。

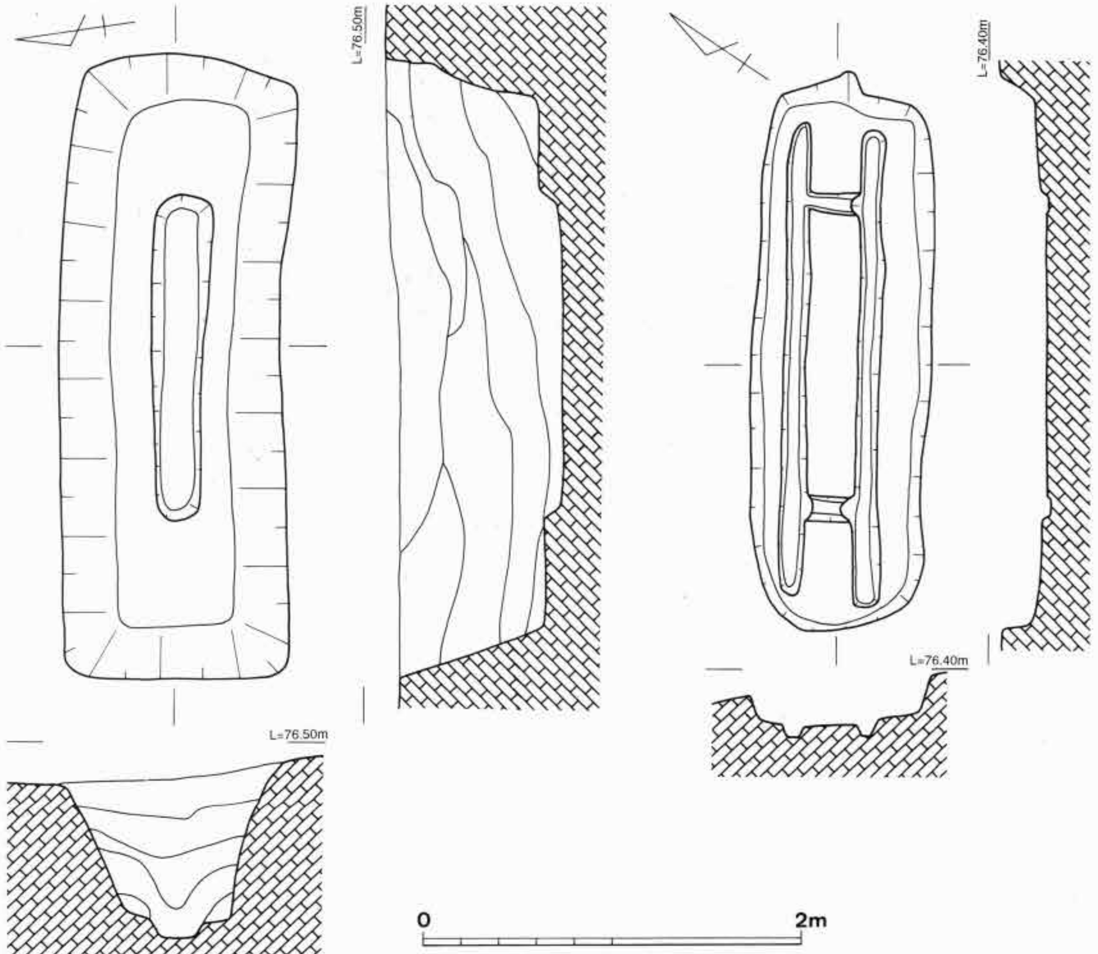
③B 3号墳

墳丘　地山整形により平坦面を構築しただけの構造である。平坦面がいびつであり、1基の古墳と考えるより2号墳造成に伴うテラス部分を利用したものと考える。したがって、ここで検出された主体部は2号墳の周辺埋葬施設的性格をもつものと考える。

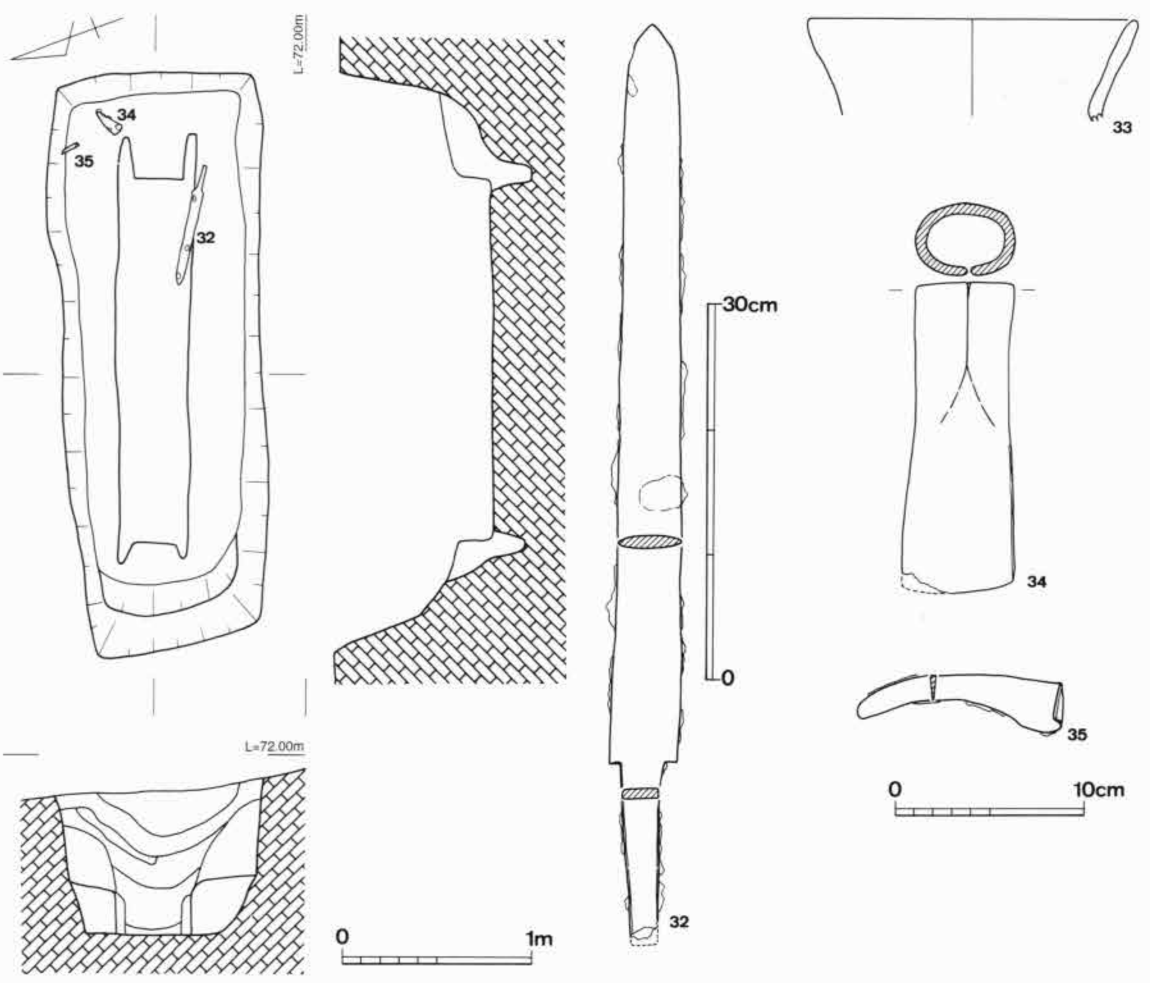
主体部　平坦面上で2基の埋葬施設を確認した。

第1主体部　平坦面中央部分で確認した。墓壙は地山面から掘り込まれている。墓壙の形態は二段墓壙を呈し、二段目墓壙内に棺を納めたものと思われるが、棺の痕跡を確認することはできなかった。墓壙の形状から箱形木棺の可能性が高いものと考える。遺物は確認されなかった。

第2主体部　平坦面中央から西側で確認した。墓壙は素掘りであり、墓壙底部に棺材を据えるための溝が設けられる。この溝の形態から箱形木棺と判断される。遺物は確認されなかった。



第57図　B 3号墳主体部実測図(左；第1主体部、右；第2主体部　1/40)



第58図　B４号墳主体部実測図(1/40)および出土遺物実測図

④B４号墳

墳丘　地山整形により平坦面を確保した古墳である。盛土は確認されない。

主体部　平坦面のほぼ中央で東西に主軸をとる木棺直葬墓１基を検出した。墓壙は素掘りであり、墓壙底面に小口板を据えるための溝が設けられていた。棺は箱形木棺であり、棺の痕跡は小口部分は明瞭ではなかったものの、側板の痕跡は明瞭に確認された。側板の痕跡から側板が小口部分をはさみ込む形態をとるものと判断される。

遺物は墳頂部で土師器が検出された。いずれも細片化していたが墓壙上に供献されていたものである。墓壙内からは鉄剣・鉄斧・曲刃鎌が各々１点出土した。いずれも棺側板を裏込め土で固定した段階で納められたものと考える。遺物の出土状況から被葬者は東頭位と推定される。

出土遺物　32が墓壙上、その他は墓壙内からの出土である。鉄剣は全長73cmを測る大型品である。木質の付着等が見られず抜き身で置かれたものと判断される。銹のため目釘孔の有無については確認できない。袋状鉄斧も全長16.4cmを測る大型品である。曲刃鎌には研ぎ減りが認められ、実際に使用されていたものと考えられる。土師器は広口壺の口縁部である。曲刃鎌の存在から、４号墳の築造時期は古墳時代中期と考える。

⑤B 6 号墳

墳丘　溝により区画された円墳である。盛土は確認されなかった。

主体部　主体部は検出し得なかった。表土直下が地山となっており、流失あるいは削平されたのか、もとから主体部が構築されていなかったのか判断できなかった。

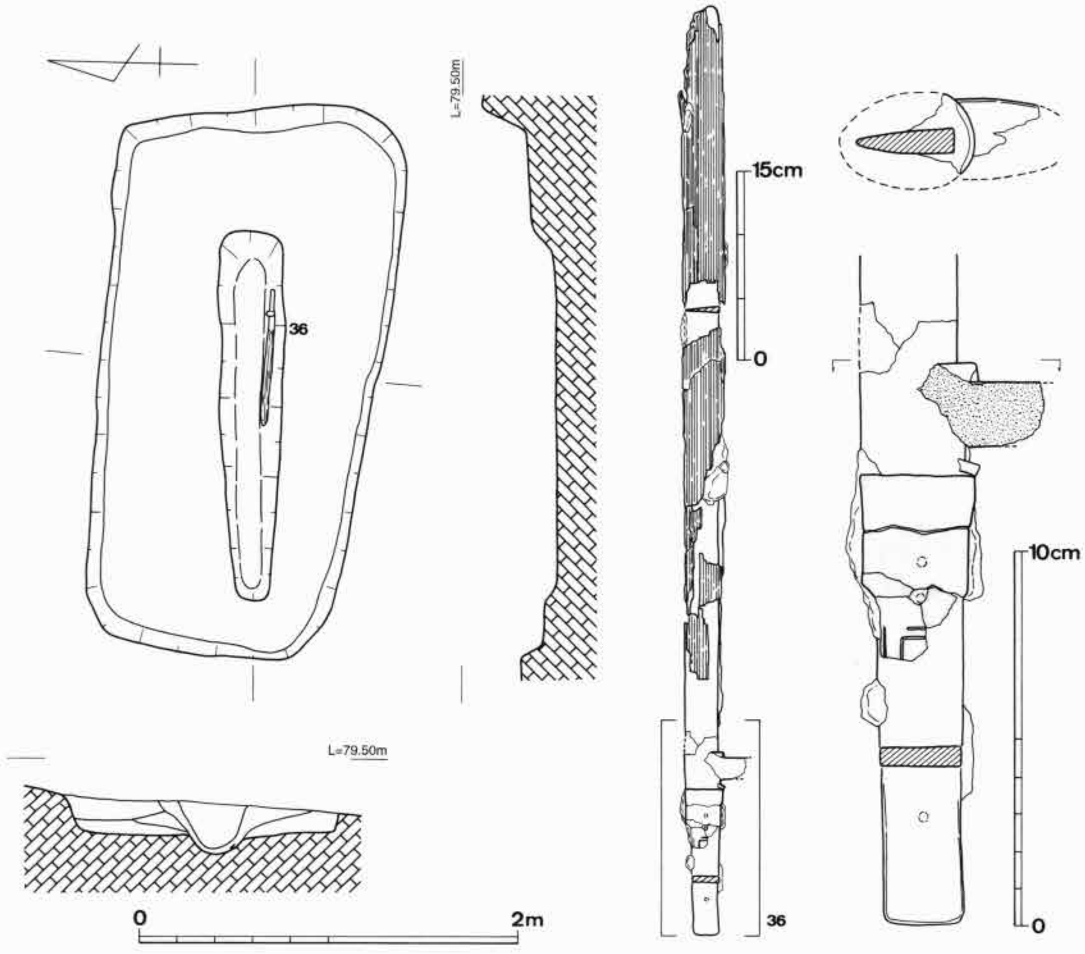
⑥B 7 号墳

墳丘　尾根主軸方向に直交する溝を設けることにより構築された方墳である。盛土は確認されなかった。

主体部　墳頂部平坦面中央で東西方向の木棺直葬墓1基を検出した。墓壙の形態は二段墓壙を呈し、二段目墓壙内に棺を納めたものと思われる。棺の痕跡を明瞭に確認することはできなかったが、土層断面の観察結果および二段目墓壙の形状から舟底状底部を呈する木棺と考えられる。

遺物は墳丘上から土師器片が検出され、二段目墓壙内から鉄刀1点が検出された。

出土遺物　棺内出土の鉄刀1点を図示した。刀装具の遺存状況がよく、木製の把をもつ。この部分には若干の朱が付着しており、本来は朱塗りであったものと考える。柄部には漆が塗られており、方形の線刻状の模様が観察される。関の形態については明確ではない。目釘穴が肉眼で3か所確認される。



第59図　B 7 号墳主体部実測図(1/40)および出土遺物実測図

⑦B８・９号墳

墳丘　当初の分布調査では、２基の古墳として認識されていたが、調査の結果、１基の古墳であることが明らかとなった。墳丘は溝により区画された円墳である。盛土は確認されなかった。

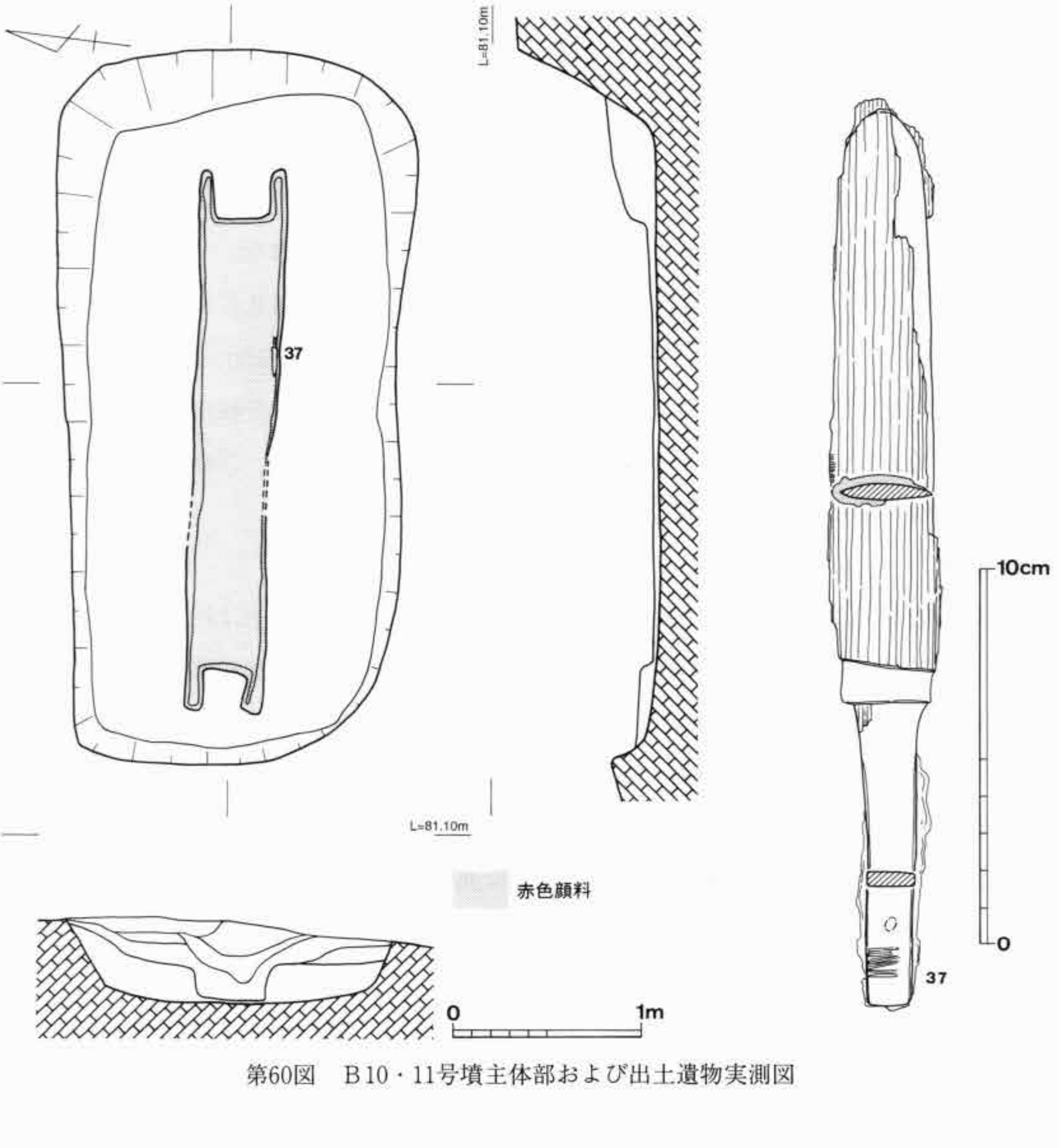
主体部　主体部は検出し得なかった。流失あるいは削平されたのか、もとから主体部が構築されていなかったのか判断できなかった。

⑧B10・11号墳

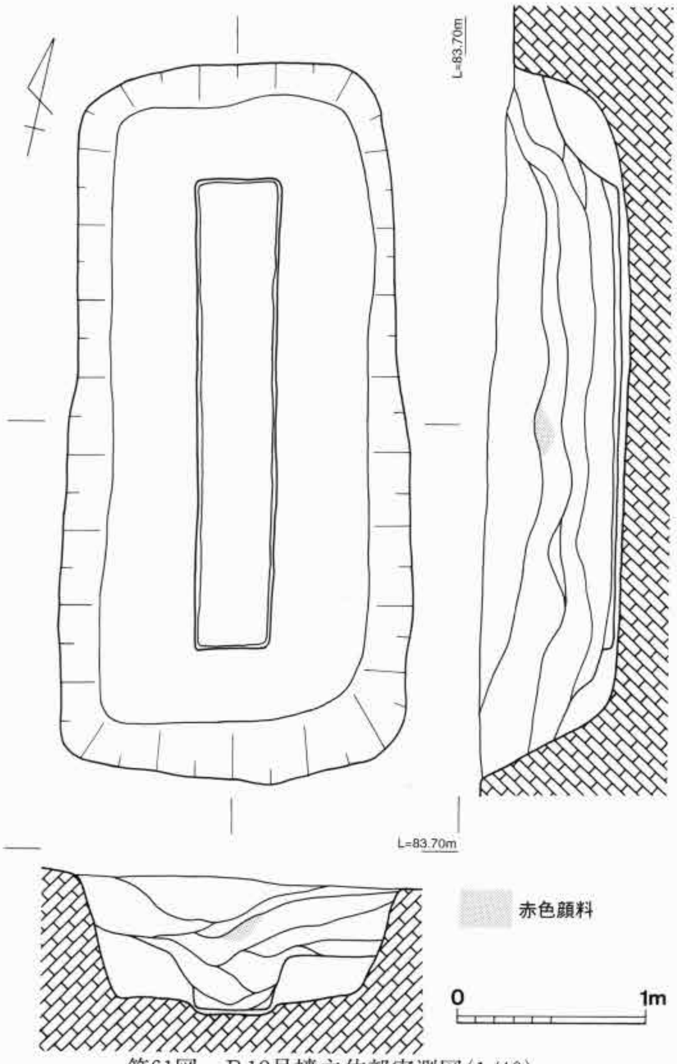
墳丘　当初の分布調査では２基の古墳として認識されていたが、調査の結果１基の古墳であることが明らかとなった。墳丘の造成は地山整形により平坦面を確保した構造をとる。墳丘西側はB８・９号墳の造成により削平され、８・９号墳に先行する古墳であることは明らかである。

主体部　平坦面中央部で東西に主軸をとる木棺直葬墓１基を検出した。墓壙の形状は素掘りである。木棺痕跡は墓壙を掘り下げる過程で検出した。木棺は長側板が小口板をはさみ込む形態をとる箱形木棺である。棺材に赤色顔料が塗布されていたため、明確に認識することができた。

副葬品として、棺中央部南長側板で、切先を西に向けた鉄剣を１点検出した。以上の点から、



第60図　B10・11号墳主体部および出土遺物実測図



第61図　B12号墳主体部実測図(1/40)

被葬者は東頭位であると考える。

出土遺物　鉄剣1点がある。全長24cmを測る。関の形態は不明である。全体に木質がよく残っており、鞘の全長を約13cmと見ることができる。鞘には木質の上にさらに糸状のものが巻かれている。茎には、木質の内部に繊維状のものが観察されることから、茎本体に糸状のものを巻き付けた上で柄に挿入し固定しているものと考える。目釘孔は1か所観察される。

⑨B12号墳

墳丘　地山整形により平坦面を造り出す構造である。墳丘の造成に際しては北側斜面旧表土上に、わずかに盛り土を施すことにより、平坦面の拡張を行っている。

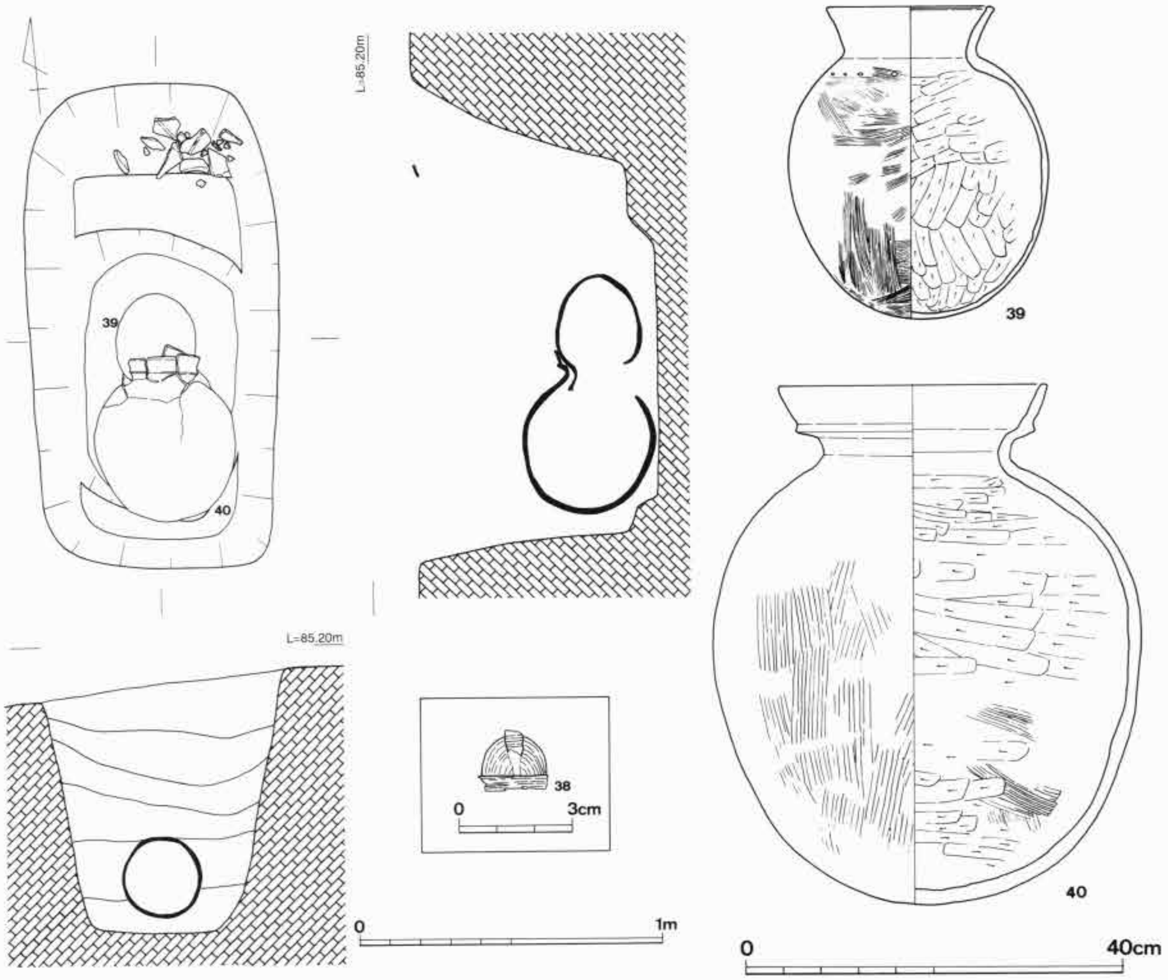
主体部　墳頂部平坦面東寄りで、南北に主軸をとる木棺直葬墓1基を検出した。墓壙の形状は小口部分に段を有さない二段墓壙である。木棺は墓壙掘削中にその痕跡を検出した。棺固定土の平面的観察から長側板が小口板をはさみ込む形態をとる組合式箱形木棺と判断される。墓壙掘削中に赤色顔料を検出したほか遺物は無い。

⑩B13号墳

墳丘　地山整形により小規模な平坦面を造り出した構造をとる。盛土は確認されなかった。

主体部　平坦面中央で、土器棺墓を1基検出した。墓壙の形状は、側辺部分に段を有さない二段墓壙である。二段目は、棺に転用された土器を据えるために掘り込まれたものと考えられる。棺には、大型の二重口縁壺と布留式の特色を有する甕を合口に使用していた。これらの土師器は、両者とも口縁部の一部を打ち欠いており、打ち欠かれた口縁部は、墓壙検出面上で検出された。以上の状況から、土器を組み合わせる際に不必要な部分を現地で打ち欠き、埋葬終了後に墓壙上面に散布したものと考える。遺物としては、壺内から小型の竪櫛2点が検出され、被葬者に装着された状態であったものと推測する。

出土遺物　棺に転用されていた土師器がある。40は大型の二重口縁壺、39は口縁端部に布留式の甕の特徴を持つ甕である。肩部に刺突紋が施文されている。2点出土した竪櫛はいずれも棟幅



第62図　B13号墳主体部実測図(1/25)および出土遺物実測図

2㎝前後の小型品である。

⑪ B14号墳

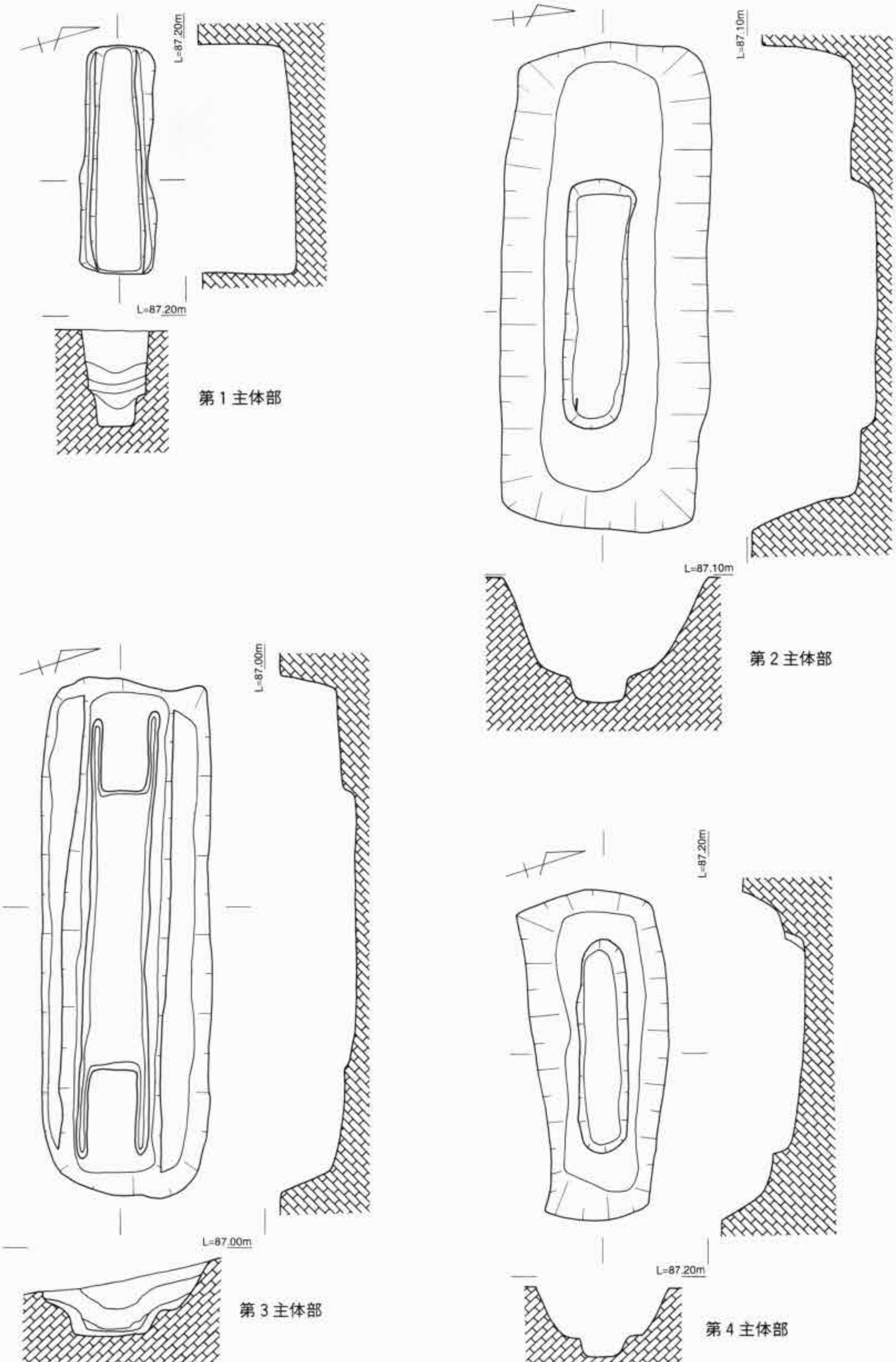
墳丘　地山成形による円墳である。17号墳とは溝により区画され、溝の状況から見て14号墳に後出することが明らかとなった。

主体部　墳頂部平坦面上で4基の埋葬施設を検出した。

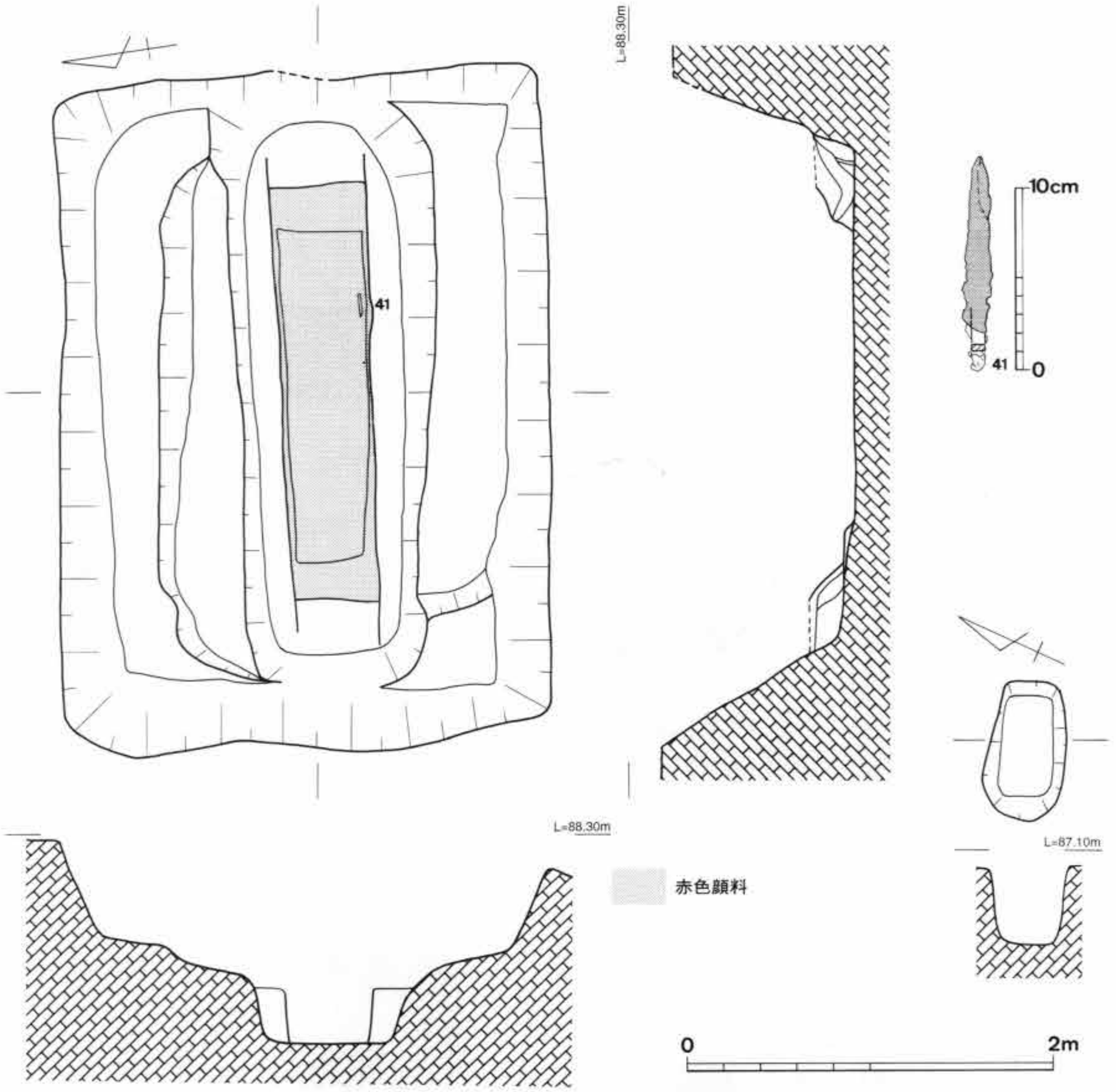
第1主体部　平坦面中央に位置する。墓壙の形態は二段墓壙を呈し、二段目小口部分には段を形成しない。木棺の痕跡は確認できなかった。二段目の墓壙の幅が極めて狭く、通常の箱形木棺が納められていたとは考えにくいが、土層断面からこの主体部内には空間が確保されていたと判断され、一段目墓壙底部に木蓋を施した木蓋土壙である可能性を考えたい。遺物は無い。

第2主体部　第1主体部の南に位置する。第3主体部により切られる。墓壙の形態は二段墓壙である。木棺の痕跡は明瞭にすることはできなかったが、土層断面観察の結果、二段目墓壙内に組合式箱形木棺を納めたものと判断した。副葬品として棺上の東小口から刀子1点を検出した。

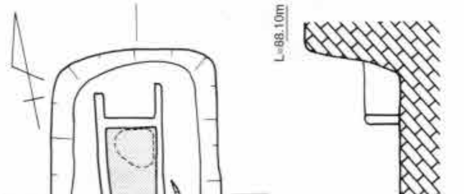
第3主体部　第2主体部の南に位置する木棺直葬墓である。墓壙の形状は二段墓壙であり、二段目小口部分には段を形成しない。木棺は長側板が木口部分を挟み込む形態をとる組合式箱形木棺である。副葬品は検出されなかった。



第63図　B14号墳第１～４主体部実測図(1/50)



第64図　B17号墳第1主体部(左)および出土遺物(右上)、周辺第2主体部(右下)実測図



第65図　B17号墳第2主体部実測図

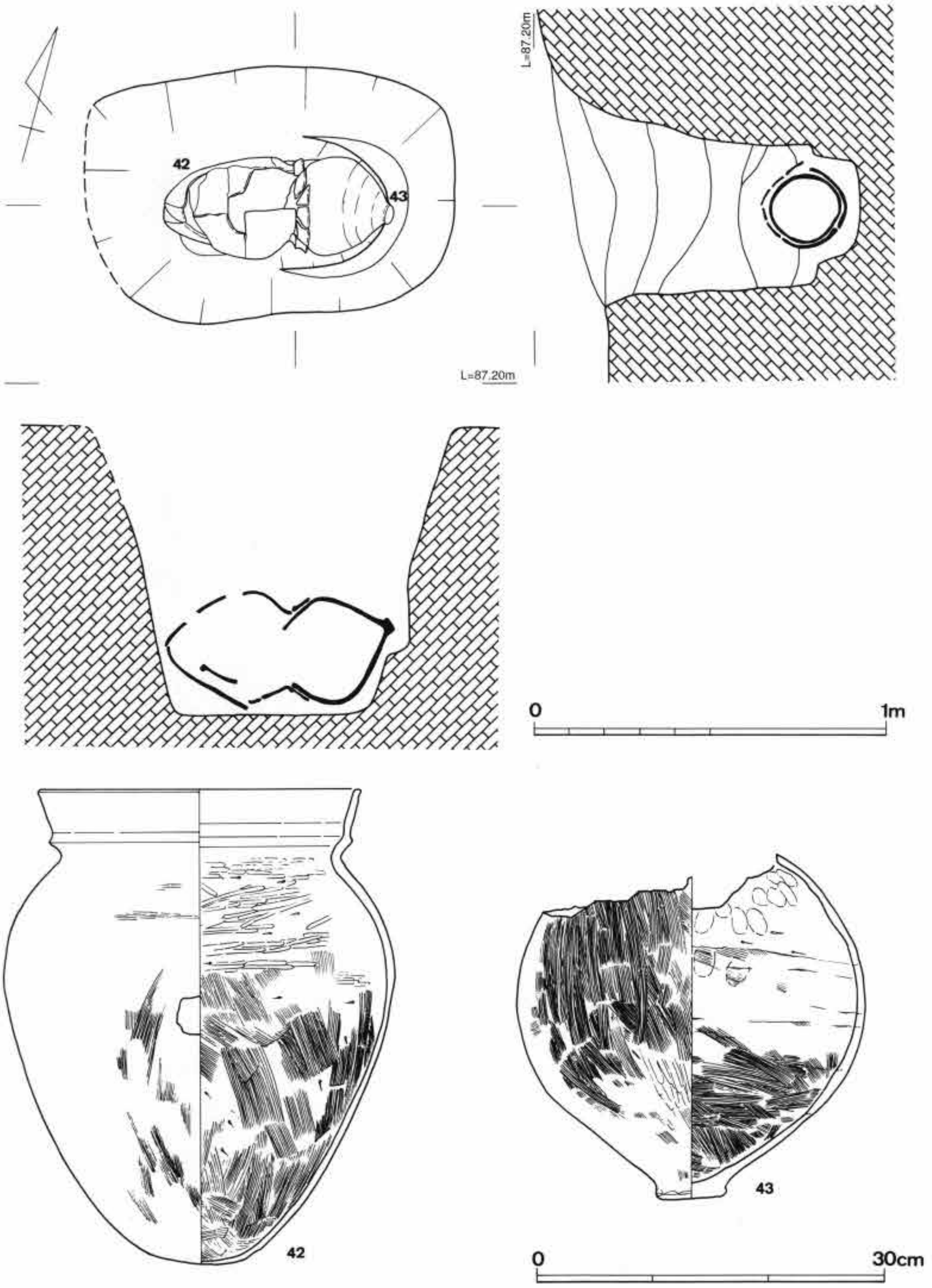
第4主体部　墳頂部平坦面北側で検出した木棺直葬墓である。墓壙の形状は二段墓壙を呈する。棺の痕跡は明確ではないが、二段目墓壙の形状、および部分的に確認された小口部分の棺痕跡から舟底状底部を呈する木棺が直葬されていたものと判断する。副葬品は検出されなかった。

⑫B17号墳

墳丘　地山整形による円墳である。明瞭な墳丘裾部は形成されていない。

主体部　墳頂部で2基、墳丘南東裾部緩斜面で2基の埋葬施設を確認した。

第1主体部　墳頂部中央で確認した木棺直葬墓である。

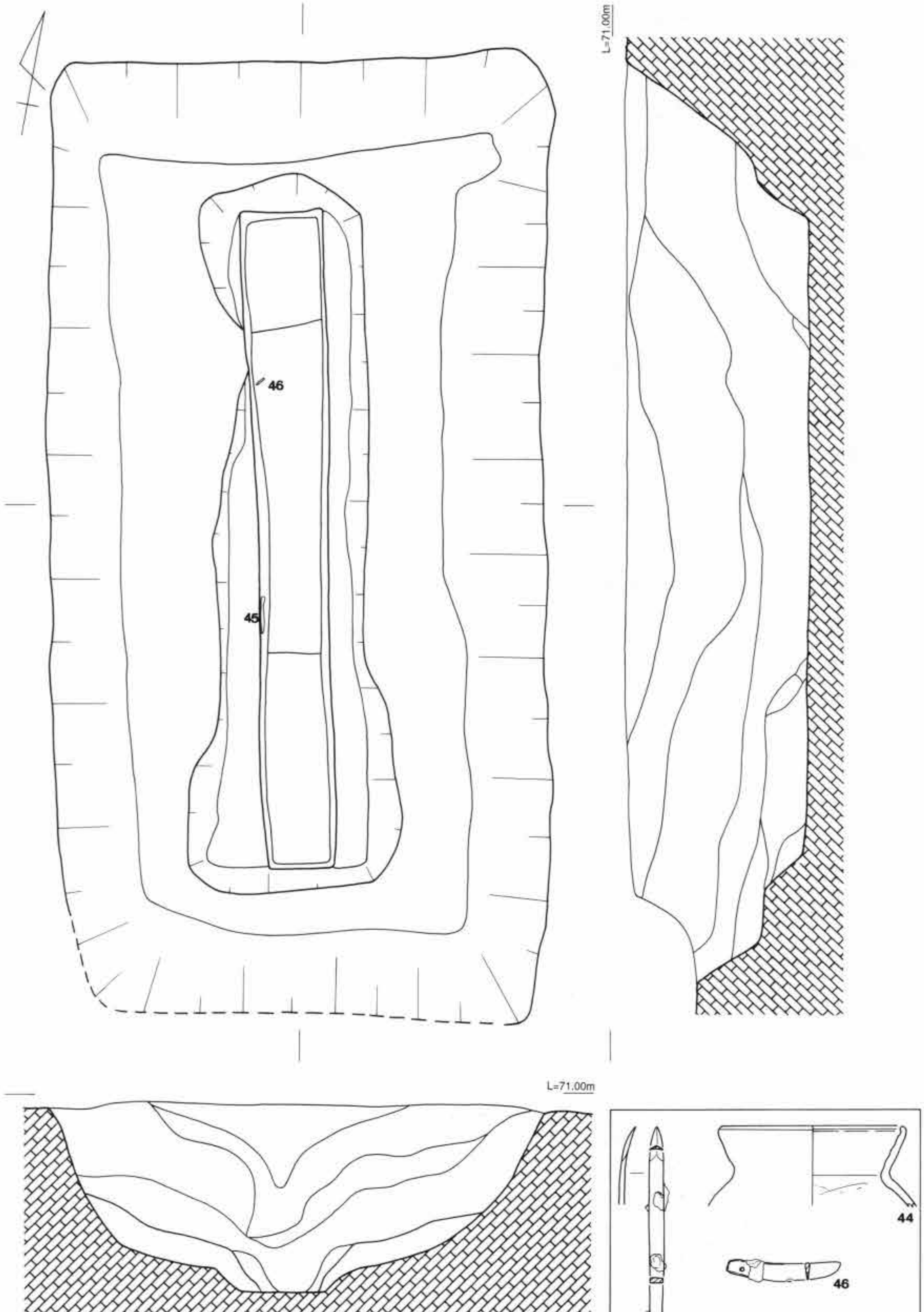


第66図　B17号墳周辺第1主体部および出土遺物実測図

墓壙の形態は二段墓壙を呈し、二段目両小口部分は段を形成しない。木棺は、二段目墓壙内に納められた箱形木棺である。棺内には赤色顔料(酸化鉄)が塗布されていた。棺内南側で鉇1点、ガラス小玉1点を検出した。

第2主体部　第1主体部の西側で検出した小型の木棺直葬墓である。墓壙の形態は二段墓壙を呈し、二段目両小口部分は段を形成していない。木棺は、二段目墓壙内に納められた箱形木棺である。棺内には赤色顔料(酸化鉄)が塗布されていた。遺物は検出されなかった。

周辺第1主体部　墳丘南側緩斜面で確認した土器棺墓である。墓壙平面形は隅丸長方形を呈し、



第67図　B33号墳主体部および出土遺物実測図

部分的に二段になる。棺には頸部から上半を打ち欠いた壺と、完形の甕を合口に使用していた。甕肩部には焼成後の穿孔があり、棺内からの排水を目的としたと推測される。副葬品は無い。

周辺第２主体部　周辺第１主体部の西に位置する小形の土壙墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、地山から直接掘り込まれる素掘りの形態をとる。土壙検出面で土師器細片を検出した。

出土遺物　第１主体部出土の鉇は布にくるまれており詳細不明である。全長11.7cmを測る。周辺第１主体部で棺に転用されていた土器は、いわゆる山陰系の甕と突出底をもつ壺である。

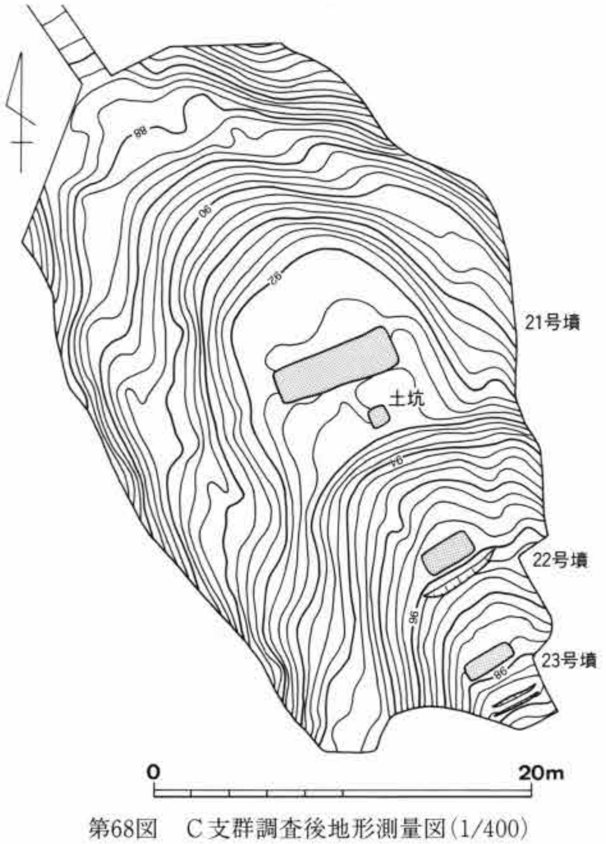
⑬Ｂ33号墳

墳丘　地山整形により平坦面を確保した古墳である。盛土は確認されない。

主体部　平坦面のほぼ中央で南北に主軸をとる木棺直葬１基を検出した。墓壙の形態は二段墓壙を呈し、二段目墓壙内に箱形木棺を納めている。側板が小口板をはさみ込む形状のものである。遺物は棺内西側板に沿って、刀子１点、鉇１点が確認された。

出土遺物　墳丘出土の甕は布留甕の特徴を持つ。刀子は全長7.3cmを測る小型品である。鉇は全長17.0cmを測る。

小結　以上、Ｂ支群で調査を実施した13基の古墳の概要について記した。丘陵稜線上に立地する古墳は、おおむね前期の築造時期と考えられる。中でも、17号墳は出土土器や主体部の形態から見てＢ支群中最も古く、Ｇ支群に近い時期のものと考える。従って、Ｇ支群で造墓を開始した集団が、次の墓域としてこの丘陵を選んだものと考えられる。また、４号墳のように中期に造墓を行っているものもある。京都府教育庁指導部文化財保護課の調査成果と併せれば、北側支尾根の造墓活動の中心は中期とみられる。



第68図　Ｃ支群調査後地形測量図(1/400)

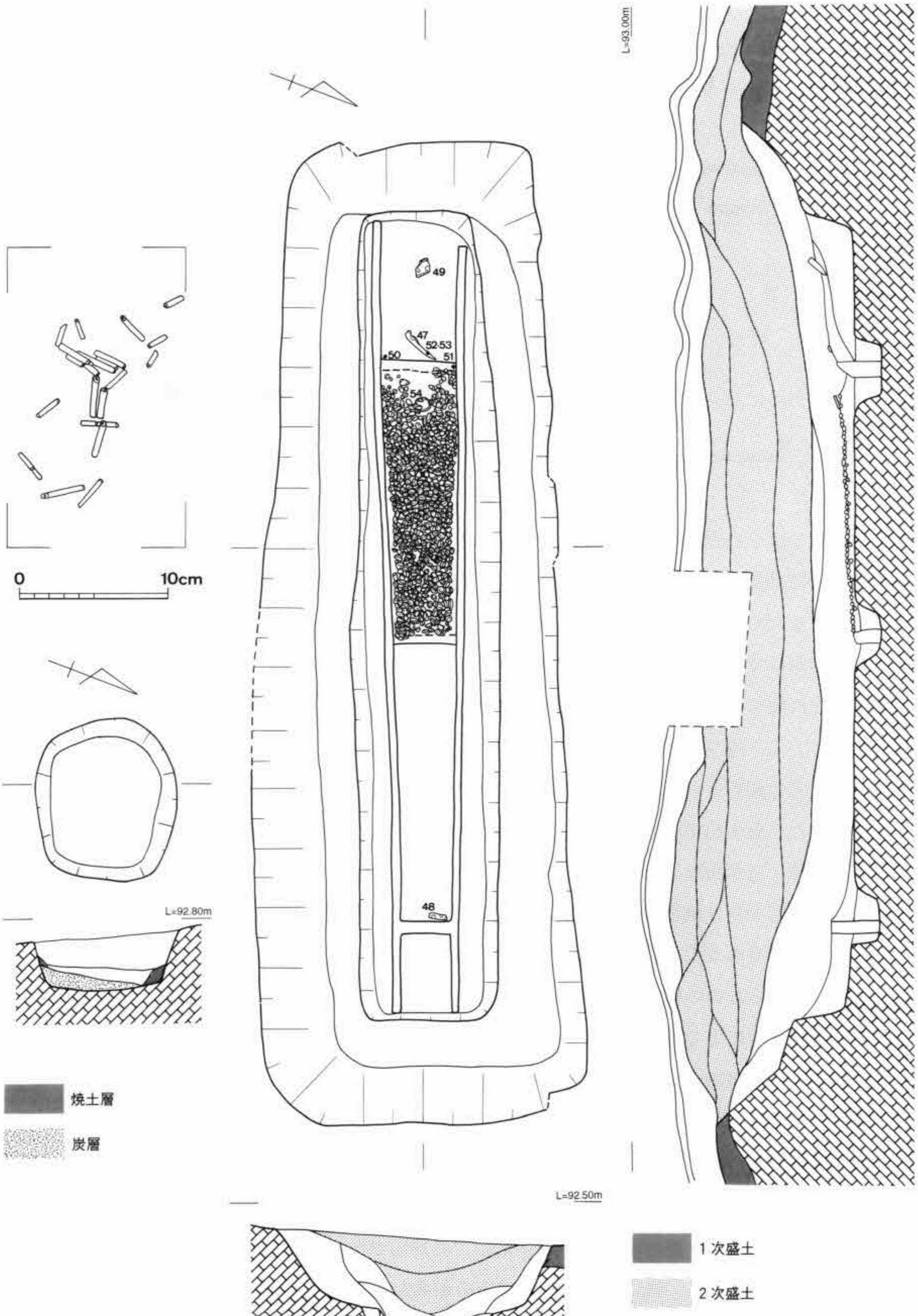
３．Ｃ支群の調査

当初、試掘調査として尾根稜線上にトレンチを設定した。その結果、３基の古墳を確認し、面的調査を実施した。

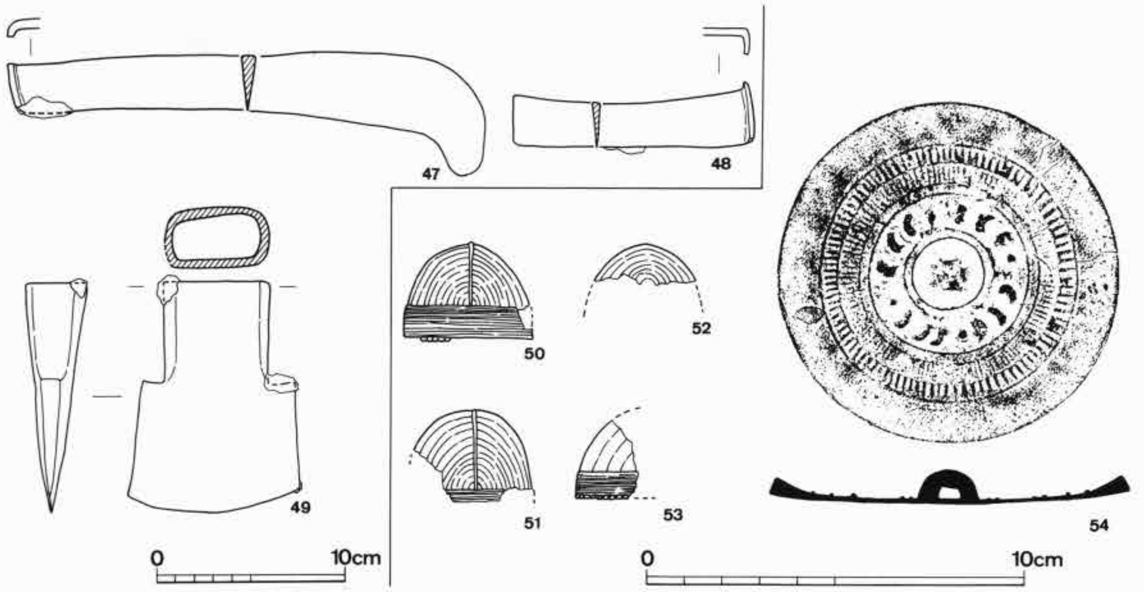
①Ｃ21号墳

墳丘　地山整形と盛土により形成された直径約20mを測る円墳である。主体部の掘り込み面から、主体部構築以前の盛土(第１次盛土)と、埋葬施設完成後の盛土(第２次盛土)の２回に分けて盛土を行っていることが明らかとなった。

主体部　墳頂部平坦面中央で東西に主軸をとる木棺直葬墓１基を検出した。ま



第69図　C21号墳主体部(右)および玉類出土状況(左上)、土坑実測図



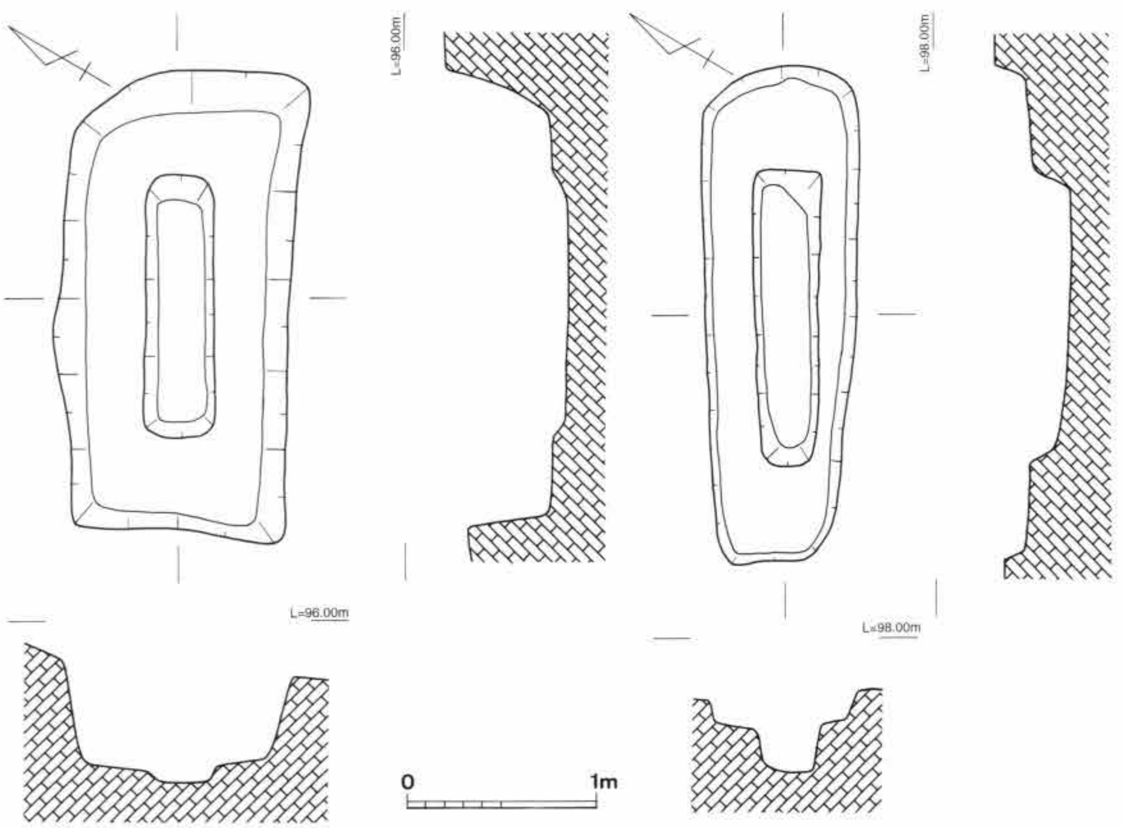
第70図　C21号墳出土遺物実測図

た、主体部ではないが、平坦面北東側で小型の方形土坑１基を検出した。主体部は、第１次盛土を切り込んで構築されている。墓壙の形状は二段墓壙を呈する。二段目墓壙底部には、棺の小口板を固定するための溝が３か所設けられている。木棺痕跡は、棺材の痕跡自体を認識することができた。木棺は中央部に仕切板を設け複室構造をとる箱形木棺である。各々西室・東室とする。

東室は小口板を据えるために裏込め土を充填し、置き土を棺内に施した後、２～５cmの円礫を敷き詰めている。厚さは厚いところでも２～３石程度である。東側小口部分の礫は密度が薄い。西室では東室で観察された小口板固定後の棺内置き土・礫などはなく、底板を施した痕跡も確認できなかった。東小口棺上からは、有肩袋状鉄斧１点・曲刃鎌１点・竪櫛４点が、西側小口棺上からは直刃鎌１点が検出された。棺内東室内からは東小口付近で鏡面を上にした仿製捩文鏡１面が置かれ、周辺からは微量ではあるが赤色顔料(水銀朱)が検出された。鏡には布が付着し、布にくるまれた状態であったと判断される。鏡の南西部からは緑色凝灰岩製管玉19点が出土した。玉類は連接しているものの被葬者に装着された状態ではないと判断される。その他、滑石製臼玉１点が排土選別作業により確認された。また、墳丘調査中に第２次盛土上面で土師器甕１点を検出した。このような遺物の出土状況から、東室内には東に頭位を向けて被葬者が埋葬されたと考える。西室の性格は、遺物や人骨などがなく不明である。

土坑　主体部北西側で確認された。地山面上で確認され、掘り込み面は明確ではない。古墳に伴うかは不明である。土坑は素掘りであり、底面に炭が認められた。壁面は被熱していない。

出土遺物　農工具・玉類・鏡・竪櫛が存在し、武器類がない点が特徴的である。鎌は曲刃鎌と直刃鎌の両者が存在する。鉄斧は朝鮮半島からの舶載品の可能性が指摘されている。竪櫛は棟幅3.5cm前後を測る大形品である。鏡は仿製捩文鏡である。銅質・鋳上がりとも良好である。面径9.6cm・鈕径1.5cmを測る。斜縁をもち、外区には鋸歯文帯・櫛歯文帯があり、二重の圏線で内区と区画する。内区には４つの乳(高さ3.5mm)があり、獣文から変化した捩文はにぶい「C」字形



第71図　C22号墳主体部(左)、C23号墳主体部(右)実測図(1/40)

を呈し、獣毛は1条の凸線により表現される。これらの遺物から築造時期は中期前半と考える。

②C22号墳

墳丘　地山整形により平坦面を造り出す構造である。盛土は認められなかった。

主体部　平坦面中央で埋葬施設を1基検出した。墓壙の形状は二段墓壙である。棺の痕跡は明確にできなかったが、墓壙の形状から箱形木棺である可能性が高い。遺物は無い。

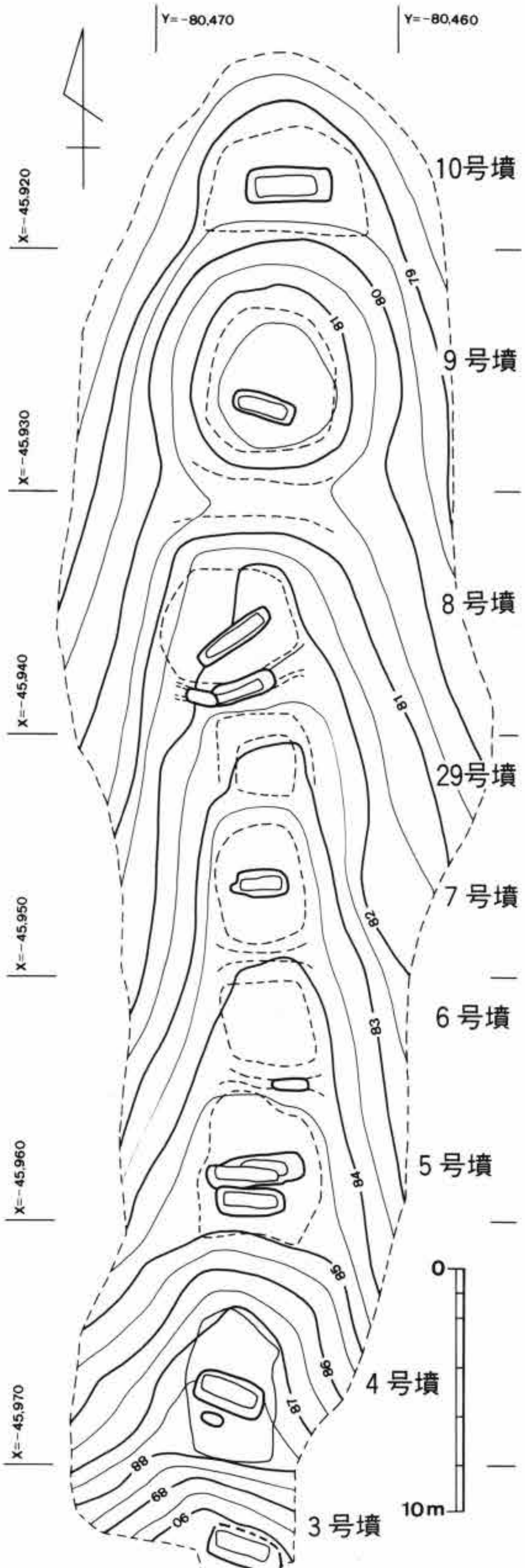
③C23号墳

墳丘　地山整形により平坦面を造り出す構造である。また、高位側には1条の溝が認められ、墳丘を区画している。盛土は認められなかった。

主体部　平坦面中央で埋葬施設を1基検出した。墓壙の形状は二段墓壙である。棺の痕跡は明確にできなかったが、墓壙の形状から箱形木棺である可能性が高い。遺物は無い。

小結　以上C支群で調査を実施した3基の古墳について概要を記した。C21号墳は左坂古墳群中でも中核的な古墳の1基と考える。築造順序は位置的な関係からみてC21号墳がもっとも新しいと判断する。22・23号墳はC支群最高所の中型古墳に付随する形で造成されていると思われる。一方、C支群北尾根上の古墳は中期後半を中心に築造され、C21号墳に後出する。中期前半から中葉にかけてはB支群北側斜面での造墓活動が継続されており、B支群の主尾根上の中規模古墳の後裔として造墓されるのが、C21号墳をはじめとするC支群主尾根上の中型墳と考える。

(石崎善久)



第72図　D支群地形図

4．D 支 群 の 調 査

D支群では、3～10号墳の8基と、調査中にさらに1基の古墳を検出したので、計9基の古墳を調査した。新たに検出した古墳については、これまで確認されているD支群の古墳番号に続けて、29号墳と仮称する。

①D3号墳

墳丘　今回調査したD支群の古墳では、最も高い地点に位置する。尾根の稜線部を削りだして台状墓状の平坦地を造成する。墳丘北側が崩落しているため、規模は不明確であるが、ほぼ2.5m×6mの方形状を呈する。

主体部　平坦面で1基の主体部を検出した。平面長方形の二段墓壙と考えられる。木棺直葬墓で、主軸方向はほぼ東西である。墓壙は、長さ約3mで、幅は北辺が崩壊しているために、不明である。棺掘形は、長さ約2.8m・幅約0.7mを測る。棺内にあたる部分から勾玉・管玉・小玉などが出土した。これらの玉類は、棺南東部と棺西半部中央の2か所に分布している。玉類の出土地点周辺には赤色顔料(酸化鉄)が残存しており、木棺に塗布されていたとみられる。

出土遺物　玉類のみである。いずれも主体部内に副葬されていた。55～74は、棺南東部から出土した。勾玉55は、瑪瑙製で、長さは、2.65cmである。管玉56・57は、碧玉製で暗緑色を呈する。管玉58～66は、軟質で表面は風化している。緑色凝灰岩製とみられ、細身のものがある。小玉67～74は、ガラス製で、紺色・水色である。75～83は棺西半部中央から出土した。管玉76～83は、灰緑色を呈し、あまり良質でない碧玉製とみられる。小玉75は、ガラス製で、淡い紺色を呈する。このほか、小玉の破片少量が出土している。

②D 4号墳

墳丘 尾根の稜線を削り出して台状墓状の平坦地を造成する。約6m×3.5mの長方形状を呈する。

主体部 平坦地ほぼ中央およびその南側で2基の主体部を検出した。1基は木棺直葬であり、主軸方向はほぼ東西である。もう1基は小規模な土壙である。

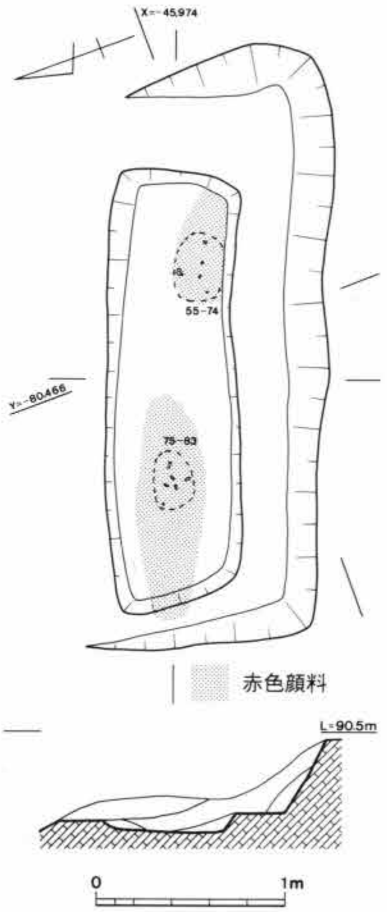
第1主体部 平面長方形状の二段墓壙である。墓壙は、長さ約3m・幅約1.6m、棺掘形は、長さ約2.2m・幅約0.7mである。掘形の形態から、箱形木棺であったものとみられる。墓壙北辺西側の埋土中から、墓壙壁上部に接して鉄鏃が出土した。棺内から副葬品は出土しなかった。

第2主体部 第1主体部の南側に位置し、長径約0.9m・短径約0.5mを測る楕円形土壙である。副葬品は無い。

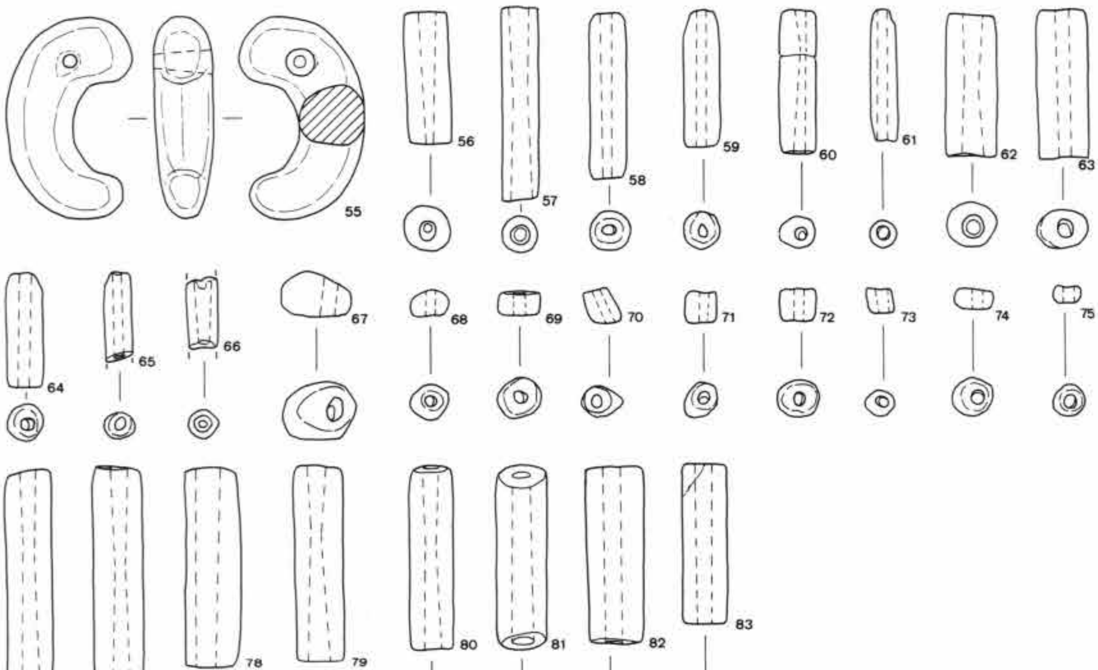
出土遺物 第1主体部から鉄製品が出土した。鉄鏃84は、腸抉のある短茎のもので、根挟みの木質が残る。鉄鏃86は、平根の長頸のもので、腸抉がある。85は鉄鏃の箆被部で、接合できないが、86の茎部とも考えられる。

③D 5号墳

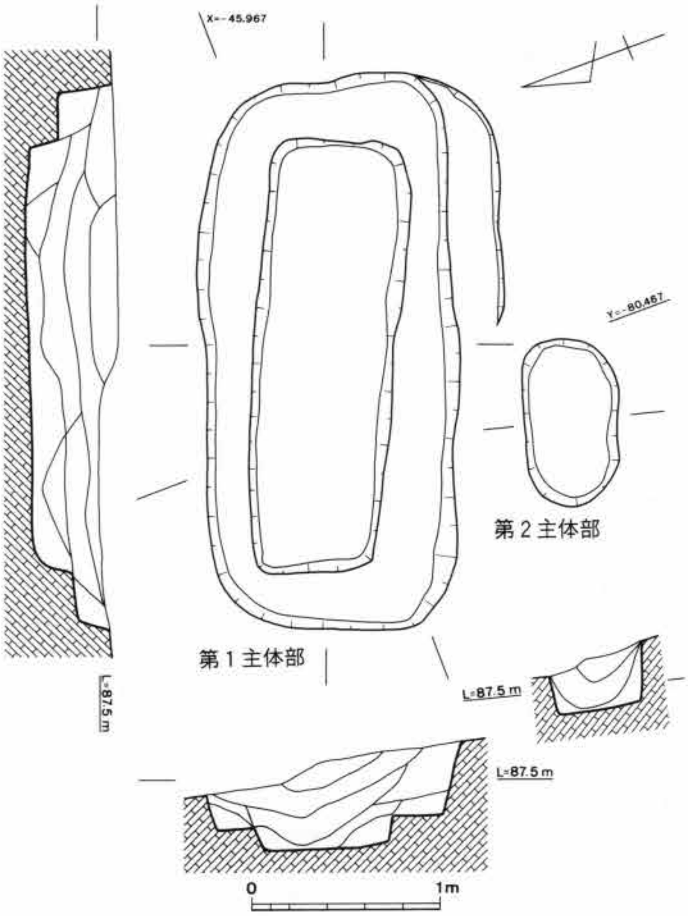
墳丘 尾根の地山を削り出して台状墓状の平坦地を造成す



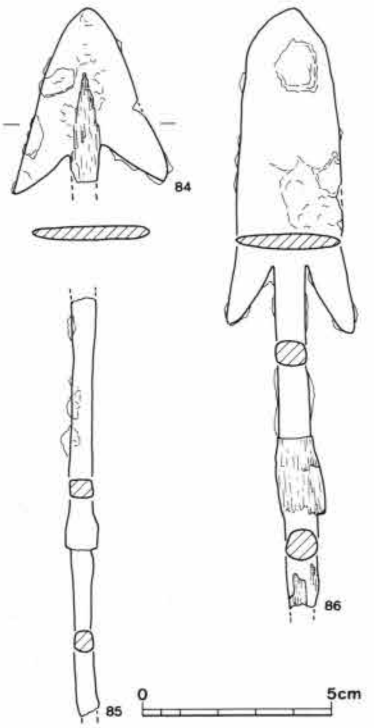
第73図 D3号墳主体部実測図



第74図 D3号墳出土遺物実測図



第75図　D4号墳主体部実測図



第76図　D4号墳出土遺物実測図

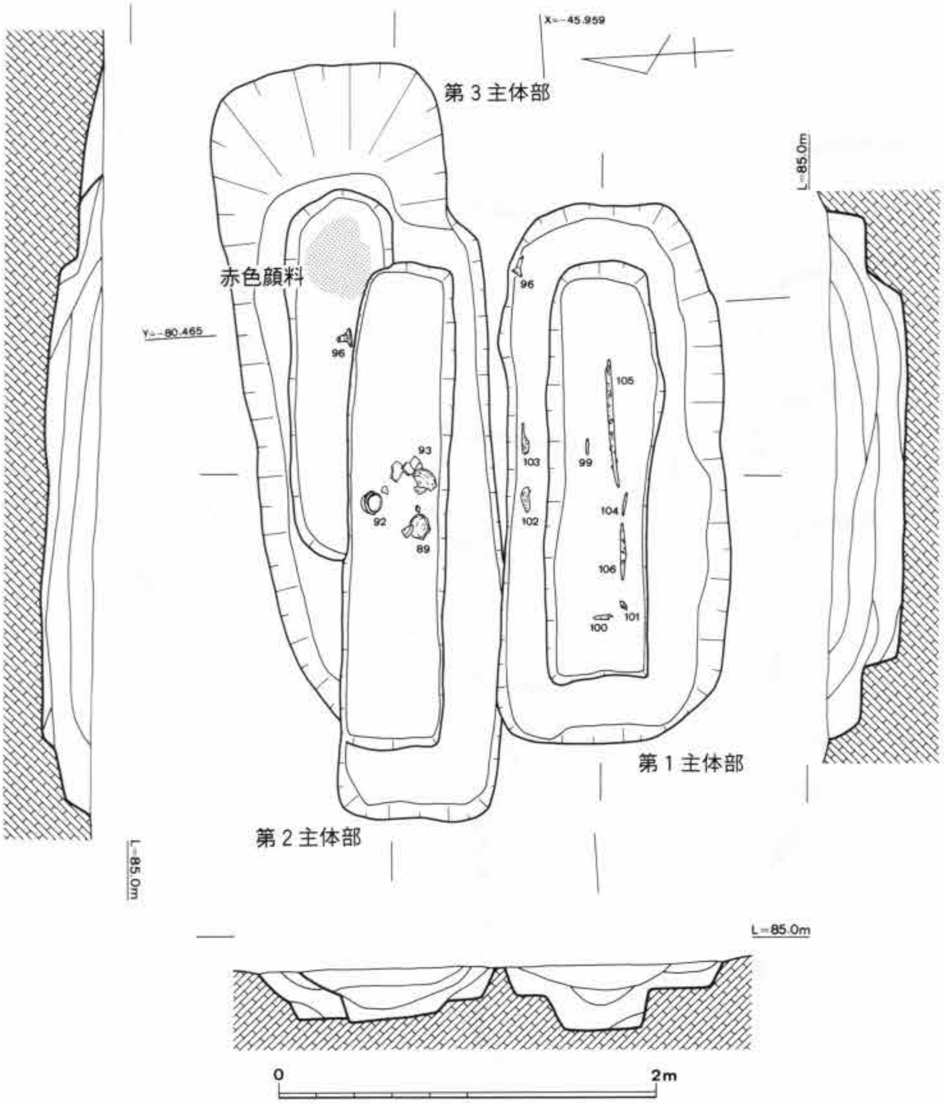
る。約6m×5mの長方形状を呈する。D4号墳とは浅い溝で区切られる。

主体部　平坦地中央および南半部で3基の主体部を検出した。これらの主体部は、木棺直葬墓であり、主軸方向はほぼ東西である。

第1主体部　平坦地の南半部に設けられる。平面隅丸長方形の二段墓壙である。墓壙の長さ約2.8m・幅約1m、棺掘形の長さ約2.1m・幅約0.5mを測る。掘形の形態から、箱形木棺と考えられる。棺底部南側から長短2振の鉄刀・鉄鏃が直線的に並んだ状態で出土した。切先は西を向く。このことから、埋葬された遺体の頭位は東であると考えられる。また、北側の一段目墓壙からも鉄鏃などが出土した。この主体部からは、鉄製品のみが出土した。

第2主体部　平坦面のほぼ中央に設けられる。平面長方形の二段墓壙であるが、棺掘形が北側に寄せて設けられており、段をなさない。墓壙南辺の一部を第1主体部に切られている。墓壙の長さ約3.3m・幅約0.8m、棺掘形は、長さ約2.6m・幅約0.5mを測る。掘形の形態から、箱形木棺と考えられる。この主体部の上部から、埋葬後に供献されたと考えられる須恵器蓋杯・高杯が出土した。なお、第1主体部埋土中から、この主体部上部出土の須恵器高杯と接合できる破片が出土しており、後に設けられた第1主体部が埋め戻された時に混入したものと考えられる。

第3主体部　第2主体部とほぼ重なる位置に設けられる。墓壙南側を第2主体部に切られている。二段墓壙である。墓壙の長さは不明確ながら約3.5m前後・幅約1.2m、棺掘形は約1.9m・



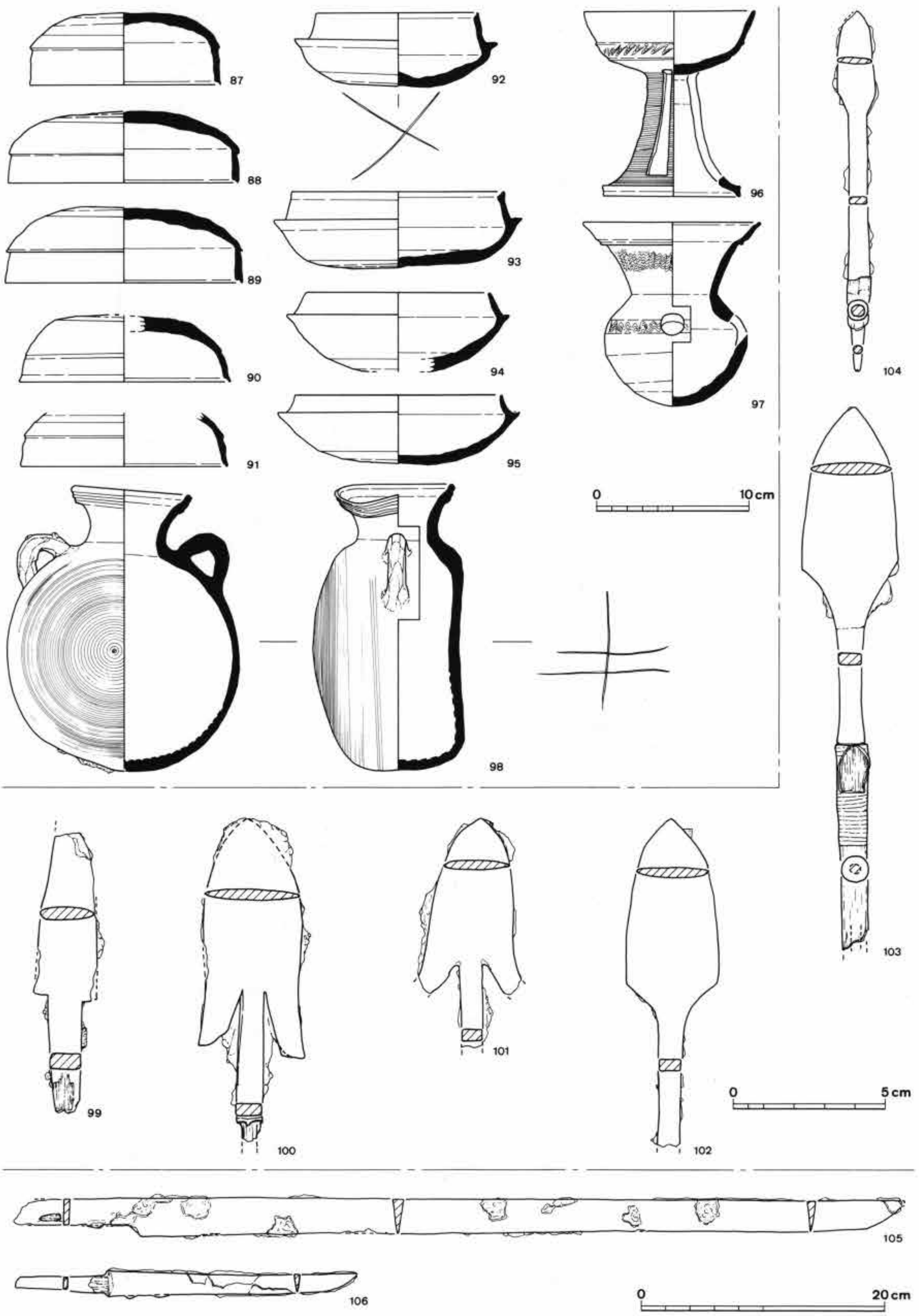
第77図　D5号墳主体部実測図

幅約0.6mを測る。部分的に赤色顔料が残存しており、棺に塗布されていたものと考えられる。副葬品は出土しなかった。

出土遺物　須恵器杯蓋87～89、杯身92・93、高杯96は、第2主体部上からの出土である。杯蓋は、口径約12cmのものと15cm前後のものがある。いずれも口縁端部に段を有する。杯身は、口径約10.6cmのものと約14cmのものがある。口縁端部に段を有する。高杯は、杯部外面に波状文を施す。脚部はカキ目調整で、長方形のスカシが3方にある。

D4・5号墳間の溝から、須恵器杯蓋90・91、杯身94・95、提瓶98が出土した。杯蓋は、口縁部が開き気味に下り、稜は形骸化する。杯身は、口縁部の立ち上がりが低くなり、端部は丸く終わる。提瓶は、背面に「キ」字形のヘラ記号がある。これらの須恵器が、どの古墳に属するものかは不明であるが、第2主体部上で出土したものに比べると、やや新しい傾向がみられる。須恵器䑓(97)は、D5・6号墳間の溝から出土した。頸部から口縁部の立ち上がりがやや高くなる。

鉄製品は、第1主体部出土である。99は、刀子である。鉄鏃100・101は、大形の鏃で、腸抉をもつ。鉄鏃102・103は、大形の長頸鏃である。鉄鏃104は、小形の柳葉形長頸鏃である。鉄刀105



第78図　D５号墳出土遺物実測図

は、全長73.1cmである。鉄刀106は、全長28.1cmである。

④D６号墳

墳丘　尾根を溝で断ち切り、地山を削りだして約3.5m四方のいびつな方形の台状墓状平坦地を造成する。主体部は、検出できなかった。流失したためか、当初から設けられなかったのかは、不明である。なお、D５号墳との間の溝の中から、埋葬主体部１基を検出した。この主体部によってD５号墳北辺の一部が削りとられており、この主体部はD６号墳に伴うものと考えられる。

D５・６号墳間溝中主体部　溝の東半部に設けられる。木棺直葬墓で、主軸はほぼ東西方向である。平面長楕円形状の二段墓壙である。墓壙の長さ約1.7m・幅約0.8m、棺掘形の長さ約1.1m・幅約0.5mを測る。副葬品は出土しなかった。底部に赤色顔料が残存しており、棺に塗布されていたものと考えられる。

⑤D７号墳

墳丘　尾根を溝で断ち切り、地山を削りだして約５m×3.6mの隅丸長方形の台状墓状の平坦地を造成する。

主体部　平坦地のほぼ中央に１基の主体部を設ける。木棺直葬墓で、主軸方向はほぼ東西である。平面がいびつな隅丸長方形の二段墓壙である。墓壙の長さ約2.3m・幅約1.1m、棺掘形の長さ約1.7m・幅約0.5mである掘形の形態から箱形木棺と考えられる。副葬品は無い。

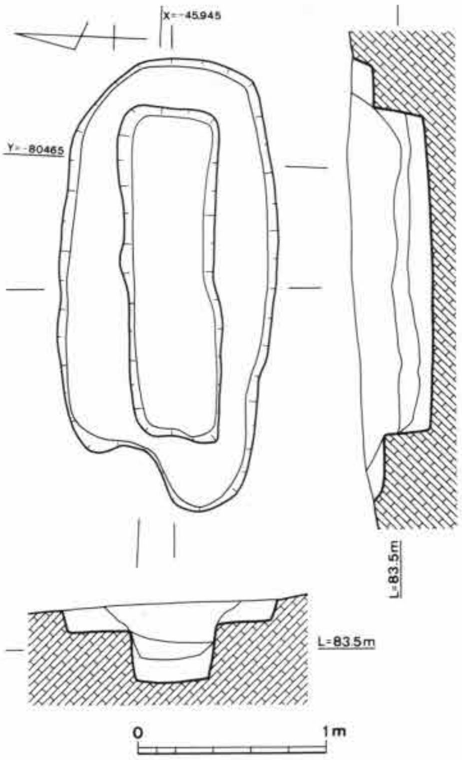
⑥D29号墳

墳丘　D７号墳の北側で、地山を約2.5m×約2.3mの方形に造成した小平坦地を検出した。その形状から、古墳であると考えられる。主体部は、検出できなかった。これが、流失によるものか、当初から設けられなかったのかは、不明である。出土遺物も無い。

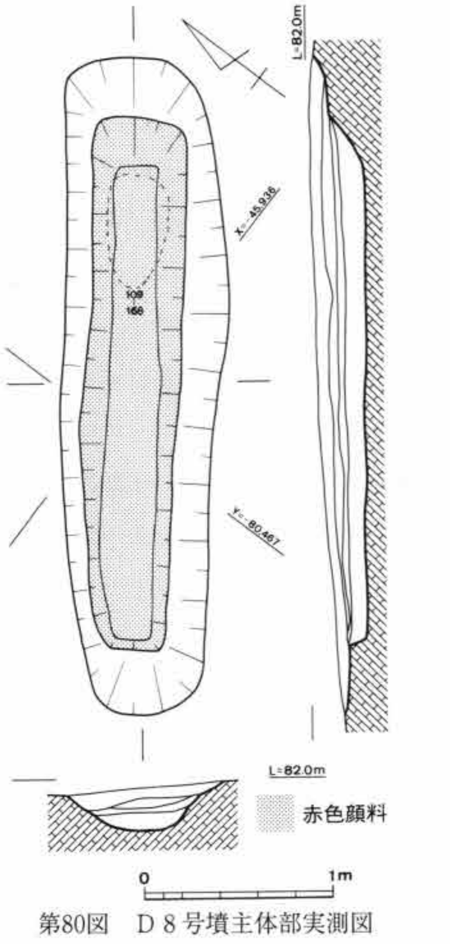
⑦D８号墳

墳丘　尾根を溝で断ち切り、径約５～６mの不整円形状平坦地を造成する。なお、墳丘南側を巡る溝の中から主体部２基を検出した。

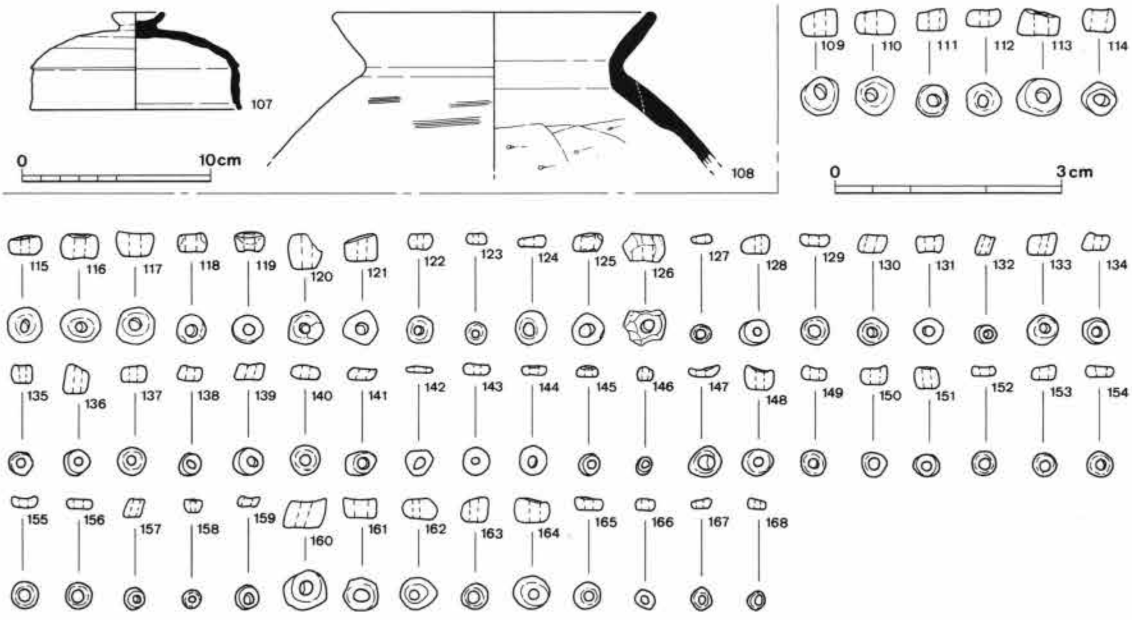
主体部　平坦地の南寄りに１基の主体部を設ける。木棺直葬墓で、主軸方向は北東から南西方向である。二段



第79図　D７号墳主体部実測図



第80図　D８号墳主体部実測図



第81図　Ｄ８号墳出土遺物実測図

墓壙で、墓壙の長さ約3.5m・幅約0.8m、棺掘形の長さ約2.8m・幅約0.5mを測る。棺掘形の底部は丸みをもっており、刳抜式木棺(舟形木棺)であった可能性がある。赤色顔料が残存しており、棺に塗布されていたものと考えられる。棺内の東側から小玉が多数出土した。

南側溝中主体部　溝中央と西側に２基の主体部を設ける。中央のものは、西側のものに切られており、墓壙の長さは不明である。幅は約0.8mである。南側墓壙壁は、D29号墳の斜面を抉り込んでおり、オーバーハングしている。中央に赤色顔料が残存しており、棺に塗布されていたものとみられる。西側のものは、墓壙の長さ約1.4m・幅約0.6mである。ともに副葬品は無い。

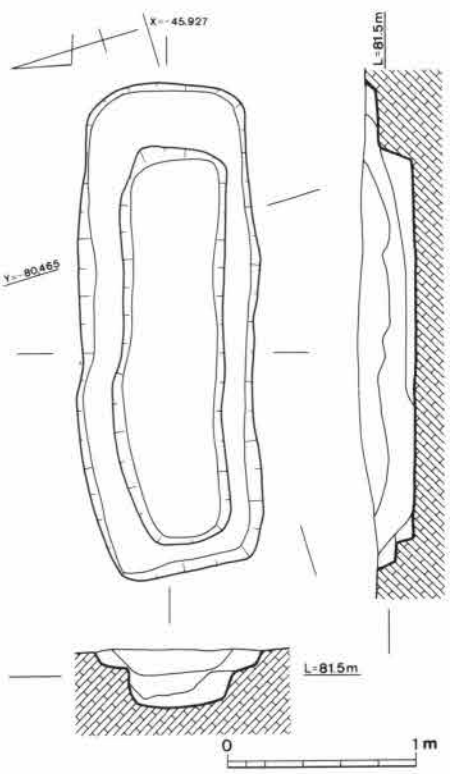
出土遺物　小玉109～168は、主体部出土のものである。109～166は、紺色・水色・黄緑色などの色調を呈し、ガラス製である。167・168は、赤褐色の色調を呈し、石製とみられる。ほかに、小玉の破片が少量出土している。須恵器蓋107は、墳丘西側表土直下から出土した。つまみが付き、口縁端部に段を有する。土師器甕108も墳丘西側斜面出土である。厚手で胎土も粗い。ともに、墳頂部の供献土器が転落したものかと考えられる。

⑧Ｄ９号墳

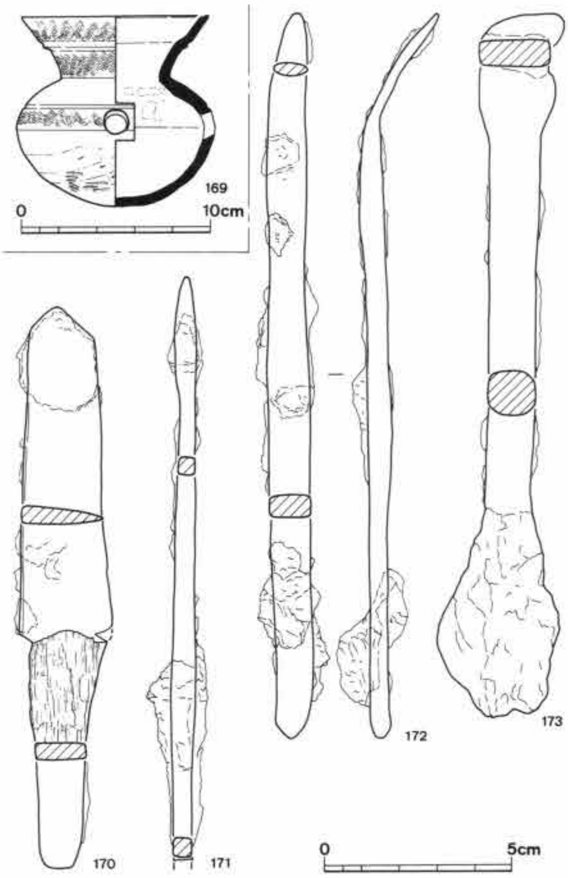
墳丘　今回調査したＤ支群の古墳の中では最大のもので、直径約10mの円墳である。Ｄ８号墳との間の溝は、幅約4.5m・深さ約１mで、断面逆台形状を呈する。墳丘下部は地山の削りだしであるが、上部には旧表土上に盛土した状況がみとめられる。この古墳からは１基の主体部を検出したが、位置的にやや南側に寄っており、規模も小さい。表土掘削時に、墳頂部中央東側から須恵器䍃・鉄製品が出土した。この点から、中央にさらに１基の主体部があった可能性がある。

主体部　墳頂部南側に１基の主体部を設ける。木棺直葬墓で、主軸方向はほぼ東西である。平面長方形の二段墓壙である。墓壙の長さ約2.6m・幅約0.9m、棺掘形の長さ約2.1m・幅約0.5mを測る。掘形の形状から、箱形木棺と考えられる。副葬品は無い。

出土遺物　墳頂部中央東側の表土直下から須恵器と鉄製品が出土した。須恵器䍃169は、口縁



第82図　D９号墳主体部実測図



第83図　D９号墳出土遺物実測図

部・頸部・胴部に波状文を巡らし、底部にはタタキの痕跡が残る。鉄製刀子170は、切先を欠く。鉄鏃171は、柳葉形の長頸鏃とみられる。鉇172は、全長15.1cmである。173は、不明鉄製品である。なお、墳丘西側斜面の表土直下からＤ８号墳と同様の土師器甕体部片が出土した。

⑨D10号墳

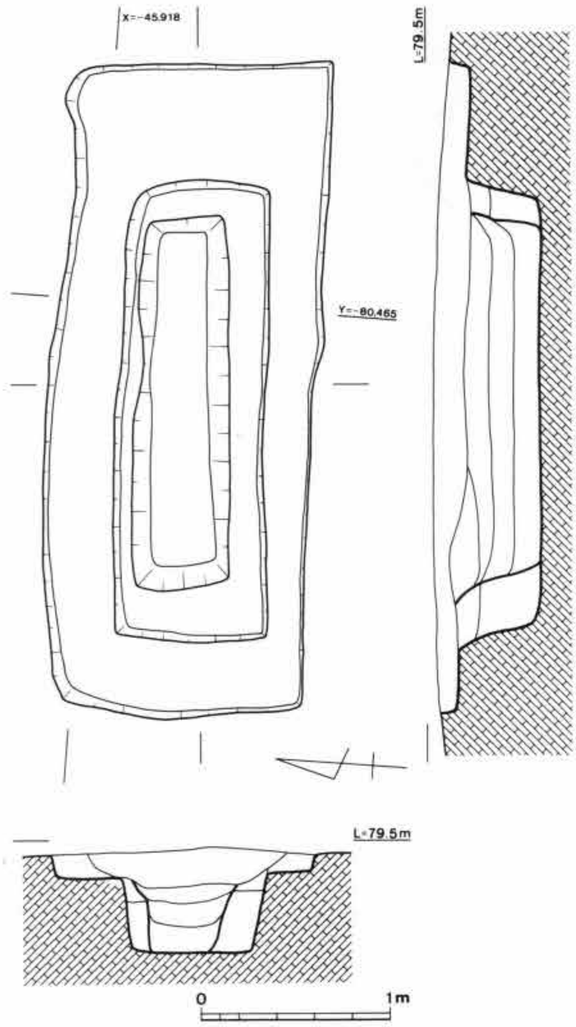
墳丘　９号墳の北裾に地山を削りだして約４ｍ×約6.7ｍの半円形状の平坦地を造成する。

主体部　平坦地中央に１基の主体部を設ける。木棺直葬で、主軸方向はほぼ東西である。棺は、箱形木棺である。墓壙の長さ約3.5ｍ・幅約1.4ｍ、棺掘形の長さ約2.4ｍ・幅約0.8ｍ、棺の長さ約２ｍ・幅約0.5ｍを測る。副葬品は無い。

⑩小結　今回の調査で、築造時期を示す遺物が出土した古墳は少ない。中でも、Ｄ８・９号墳から出土した須恵器は、陶邑古窯址群の編年でＴＫ47型式併行期のものとみられ、それらの古墳の築造が５世紀末頃であることをうかがわせる。Ｄ５号墳とその周辺出土の須恵器は、ＭＴ15型式もしくはＴＫ10型式併行期のものとみられる。おおよそ６世紀前半の築造を示す。また、95のようなＴＫ43型式併行期と考えられるものもある。５世紀末から６世紀前半期は、左坂地区の丘陵地における古墳築造の最盛期であり、Ｄ支群もその頃に形成されたと言えよう。

５．Ｅ 支 群 の 調 査

Ｅ支群では、５～８号墳の４基の古墳を調査した。この支群は、南東から北西に向かってのび



第84図　D10号墳主体部実測図

る尾根上に築造されている。

①E5号墳

墳丘　今回調査したE支群の古墳の中では、最も高い場所に位置する。尾根の稜線を削り出して、約3m×4mの台状墓状平坦地を造成する。

主体部　平坦地南東寄りに2基の主体部を設ける。木棺直葬墓であり、主軸方向は北東から南西で、尾根稜線に直交する。

第1主体部　墓壙の長さ約2.6m・幅約0.8m、棺掘形の長さ約2.1m・幅約0.5mを測る。二段墓壙である。底部には赤色顔料が残存しており、棺に塗布されていたものとみられる。副葬品は無い。

第2主体部　第1主体部南東辺を切っている。墓壙の長さ約2.5m・幅約0.5mである。副葬品は無い。

出土遺物　主体部からの出土遺物は無いが、表土掘削中に南東側斜面から須恵器壺174が出土した。小形のもので、胴部に波状文を巡らす。墳頂部に供献されていたものと考えられる。

第85図　E5号噴出土遺物実測図

②E6号墳

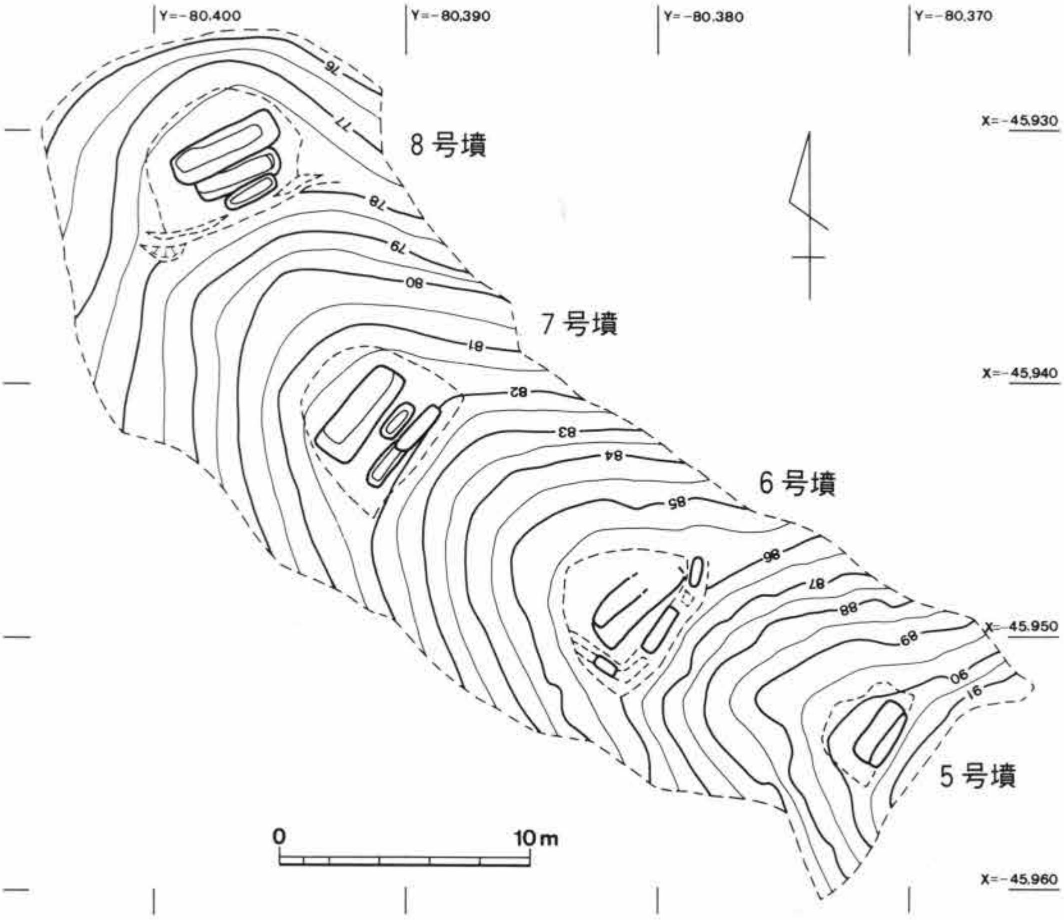
墳丘　尾根の稜線を削りだして、約4m×5mの台状墓状平坦地を造成して主体部を設ける。墳丘北西側には盛土が認められる。主体部は1基で、木棺直葬墓であるが、木の根等のため明確に検出できず、規模等は不明である。副葬品も出土しなかった。なお、E5号墳寄りの溝の中に3基の長方形の小主体部を設ける。これらも副葬品は無い。

③E7号墳

墳丘　尾根の稜線を削りだして、約5.5m×約6mの台状墓状の平坦地を造成する。墳丘北西側には盛土が認められる。

主体部　平坦地の中央から南東部にかけて4基の主体部を設ける。いずれも木棺直葬墓で、主軸方向は北東から南西である。

第1主体部　墓壙の長さ約4.1m・幅約1.5m、棺掘形の長さ約3.6m・幅約1mを測る。平面長方形の二段墓壙であるが、木棺の掘形が北西に寄せて設けられているため、南東・南西側のみ



第86図　E支群地形図

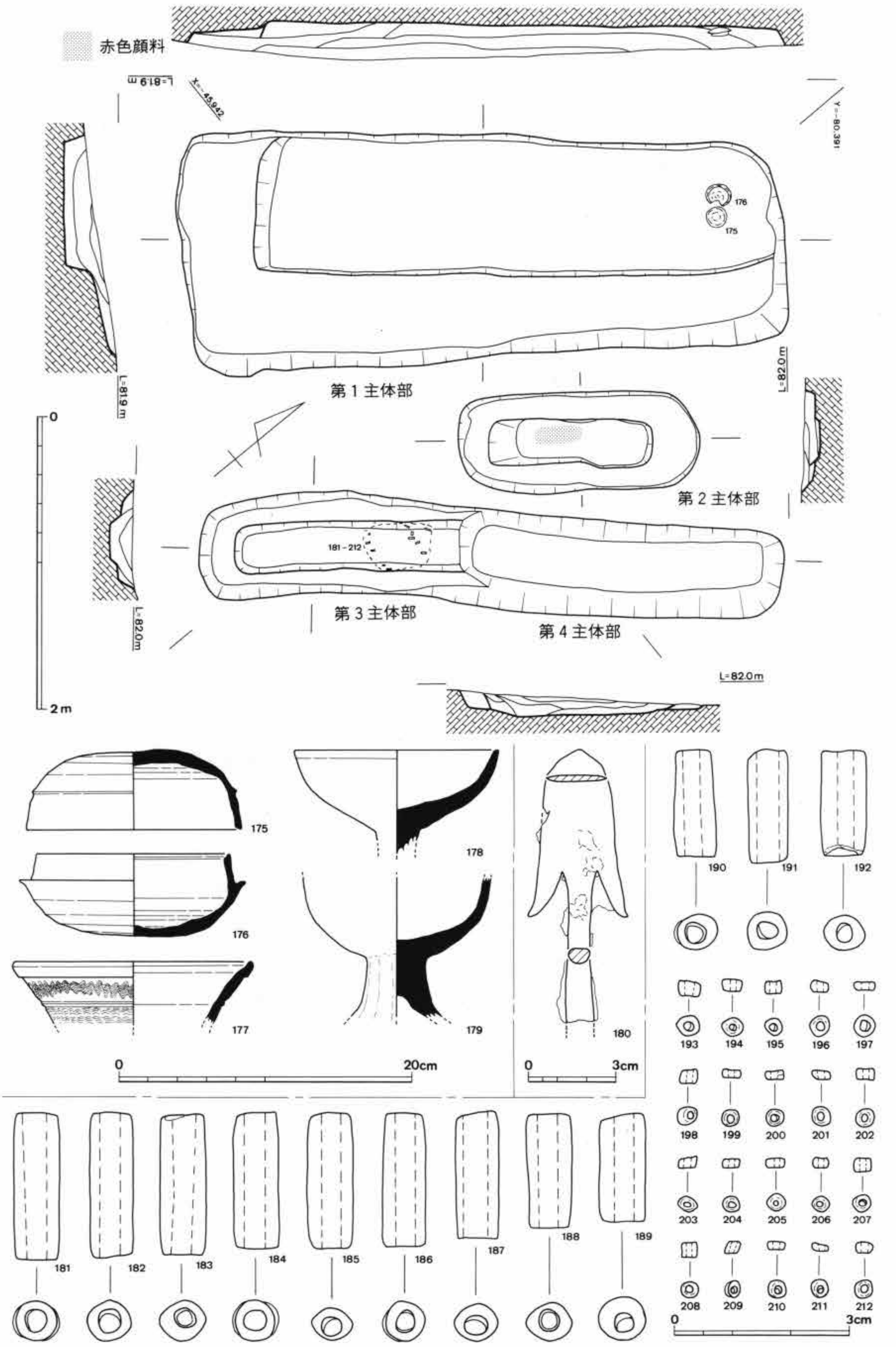
段をなす。木棺の掘形の形状から、箱形木棺と考えられる。棺の北東側小口に当たる部分から、須恵器蓋杯が出土した。

第2主体部　墓壙の長さ約1.6m・幅約0.7m、棺掘形の長さ約1.1m・幅約0.3mを測る。平面が長楕円形の二段墓壙である。底部には赤色顔料が残存しており、棺に塗布されていたものと考えられる。木棺の掘形の形状から、刳抜式木棺(舟形木棺)の可能性がある。副葬品はない。

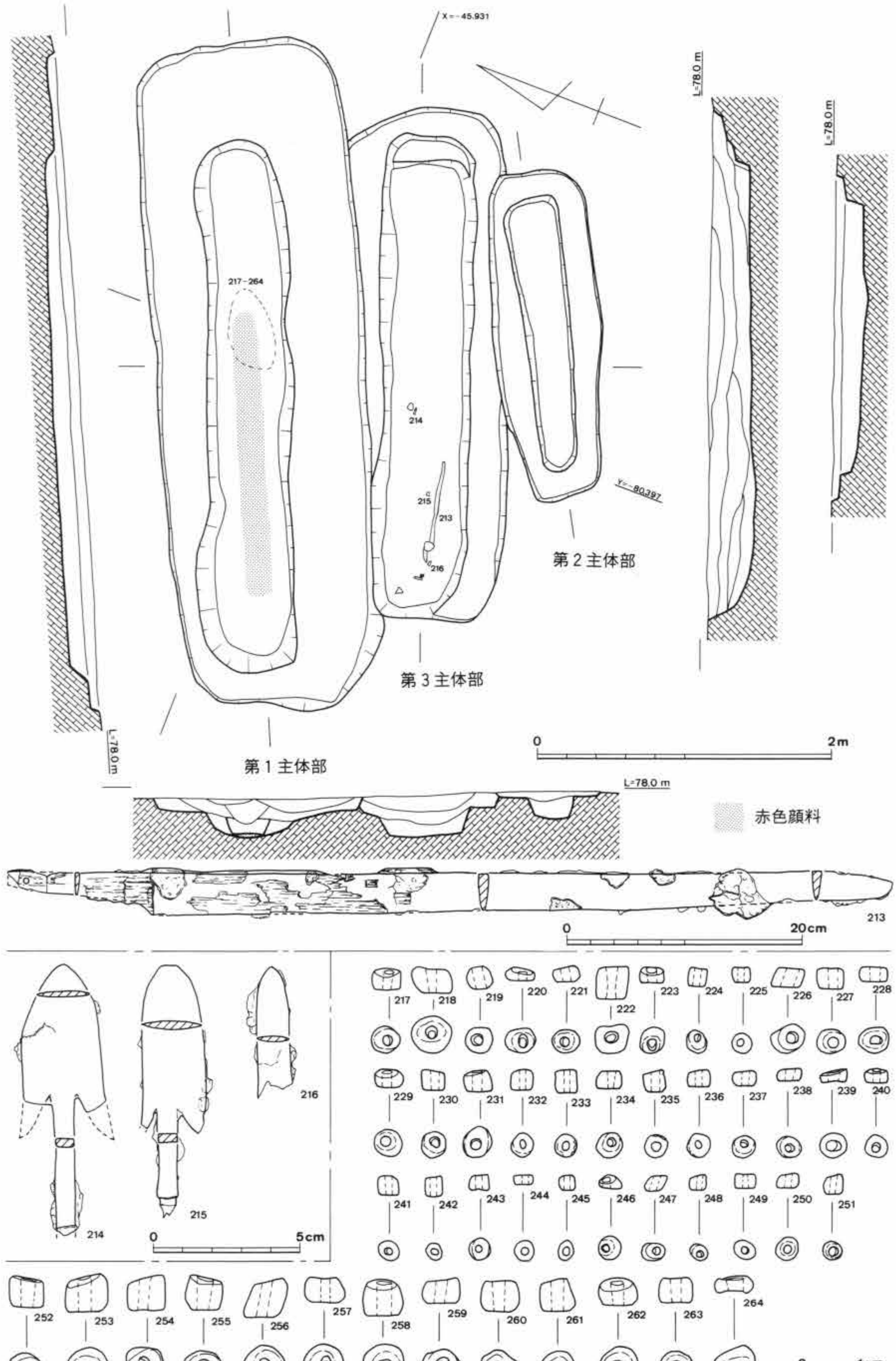
第3主体部　墓壙は北東端部を第4主体部に切られているため、長さは不明である。幅は約0.7m、棺掘形の幅は約0.3mである。二段墓壙である。棺内北東部に当たる部分から管玉・小玉が出土した。

第4主体部　墓壙の長さ約2.2m・幅約0.6mを測る。副葬品は無い。

出土遺物　須恵器杯蓋175・杯身176は、第1主体部出土である。175は天井部が丸みをもち、口縁端部に段を有する。稜は鋭くない。176は、口縁端部に段を有する。須恵器177は、甕もしくは壺の口縁部とみられる。波状文を施す。墳丘堆積土から出土した。土師器高杯178・179は、丸い杯部をもち、赤褐色の顔料が塗布される。おなじく、墳丘堆積土出土である。鉄鏃180は、第1主体部埋土から出土した。大形の鏃で、腸抉を有する。管玉181～192・小玉193～212は、第3主体部から出土した。181～192は、あまり質の良くない碧玉製で、淡緑色を呈する。193～212は、ガラス製で、紺色・水色・緑色を呈する。小玉は図示したもの以外に17点出土している。



第87図　E 7 号墳主体部・出土遺物実測図



第88図　E 8 号墳主体部・出土遺物実測図

④E８号墳

墳丘　尾根の稜線を削り出して、約4.5m×6.5mの台状墓状平坦地を造成する。墳丘北西側には盛土がみとめられる。

主体部　平坦地北西側中央寄りから南東部にかけて３基の主体部を設ける。木棺直葬で、主軸方向は北東から南西である。

第１主体部　墓壙の長さ約4.4m・幅約1.4m・棺掘形の長さ約3.3m・幅約0.5mを測る。隅丸長方形状の二段墓壙である。底部には赤色顔料が残存しており、棺に塗布されていたものと考えられる。棺掘形は丸みを帯びており、刳抜式木棺(舟形木棺)の可能性がある。棺内中央やや北東寄りから小玉が出土した。

第２主体部　墓壙の長さ約2.2m・幅約0.8m・棺掘形の長さ約1.8m・幅約0.4mを測る。長方形状の二段墓壙である。棺掘形の形状から、箱形木棺と考えられる。副葬品はない。

第３主体部　墓壙の北西辺は第１主体部に、南東辺は第２主体部に切られている。墓壙の長さ約3.4m・幅は不明、木棺掘形の長さ約3.1m・幅約0.6mである。平面隅丸長方形の二段墓壙であるが、木棺掘形は南西に寄せて設けられており、段をなさない。木棺掘形の形状から、箱形木棺と考えられる。棺内南西側から鉄刀・鉄鏃などの鉄製品が出土した。鉄刀の切先は、南西である。このことから、埋葬された遺体の頭位は北東と考えられる。

出土遺物　第１主体部から、ガラス製小玉217～264が出土した。径３～7.5mmまで、様々なものがある。色調は、紺色・水色・青緑色である。第３主体部から、鉄製品が出土した。鉄刀213は、全長75.4cmで鞘や柄の木質が部分的に残存している。茎の端部近くに目釘孔がある。鉄鏃214・215は、平根の長茎鏃で、腸抉をもつ。鉄鏃216は、細身の長茎鏃とみられる。

⑤小結　この支群では、Ｅ７号墳から出土した蓋杯以外に築造年代を考える資料が無い。その蓋杯は、陶邑古窯址編年のＭＴ15型式もしくはＴＫ10型式併行期のものと考えられ、６世紀前半の築造をうかがわせる。

(引原茂治)

(2)シミズ谷古墳群

1．調　査　概　要(第89図、図版第48)

シミズ谷古墳群は、竹野川の東岸から奥へ約500m入り込んだ標高106mの丘陵尾根上に位置し、高所に造営された数少ない古墳群の一つである。調査地は、1号墳の東側裾部の北斜面にあたり、古墳に関連する遺構・遺物の検出につとめた。掘削作業は表土、包含層、断ち割りなど、深さ50cmまではすべて人力で行った。現地の記録は、平板測量・写真撮影で行った。調査の結果、遺構は検出されなかったが、わずかに土器片が出土した。なお、調査と並行してシミズ谷1・2号墳の墳丘測量(平板測量)・写真撮影を行った。その成果を第90図、図版第48に示した。

調査地の基本的な堆積土は、(1)表土層(腐植土)、(2)黄褐色土層、(3)淡赤褐色土層(地山)である。(2)は粘土質に若干の砂質が混じり、雑木の根跡付近では細かい炭化物があった。トレンチ東隅のこの層からは、古墳時代中期と判断される土師器の破片が出土した。(3)は粘土層・白色シルト層・砂層・礫層の互層であり、遺物が全くない洪積層である。調査の結果、遺構は検出されなかったが、前述の出土土器は、この古墳群の築造時期を推定する資料になるものと考える。

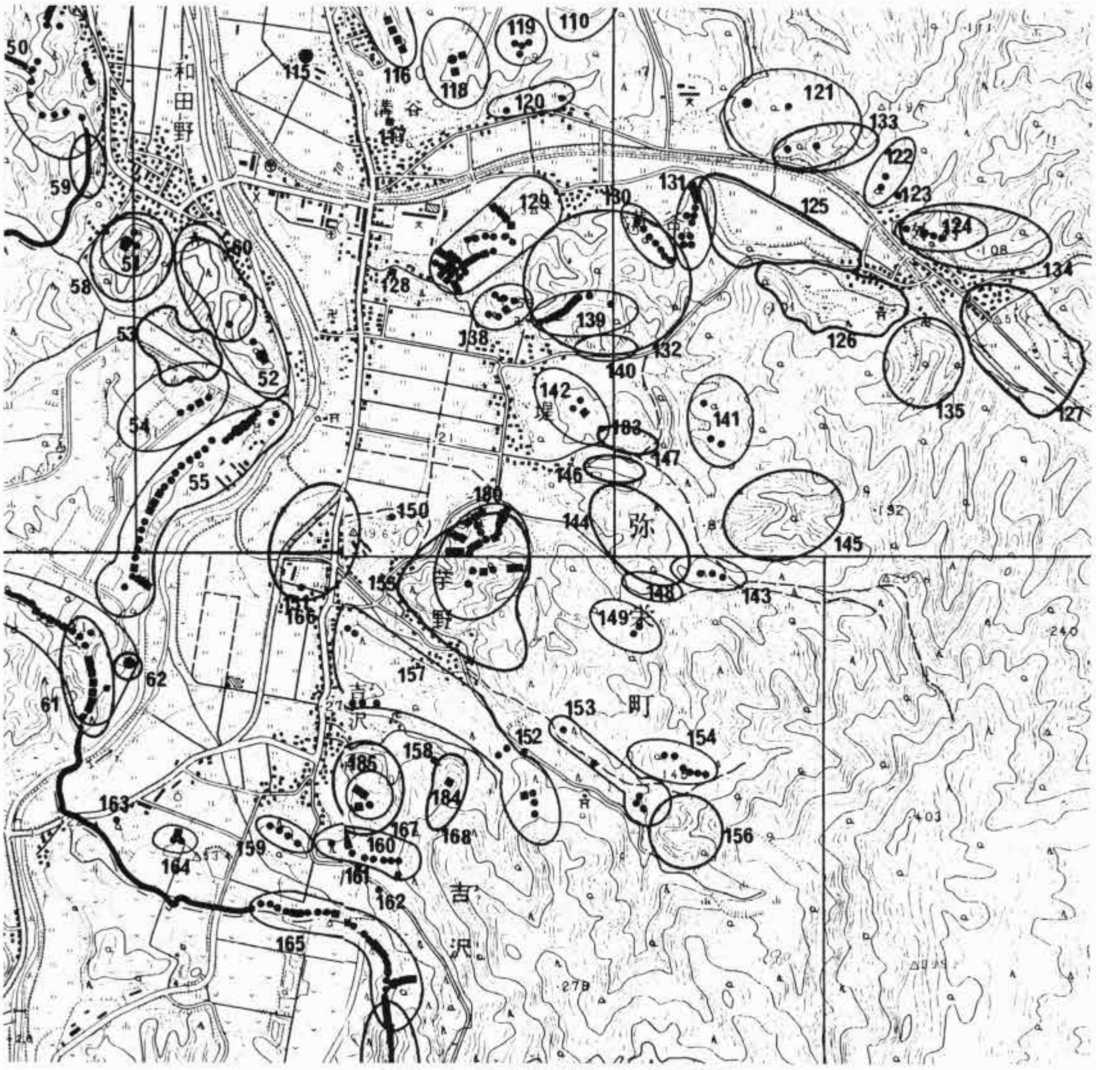
シミズ谷古墳群の平板測量・表面観察の成果について、簡単に記述したい。

この古墳群は、『弥栄町遺跡地図』によると、1～3号墳の円墳3基からなり、丘陵先端の稜線上に位置する。現況は松・ヒノキ・竹などが墳丘およびその周辺に鬱蒼としている。1・2号墳の高まりは明瞭に観察できるが、3号墳は区画のための溝があり、植林されたと思われる平坦地になっている。1号墳は直径約13m・墳丘高約1.3mを測る。墳丘は2号墳側の裾部、斜面の等高線が、道によって攪乱されている。墳頂部は道、雑木の根による凹凸が見られる。2号墳は直径17.5m・墳丘高1.8mを測り、腰高の感がある。墳丘の形状は1号墳側および南側の裾部、斜面は墳丘の崩落による緩斜面が認められる。北側斜面は裾部から急崖、108mコンターあたりは密で直線的である。これは土取りの跡と思われる。墳頂部は広い平坦面を持つが、中央東側で2mほどの不整形な凹みが見られ、土壙状を呈する。

2．ま　と　め

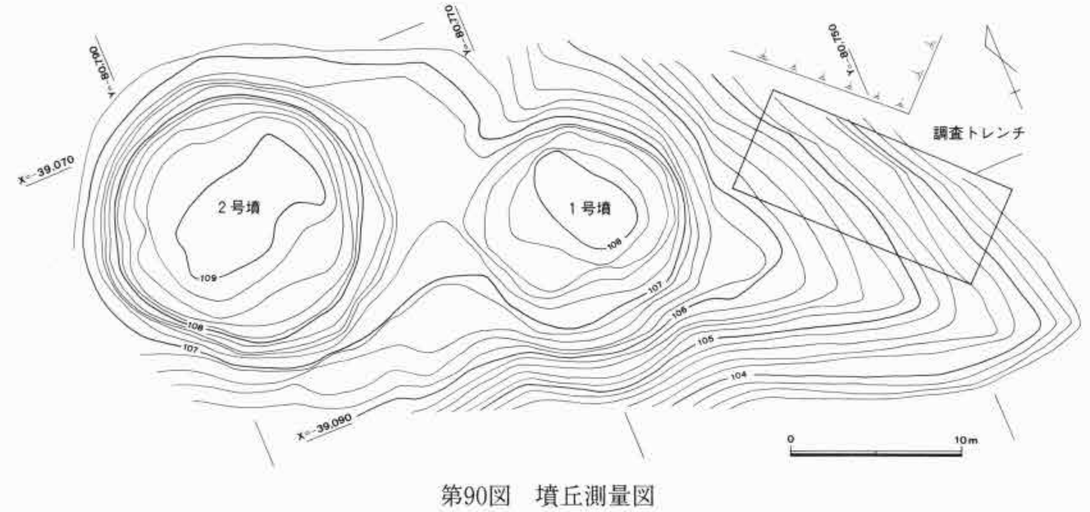
今回の調査の結果、1号墳の裾部を決定づけるものは何も出土しなかった。しかし、布留式土器が出土したことは、この古墳群にとって大きな意味を持つと考える。墳丘測量の成果は、1・2号墳に関しては前記『弥栄町遺跡地図』のとおりであったが、3号墳については後世の削平(開墾・植林)により若干の高まりを残すだけである。シミズ谷1・2号墳は、古墳時代中期の盛土墳であり、石材の露出も顕著ではないことから、木棺直葬墳である可能性がある。

(竹井治雄)



第89図　調査地位置図(1/25,000)

143.シミズ谷古墳群(調査地)　144.堤城(篭屋城)跡　148.城ノ越横穴　146.シミズ谷城
145.勝負谷城　147.小屋ヶ谷城　142.愛宕神社古墳群　141.勝負谷古墳群



第90図　墳丘測量図

(3)墓ノ谷古墳群

1. 調　査　概　要(第91図、図版第49・50)

墓ノ谷古墳群は、丹後半島中央部を南北に貫流する竹野川の西側丘陵上に所在する。この古墳群は、『弥栄町遺跡地図』では、11基の円墳、古墳状隆起からなる。今回の調査は、標高67~72mの尾根上に位置する6~8号墳を対象に、墳丘規模・主体部の有無を確認するため実施した。調査は7・8・6号墳の順に幅3mのトレンチを入れ、平面、断面の精査につとめた。調査の結果、古墳に関連する遺構は検出されなかったが、7号墳調査区の表土から土器が1点出土した。

6号墳(第92図)　頂部は標高67.5mを測り、楕円形を呈し、南・北側は急斜面である。詳細にみると、頂部は2か所の高まりが認められ、墳丘ではないかと思われた。調査地の堆積土は、表土以下40cmまで茶褐色粘砂質土であり、シルト・炭化物・腐植土などを含む風化したバイラン土である。下層は白色シルトを主とする地山である。この地山には幅10~15cmの赤色シルトの帯が南北方向に走り、地震による断層が認められた。調査の結果、古墳に伴う盛り土・遺構は無かった。

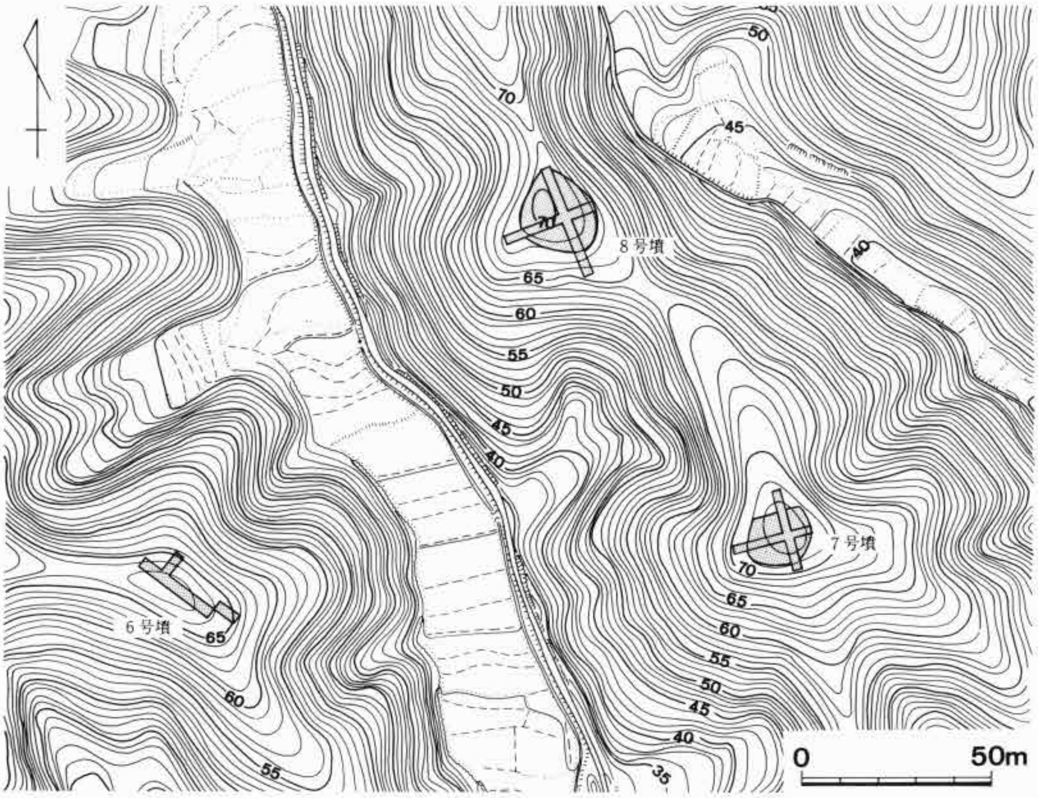
7号墳(第93図)　頂部は標高72.2mを測り、東西にやや長い長方形を呈している。東・南斜面は山道・土取・植林等により等高線が大きく乱れている。一方北・西側斜面は急傾斜で等高線も直線的である。大いに古墳の可能性があるものと期待された。堆積土は、頂部では表土下約60cmまで茶褐色粘質土であり、開墾・植林などの痕跡が多く、斜面では特に南側において崩落・掘削による撹乱が著しい。遺物は地表面で須恵器の破片1点を採集した。調査の結果、古墳に伴う遺構は認められなかった。

8号墳(第94図)　頂部は標高70mを測り、長楕円形を呈している。南側斜面は土取・植林等により等高線が大きく乱れる。北半部の両側斜面では等高線が乱れず、西側斜面はゆるやかである。堆積土は、表土下25~30cmまでは、淡茶灰色砂質土である。斜面では崩落土・木痕が堆積する。地山は風化した花崗岩からなり、6号墳でも見られた幅5~10cm・深さ2m以上の緑灰色砂質土の帯が、東北から南東方向に走り、断層が認められた。調査の結果、古墳に関連するものは何も検出されなかった。

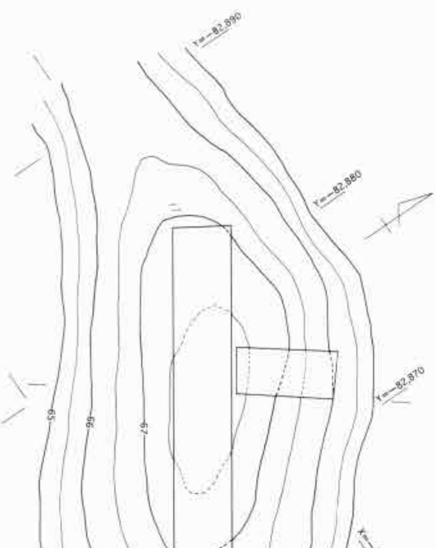
2. ま　と　め

今回の調査の結果、6・7・8号墳はすべて古墳状隆起であったが、7号墳は古墳であった可能性が高い。主体部が検出されなかった理由が、後世の影響によるものか、一概に結論付けることは難しい。

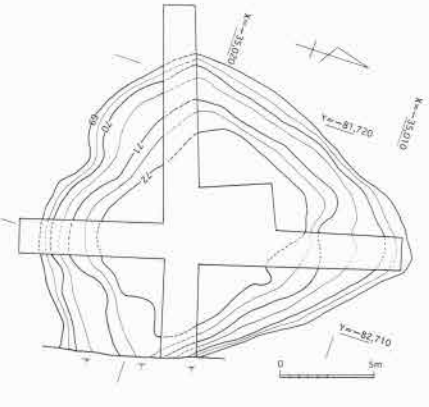
(竹井治雄)



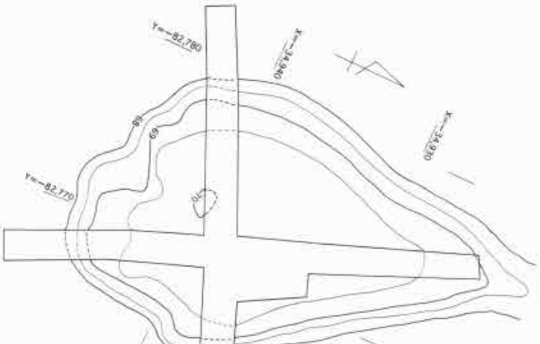
第91図　調査地位置図



第92図　6号墳地形測量図



第93図　7号墳地形測量図

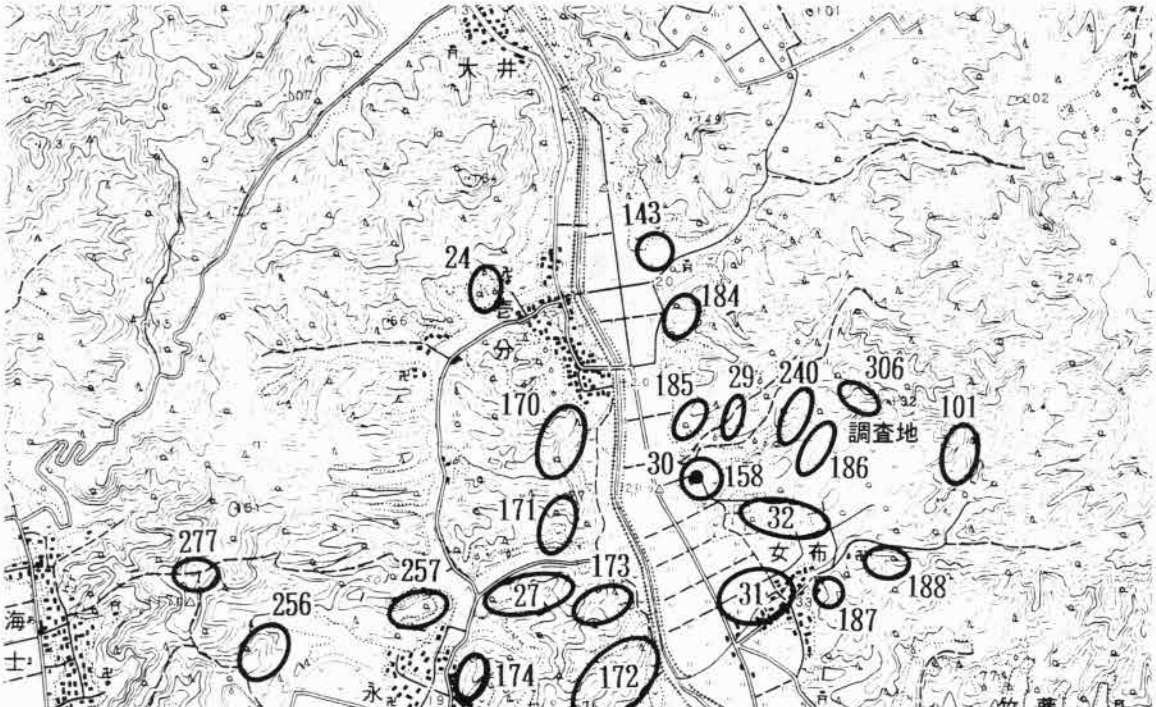


第94図　8号墳地形測量図

(4)南 谷 古 墳 群

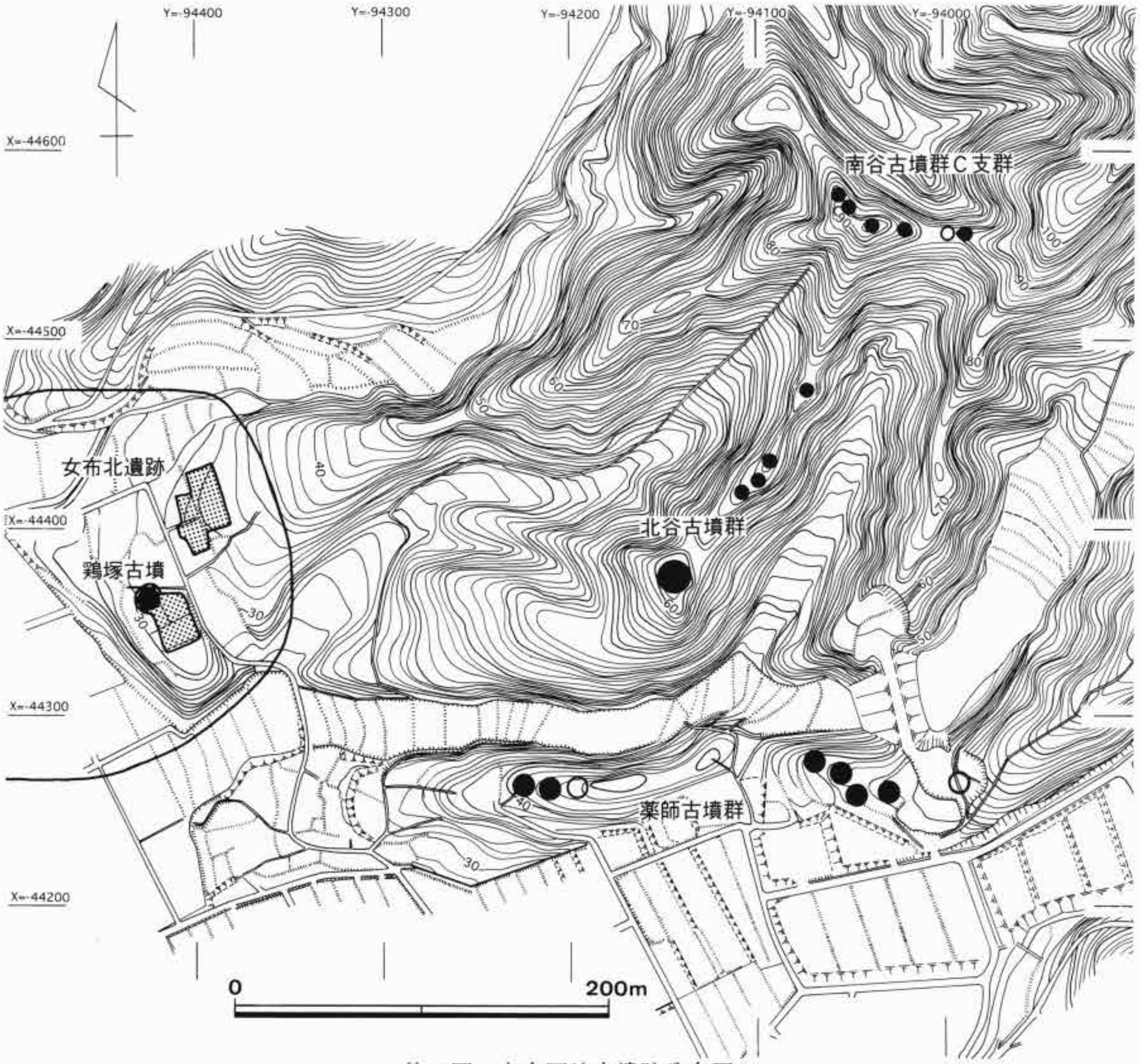
1. 立 地

南谷古墳群C支群は、京都府熊野郡久美浜町壱分および女布の地境に所在する。この遺跡は、『京都府遺跡地図』には、北谷古墳群の一部として登録されているが、近年の京都府教育委員会・久美浜町教育委員会および当調査研究センターの調査成果から、南谷古墳群C支群と遺跡名を変更している。町内には、北流して久美浜湾に注ぐ3河川、西から久美谷川・川上谷川・佐濃



第95図　調査地および周辺遺跡分布図(1/25,000)

26.橋爪遺跡　306.南谷古墳群C支群　186.北谷古墳群　30.鶏塚古墳　32.薬師古墳群
31.女布遺跡　158.女布北遺跡　143.椎ノ坪遺跡　184.南谷古墳群A支群
185.南谷古墳群B支群　101.女布城跡　187.女布神社遺跡　188.大堀池古墳群　34.竹藤遺跡
191.卯谷古墳群　170.大谷古墳群　27.谷垣古墳群　171.谷垣古墳群B支群
173.サトA古墳群　284.堤谷窯跡　172.サトB古墳群　174.マンダラB古墳群
28.マンダラA古墳群　284.マンダラ遺跡　256.永留城跡　287.畑山城跡　277.愛宕山城跡
175.堤谷A古墳群

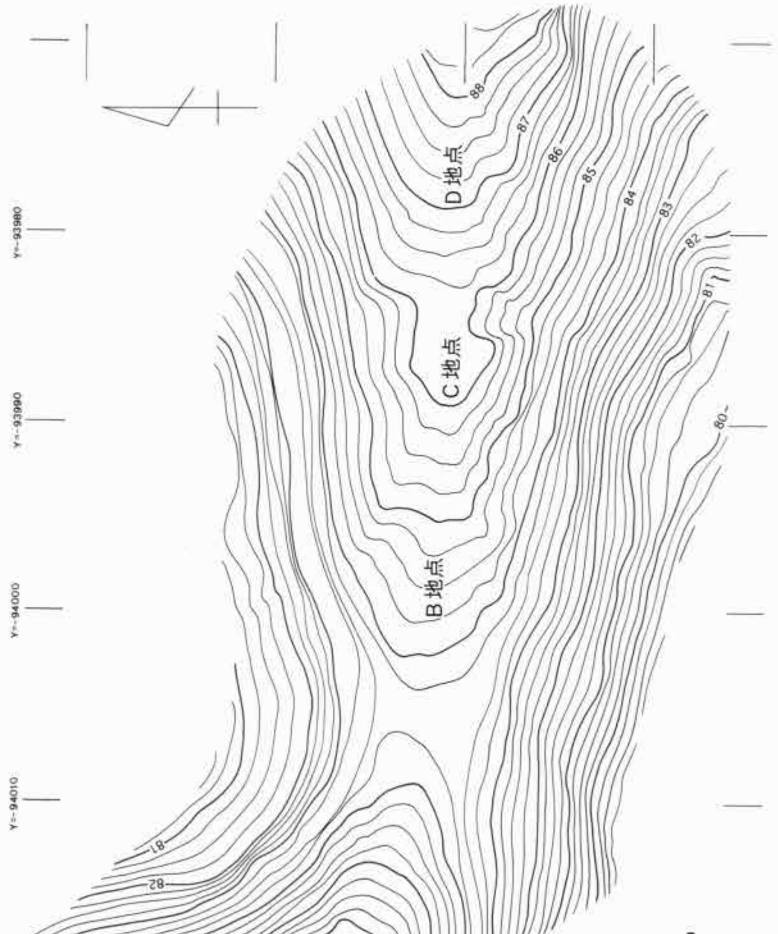


第96図　女布団地内遺跡分布図

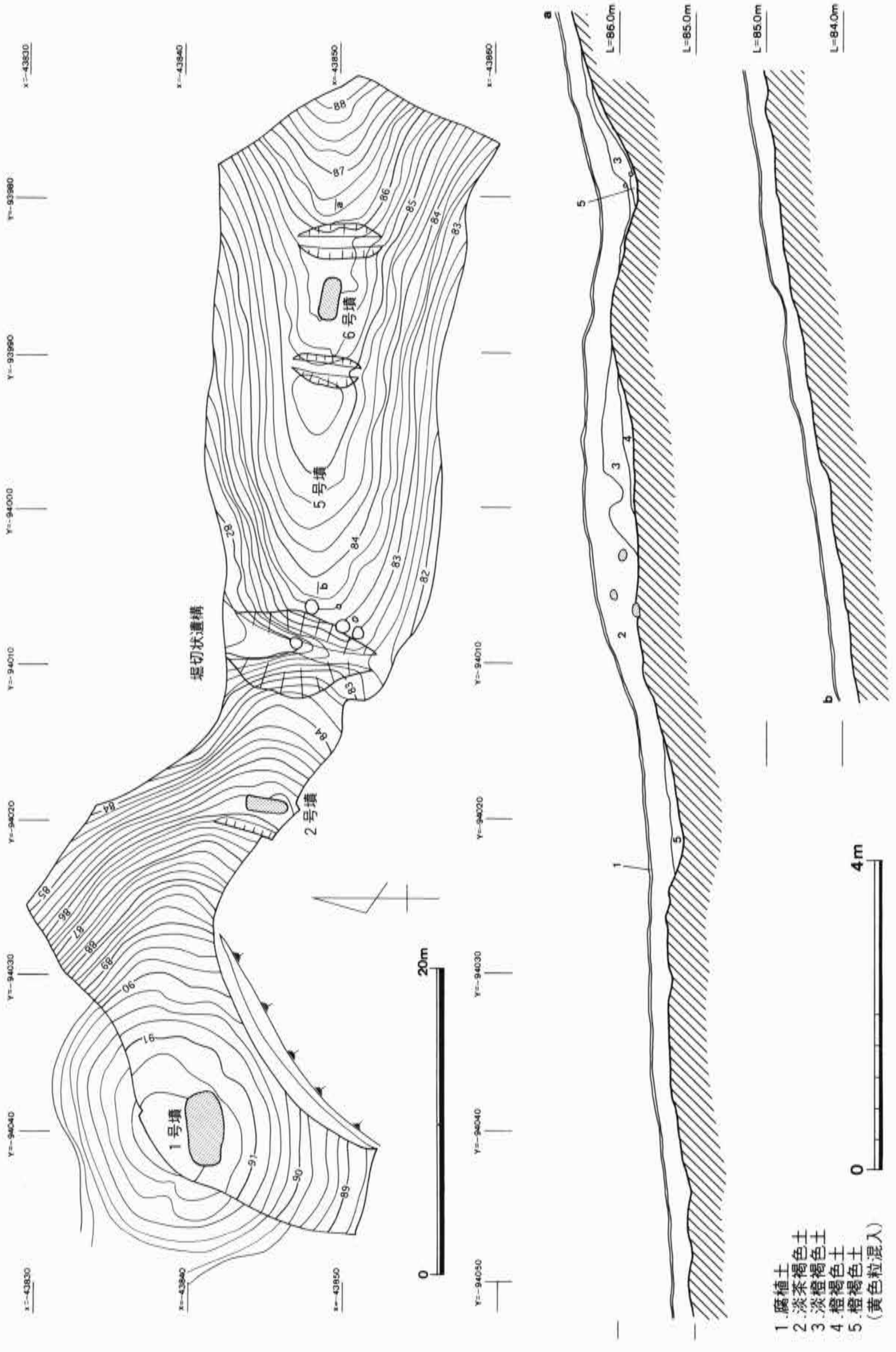
谷川が狭長な沖積平野を形成している。このうち、沖積平野の比較的発達した川上谷川・佐濃谷川流域に多くの遺跡が分布する。縄文時代の遺跡には、日本海沿いの函石浜遺跡、久美浜湾を見下ろす段丘上の浦明遺跡、佐濃谷川中流域の女布北遺跡(注2)などがある。女布北遺跡では、堆積層から縄文時代早期の押型文土器片が出土した。これは、久美浜町内で知られる最古の土器である。

弥生時代の遺跡には、貨泉出土地として有名な函石浜遺跡、川上谷川流域の弥生時代中期から古墳時代中期の大量の土器や木器が出土した橋爪遺跡、浦明遺跡、佐濃谷川中流域の椎ノ坪遺跡、弥生時代中期にかけての土器が出土した女布北遺跡(注3)、女布遺跡などがある。

古墳時代の丹後地域では、網野町網野銚子山古墳・丹後町神明山古墳などの前期から中期の日本海沿岸域でも最大級の大型前方後円墳が築造される。久美浜町でも、同時期の前方後円墳が川上谷川流域に岩ケ鼻古墳などの50m前後の古墳が数基築かれるが、佐濃谷川流域では、前方後円墳は確認されていない。佐濃谷川中流域は、川上谷川中流域と並んで古墳群が多い地域であり、右岸には南谷古墳群、塚ケ谷古墳群・鶏塚古墳・北谷古墳群・薬師古墳群が、左岸には大谷古墳群・谷垣古墳群・サト古墳群・マンダラ古墳群・堤谷古墳群などがある。また、久美浜町域は、古墳時代後期の横穴式石室墳が多い地点としても知られている。特に、著名なものは、双龍環頭



第97図　調査前地形図



第98図　調査地平面図および土層断面図

大刀の副葬で話題をまいた湯舟坂２号墳で、川上谷川を支配領域とした古墳時代後期後半期の首長墓と考えられる。

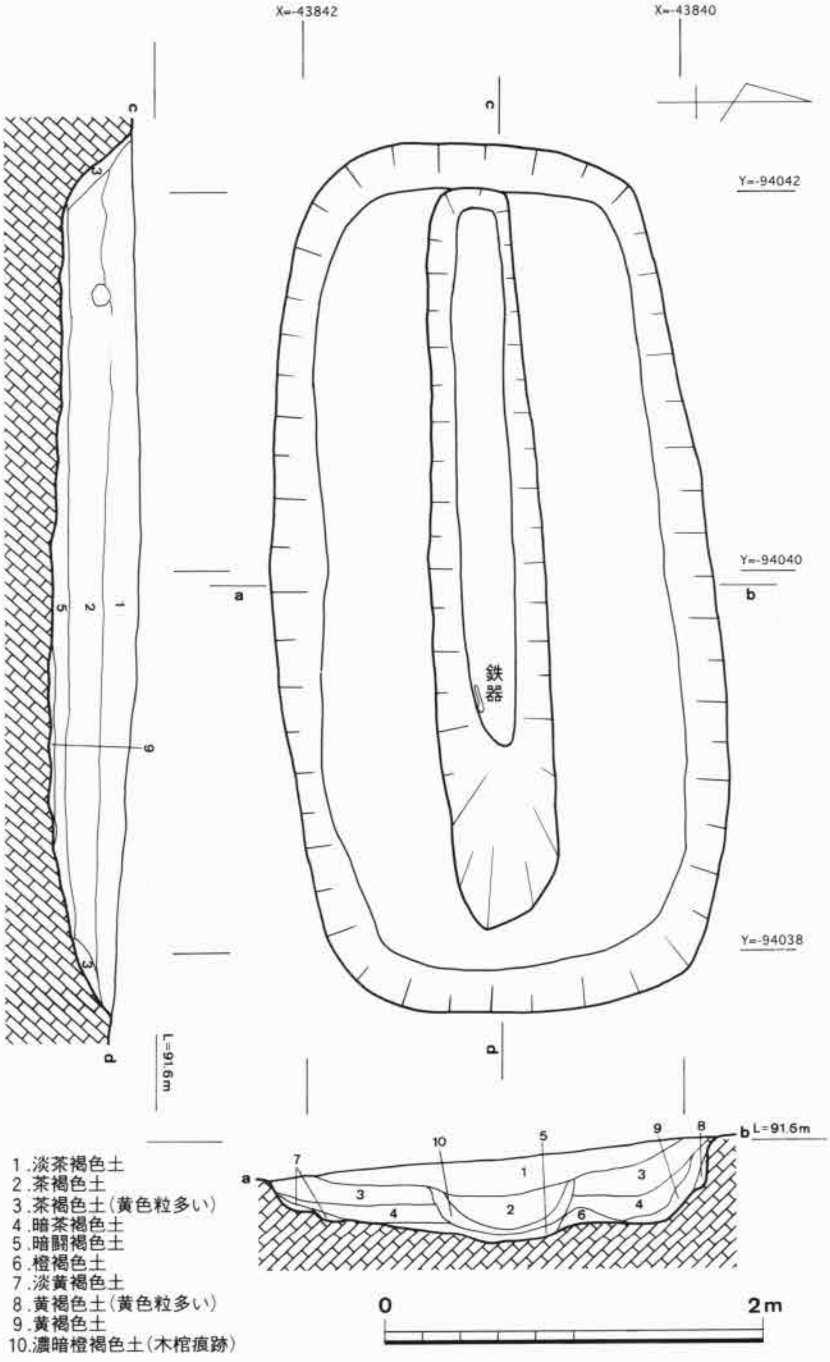
また、久美浜町内の集落遺跡では、橋爪遺跡・浦明遺跡など、多くの弥生時代～古墳時代にかけての集落が知られている。本調査地の周辺では、女布北遺跡[注4]で、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけての竪穴式住居跡が知られている。

堤谷古墳群の西方には堤谷窯跡群があり、古墳時代後期末～奈良時代前半にかけて須恵器・瓦類を焼成していた。この時期の遺構は調査地周辺ではほとんど知られていない。

中世以降では、薬師古墳群[注5]で中世墓群・石仏をはじめとする多量の石製品が発見されている。丘陵上には、『丹後旧事記』に「天正十一年(1583)正月二十一日　女布城　森脇宗坡」とあり、森脇氏の居城であった女布城跡が立地する。

2．調　査　概　要

調査は、１号墳周辺をＡ地点、新たに発見された古墳状隆起を西からＢ・Ｃ・Ｄ地点と呼称する。東尾根では、遺構の有無を確認するため、尾根線上に試掘トレンチを設けて調査した。その結果、Ｃ地点では花崗岩風化土である黄褐色～橙褐色砂質土の地山面で、古墳の埋葬施設を区画した溝、Ｂ地点の西方では地山面で堀切状遺構・土坑を確認したので、範囲を拡張した。１号墳については、面的に調査を実施し、墳頂部で埋葬主体部を１か所検出した。



第99図　１号墳埋葬主体部実測図

なお、１号墳の南西尾根に想定されていた２基の古墳が、現地表面では確認できなかったことから、新たに検出した古墳を、１号墳から北西に延びる尾根の２・３号墳に続いて４・５・６号墳と呼ぶ。ただし、５号墳の埋葬施設は検出できなかった。

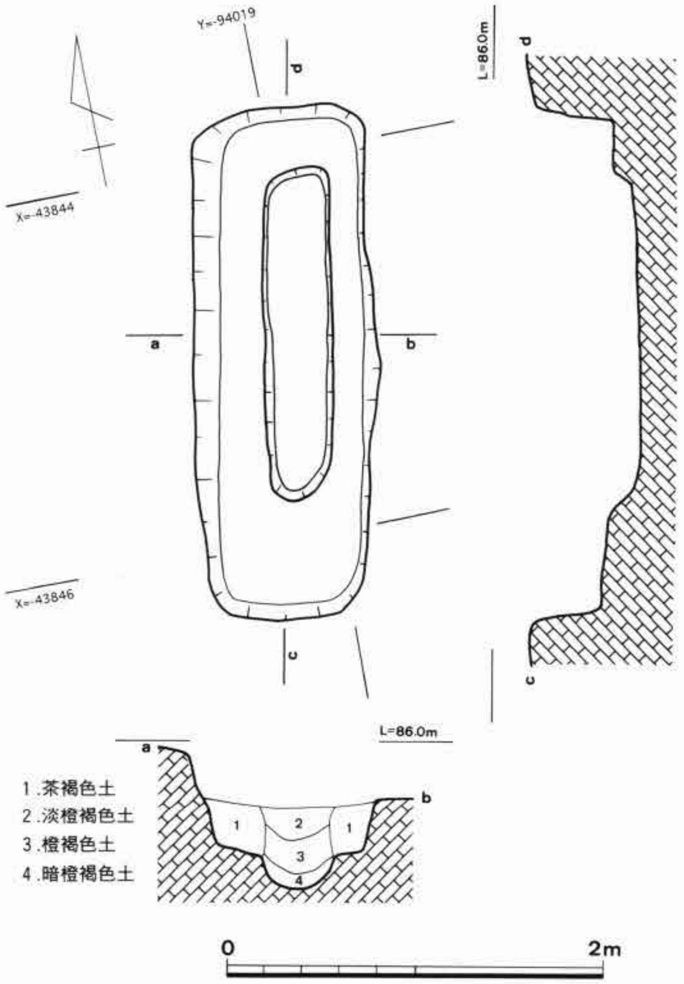
１号墳　地形測量から直径18m前後の円墳と推定される。東西方向に主軸を持つ埋葬主体部は、長さ約4.5m・幅約2.3m・深さ約45cmを測る。一部に残った木棺痕跡が「U」字形を呈し、および墓壙底部中央がわずかに窪むことから、舟形木棺を直接納めたと推定される。棺の底から鉄製品が１点出土した。

４号墳　傾斜面を階段状に削り、わずかな平坦地に埋葬施設を造る。平坦面は南北約４ｍ・東西約1.5mを測る。東西方向に主軸を持つ埋葬主体部は２段に掘られ、１段目は長さ約2.6m・幅約１ｍ・深さ60～30cmを測る。２段目は長さ約1.7m・幅35cm・深さ20cmを測る。埋葬主体部の堆積土観察から組合式の木棺を直接埋葬したと推定される。主体部北方では、棺の底からわずかに浮いた状態で、勾玉(瑪瑙)１点、管玉(グリーンタフ)１点、棗玉(琥珀)１点、ガラス小玉16点などが出土した。玉類の出土状況から遺体は頭を北にして埋葬されたと推定される。

５号墳　６号墳との区画溝の存在や、６号墳が単体で構築されたと考えにくいこと、および周辺が後世に改削が行われていたことが判明したこと等により、主体部や墳丘の大部分が消滅したと推定される。

６号墳　尾根を切り離す溝で区画された古墳である。東側溝は幅約２ｍ・深さ約20cm、西側溝は幅２ｍ・深さ約15cmを測る。墳丘規模は溝間の長さから、長軸約10m・短軸約５～６ｍの方墳と推定され、中央部に埋葬施設を設ける。東西方向に主軸を持つ埋葬主体部は２段に掘られ、１段目は残存状況が良くないが、長さ約2.6m・幅約1.2ｍを測り、２段目は長さ約1.8m・幅45cm・深さ20cmを測る。棺の痕跡は明瞭ではない。中央部で鉄製品(鏃)が出土した。また、表土掘削中に、５世紀末とみられる須恵器杯蓋が出土した。

４号墳と５号墳の間の鞍部を堀切状に切り落とした遺構を検出した。この遺構は上面の幅約５ｍ・深さ約1.7ｍ・底の幅60cmを測り、すり鉢状に掘削されている。南方が浅くなっていく



第100図　４号墳主体部実測図

ので堀切というより通路(切り通し)の可能性がある。その底面で円形土坑1か所(SK03)を検出した。堀切状遺構の堆積状況から土坑が先行すると推定される。

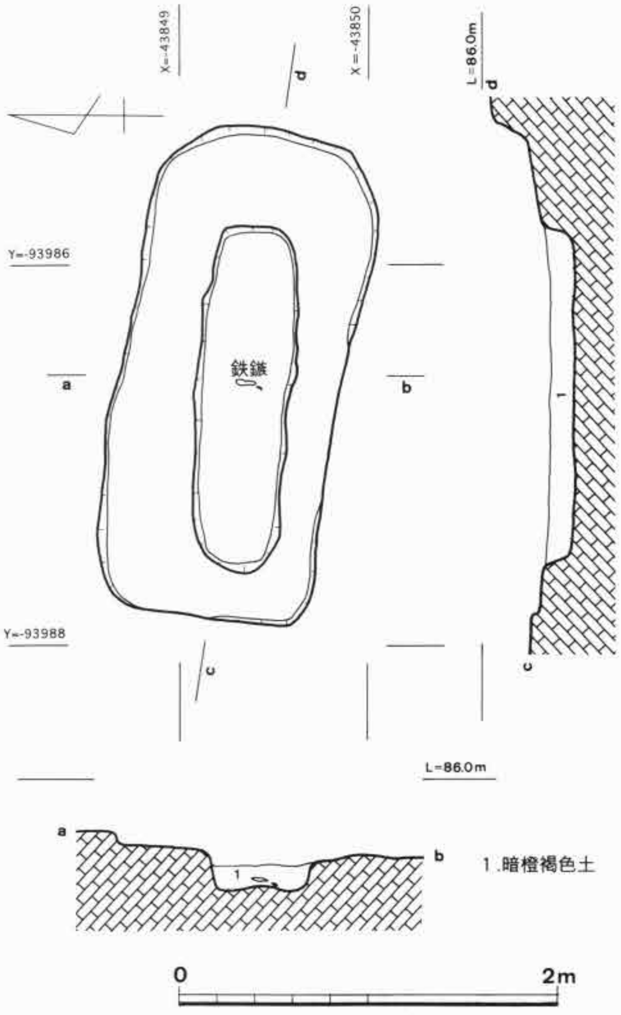
土坑SK01　堀切状遺構の東端で検出した、東西約1m・南北約90cm・深さ約40cmを測る円形土坑である。埋土には炭が混入していた。

土坑SK02　土坑SK01の南西で検出した、一辺約80cmを測る隅丸方形の土坑である。底が平らで、ほぼ垂直に掘られ深さ約1mを測る。出土遺物は無い。

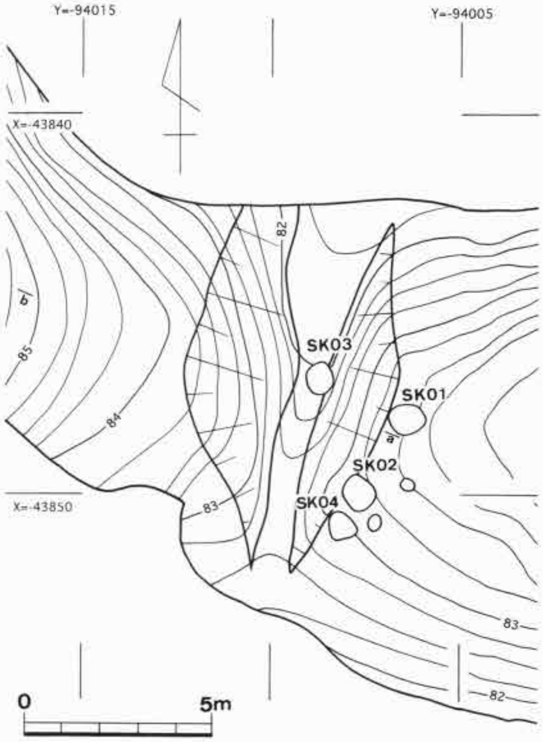
土坑SK03　堀切状遺構の底部で検出した、直径約80cm・深さ約5mを測る円形土坑である。土坑SK02と同様の遺構と推定される。

3．出　土　遺　物

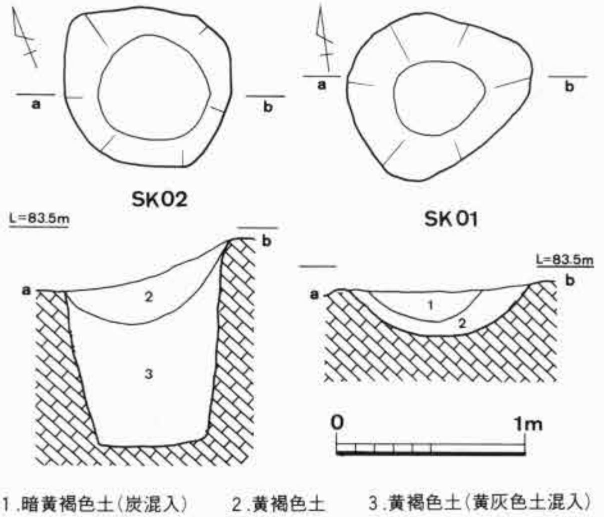
出土遺物には、4号墳主体部から出土した玉類(1～19)、1号墳主体部から出



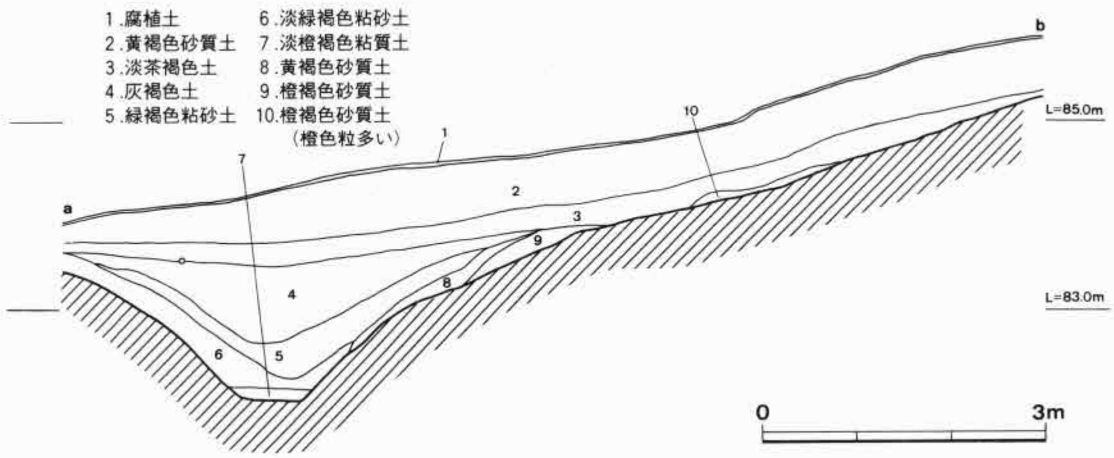
第101図　6号墳主体部実測図



第102図　堀切状遺構平面図



第103図　土坑SK01・02実測図



第104図　堀切状遺構土層断面図

土した鉄器(21)、6号墳主体部から出土した鉄鏃(20)、6号墳表土の掘削中に出土した須恵器の杯蓋(22)がある。表土掘削中にわずかに土師器細片が出土したが形・時期のわかるものはない。

ガラス玉にはやや長いもの(14)と5㎜以下のものがある。琥珀製の棗玉(17)、グリーンタフ製の管玉(18)、瑪瑙製の勾玉(19)がある。勾玉は透明感のある淡い黄桃色を呈する。これらはいずれも表面がやや風化している。

中期の古墳群から、ガラス玉が出土することは珍しいことではないが、本例は、緑色系4点・水色系5点・紺色系7点と多様であり、その中で紺色系が主体を占める。この時期のガラス玉の副葬の典型的な例と位置づけることができる。

鉄鏃(20)は幅2.3cmで腹抉がやや大きく、長さ12.3cmを測る。腸抉は、端部が短く外反するものである。5世紀末の平根鏃の形態である。

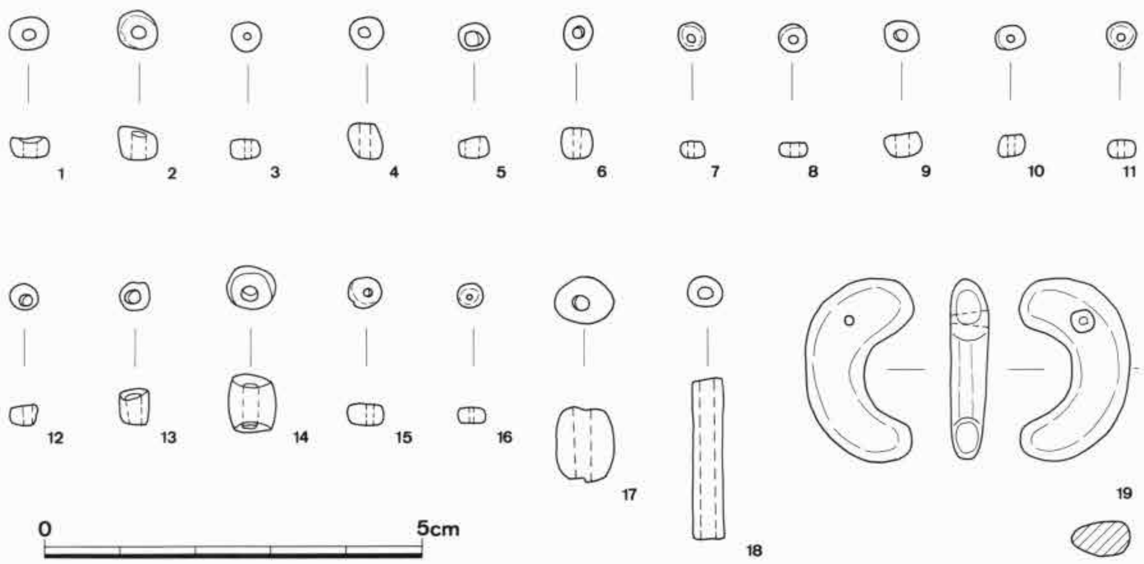
21は両端が欠損し、残存長は11.7cmを測る。片側が大きく湾曲し、断面が長方形を呈し、刃は無い。用途不明品である。

杯蓋(22)は口径12.1cm、器高4.8cmを測り、色調が灰青色で胎土も良好である。稜は鋭く作り出し、口縁端部には段を有している。ただし、器壁は厚く、在地産の須恵器の可能性を持つ。口径などから、陶邑古窯址編年ＴＫ47型式に並行する時期であろう。

4. ま と め

今回の調査で、南谷古墳群Ｃ支群に関係するものには、円墳1基・階段状古墳1基・方墳1基を検出した。その他に堀切状遺構、土坑4か所などを検出した。

古墳関係では、表土掘削中に出土した須恵器杯蓋から、6号墳は中期末期(5世紀末)の築造と推定できる。時期の分かる遺物は出土しなかったが、1号墳は埋葬施設に舟形木棺を採用していることから、丹後地域の出土例からみて、前期末～中期前半のものと推定される。丹後地域では、弥生時代の台状墓以来、舟形木棺が認められるが、古墳時代のものは弥生時代のものに比べて細身で、総じて規模も大きなものが多いという特徴がある。また、4号墳は、主体部出土の玉類の



第105図　4号墳主体部出土玉類実測図
（1～16.ガラス玉　17.棗玉　18.管玉　19.勾玉）

付表2　南谷古墳群出土玉類観察表

番号	種　類	長さ	径	材　質	色　調	備　考
1	ガラス小玉	3.0	5.0	アルカリ石灰	明水色	
2	ガラス小玉	4.8	5.0	アルカリ石灰	暗紺色	
3	ガラス小玉	3.0	4.0	アルカリ石灰	紺色	
4	ガラス小玉	4.8	4.0	アルカリ石灰	濃紺色	
5	ガラス小玉	2.8	4.0	アルカリ石灰	淡水色	
6	ガラス小玉	3.8	4.0	アルカリ石灰	明緑色	
7	ガラス小玉	2.5	3.8	アルカリ石灰	紺色	
8	ガラス小玉	2.3	3.8	アルカリ石灰	明緑色	
9	ガラス小玉	3.3	4.8	アルカリ石灰	明緑色	
10	ガラス小玉	3.0	3.9	アルカリ石灰	明水色	
11	ガラス小玉	2.1	3.9	アルカリ石灰	淡紺色	
12	ガラス小玉	2.8	4.0	アルカリ石灰	明水色	
13	ガラス小玉	4.2	4.3	アルカリ石灰	濃水色	
14	ガラス小玉	7.5	7.0	アルカリ石灰	濃緑色	
15	ガラス小玉	2.5	4.5	アルカリ石灰	暗紺色	
16	ガラス小玉	2.3	3.6	アルカリ石灰	紺色	
17	棗玉	9.8	7.8	琥珀	紫暗褐色	破損あり
18	管玉	21.8	4.2	グリーンタフ	緑灰色	
19	勾玉	24.2		瑪瑙	淡黄桃色	

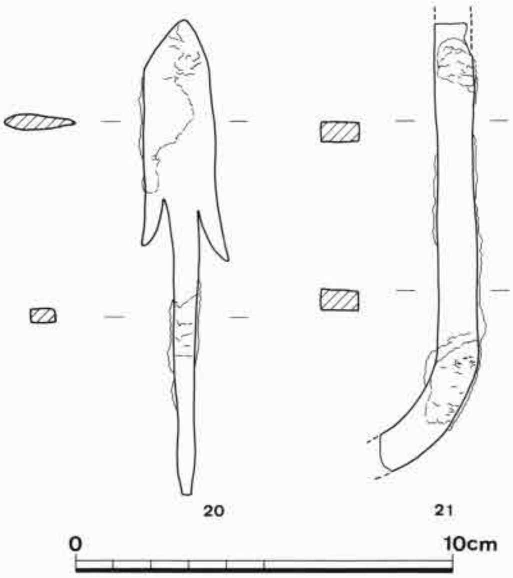
うち、勾玉は湾曲が大きく、頭部の丸みも顕著に認められることから、中期のものと考えられる。古墳の埋葬施設は、4号墳が地形に制約されて南北方向に主軸をもつが、1・6号墳は東西方向の主軸を持つこと、4・6号墳の埋葬主体部2段目の幅が狭いことに共通点がみられる。周辺の古墳で、埋葬主体部が狭いものでは北谷古墳群(注6)の3号墳がある。北谷3号墳第1主体部は、長軸約2m・短軸約60cm・深さ約50cmの長方形土坑で、2段目が幅約25cm・深さ約10cmを測る。南谷

４号墳はこれよりひとまわり大きいが、よく似た形態といえる。北谷３号墳は中期後半の築造とされている。

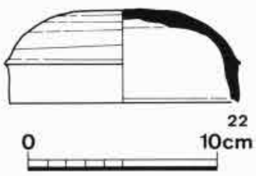
これらから、南谷古墳群Ｃ支群は北谷古墳群と一部が重なる時期のものがあり、この古墳群が北谷古墳群と何らかの関係を持つ集団によって造られたと推定される。そして、南谷古墳群Ｃ支群は、１号墳を中心とした古墳時代中期の中におさまる古墳群といえる。

堀切状遺構からは、時期がわかる遺物が出土しなかったが、女布城跡推定位置の北方（この調査地北東）の丘陵に、堀切状の窪地が久美浜町教育委員会の分布調査で指摘されている(注7)ので、堀切状遺構は山城（女布城跡）に関連する遺構の可能性が高い。

（石尾政信）



第106図　出土遺物実測図（鉄製品）



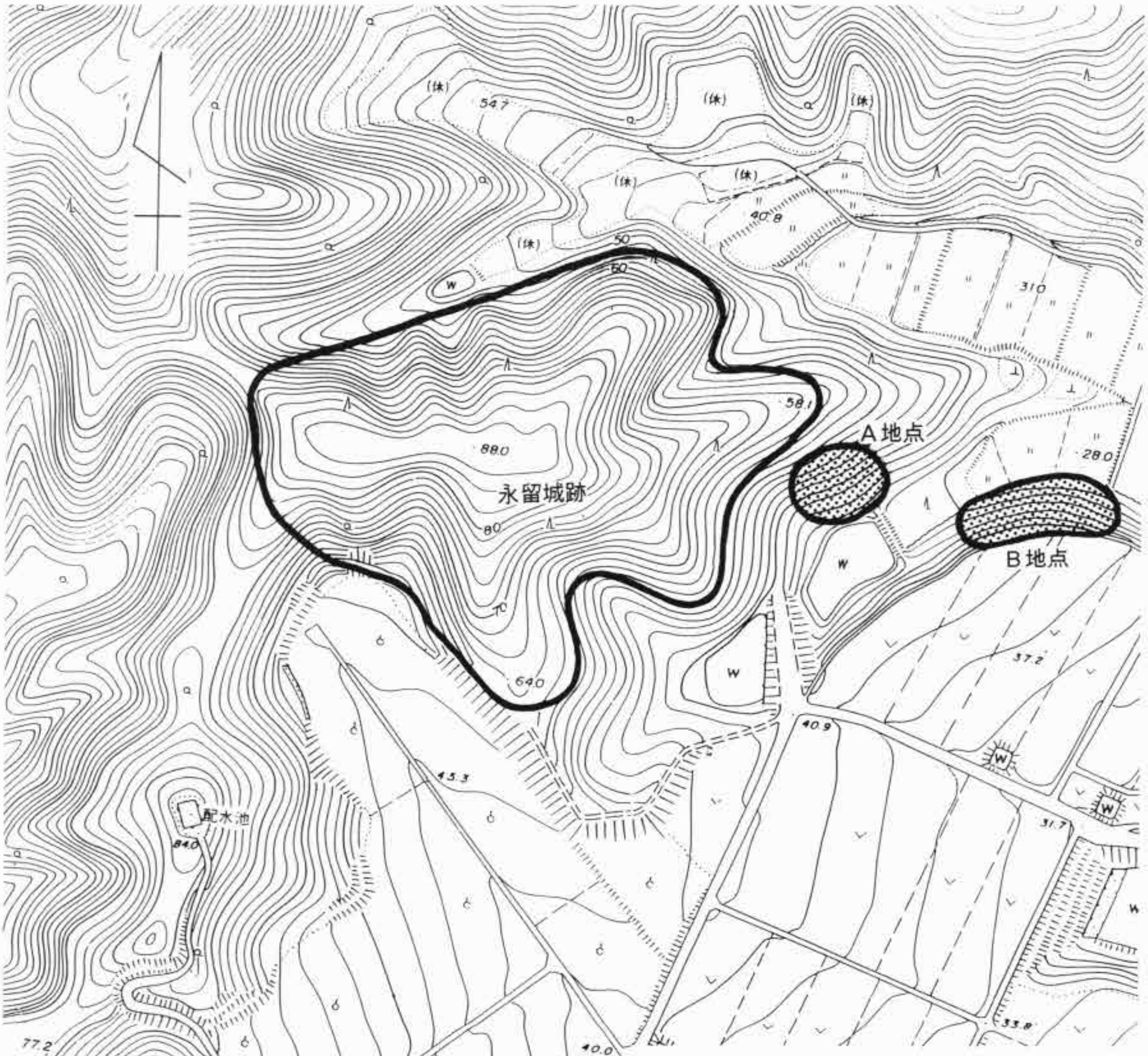
第107図　出土遺物実測図（須恵器）

(5)永留城跡A地点

1．立　地

永留城跡は、熊野郡久美浜町字永留小字畑山に所在する。久美浜湾に向かって北流する川上谷川と佐濃谷川に挟まれた永留地区には、地区の中央を永留川が南から北に向かって流れ、その川は川上谷川に合流する。永留地区は川に沿って南北に走る谷地形(通称本谷)と東西に小さな谷が錯綜し、本谷の東側丘陵には、谷垣古墳群など多くの遺跡が所在するが、西側丘陵では古墳群も知られておらず、永留城跡・畑山城跡が丘陵上に点在する程度である。

永留城跡は、久美浜町教育委員会の分布調査で、丘陵上(標高88m)に本丸と推定される平坦地



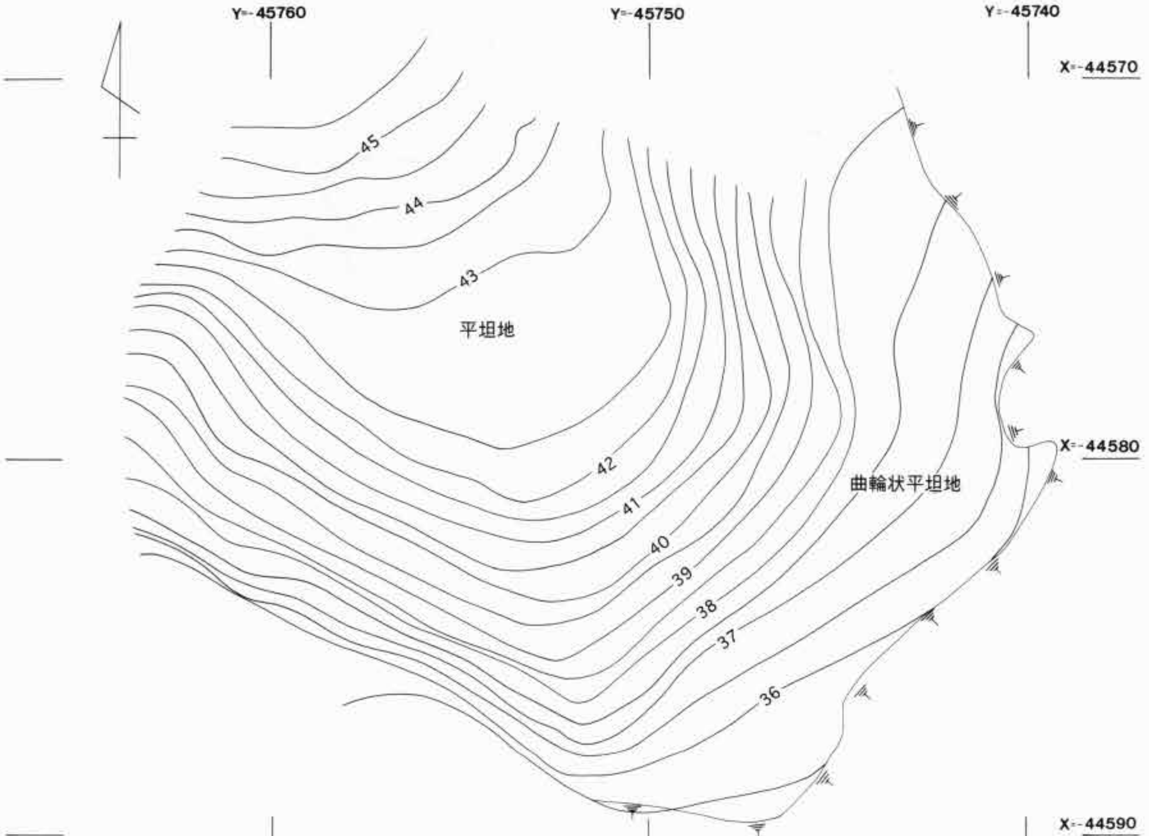
第108図　永留城跡調査地位置図

と堀切を挟んで幅の狭い平坦地があり、そこから北西・東および南に曲輪と推定される削平地が階段状に確認されている。城跡の範囲は東西約250m・南北約200mと推定される。東に延びる尾根から派生した小さな尾根筋の先端部が今回の調査対象地(A地点)にあたる。調査対象地の東側にも本谷から西に入り込んだ谷筋がみられ、谷奥には溜め池が造られている。

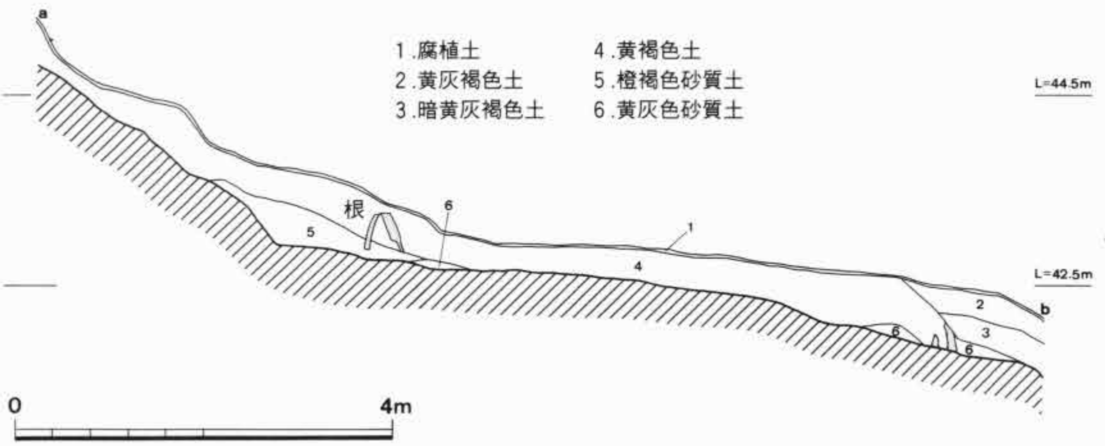
2．調　査　概　要

調査対象地の樹木を伐採後、まず最初に地形測量を行った。地形は、丘陵先端部を削平しゆるやかに傾斜した東西約10m・南北約７ｍの平坦地と、その三方を急峻に切り落とし、東側には曲輪状平坦地が確認できた。

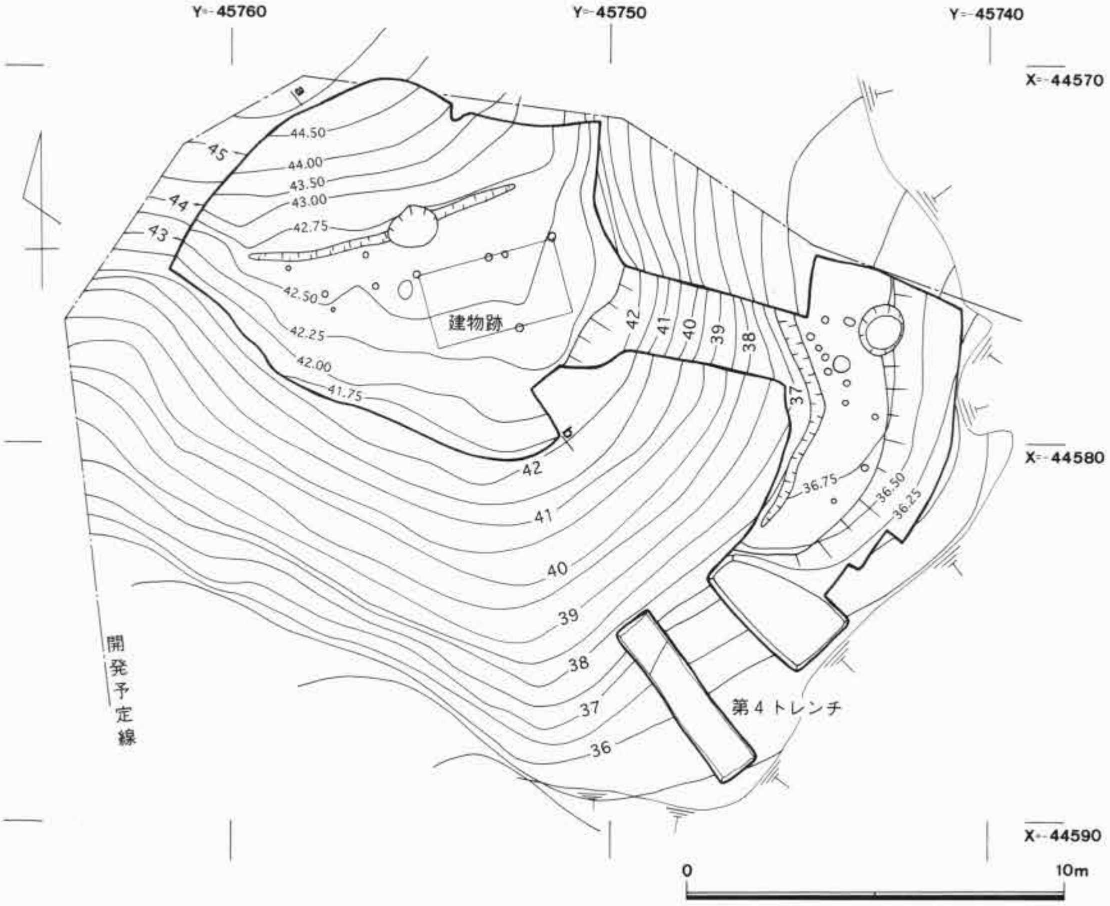
調査は、遺構の有無を確認するために、平坦地・曲輪状地形および傾斜地に試掘トレンチを設定して、人力で掘削した。試掘調査では、丘陵を切り土した側に沿った小溝と柱穴を確認したので、調査範囲を拡張した。平坦地では、切り土した側に平行する幅約20～30cmの溝(排水溝)、直線上に並ぶ柱穴３か所(間隔はやや不揃い)やほぼ直交する柱穴を検出した。平坦面が南東に下がることから、流失した柱穴もあったと考えられる。これら柱穴の配列から小さな建物の所在が推定できる。また、東斜面は急峻に切り落とされ容易に登ることができないように造られている。地表面の観察から、南東・南西斜面も同様であると判断できる。



第109図　調査地地形測量図



第110図　永留城跡平坦地土層断面図



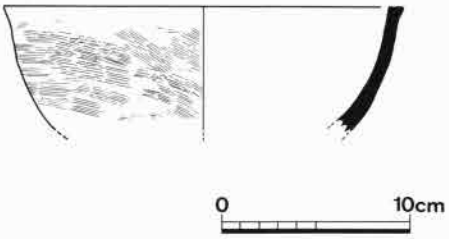
第111図　調査地平面図

東側の曲輪状平坦地の場所では、平坦地と同様に切り土面に沿って幅20～30cmの排水溝がめぐり、南に向かってわずかに傾斜する。排水溝から外側に幅約２ｍの平坦面があり、平坦面では柱穴も検出した。柱穴の一部が弧を描くように平坦面の外端に沿っているので、防御柵が設置されていた可能性がある。平坦面は南東部分には無く、後世に崩落した可能性が高い。

出土遺物は、平坦地の表土掘削中に土師器片が１点だけである。土師器は、復元口径21.2cmを測り、椀または鉢と推定される。

3．まとめ

今回の調査では、平坦地で溝と建物が推定できる柱穴配列、切り落とした急斜面、急斜面下の排水溝・狭い平坦面と柵列が推定できる柱穴が確認できた。検出した遺構は、細く入り込んだ谷筋を見下ろす調査地の立地条件から、簡単な防御施設をもつ、見張り小屋程度の監視施設と考えられる。谷筋を挟んだ対岸にも同様な施設が所在した可能性がある。また、調査地の北西と南東には細い谷筋が見られるので、そこが城への入り口のひとつと考えられる。永留城跡は、今回の調査で関連する遺構が確認されたことから、これまで推定されていた範囲より広い地域まで含まれる可能性が高い。ただし、出土遺物が１点のみであり、遺構の時期が判明していないのが残念である。今後、周辺での調査が期待される。



第112図　出土遺物実測図

（石尾政信）

注１　橋本勝行『左坂古墳群・幾坂経塚・幾坂城跡発掘調査概報』（京都府大宮町文化財調査報告書　第12集　大宮町教育委員会）　1998

注２　筒井崇史「(6)女布北遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第60冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1994

注３　注１に同じ。

注４　注１に同じ。

注５　田代　弘「９．北谷古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第65冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

注６　黒坪一樹「(5)薬師古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第65冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1994

注７　能勢知生氏のご教示による。

平成10年祖年度調査参加者（敬称略・順不同）

調査補助員　中尾清之・壱岐一哉・才本佳孝・黒石昌代・高木　彩・小倉志摩・山田　諭・大村昌義・反納智子・浦川真澄・坂田真紀子・三好　玄・森オリ江・猿橋紀子・岡崎　彩

整理員　山本弥生・寺尾喜美子・川崎祐子・金保真由美・田中美恵子・金久真弓・谷辻絹代・有田美恵子・野口美乃・永埜ヤス子・吉岡美秋・山本絹・関野雅子・伊熊佐知子・永埜ヤス子・野口美乃・山本　絹

作業員　平林秀夫・平林直美・松村　仁・森野美智代・永島俊夫・本城義晴・由良里枝・藤原敏子・尾崎二三代・村上五月・吉村晴雄・坪倉愛子・森　秀雄・小國喜市郎・藤原多津子・岩佐正一・石井　清・石嶋文恵・大江田洋子・田宮節子・黒川花恵・吉岡つや子・入江敏夫・藤原悦子・増田英男・中西　保・高野貞子・坪倉孝一・坪倉利恵子・藤原慶治・松本一夫・森　和夫・田谷フミ子・入江君子・堀　か江・岩淵寛徳・栄元一雄・元井淳輔・船戸　優・松田　章・大石四郎・大橋弘之・岡崎　巌・日下部安子・林敬祐・浜岡利幸・上田義直・中田正則・高谷まり子・吉岡徳正・土出定子・本井銑一郎・松本はるえ・富田英信・沖野英範・坂井喜三郎・堀新治・筒井百子・堀　末野・小仲健一・吉岡美智雄・相見文夫・吉岡暉雄・天橋治郎・由利篤子・堀口征護・吉岡榮太郎・二条清吉・岡本喜久枝・近藤護・川口誠也・水口節夫・谷口勝江・小田貞彦・井通光信・井尻志か枝・山形議松・本田和子・田中久江・田中脩一・山口利枝子・小中明美・川口　毅・木下康雄・山下　進・吉岡新一・小幡利満・田中　修・高田正彦・池辺龍之助・中村敏一・山本恒子・安井弥平一・大江稔弘・前田富美代・小西キヌ子

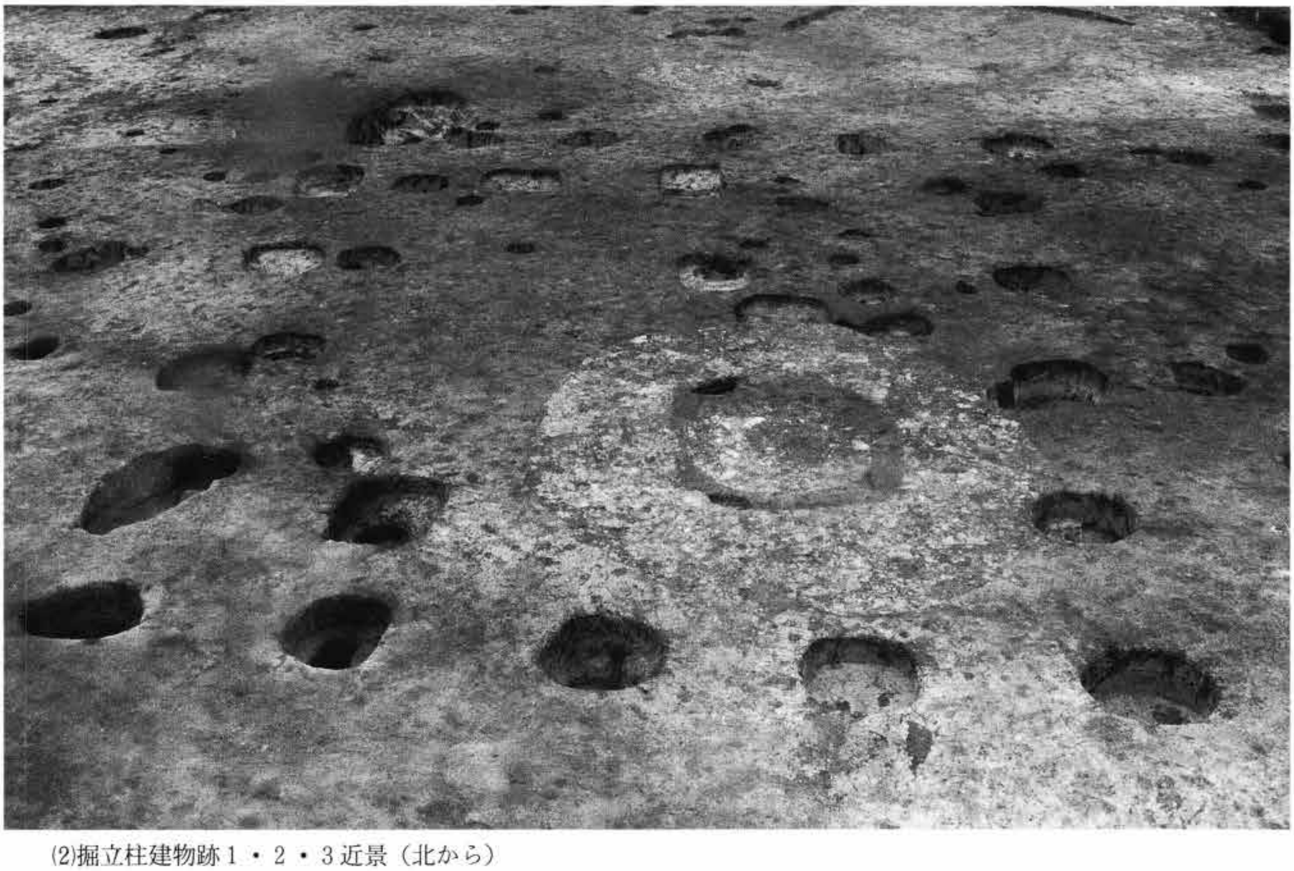
図　　版

調査地全景（西上空から）

⑴竪穴式住居跡１近景（南東から）

⑵竪穴式住居跡２近景（北東から）

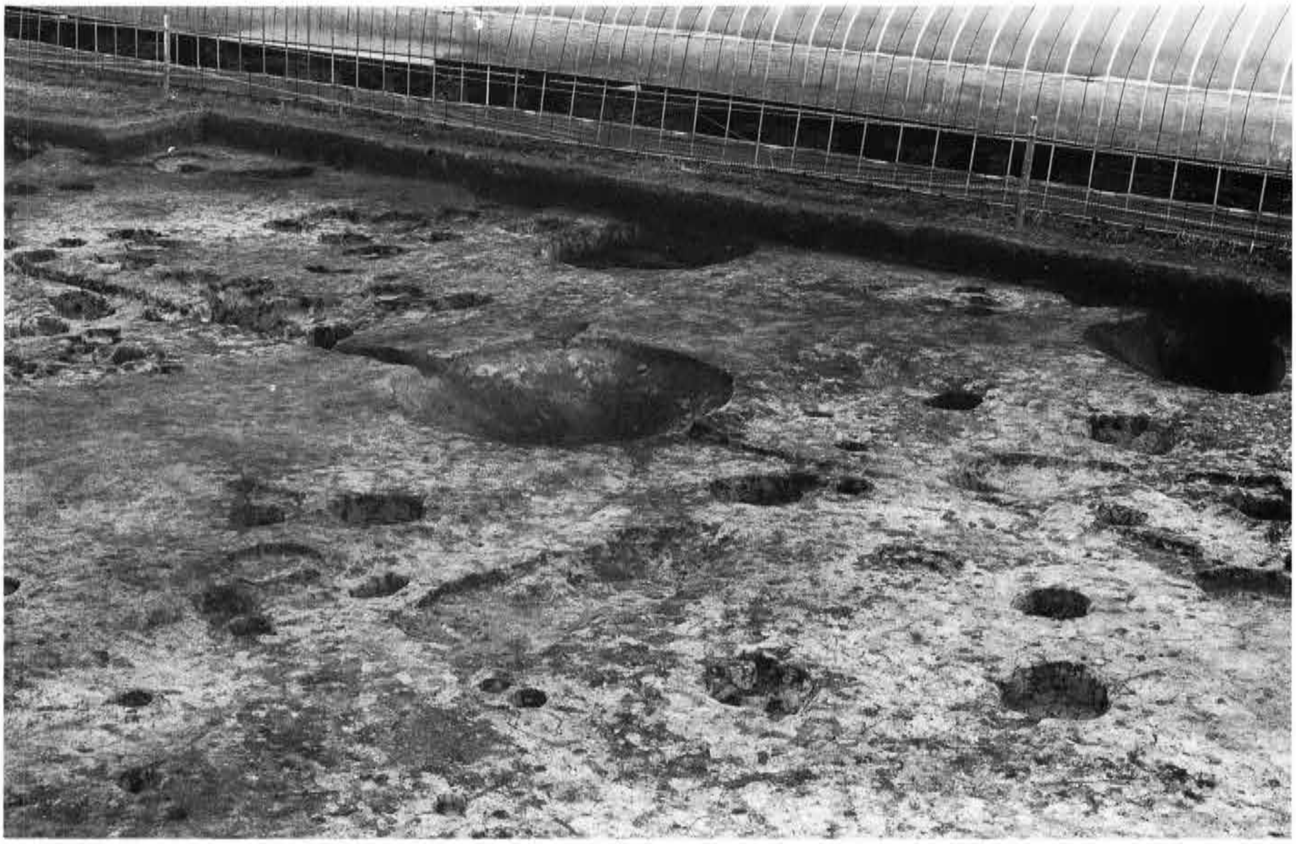
⑴掘立柱建物跡1半掘状況（北から）



⑵掘立柱建物跡1・2・3近景（北から）

⑴掘立柱建物跡４検出状況（南から）

⑵掘立柱建物跡４近景（南から）


⑴土坑３・井戸２近景（南西から）

⑵掘立柱建物跡６・７近景（東から）

(1)土器埋納坑近景
（北東から）

(2)柱穴半掘状況
（南東から）

(3)井戸1近景
（北から）

4

11

1

17

19

7

21

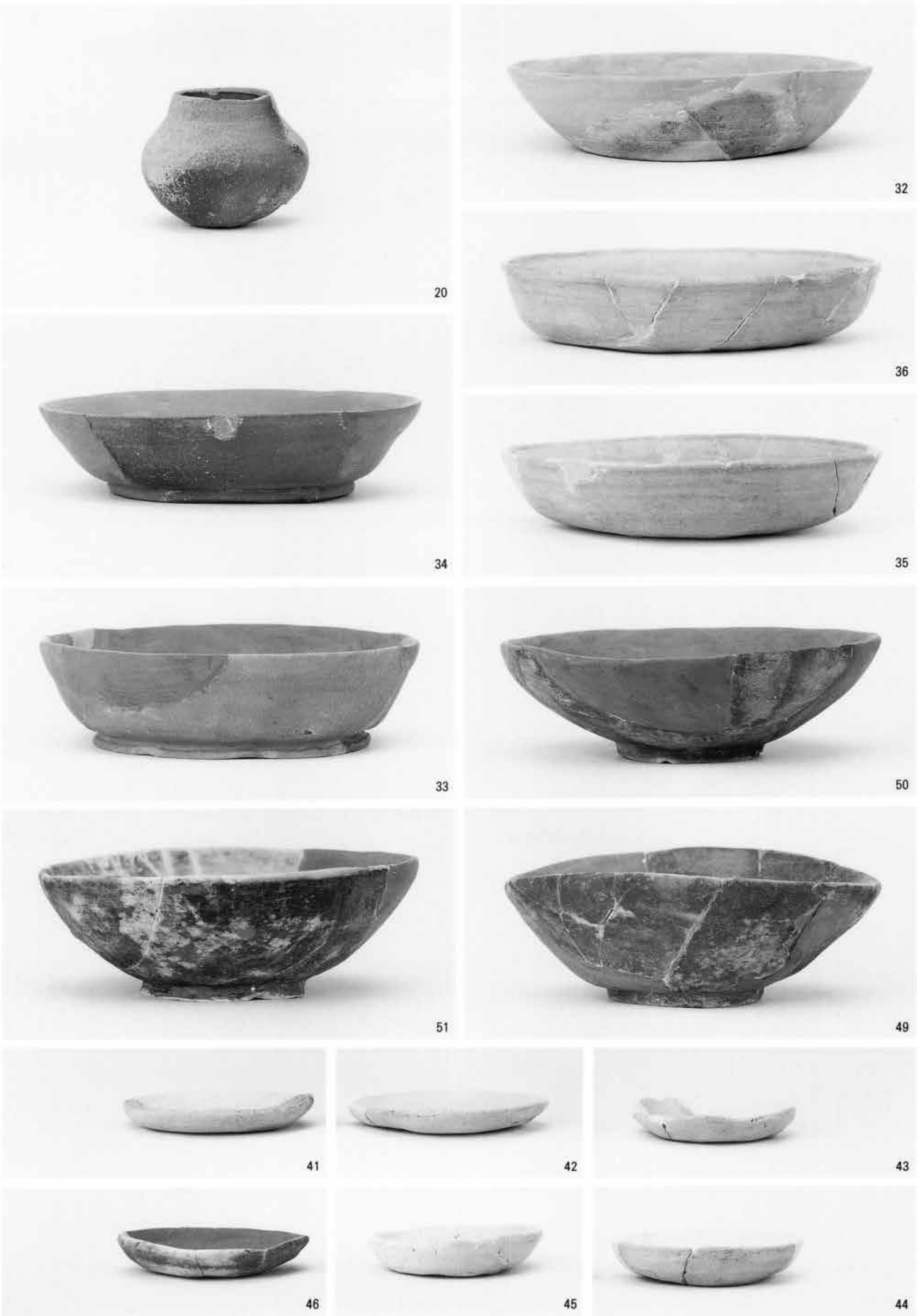
6

22

23

出土遺物(1)

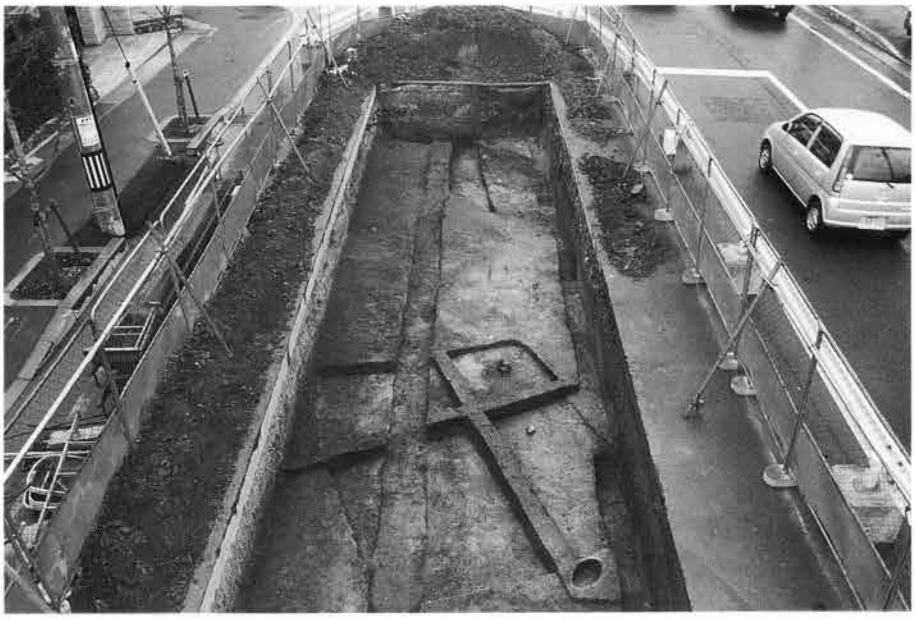
図版第8　太田遺跡第8次



出土遺物(2)

図版第９　中海道遺跡第49次

⑴調査区全景
（西から）

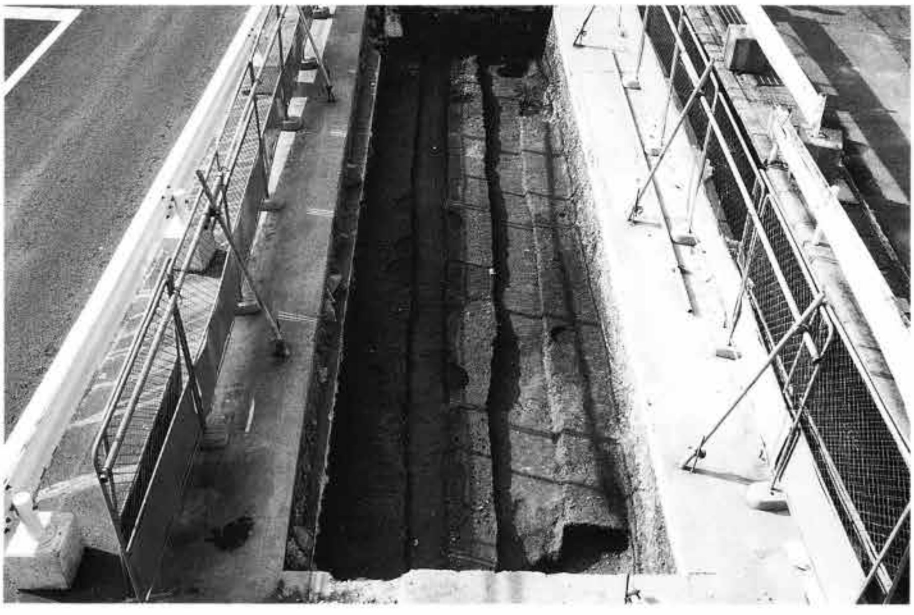


⑵第１トレンチ全景
（西から）

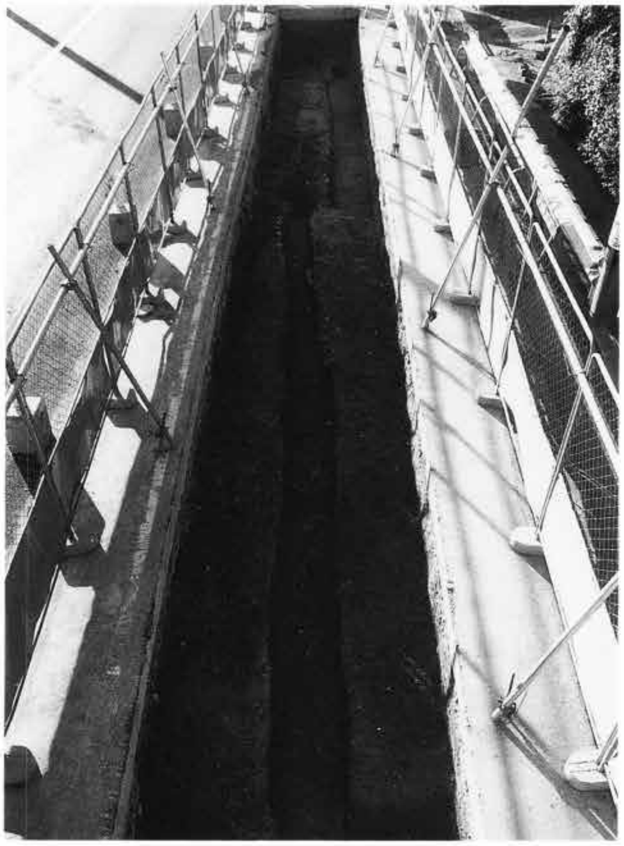
⑶第１トレンチＳＨ02完掘状況
（西から）

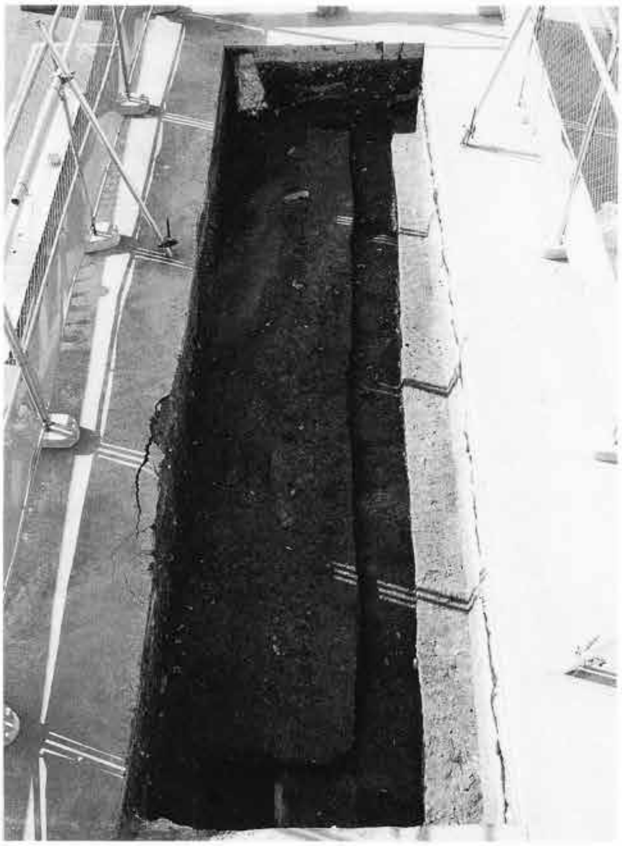
(1)第２トレンチ全景
（東から）

(2)第３トレンチ全景
（西から）



(3)第４トレンチ全景
（東から）


⑴第5トレンチ全景（東から）


⑵第6トレンチ全景（東から）

⑶第7トレンチ全景（東から）

図版第12　中海道遺跡第49次

1

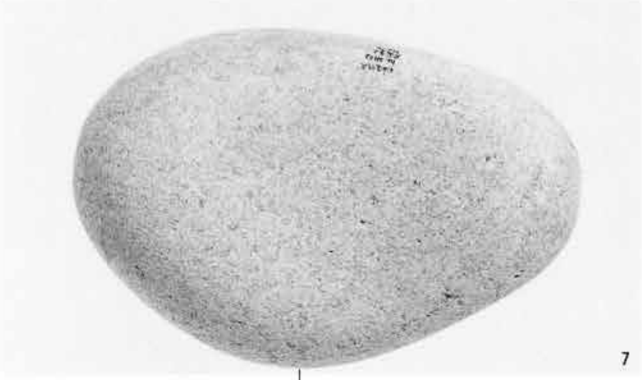
2

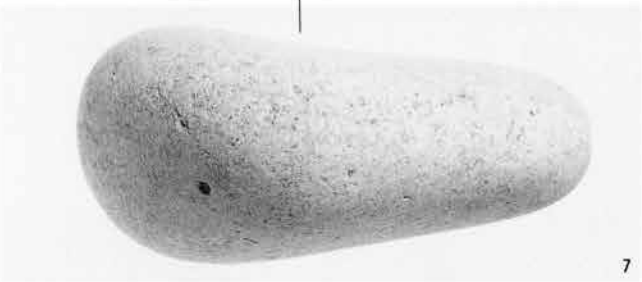
3

4

5

6


7


7

10

9

出土遺物

図版第13　長岡宮跡第372次

(1)重機掘削および
土砂の搬出状況

(2)精査風景

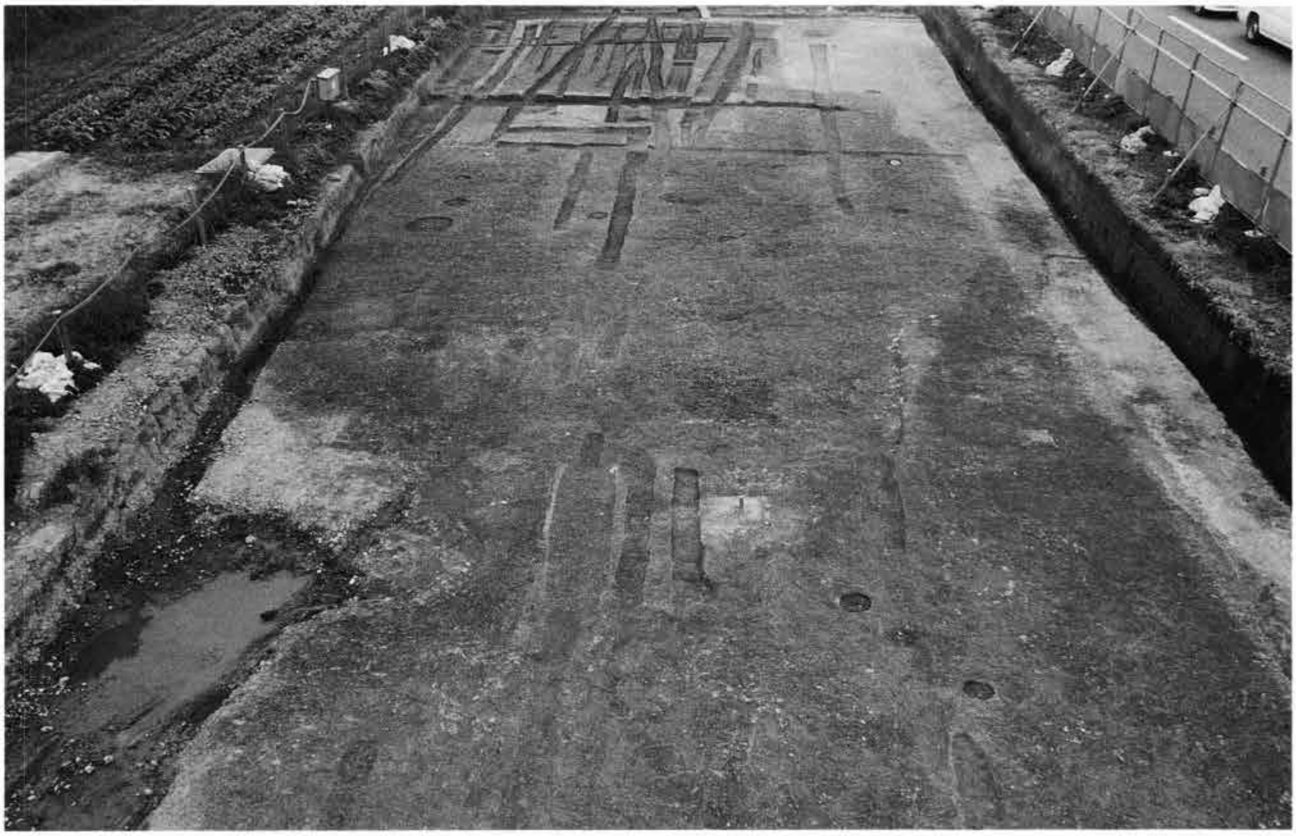
(3)トレンチ全景
（東から）

(1)土層堆積状況

(2)トレンチ完掘状況
（東から）

(3)トレンチ完掘状況
（西から）

⑴調査前全景（南から）

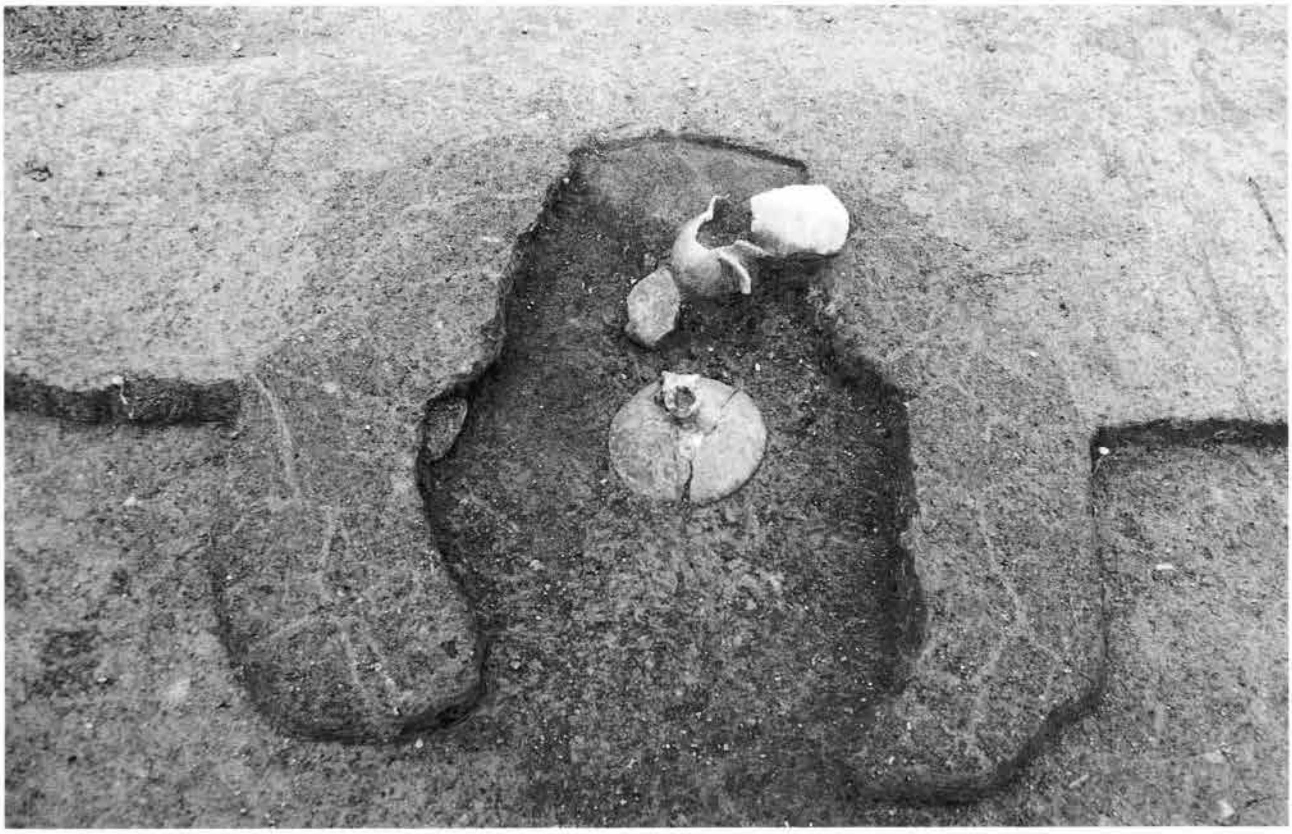


⑵調査トレンチ全景（南から）

(1)調査トレンチ全景空撮（南から）

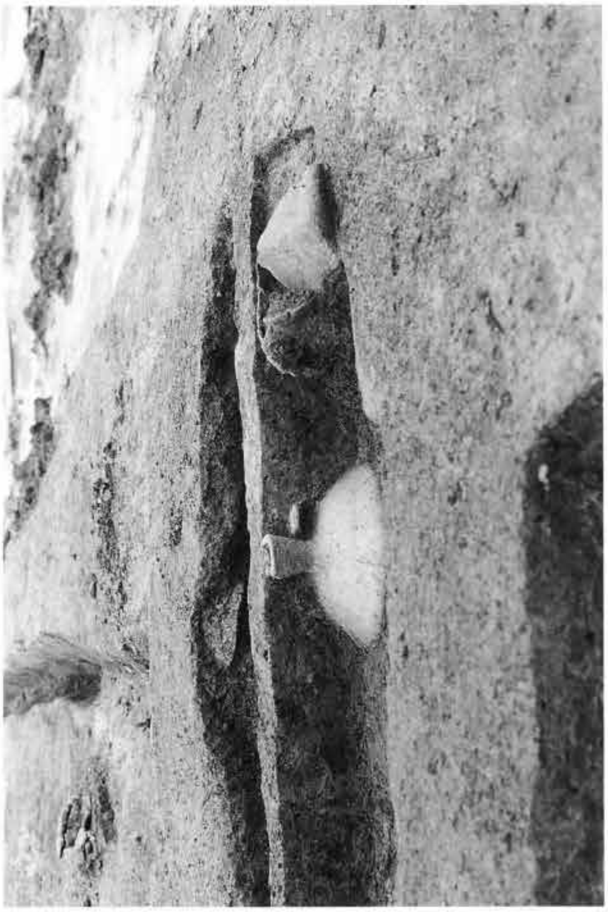
(2)調査トレンチ全景空撮（真上から）

⑴竪穴式住居跡ＳＨ01全景（北西から）

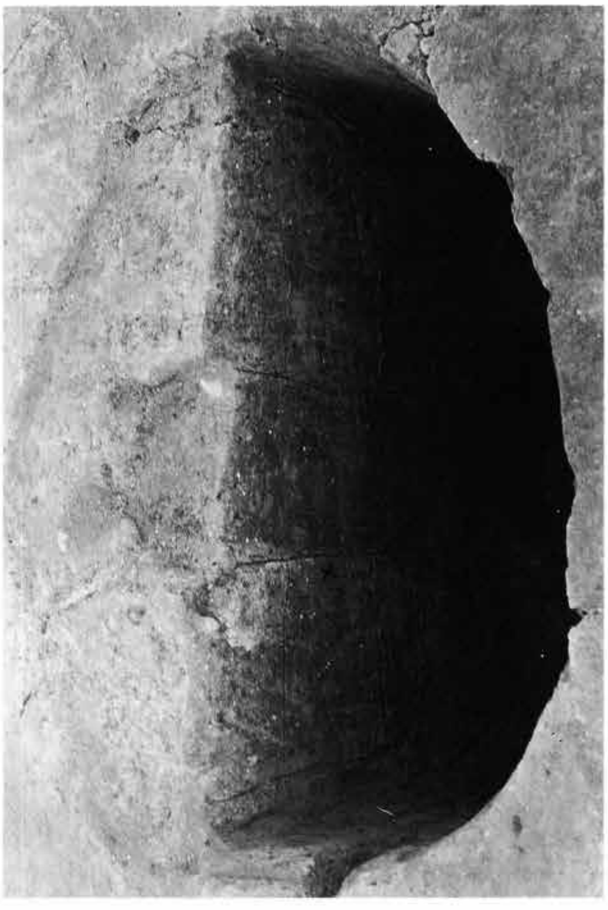


⑵竪穴式住居跡ＳＨ01竈全景（東から）

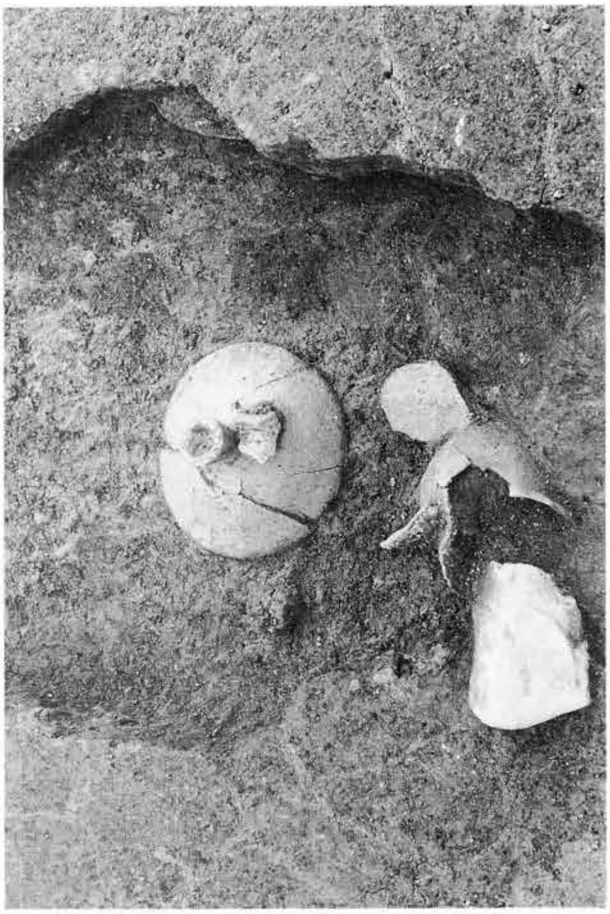
(1)竪穴式住居跡ＳＨ01竃下層断面（北から）



(2)竪穴式住居跡ＳＨ01竃・支脚断面（北から）



(3)竪穴式住居跡ＳＨ02主柱穴（北から）



(4)竪穴式住居跡ＳＨ01竃の支脚（西から）

(1)竪穴式住居跡ＳＨ01・02・03全景（南から）

(2)掘立柱建物跡ＳＢ01全景（北西から）

⑴溝状遺構全景（北西から）

⑵土壙ＳＫ01全景（北から）

(1)溝状遺構内土器出土状況（部分拡大）

(2)溝状遺構内底部土器出土状況（南から）

(3)溝状遺構内土器出土状況（部分拡大）

(4)溝状遺構断面（北から）

出土遺物

図版第23　芝山遺跡

(1) 2 地点調査前全景
（南西から）

(2) 2 − 1 トレンチ全景
（南から）

(3)古墓検出状況
（南から）

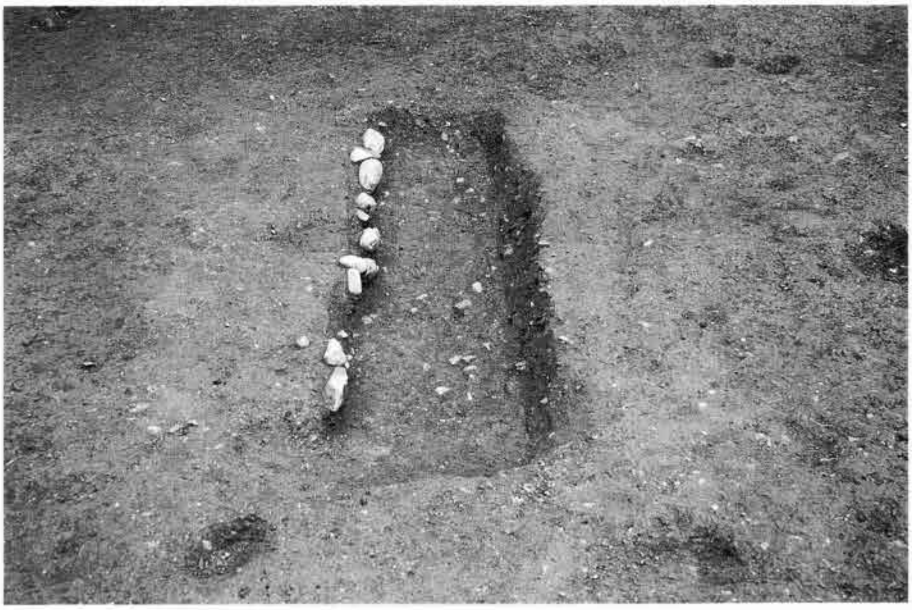
(1)古墓遺物出土状況
（北から）

(2)北側木口付近遺物出土状況
（東から）

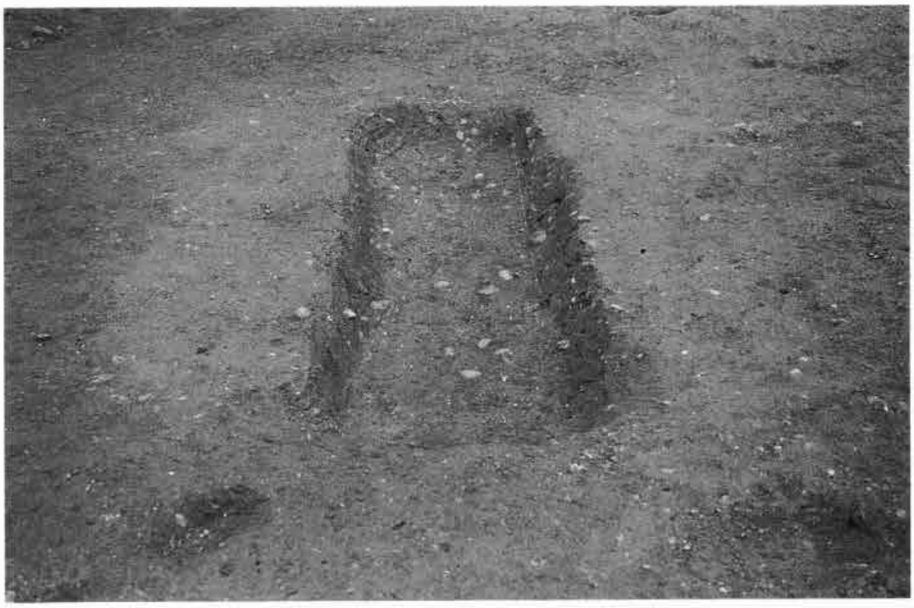
(3)中央部石帯出土状況
（東から）

図版第25　芝山遺跡

⑴南側木口付近遺物出土状況
（南から）



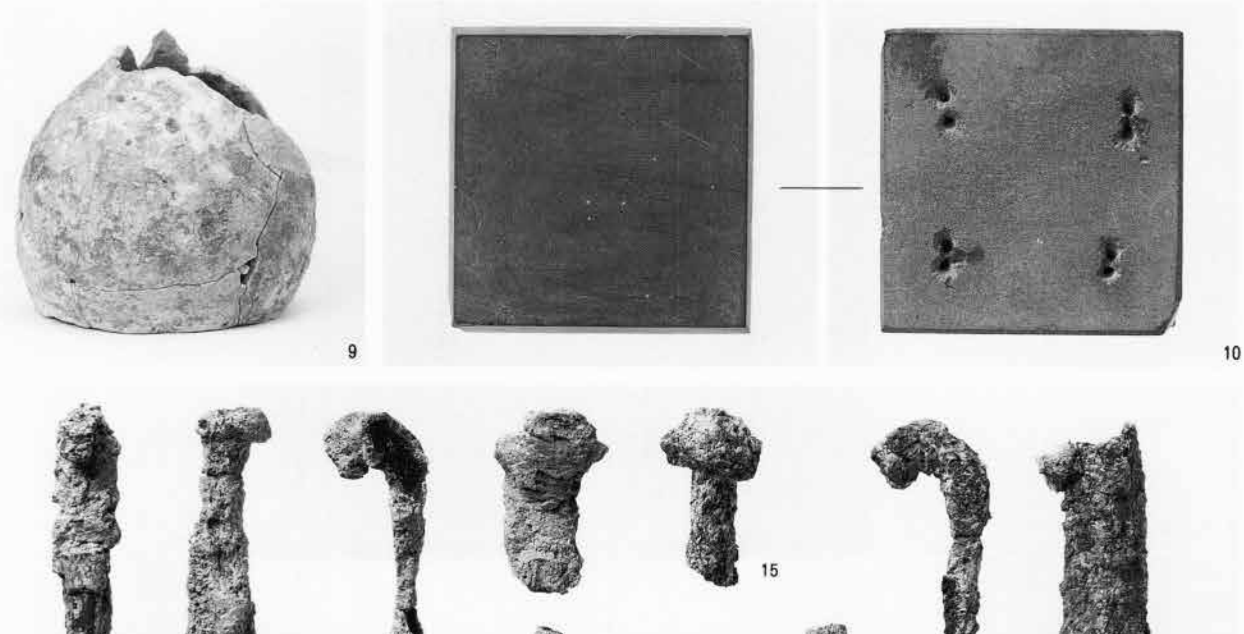
⑵遺物除去後全景
（南から）



⑶裏込め除去後
（南から）

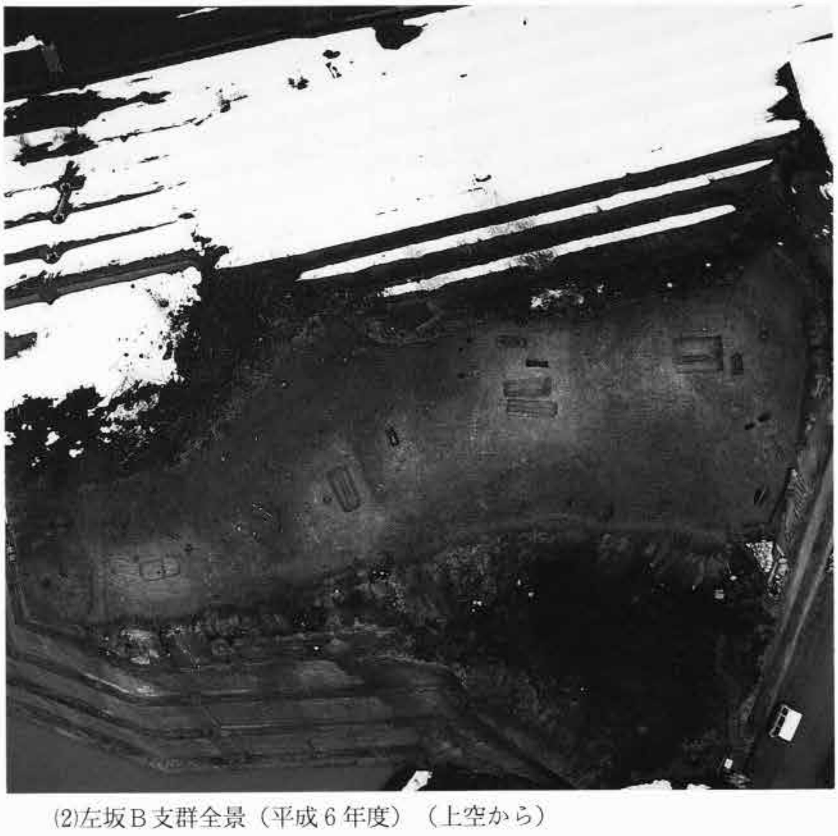
図版第26　芝山遺跡

(1)3－1トレンチ全景（南西から）



(2)出土遺物

⑴左坂Ｂ支群全景（平成５年度）（上空から）



⑵左坂Ｂ支群全景（平成６年度）（上空から）

(1)左坂B１号墳主体部全景（北から）

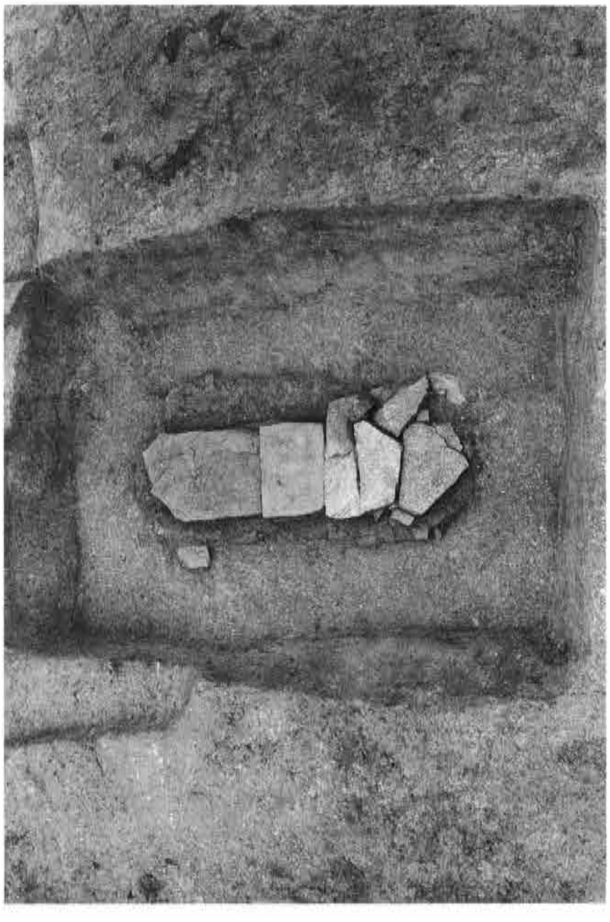
(2)左坂B１・２号墳間溝内埋葬（南から）

(3)左坂B２号墳全景（東から）

(4)左坂B２号墳頂部全景（東から）

(1)左坂Ｂ２号墳墓壙内礫群出土状況（東から）

(2)左坂Ｂ２号墳第１主体部石棺被覆粘土検出状況（東から）


(3)左坂Ｂ２号墳第１主体部石棺蓋検出状況（東から）

(4)左坂Ｂ２号墳石棺蓋石除去後全景（東から）

(1)左坂Ｂ２号墳第１主体部石棺全景（東から）

(2)左坂Ｂ２号墳石棺内細部(1)（北から）

(3)左坂Ｂ２号墳石棺内細部(2)（北から）

(4)左坂Ｂ２号墳石棺調査状況（東から）

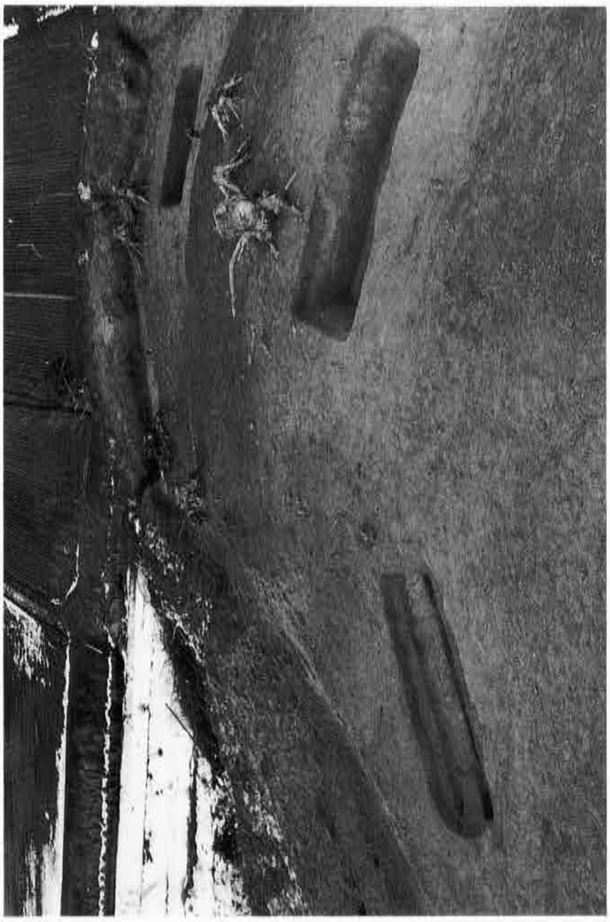
(1)左坂Ｂ２号墳第２主体部全景

(2)左坂Ｂ２号墳第３主体部全景（西から）

(3)左坂Ｂ２号墳第３主体部西群遺物出土状況（南から）

(4)左坂Ｂ２号墳第４主体部全景（東から）

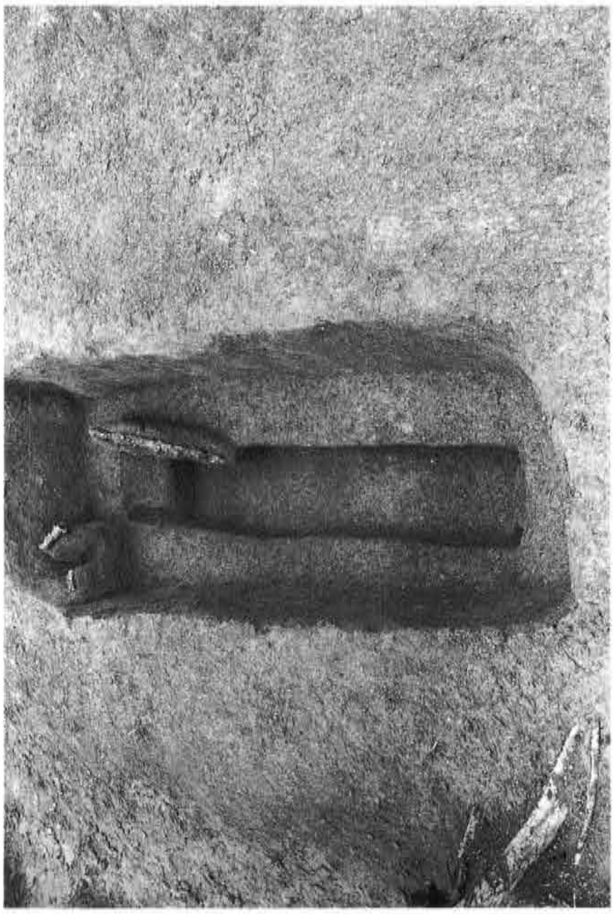
(1)左坂Ｂ２・６号墳間溝内埋葬（西から）



(2)左坂Ｂ３号墳全景（南から）

(3)左坂Ｂ３号墳第１主体部全景（東から）

(4)左坂Ｂ３号墳第２主体部全景（東から）



(1)左坂Ｂ４号墳主体部全景（西から）

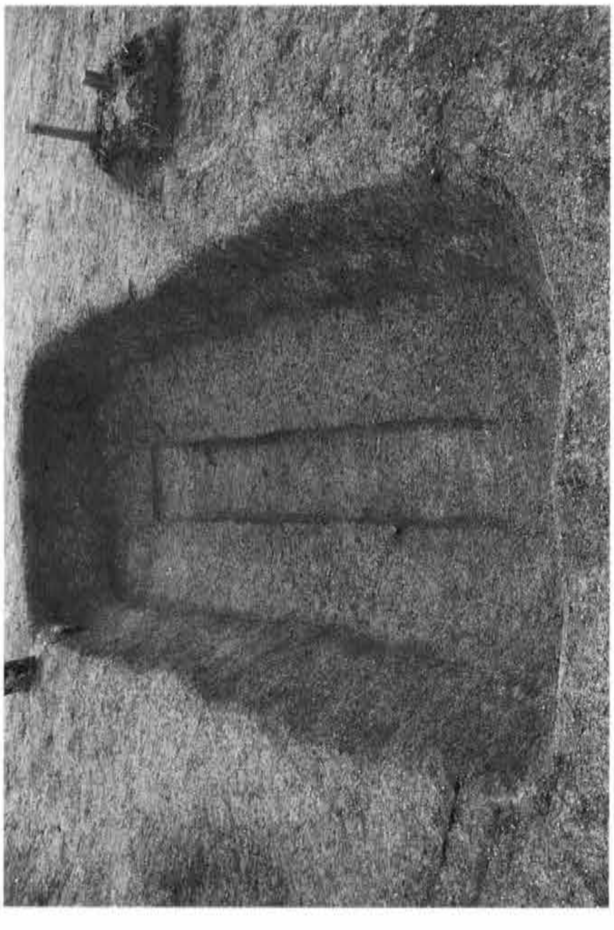
(2)左坂Ｂ４号墳鉄剣出土状況（北から）

(3)左坂Ｂ７号墳主体部全景（東から）

(4)左坂Ｂ７号墳主体部内遺物出土状況（北から）

(1)左坂B10・11号墳主体部全景（東から）

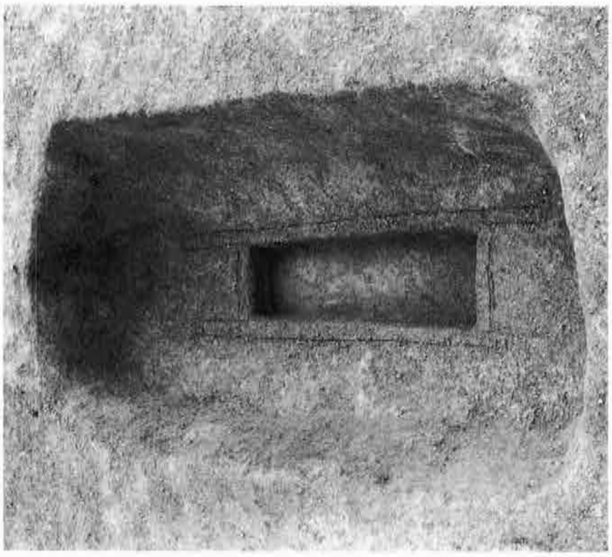
(2)左坂B13号墳主体部全景（南から）



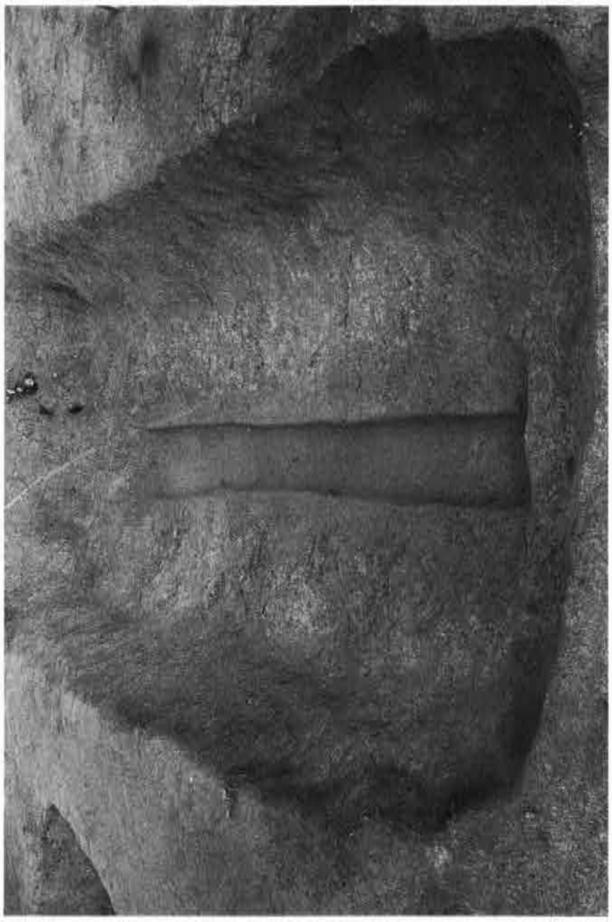
(3)左坂B12号墳主体部全景（北から）

(4)左坂B14号墳全景（東から）

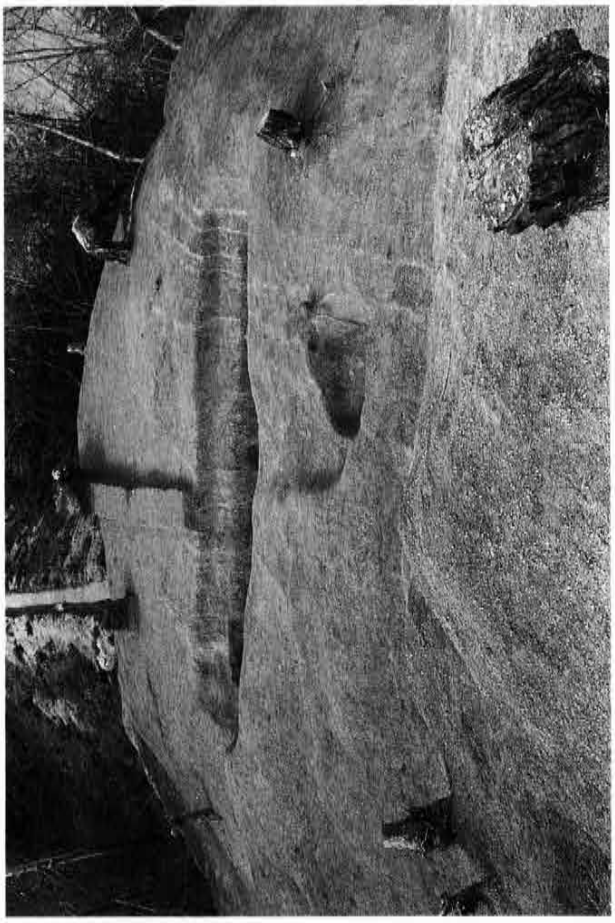
(1)左坂B17号墳第1主体部全景（西から）


(2)左坂B17号墳第2主体部全景（南から）

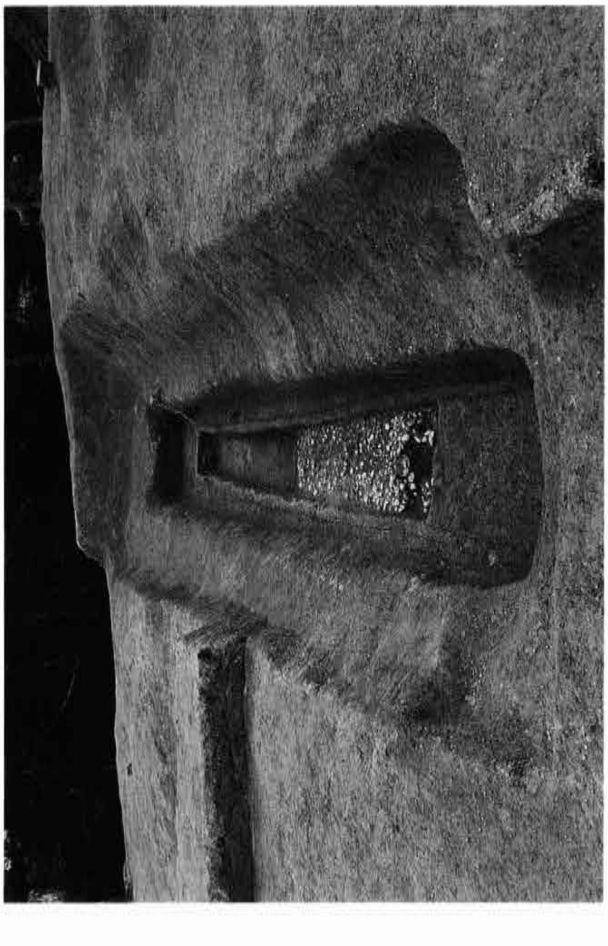
(3)左坂B17号墳周辺第1主体部全景（東から）


(4)左坂B33号墳主体部全景（南から）

(1)左坂Ｃ支群全景（北から）

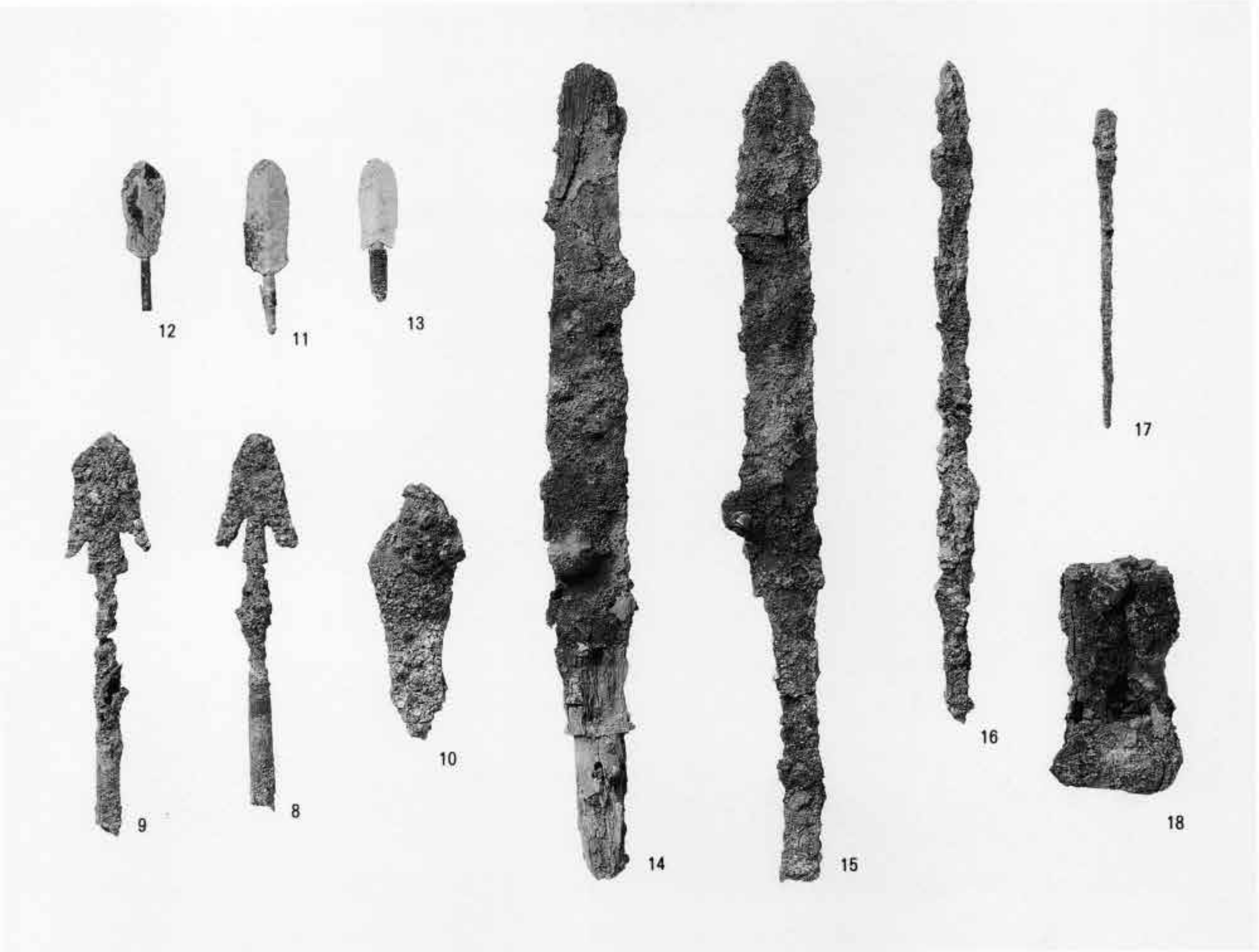


(2)左坂Ｃ21号墳全景（南から）



(3)左坂Ｃ21号墳主体部全景（西から）

(4)左坂Ｃ21号墳鏡検出状況（東から）



出土遺物(1)

39

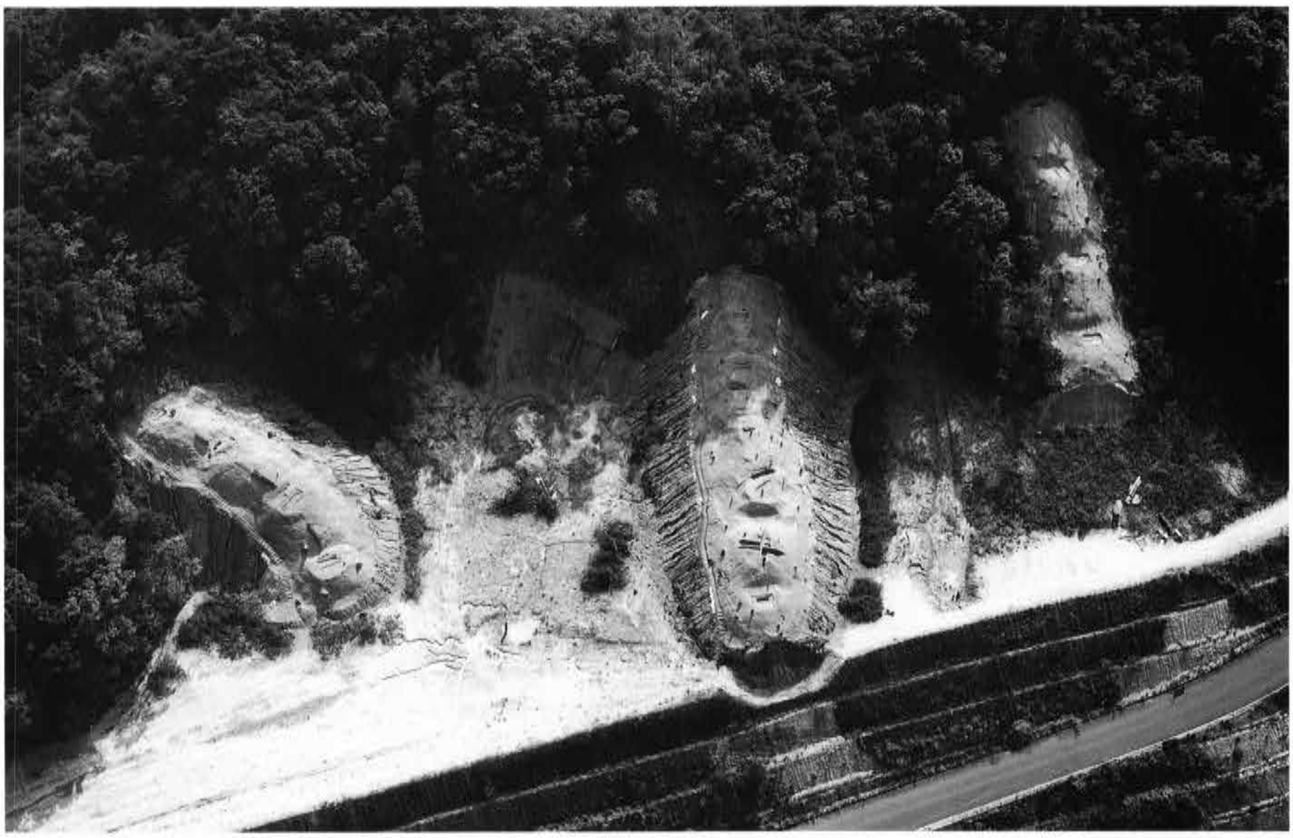
54

48

47

出土遺物(2)

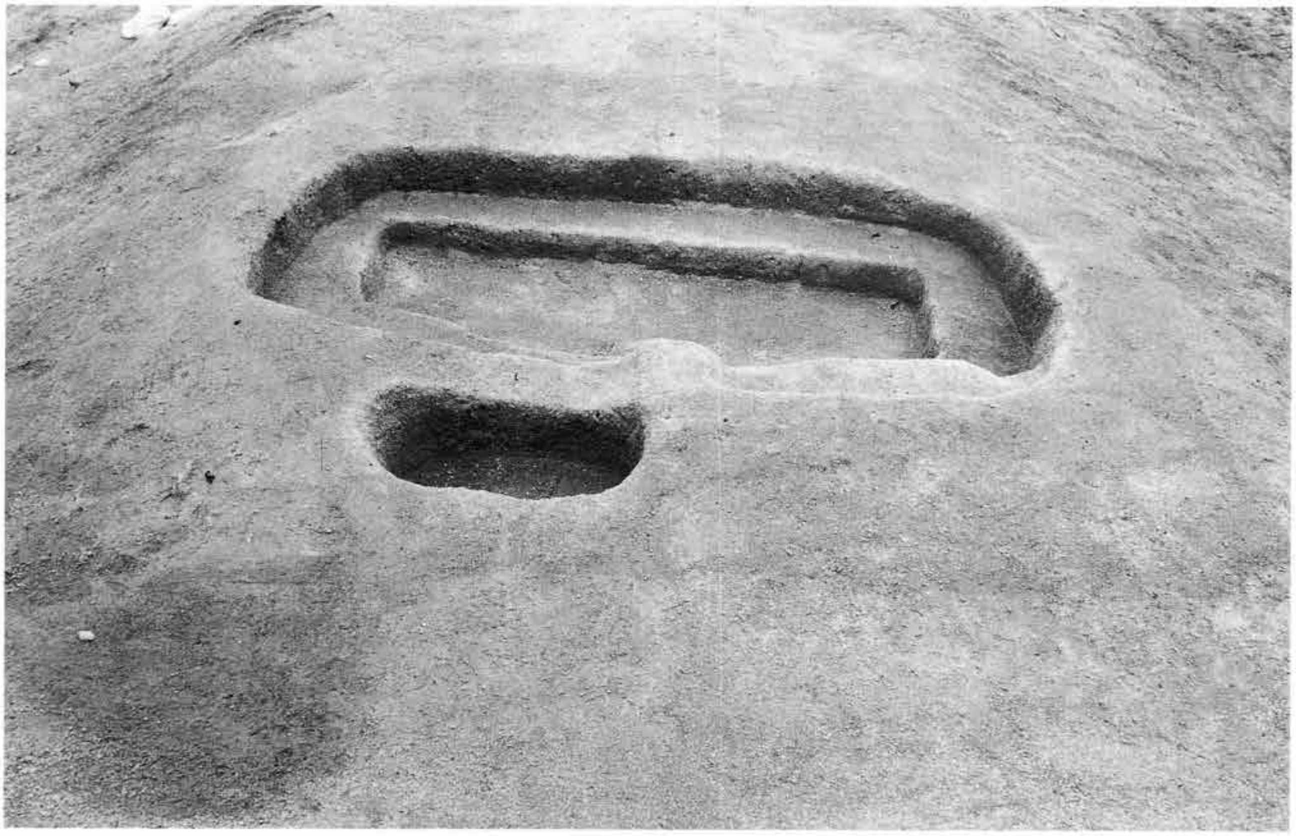
(1)D・E支群調査前全景（下が北）



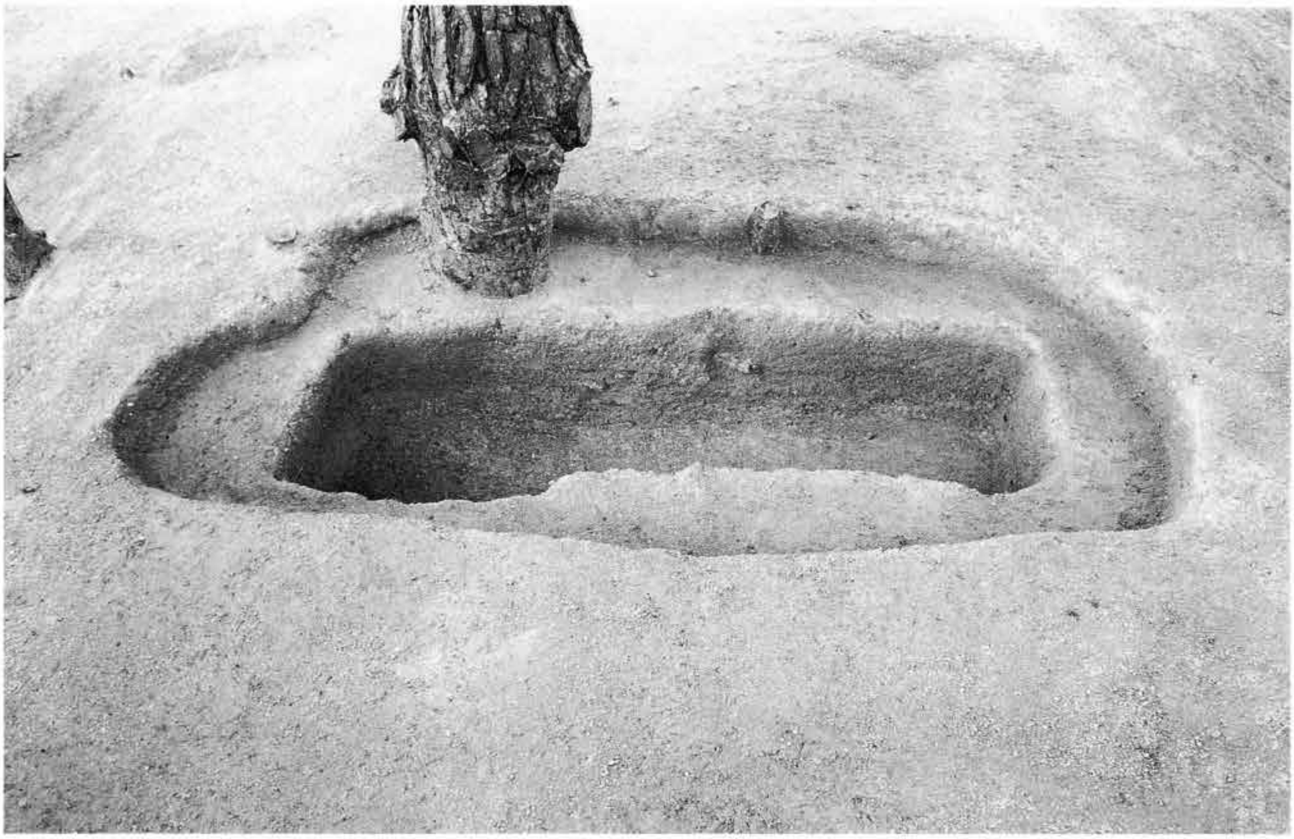
(2)D・E支群全景（下が北）

図版第40　左坂古墳群

(1)D支群全景（南から）


(2)D 4 号墳主体部（南から）

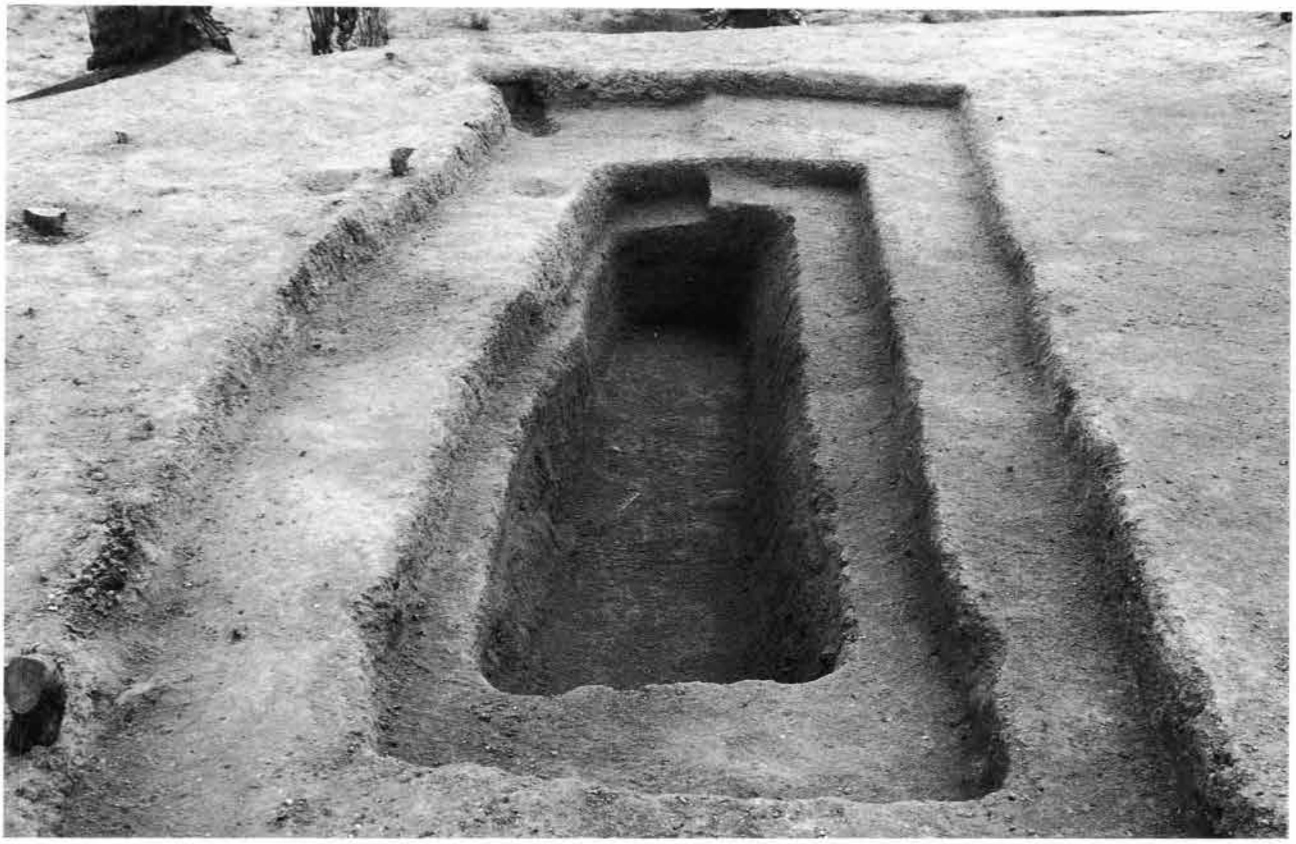
(1)D 5 号墳主体部（南から）



(2)D 7 号墳主体部（南から）

(1)D 8 号墳主体部（北東から）

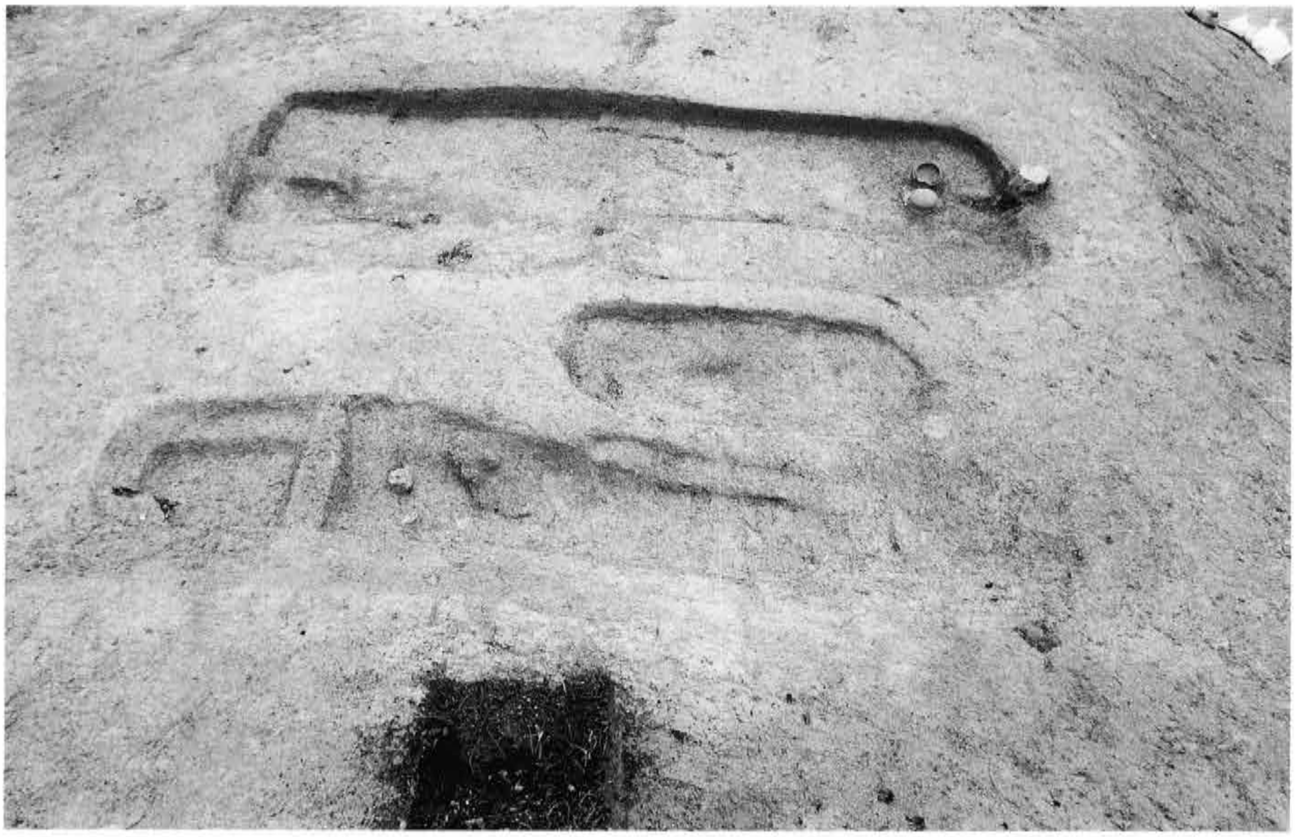
(2)D 9 号墳主体部（東から）



(1)D10号墳主体部（東から）

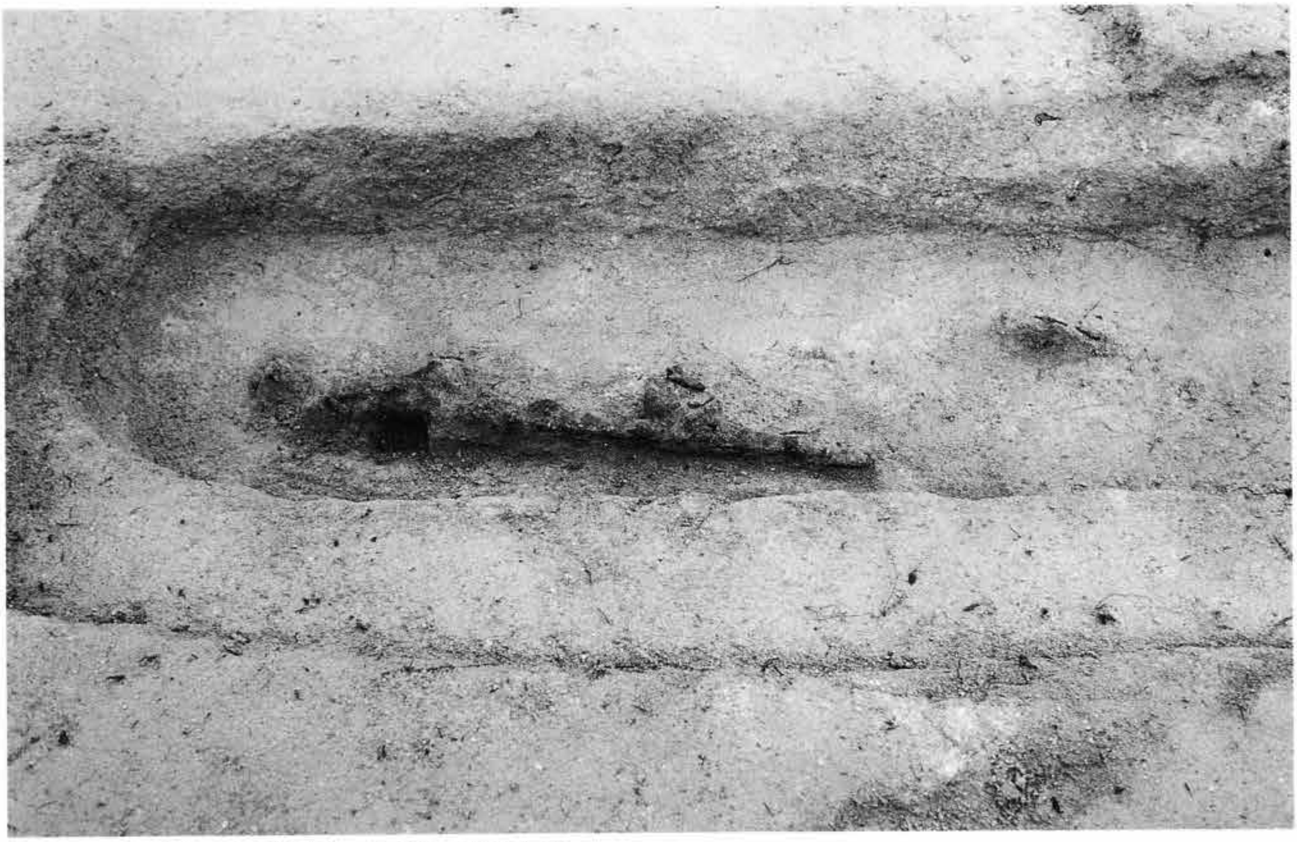
(2)E支群全景（西から）

(1)E 5 号墳主体部（南東から）



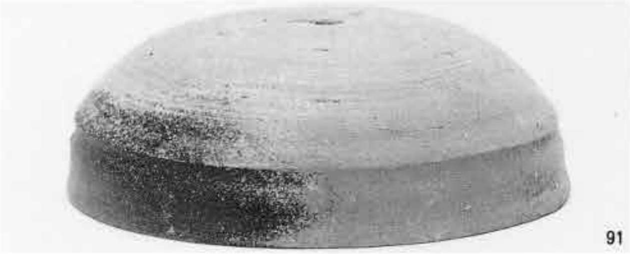
(2)E 7 号墳主体部（南東から）

(1)E 8 号墳主体部（南東から）



(2)E 8 号墳第 3 主体部遺物出土状況（南東から）

89


91

96

97

107

93

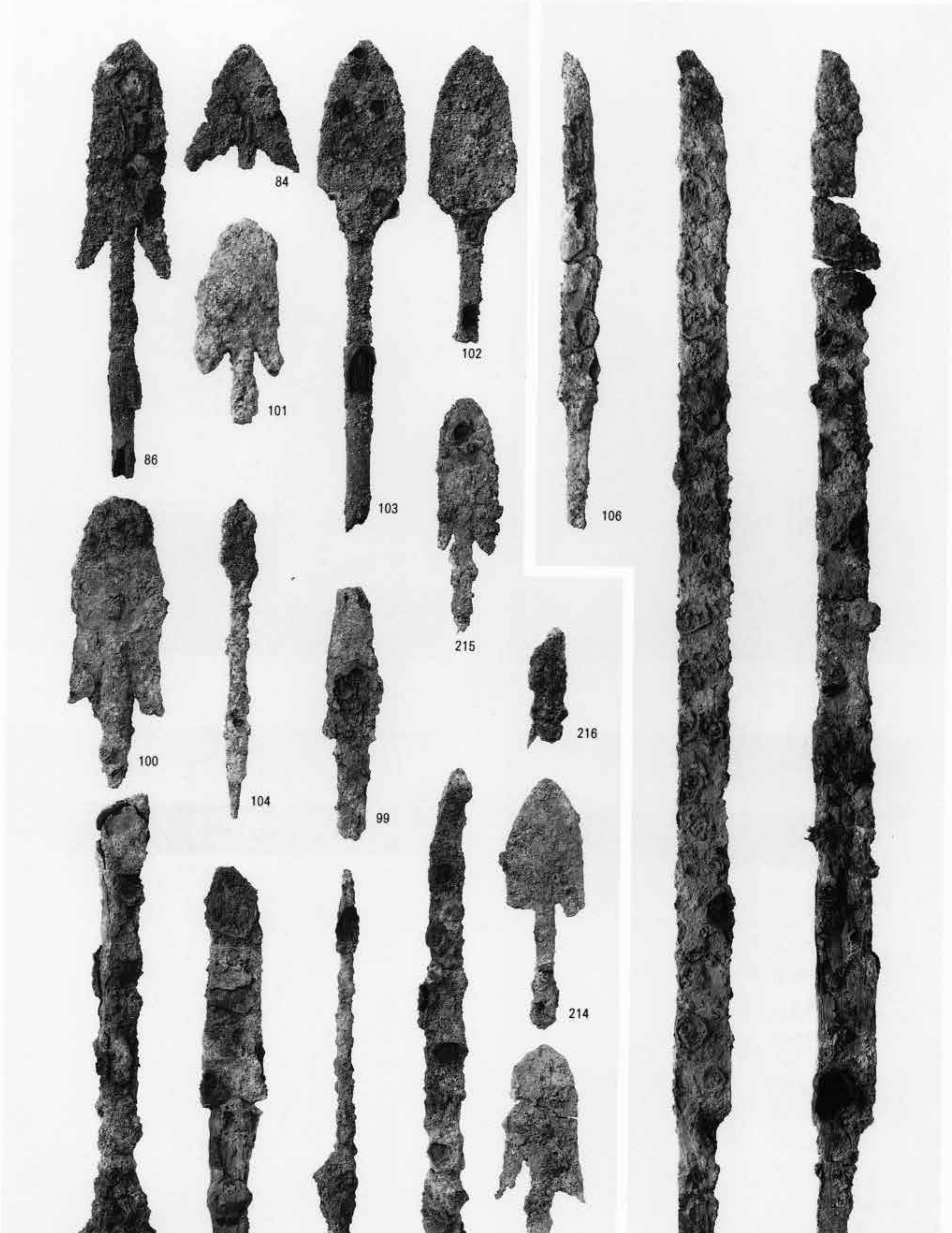
95

92

98

169

D支群出土遺物（須恵器）

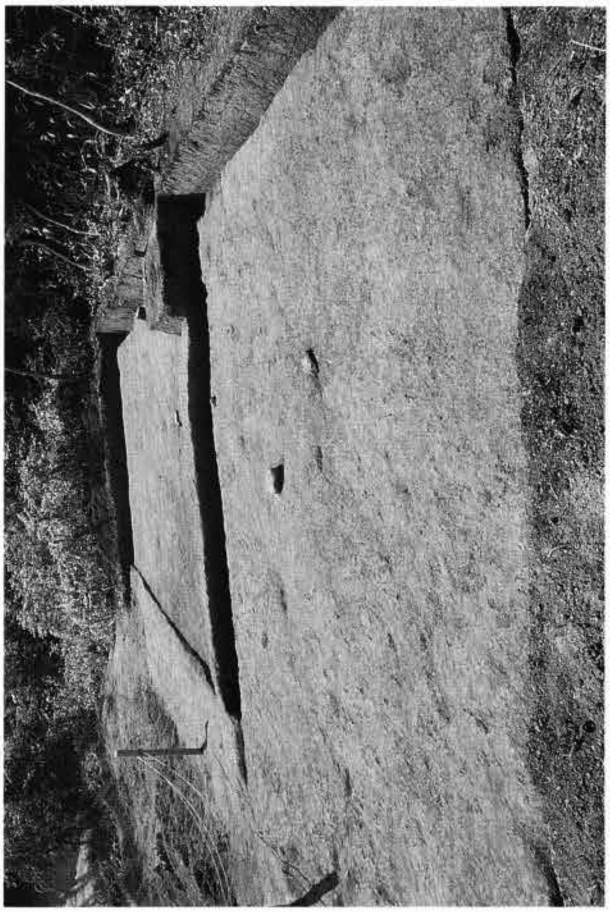


D・E支群出土遺物（鉄製品）

(1)シミズ谷1号墳全景（北から）

(2)調査前全景（北から）

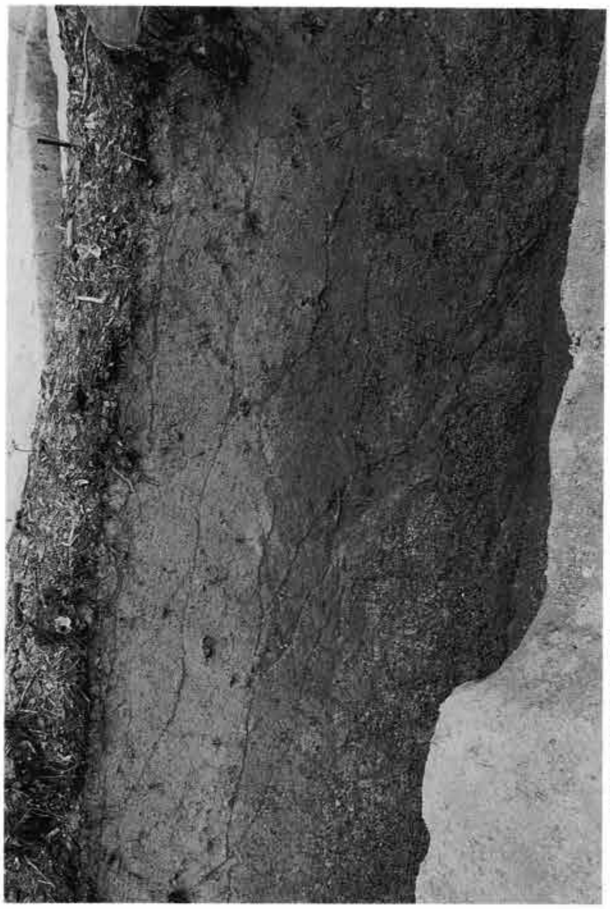
(3)シミズ谷2号墳全景（北から）


(4)調査トレンチ全景（北から）

(1)6号墳調査前全景（北から）

(2)墓ノ谷6・7・8号墳遠景（北東から）

(3)6号墳調査トレンチ全景（北から）


(4)7号墳調査地断面（北から）

(1)8号墳調査前全景（北から）

(2)7号墳調査前全景（北から）

(3)8号墳調査トレンチ全景（北から）

(4)7号墳調査トレンチ全景（北西から）

(1)調査地全景（北から）

(2)調査地全景（北上空から）

(1)調査前風景
（南上空から）

(2)調査前風景
（南から）

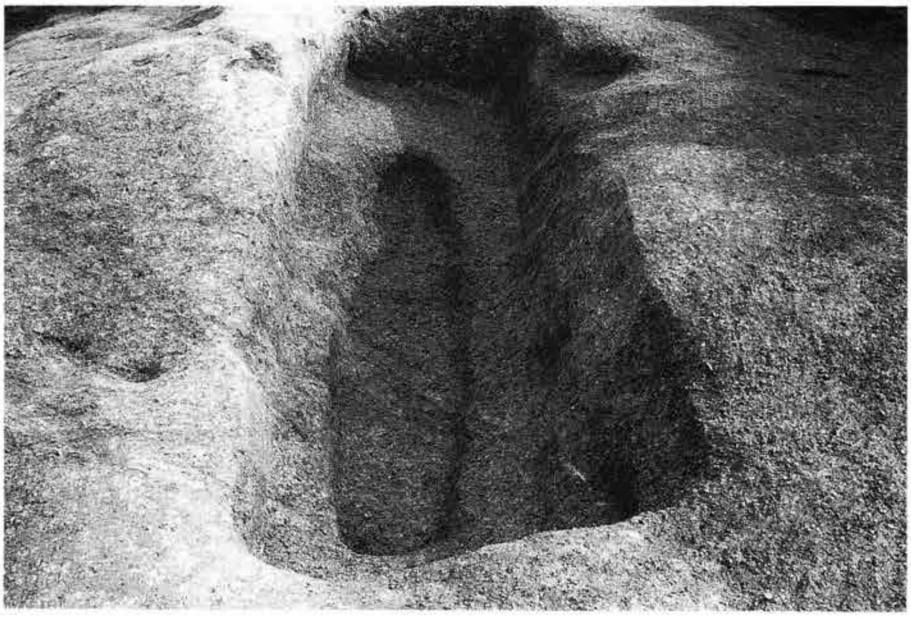
(3)調査地全景
（南東から）

(1) 1 号墳全景（南東から）

(2) 1 号墳主体部完掘状況（北から）

(3) 1 号墳主体部土層断面（東から）

(1) 4 号墳主体部検出状況
（北から）

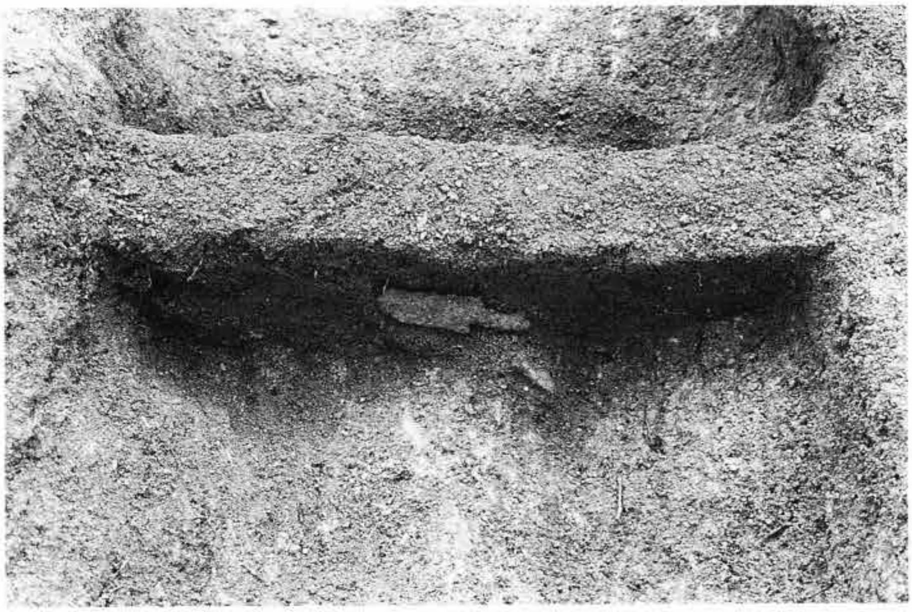


(2) 4 号墳主体部完掘状況
（北から）

(3) 4 号墳主体部土層断面
（北から）

(1) 6 号墳全景
（東から）

(2) 6 号墳主体部完掘状況
（北から）



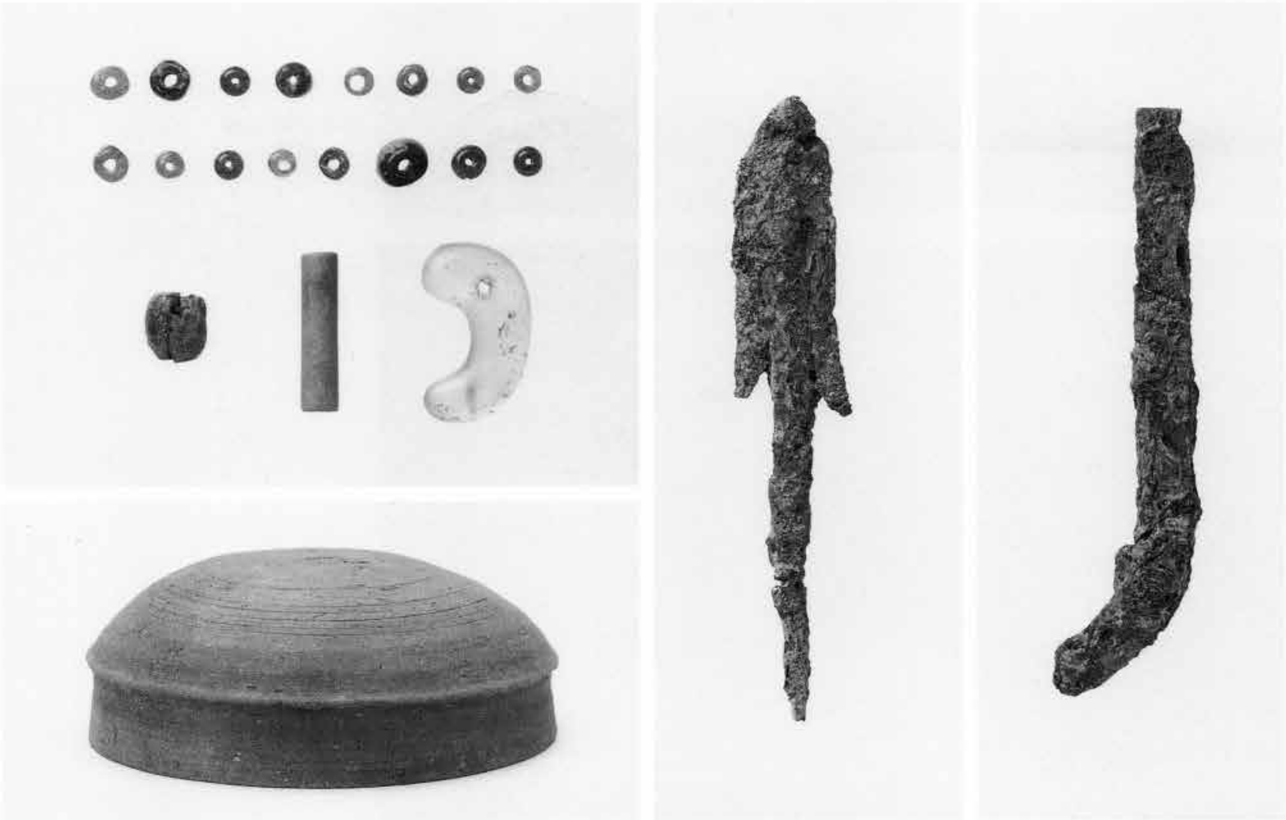
(3) 6 号墳主体部土層断面
鉄器出土状況
（西から）

(1) 6号墳東側切り離し溝
（北から）

(2)掘切状遺構土層断面
（北から）

(3)掘切状遺構完掘状況
（北から）

(1) 4 号墳主体部玉類出土状況（北から）



(2)出土遺物

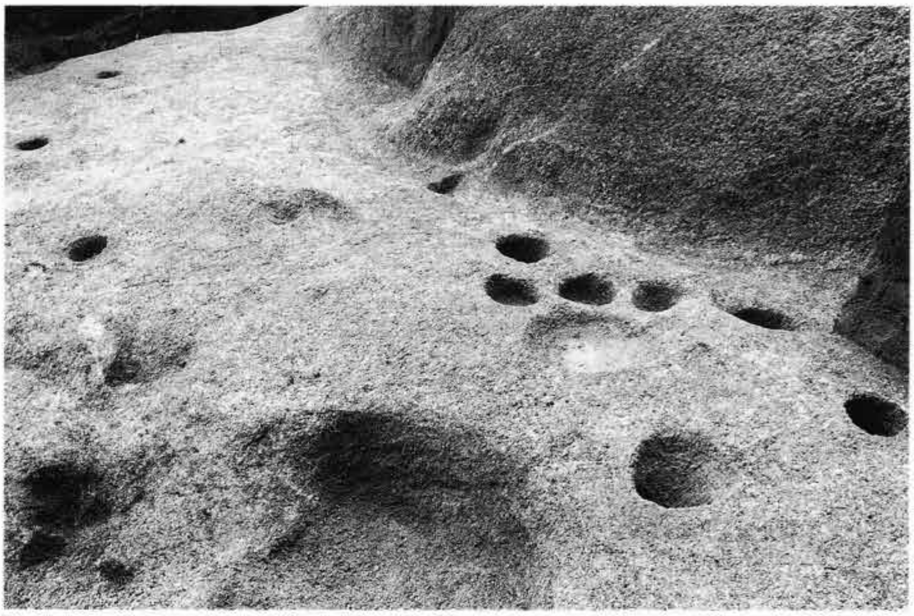
(1)平坦地調査前風景
（北西から）

(2)平坦地全景
（北西から）

(3)平坦地溝と柱穴
（南東から）

図版第59　永留城跡

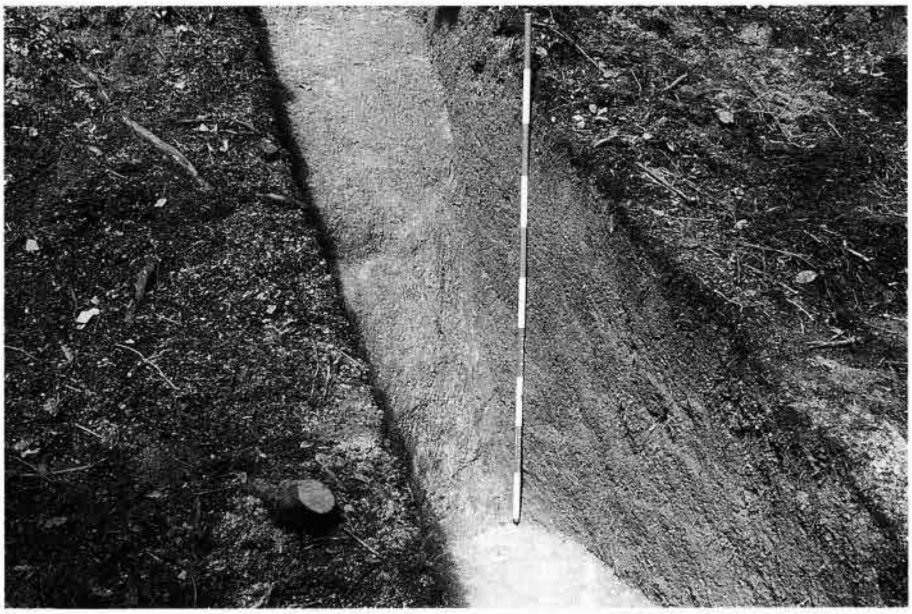
(1)東斜面と曲輪状平坦地
（南東から）



(2)曲輪状平坦地
（北東から）

(3)曲輪状平坦地
（南西から）

(1)曲輪状平坦地溝跡検出状況
（北東から）



(2)第４トレンチ土層断面
（南から）

(3)曲輪状平坦地地形測量風景
（南西から）

報告書抄録

ふりがな	
書　名	
副書名	
巻　次	
シリーズ名	京都府遺跡調査概報
シリーズ番号	第89冊
編著者名	岡崎研一・藤井　整・田代　弘・竹井治雄・増田孝彦・石崎善久・引原茂治・石尾政信
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　Phone　075(933)3877
発行年月日	西暦　1999　年　3　月　26　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
おおたいせきだいはちじ 太田遺跡第8次	かめおかしひえだのちょうおおた 亀岡市稗田野町太田	206	108	35° 1′ 00″	135° 32′ 30″	19981026 ～ 19990208	1,200	ほ場整備
なかかいどういせきだいよんじゅうきゅうじ 中海道遺跡第49次	むこうしもずめちょうなかかいどう 向日市物集町中海道	208	3	34° 57′ 39″	135° 41′ 44″	19981109 ～ 19990125	270	道路整備
ながおかきゅうあとだいさんびゃくななじゅうにじ 長岡宮跡第372次	むこうしてらどちょうにしのだんごばんち 向日市寺戸町西ノ段5番地	208	K87	34° 56′ 40″	135° 42′ 3″	19990106 ～ 19990219	300	施設整備
ながおかきょうあとうきょうだいろっぴゃくじゅうごじ 長岡京跡右京第615次	ながおかきょうしいまざとはすがいと 長岡京市今里蓮ヶ糸	209	10	34° 56′ 11″	135° 41′ 19″	19980911 ～ 19981217	500	道路拡幅
しばやまいせき 芝山遺跡	じょうようしとの 城陽市富野	207	56	34° 50′ 42″	135° 42′ 3″	19981209 ～ 19990216	680	公園整備
こくえいのうちかんけい（たんごとうぶ・せいぶちく）いせき 国営農地関係(丹後東部・西部地区)遺跡								農地造成
ささかこふんぐん 左坂古墳群	なかぐんおおみやちょうすき 中郡大宮町周枳	482	107	35° 34′ 58″	135° 6′ 37″	19980707 ～ 19981112	1,200	

しみずだにこふんぐん シミズ谷古墳群	たけのぐんやさかちょうつつみ 竹野郡弥栄町堤	503	103	35° 38′ 39″	135° 6′ 29″	19980420 ～ 19980522	90	
はかのたにこふんぐん 墓ノ谷古墳群	たけのぐんやさかちょうとっとり 竹野郡弥栄町鳥取	503		35° 40′ 50″	135° 5′ 4″	19980608 ～ 19980714	780	
みなみだにこふんぐん 南谷古墳群	くまのぐんくみはまちょういちぶ 熊野郡久美浜町壱分	521	185	35° 36′ 1″	134° 57′ 44″	19980519 ～ 19980812	1,000	
ながとめじょうあと 永留城跡	くまのぐんくみはまちょうながとめ 熊野郡久美浜町永留	521	256	35° 35′ 49″	135° 29′ 42″	19980825 ～ 19981014	130	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田遺跡 第８次	集落	古墳 奈良 鎌倉	竪穴住居・土坑・土器埋納坑 掘立柱建物跡・井戸・土坑 柱穴・溝・井戸	須恵器・土師器 須恵器・瓦 瓦器・土師器	
中海道遺跡 第49次	集落	弥生～古墳	竪穴住居・土坑	土師器・石器	
長岡宮跡 第372次	都城		なし	なし	
長岡京跡右京第615次	集落	弥生 古墳 中世	溝 竪穴住居 素堀溝・柱穴	弥生土器 土師器・須恵器	
芝山遺跡	古墓	平安	古墓	石帯・緑釉陶器	
左坂古墳群	古墳	古墳	木棺直葬墓・石棺	土師器・鉄製品	
シミズ谷古墳群	古墳状隆起				
墓ノ谷古墳群	古墳状隆起				
南谷古墳群	古墳	古墳	木棺直葬墓	鉄鏃・須恵器	
永留城跡	山城跡	中世	掘立柱建物跡		

京都府遺跡調査概報　第89冊

平成11年3月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)